

共同住宅地造成に伴う

日輪寺遺跡発掘調査報告書

日輪寺遺跡第4次～第7次調査

2002・1

神戸市教育委員会

共同住宅地造成に伴う

にちりんじ
日輪寺遺跡発掘調査報告書

日輪寺遺跡第4次～第7次調査

2002・1

神戸市教育委員会



日輪寺遺跡遠景



SH03出土遺物

序

今回報告します一連の日輪寺遺跡の発掘調査は、大規模な土地区画整理事業施行区域に隣接して実施された、いずれも民間の宅地造成工事に先立つものです。

阪神大震災の傷痕が癒える間もなく、住宅供給の促進を図るために最優先で行われる工事の性格上、火急を要し、兵庫県教育委員会からは震災復興職員の派遣を受けて現地調査に対応しました。

その結果、特に弥生時代終わりごろを中心とする大集落が確認され、数多くの住居跡や多量の土器が発見されました。さらに、中世の日輪寺を考えいく上での貴重な資料も発見されました。

これらの調査成果をまとめた本書が、地域の歴史研究、文化財の普及啓発の資料として、今後市民の方々に広く活用されれば幸いです。

最後にはなりましたが、発掘調査事業の円滑な推進ならびに報告書の作成にご協力いただきました関係諸機関ならびに関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成14年1月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、兵庫県神戸市西区玉津町二ツ塚字西山695-1・696-1・692および玉津町小山字日輪寺561-16に所在する、日輪寺遺跡第4次～第7次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、4次の調査とも、共同住宅地造成事業に伴う埋蔵文化財の事前調査で、神戸市教育委員会が主体となり実施した。なお、本調査は、阪神・淡路大震災に伴う復興調査の一環として行われたため、第4次～第6次調査は、神戸市教育委員会の支援要請のもと、兵庫県教育委員会が調査を担当した。
3. 発掘調査は、第4次調査が平成9年9月26日～平成10年2月27日まで、第5次調査が平成10年10月21日～平成10年11月13日まで、第6次調査が平成10年12月14日～平成11年3月30日まで、第7次調査が平成12年3月21日～平成12年5月12日まで、それぞれ実施した。
4. 発掘調査は第4次調査を兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所深谷憲二（茨城県教育委員会から派遣）・同氏平昭則（岡山県教育委員会から派遣）、第5次調査を同小川良太・渡辺昇、第6次調査を同山田清朝・高木芳史、第7次調査を神戸市教育委員会山本雅和が担当した。
5. 発掘調査作業は、第4次調査～第6次調査の各調査を、株式会社長谷川工務店に委託して実施した。第7次調査は、安西工業株式会社に委託した。
6. 発掘調査時の造構写真の撮影については、各調査員が行った。ただし、第4次調査の一部については、奈良国立文化財研究所牛嶋茂氏の撮影によるものである。また、各調査の空中からの全景写真については、国際航業株式会社・株式会社ジオテクノ関西に委託した。
遺物写真的撮影は、奈良国立文化財研究所牛嶋茂氏の指導のもと、杉本和樹氏が行った。
7. 調査は、神戸市復興基準点をもとに設置した4級基準点をもとに、多角点測量により国土地標をもとめ、これを基準とした。なお、調査地は第V系に属する。よって、本書に用いる方位は、座標北を示す。
また、標高は、東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
8. 整理作業は、土器の接合・復元・実測を神戸市埋蔵文化財センターにて実施した。なお、土器の実測は、第4次調査分を氏平が、第4次調査分の一部と第5次・第6次調査分を山田が、第7次調査分については、SH26出土土器を山田が、他を山本が行った。石器の実測は、すべて高木が行った。
9. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
10. 本書の執筆は、各調査担当者が行い、山田が編集した。具体的な執筆者は、目次に示した通りである。なお、第4次調査の遺構に関する執筆は、深谷・氏平が実績報告書および『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』で執筆したものとともに、高木がまとめた。遺物に関しては、土器を山田が、石器を高木が執筆した。
11. 本書にかかわる遺物は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
12. 最後に、本書の作成にあたっては、以下の方々の御指導・御援助をいただいた。記して深く感謝の意を表するものである。

大村敬通・松井 章・水口富夫・山下史朗・山本三郎

凡　　例

1. 今回報告する4次の調査区は、隣接するものである。このため、遺構番号・遺物番号は4次の調査分を一括して付けている。このため、豊穴住居跡を除く遺構番号については、報告書作成段階で付け直している。
 2. 上器の実測図については、弥生土器に関しては、すべて断面を墨入れしてあるが、平安時代以降の土器に関しては、土師器のみ墨入れせず須恵器・陶磁器などと区別している。
 3. 遺構番号の頭に付けたS Hは豊穴住居跡を、S Bは掘立柱建物跡を、S Dは溝を、S Kは土坑を、Pは柱穴を、S Xは倒木痕を、それぞれ表す。
 4. 第4次調査については、すでに『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』(2000 神戸市教育委員会刊)にて、その概要が報告されている。そこでは、当該調査で出土した土器の実測図も一部記載されている。しかし、今回の報告にあたっては、土器調整法の表現の統一化を図るため、再トレースを行っている。
- また、遺構図についても、第6次調査分と完結するものを中心に、再整理を行っている。

目 次

第1章 日輪寺遺跡	
第1節 地理的環境(山田) 1
第2節 歴史的環境(山田) 5
第3節 日輪寺遺跡の調査(山田) 9
第2章 調査に至る経緯	
第1節 全面調査(山田) 11
第2節 整理作業(山田) 13
第3節 金属製品の取り上げと保存処理(千種・山村) 14
第3章 調査の結果	
第1節 調査概要(山田) 17
第2節 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物(深谷・氏平・山田・高木・山本) 19
第3節 中世の遺構と遺物(山田・高木・山本) 137
第4節 近世の遺構と遺物(山本) 156
第4章 まとめ	
第1節 弥生時代後期～古墳時代初頭の土器(山田) 158
第2節 住居跡の変遷(山田) 172
第3節 弥生時代後期から古墳時代初頭の石器(高木) 175
第4節 S D01出土の上師器について(山本) 179
第5節 中世の日輪寺遺跡をめぐる諸問題(山本) 184
第6節 まとめ(山田) 188

表 目 次

第1表 主要周辺遺跡7 第3表 住居跡の変遷172
第2表 一括遺物の時期171 第4表 出土砥石一覧表176

挿 図 目 次

第1図	道路の位置	1	第37図	S H08	38
第2図	遺跡の立地	2	第38図	S H08出土土器	39
第3図	遺跡周辺の地形	3	第39図	S H08出土石器	39
第4図	明治19年の日輪寺遺跡周辺	4	第40図	S H09出土土器	40
第5図	主要周辺遺跡	6	第41図	S H09	40
第6図	日輪寺遺跡周辺遺跡の調査	8	第42図	S H10・S H11	41
第7図	日輪寺遺跡	9	第43図	S H10出土土器	42
第8図	日輪寺遺跡の調査	10	第44図	S H11出土土器	44
第9図	第4～第7次調査	11	第45図	S H11出土石器	45
第10図	取り上げ1	14	第46図	S H12	46
第11図	取り上げ2	14	第47図	S H12出土土器	47
第12図	取り上げ3	14	第48図	S H13	47
第13図	取り上げ4	14	第49図	S H14	48
第14図	取り上げ5	15	第50図	S H14出土土器	48
第15図	取り上げ6	15	第51図	S H15	49
第16図	検出遺構	16	第52図	S H15出土土器	50
第17図	住居跡	18	第53図	S H16出土土器	50
第18図	S H01	19	第54図	S H16	51
第19図	S H01出土土器	20	第55図	S H17	52
第20図	S H01出土石器	21	第56図	S H17出土土器	53
第21図	S H02	21	第57図	S H18	54
第22図	S H02出土土器	22	第58図	S H18出土土器	55
第23図	S H03	24	第59図	S H19	55
第24図	S H03上層出土土器	25	第60図	S H19出土土器	56
第25図	南東隅一括土器群出土状況	27	第61図	S H20	57
第26図	S H03一括土器群	28	第62図	S H20出土土器	58
第27図	S H03下層出土土器	29	第63図	S H20出土石器	59
第28図	S H04	30	第64図	S H21	59
第29図	S H04出土土器	30	第65図	粘土出土状況	60
第30図	S H05	31	第66図	S H21出土土器	61
第31図	S H05出土土器	32	第67図	S H22	62
第32図	S H05出土石器	33	第68図	炉	63
第33図	S H06	34	第69図	S H22出土土器	63
第34図	S H06出土土器	35	第70図	S H23	64
第35図	S H07	36	第71図	S H23出土土器	65
第36図	S H07出土土器	37	第72図	S H24	66

第73図	S H 25の検出	66	第111図	S H 36出土土器(1)	104
第74図	S H 25	68	第112図	S II 36出土土器(2)	105
第75図	S H 25(新)	69	第113図	S 18出土状況	105
第76図	S H 25(新)出土上器	70	第114図	S H 36出土石器	106
第77図	S H 25(新)出土石器	70	第115図	S H 37	107
第78図	S H 26	71	第116図	S H 37出土土器	108
第79図	S H 26の検出	72	第117図	S H 38	109
第80図	S H 26上層出土土器(1)	74	第118図	S H 39	110
第81図	S H 26上層出土土器(2)	75	第119図	S H 40	111
第82図	S H 26下層出土土器(1)	76	第120図	S H 40出土上器	112
第83図	S H 26下層出土土器(2)	77	第121図	S H 41	113
第84図	S H 26出土土器	78	第122図	S H 41出土土器	114
第85図	S H 27	79	第123図	S H 42	116
第86図	S H 27出土土器(1)	81	第124図	S II 42中央土坑	117
第87図	S II 27出土土器(2)	82	第125図	S H 42出土土器	118
第88図	S H 27出土石器	83	第126図	土坑	119
第89図	S II 28の検出	84	第127図	S K 01	120
第90図	S H 28	85	第128図	S K 02出土上器	120
第91図	S H 28上層出土土器	86	第129図	S K 02	120
第92図	S H 28下層出土土器	87	第130図	S K 02出土土器	121
第93図	S H 29	88	第131図	S K 03	121
第94図	S H 29出土土器	88	第132図	S K 03出土土器	122
第95図	S H 30	89	第133図	S K 04	123
第96図	S H 30出土土器	90	第134図	S K 04出土土器	124
第97図	S H 30出土石器	90	第135図	S K 07	125
第98図	S H 31	91	第136図	S K 08の検出	125
第99図	S H 31出土土器	92	第137図	S K 08	126
第100図	S H 32	93	第138図	S K 08出土土器	126
第101図	S H 32出土土器	94	第139図	S K 14	128
第102図	S H 33	95	第140図	S K 14出土土器(1)	130
第103図	S H 34	96	第141図	S K 14出土土器(2)	131
第104図	S H 34出土上器	96	第142図	S K 15	131
第105図	S H 34出土石器	97	第143図	S K 16	131
第106図	S H 35の検出	98	第144図	風倒木痕	132
第107図	S H 35	99	第145図	S X 08	133
第108図	S H 35出土上器	100	第146図	S X 15	134
第109図	S H 35出土石器	101	第147図	S X 16	134
第110図	S H 36	102	第148図	鳥形土製品	135

第149図 S 19	135	第169図 S D01出土上器(8)	153
第150図 中世の遺構	136	第170図 S B 05	156
第151図 S B 01	137	第171図 S B 05出土土器	157
第152図 S B 02	138	第172図 鉄釘	157
第153図 S B 03	139	第173図 壺形土器の分類(1)	159
第154図 S B 04	139	第174図 壺形土器の分類(2)	160
第155図 P 01出土状況	140	第175図 壺形土器の分類(3)	161
第156図 P 01出土土器	141	第176図 壺形土器の分類(4)	162
第157図 P 02	141	第177図 強形土器の分類(2)	163
第158図 P 03	141	第178図 鉢形土器の分類(1)	164
第159図 S T 01	142	第179図 鉢形土器の分類(2)	166
第160図 S T 01出土遺物	143	第180図 高环形土器の分類(1)	167
第161図 S D 01	144	第181図 高环形上器の分類(2)	168
第162図 S D 01出土土器(1)	146	第182図 器台形土器の分類	169
第163図 S D 01出土土器(2)	147	第183図 住居跡の変遷(1)	173
第164図 S D 01出土土器(3)	148	第184図 住居跡の変遷(2)	174
第165図 S D 01出土土器(4)	149	第185図 砥石長幅比	176
第166図 S D 01出土土器(5)	150	第186図 砥面の弧度	177
第167図 S D 01出土土器(6)	151	第187図 土師器鍋・釜の変遷	180
第168図 S D 01出土土器(7)	152	第188図 日輪寺遺跡と日輪寺の寺域	185

写真図版目次

卷首写真図版 1 日輪寺遺跡遠景

卷首写真図版 2 S H 03出土遺物

写真図版 1 日輪寺遺跡

遺跡全景

写真図版 2 第4・6・7次調査

全景

写真図版 3 第4次調査

4-1 全景（北から）

4-2 全景（北から）

写真図版 4 第6次調査

6-1 全景（北から）

6-2 全景（北から）

写真図版 5 第4次調査

4-2 全景（北から）

写真図版 6 第6次調査

6-1 全景（北から）

6-2 全景（東から）

写真図版 7 第7次調査

全景（南東から）

写真図版 8 第7次調査

北半部全景（南から）

南半部全景（北から）

写真図版9 第5次調査	S H11中央土坑断面（東から）
全景（西から）全景（南から）	S H11中央土坑全景（東から）
写真図版10 第4次調査	写真図版19 第4次調査
S H01全景（北西から）	S H17・S II18全景（西から）
S H01中央土坑（北から）	S H17全景（西から）
S H02全景（北から）	S H17土器出土状況（東から）
写真図版11 第4次調査・第6次調査	写真図版20 第6次調査
S H03全景（東から）	S H20全景（西から）
S H03全景（東から）	S H20全景（北から）
S H03中央土坑（南から）	S H20中央土坑（南から）
写真図版12 第4次調査	写真図版21 第5次調査
S II03南東隅土器出土状況（南から）	S H22全景（南から）
S H03南東隅土器出土状況（東から）	S H21全景（南から）
S H05全景（北から）	S H21全景（西から）
S H05中央土坑（北から）	写真図版22 第5次調査
写真図版13 第4次調査・第6次調査	S H23全景（西から）
S H06（西から） S H06（東から）	S H23上器出土状況
S H06・S H09（東から）	S H23土器山上状況
写真図版14 第4次調査	S H24全景（西から）
S H07全景（北から）	写真図版23 第6次調査
S H12全景（西から）	S H25全景（北から）
S H12中央土坑（東から）	S H25全景（西から）
写真図版15 第4次調査・第6次調査	S H25上坑3（南から）
S H08（東から） S H08（東から）	写真図版24 第6次調査
S II08中央上坑（西から）	S H25北側張り出し（北東から）
S H08中央土坑（東から）	S H25北側張り出し（北東から）
写真図版16 第4次調査	S H25南西隅張り出し（南から）
S H15全景（西から）	写真図版25 第6次調査・第7次調査
S H16全景（西から）	S H26全景（東から） S H26全景（南から）
S H16上層（西から）	写真図版26 第6次調査・第7次調査
写真図版17 第4次調査・第6次調査	S H26中央土坑（東から）
S H11（南から） S H11（北東から）	S H26中央土坑
S H11（北東から）	写真図版27 第6次調査
写真図版18 第6次調査	S H27全景（西から）
S H11上器出土状況	S H27中央土坑（北西から）
S H11土器出土状況	S H27右器出土状況（北から）
S H11上坑断面（北から）	写真図版28 第6次調査
S H11土坑全景（北から）	S H29全景（東から）

- S H29全景（南から）
写真図版29 第6次調査
S II28全景（南から）
S H28全景（東から）
S H28北西隅張り出し（南東から）
写真図版30 第6次調査
S H28中央土坑検出状況（南から）
S H28中央土坑断面（南から）
S H28中央土坑全景（南から）
写真図版31 第6次調査
S H30全景（南から）
S H30中央上坑（北から）
S H30石器出土状況（南から）
写真図版32 第6次調査
S II31全景（西から）
S H31全景（南から）
S H30土器山土状況（西から）
写真図版33 第6次調査
S H32全景（東から）
S H33全景（東から）
写真図版34 第6次調査
S H34全景（南から）
S H34土器山土状況（南から）
写真図版35 第6次調査
S H35断面（南から）
S H35全景（西から）
S H35全景（北から）
写真図版36 第6次調査
S H35中央土坑（南から）
S H35土器出土状況
S H35上器出土状況（南から）
写真図版37 第6次調査
S H36全景（南から）
S H36全景（西から）
S H36上器出土状況
S H36石器出土状況（北東から）
写真図版38 第6次調査
S H36中央土坑検出状況（南から）
S H36中央土坑断面（南から）
写真図版39 第6次調査
S H38全景（北から）
S H39全景（東から）
写真図版40 第6次調査
S H40全景（北東から）
S H40全景（南東から）
S H40土器出土状況
写真図版41 第7次調査
S H41全景（北から）
S H41全景（南から）
写真図版42 第7次調査
S H42全景（南から）
S H42中央土坑（西から）
写真図版43 第6次調査・第7次調査
S K02断面（南から）
S K03全景（北東から）
S K08全景（西から）
写真図版44 第7次調査
S K04上層検出状況（西から）
S K04中層検出状況（西から）
S K04下層検出状況（西から）
写真図版45 第6次調査
S K14全景（南から）
写真図版46 第6次調査
S K14上層土器出土状況（南から）
S K14下層土器出土状況（西から）
写真図版47 第7次調査
S B01全景（東から）
S B01全景（南西から）
写真図版48 第4次調査・第6次調査
S B02全景（北から）
S B03全景（北から）
P01土器出土状況（東から）
写真図版49 第7次調査
S T01全景（東から）
S T01全景（北から）

- 写真図版50 第7次調査
S D01近景（南から）
S D01断面（南から）
S D01全景（南から）
- 写真図版51 第7次調査
S B04全景（北から）
- 写真図版52 第6次調査
S X44断面 S X19断面
S X33断面
- 写真図版53 出土遺物
S H02出土土器
- 写真図版54 出土遺物
S H02出土土器 S H03出土土器
- 写真図版55 出土遺物
S H03出土土器
- 写真図版56 出土遺物
S H03出土土器
- 写真図版57 出土遺物
S H03出土土器
- 写真図版58 出土遺物
S H03出土土器
- 写真図版59 出土遺物
S H03出土土器 S H04出土土器
S H05出土土器
- 写真図版60 出土遺物
S H05出土土器 S H06出土土器
S H08出土土器
- 写真図版61 出土遺物
S H08出土土器 S H11出土土器
- 写真図版62 出土遺物
S H11出土土器
- 写真図版63 出土遺物
S H11出土土器
- 写真図版64 出土遺物
S H11出土土器 S H15出土土器
- 写真図版65 山土遺物
S H16出土土器 S H17出土土器
- 写真図版66 山土遺物
- S H17出土土器 S H20出土土器
- 写真図版67 出土遺物
S H20出土土器 S H21出土土器
S H23出土土器 S H25出土土器
- 写真図版68 出土遺物
S H25出土土器
- 写真図版69 出土遺物
S H26出土土器
- 写真図版70 出土遺物
S H26出土土器
- 写真図版71 出土遺物
S H26出土土器
- 写真図版72 出土遺物
S H26出土土器
- 写真図版73 出土遺物
S H26出土土器
- 写真図版74 出土遺物
S H27出土土器
- 写真図版75 出土遺物
S H27出土土器
- 写真図版76 出土遺物
S H27出土土器
- 写真図版77 出土遺物
S H27出土土器 S H28出土土器
- 写真図版78 出土遺物
S H28出土土器 S H29出土土器
S H30出土土器
- 写真図版79 出土遺物
S H31出土土器 S H32出土土器
- 写真図版80 出土遺物
S H32出土土器 S H34出土土器
- 写真図版81 出土遺物
S H35出土土器
- 写真図版82 出土遺物
S H35出土土器
- 写真図版83 出土遺物
S H36出土土器
- 写真図版84 出土遺物

S H36出土土器	写真図版100 出土遺物
写真図版85 出土遺物	S D01出土土器
S H36出土土器 S H37出土土器	写真図版101 出土遺物
写真図版86 出土遺物	S D01出土土器
S H40出土土器 S H41出土土器	写真図版102 出土遺物
写真図版87 出土遺物	S D01出土土器
S H41出土土器	写真図版103 出土遺物
写真図版88 出土遺物	S D01出土石製品・貝 S B05出土土器
S H42出土土器 S K03出土土器	包含層出土鐵製品
写真図版89 出土遺物	写真図版104 出土遺物
S K03出土土器 S K04出土土器	S H01出土石製品
写真図版90 出土遺物	S H05出土石製品
S K04出土土器 S K08出土土器	S H08出土石製品
写真図版91 出土遺物	S H11出土石製品
S K14出土土器	S H20出土石製品
写真図版92 出土遺物	S H26出土石製品
S K14出土土器	S H27出土石製品
写真図版93 出土遺物	S H34出土石製品
S K14出土土器 鳥形土製品	写真図版105 出土遺物
写真図版94 出土遺物	S II25(新)出土石製品
P 01出土土器	S H27出土石製品
写真図版95 出土遺物	S II30出土石製品
S T01出土土器 ST 01出土鐵製品	S H34出土石製品
写真図版96 出土遺物	S II36出土石製品
S D01出土土器	写真図版106 出土遺物
写真図版97 出土遺物	S H36出土石製品
S D01出土土器	
写真図版98 出土遺物	
S D01出土土器	
写真図版99 出土遺物	
S D01出土土器 S D01出土瓦	

第1章 日輪寺遺跡

第1節 地理的環境

神戸市

日輪寺遺跡の所在する神戸市は、兵庫県の南東部に位置する。兵庫県の県庁所在地として、政治・経済の中心を担うとともに、市域の面積も約548km²と兵庫県下の市の中では最も広大である。また、人口約140万人と、県下の約26%を占めている（平成13年現在）。東側を芦屋市、北東側を西宮市、北側を三田市、北西側を二木市、南西側を明石市、とそれぞれ境をなしている。また、南側は大阪湾に面している。

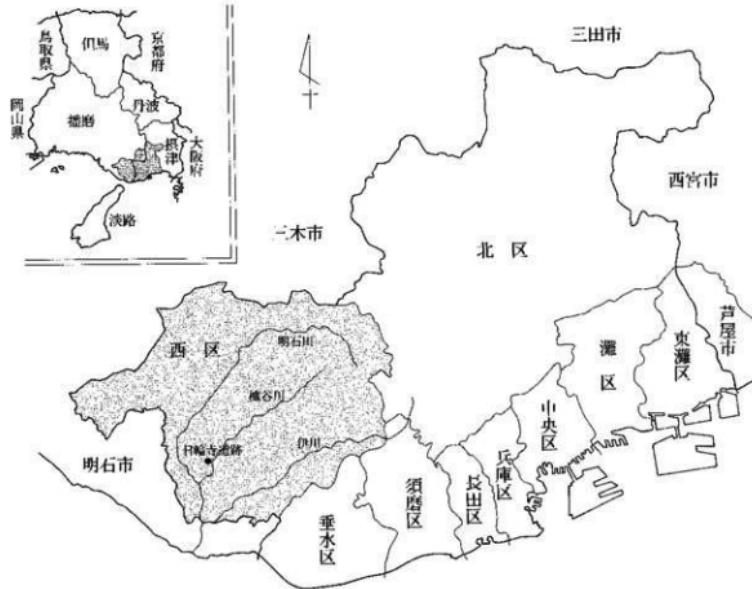
神戸市は、平成13年現在、東灘区・灘区・中央区・兵庫区・長田区・須磨区・垂水区・西区・北区の9区からなる。これらの9区は、六甲山系を中心として、その海側・山側そして西側の大きく3地域に分けられる。

海側

東灘区・灘区・中央区・兵庫区・長田区・須磨区からなる。六甲山系から大阪湾に向かってほぼ直線的に流れ込む妙法寺川・淡川・都賀川・住吉川・芦屋川などの諸河川によって形成された扇状地が東西に連続する地域で、「六甲南麓」とあるいは「西摂地域」または「阪神間」と呼ばれている。当地域は、神戸市のなかでもとりわけ政治・経済の中心を占めている。

山側

北区を中心とした地域である。武庫川の支流をなす有馬川・有野川・八多川および美嚢川



第1図 遺跡の位置

の支流をなす淡河川を中心に形成された段丘・低地と丘陵からなる。段丘上と低地を中心に農業を主産業としてきた地域である。近頃は、丘陵部を中心に北神ニュータウンに代表される宅地化が顕著である。

西側 垂水区と当遺跡の所在する西区を中心とした地域である。明石川とその支流をなす伊川を中心に形成された明石平野と段丘および丘陵地からなる。当初、当地域は全て垂水区であったが、後述するように人口の増加が著しいため、昭和57年に垂水区から西区が分離したものである。

当地域では、山側の地区同様、農業を主産業としてきた地区であるが、昭和50年代以降、丘陵部を中心に西神ニュータウンに代表される宅地化が顕著に進行してきた。また、近年では、平野部においても、玉津ニュータウンや出合ニュータウンなど、宅地化が急速に進行している。当遺跡の今回の調査契機となった共同住宅地造成事業も、これら宅地化の流れの延長線上に位置付けられるものである。具体的には、調査地の南側の二ツ屋・小山地区で行われている土地区画整理事業などである。

以上のように、神戸市は六甲山系を中心とした地理的環境で大きく3地域にわかれるが、これらの地域は地質的・歴史的背景をも異にしている。

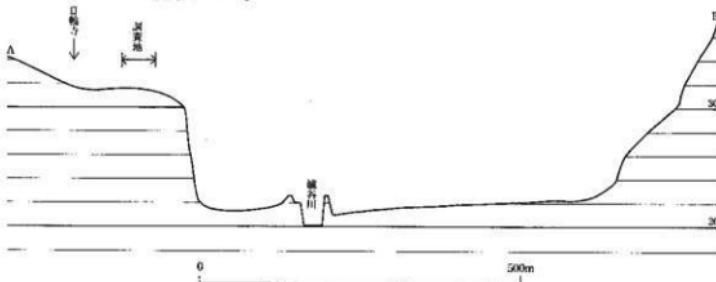
地質的背景としては、六甲山系の海側は、沖積層および花崗岩層からなる。山側は、神戸層群および有馬層群からなる。一方西側は、大阪層群と沖積層からなる。

歴史的背景としては、六甲山の海側と山側の地域は律令時代においては攝津国に属していたが、西側の地域は播磨國に属していた。つまり、現在の神戸市域は、IH國の攝津と播磨からなることになる。

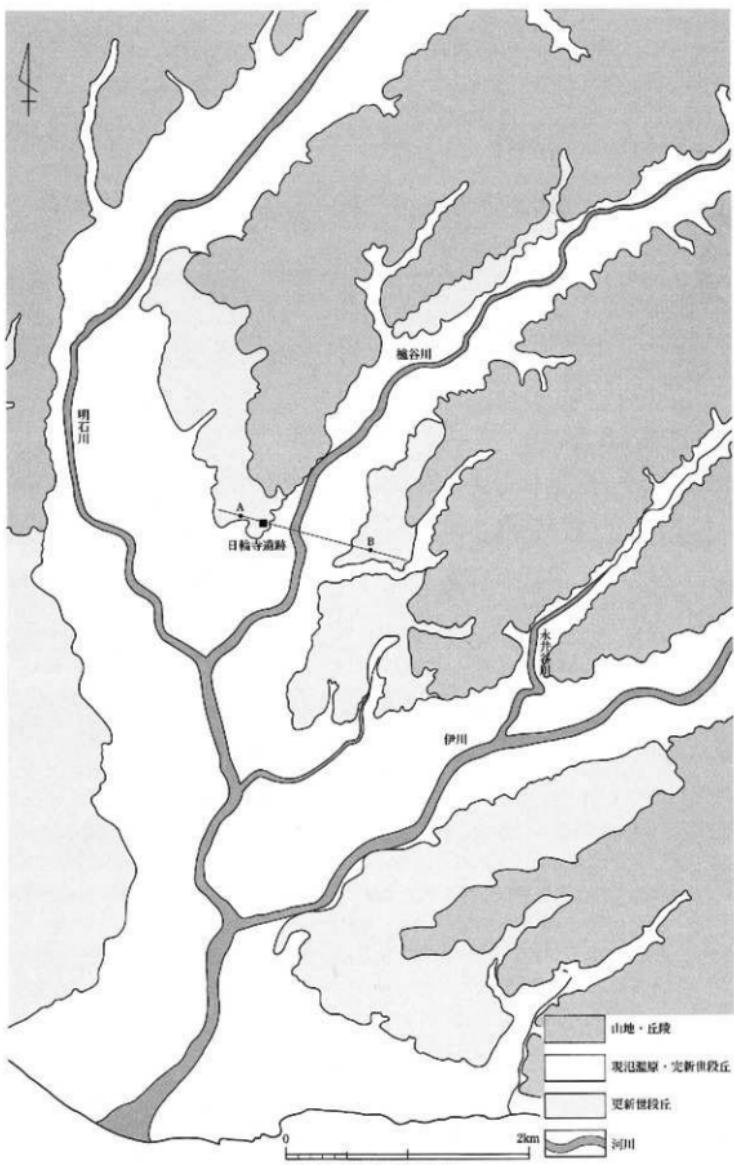
次に、当遺跡周辺の地形環境についてみていくことにする。

地形環境 日輪寺遺跡は、先述したように、六甲山系の西側の地域に位置する。当地域は、明石川水系によって形成された明石平野とその周辺の段丘および丘陵からなる。

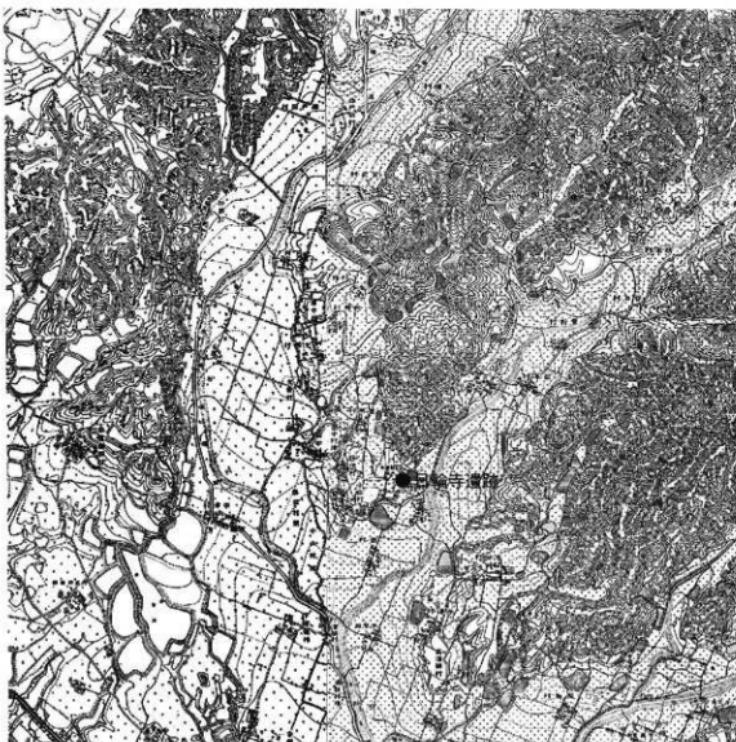
明石平野は、明石川を中心に、伊川・塙谷川を支流として形成された平野である。西側を印南台地、東側を西神丘陵と境をなしている。明石平野の中心をなす明石川は、いずれも六甲山を源とする木見川と木津川が押部谷町木幡にて合流し明石川となり、押部谷町細田付近で北東—南西方向に流れ、平野町中津付近で南北方向に屈曲し、播磨灘に流れ込む、全長約25kmの一級河川である。



第2図 遺跡の立地



第3図 遺跡周辺の地形



第4図 明治19年の日輪寺遺跡周辺

明石川と櫛谷川・伊川が合流する地点から海側がいわゆる明石平野の中心で、この付近より上流側は、各河川を中心とした谷底平野となっている。これらの谷底平野を除く地域は、大阪層群によって形成された丘陵地となっている。いわゆる西神丘陵である。この西神丘陵は、ほぼ北東—南西方向に人手状にのびており、この丘陵の南端の明石平野に突き出た箇所にわずかに更新世段丘が認められる。具体的には、明石川と櫛谷川の合流部北側と明石川と伊川の合流部北側である。そして、日輪寺遺跡は前者の段丘面上に立地している。調査地は当段丘面の北東隅にあたる。東側は櫛谷川によって形成された谷底平野に面し、段丘面上の標高は31.0mを測る。また、谷底平野との比高は約13mである（第2図）。

〔参考文献〕

- 田中眞吾「播磨の地形の成り立ちと特色」『播磨の地理 自然編』神戸新聞総合出版センター 1994
『新修神戸市史 歴史編Ⅰ 自然・考古』神戸市 1988

第2節 歴史的環境

はじめに

明石川流域は、縄文時代以降、多くの遺跡が周知されている。弥生時代の遺跡としては、日輪寺遺跡の立地する高位段丘面上に立地する玉津田中遺跡、明石川下流の新方遺跡・古田南遺跡などが知られている。

特に、ここ20年間に宅地造成を中心とした開発が急速に進行したことから、かなりの発掘調査が行われ、より多くの遺跡が明らかになるとともに、各遺跡の具体的な様相が明らかになってきている（第5図）。玉津田中遺跡がその顕著な例と言えよう。本書で報告する日輪寺遺跡も、このような開発の波により明らかとなった遺跡である。

以上のような経緯から、当遺跡の周辺には多くの遺跡が周知されている。しかし、これらの遺跡すべてを検討することは、紙数の都合上困難である。そこで、本報告では、当遺跡が立地する段丘面およびその周辺の遺跡に限定して、紹介することにする。加えて、今回報告する弥生時代後期と中世を中心見ていくことにしたい。

1. 周辺の遺跡

日輪寺遺跡の立地する高位段丘面上およびその北側に続く丘陵上では、居住・小山遺跡、花丘群集墳が、その周辺の低位段丘面上では、二ツ屋遺跡・小山遺跡などが周知されている。

二ツ屋遺跡

これまでに6次に及ぶ調査が行われている（平成13年3月現在）。いずれも、特定土地区画整理事業に伴い、調査が実施されたものである。後述するように、当初、日輪寺遺跡も二ツ屋遺跡の範疇で理解されていた。

当遺跡では、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代の遺構・遺物が明らかになっている。

弥生時代

後期後半の溝・土坑・しがらみ（第1次）と、後期後半～古墳時代初頭にかけての上坑（第6次）・溝（平成4年度調査・第6次）・井堰（平成4年度調査・第6次）が検出されている。また、第3次調査においても西側からの流土中から後期の土器が多く出土しており、段丘面上に同時期の集落の存在が推定されている。

古墳時代

中期では、遺構は検出されていないが、韓式系土器が出上している（第3次）。後期では、溝（第5次）が検出されている。

奈良時代

溝（第1次）が検出されている。

平安時代

前半の溝（平成4年度調査）と、後半の区画溝（第5次・第6次）、掘立柱建物跡・礎石建物跡・池・土坑・溝・柱穴（平成4年度調査）等が検出されている。特に、後期の一連の遺構は「地方豪族などの極めて有力な人物の邸宅」と考えられている。また、第6次調査でも当該期の溝・土坑が検出されている。

なお、第4次調査で、今回報告する調査地に隣接する東側の崖面を調査したが、顯著な遺構は確認されていない。

居住・小山遺跡

弥生時代と古墳時代・鎌倉時代の遺構が検出されている。

弥生時代

中期小墳の堅穴住居跡と土坑が検出されている。

古墳時代

円墳2基・上器棺墓・木棺墓・土坑墓・柱穴が検出されている。



第5図 主要周辺遺跡

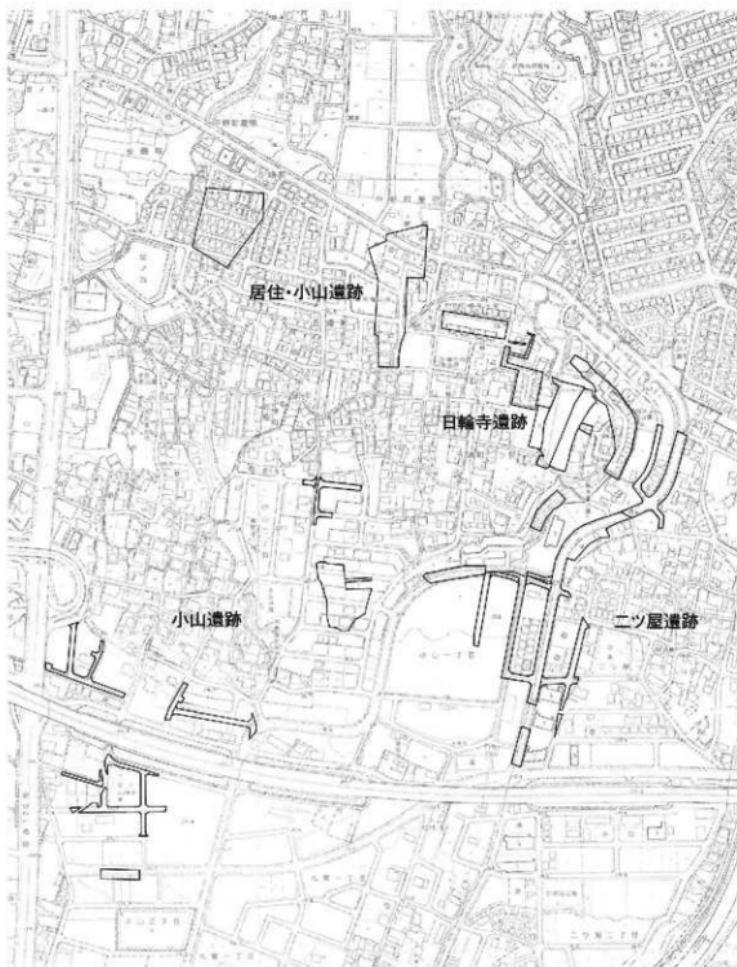
縄文時代	掘立柱建物跡・区画溝・土坑・土壤基・柱穴などが検出されている。
小山遺跡	小山地区特定土地区画整理事業に伴う調査が数次にわたり行われ、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・鎌倉時代の遺構が検出されている。
繩文時代	遺構（第3次）が検出されている。
弥生時代	前期の土坑（第1次・第2次）、後期の堅穴住居跡（第2次・第3次）、土坑（第2次）、溝（第2次）が検出されている。
古墳時代	初頭の堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝（第1次）、後期の堅穴住居跡（第3次）が検出されている。
奈良時代	土坑と溝（第3次）が検出されている。
鎌倉時代	土坑（第3次）が検出されている。
中世以降	水田跡が検出されている（第1次）。

〔参考文献〕

- 千種 浩「居住・小山遺跡」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1983
- 千種 浩「居住・小山遺跡」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1985
- 斎木 巍「小山遺跡 第1次調査」『平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1996
- 斎木 巍「小山遺跡 第2次調査」『平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1997
- 斎木 巍「小山遺跡 第3次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
- 前田久佳久「二ツ屋遺跡」『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1995
- 前田久佳久「二ツ屋遺跡 第1次調査」『平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1996
- 池田 稔「二ツ屋遺跡 第3次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
- 山口美正「二ツ屋遺跡 第4次調査」『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- 関野 豊「二ツ屋遺跡 第5次調査」『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999

第1表 主要周辺遺跡

- | | | |
|------------|------------|-----------|
| 1. 日輪寺遺跡 | 8. 居住遺跡 | 15. 今津遺跡 |
| 2. 二ツ屋遺跡 | 9. 桧木遺跡 | 16. 南別府遺跡 |
| 3. 居住・小山遺跡 | 10. 菖野遺跡 | 17. 新方遺跡 |
| 4. 花丘群集墳 | 11. 城が谷遺跡 | 18. 出合遺跡 |
| 5. 小山遺跡 | 12. 青谷遺跡 | 19. 吉田遺跡 |
| 6. 印路遺跡 | 13. 水谷遺跡 | 20. 吉田南遺跡 |
| 7. 玉津川中遺跡 | 14. 高津橋岡遺跡 | |



第6図 日輪寺遺跡周辺遺跡の調査

第3節 日輪寺遺跡の調査

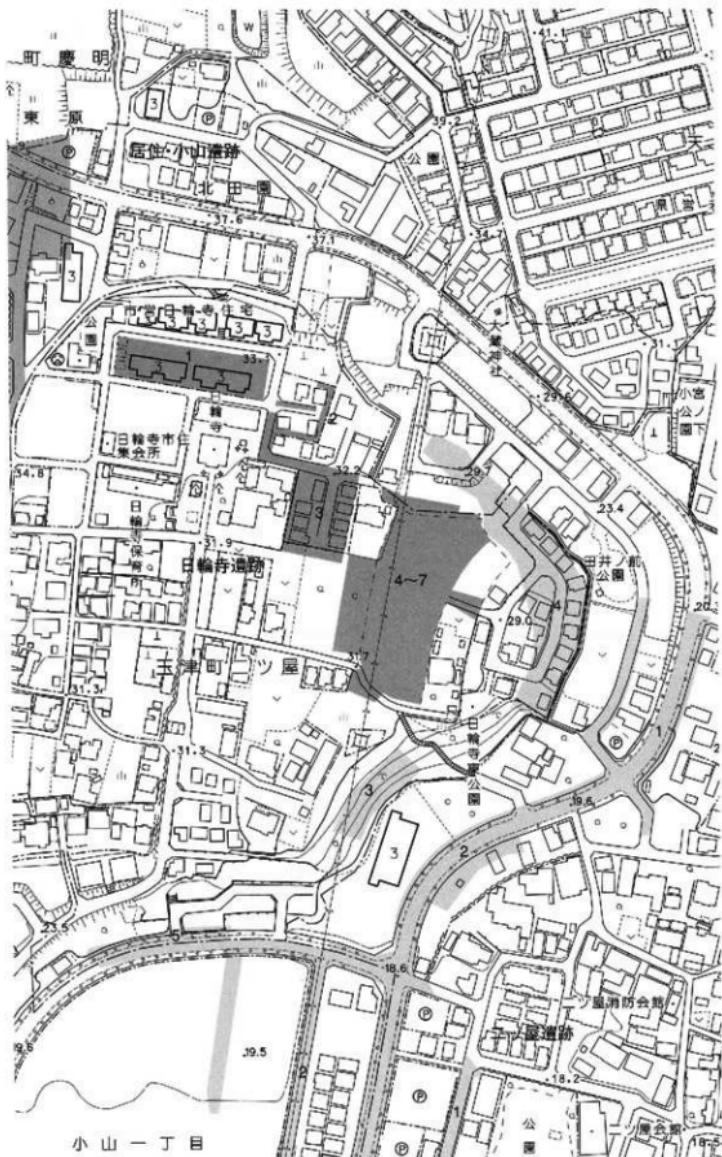
- はじめに 先述したように、日輪寺遺跡は、当初、二ッ屋遺跡として周知されていた。その後、立地の違いから、段丘面上の遺跡を「日輪寺遺跡」と呼称するようになった。今回報告する分を含めて平成13年3月現在、計7次の調査が行われている（第8図）。
- 第1次調査 平成5年度に実施した。平安時代の鉄瓶・鋤先・銅鏡を埋納した祭祀土坑を検出している。
- 第2次調査 平成6年度に、神戸市教育委員会が約145m²の範囲を調査している。調査の結果、12世紀代の掘立柱建物・溝・土坑を検出している。
- 第3次調査 弥生時代後期の竪穴居跡・掘立柱建物、室町時代前半の掘立柱建物・築地状遺構を検出している。戦国期に三好氏による焼き打ちを受けたとされる日輪寺の一部と考えられ、注目される。
- 第4次調査 平成9年度に実施した。今回報告対象とする調査である。
- 第5次調査 平成10年度に実施した。今回報告対象とする調査である。
- 第6次調査 平成10年度に実施した。今回報告対象とする調査である。
- 第7次調査 平成11～12年度に実施した。今回報告対象とする調査である。

〔参考文献〕

- 藤井太郎「日輪寺遺跡 第3次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
深谷憲二・氏平昭則「日輪寺遺跡 第4次調査」『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000



第7図 日輪寺遺跡



第8図 日輪寺遺跡の調査

第2章 調査に至る経緯

第1節 全面調査

1. 調査概要

概要

調査は宅地造成に伴うもので、平成9年度から12年度に至る、第4次から第7次にわたる計4次にわたりて調査が行われた。各調査の概要は以下のとおりである。

第4次調査

平成9年度に実施した。計1820m²調査したが、残土置き場を調査対象地内に確保する必要から、調査地を南北に分割（北から、第4-1次・第4-2次）して調査を実施した（第9図）。

第5次調査

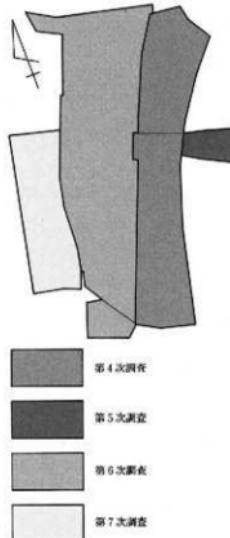
平成10年度に実施した。第4次調査の対象となった宅地造成予定地への進入路部分の調査である。このため、調査面積は171m²とわずかである。

第6次調査

平成10年度に実施した。第4次調査の西側に隣接する地区である。第4次調査地の南側に民家があり、この民家への進入路が当調査対象地内南側を通っている。この進入路の確保の必要性から、調査地を分割（北から、第6-1次・第6-2次）して調査を実施した（第9図）。調査面積は、2550m²（第6-1次：2332m²・第6-2次：218m²）である。

第7次調査

平成11年度から12年度にかけて実施した。調査面積は720m²である。



第9図 第4次～第7次調査

2. 調査組織

各調査年度の発掘調査組織は以下のとおりである。

平成9年度

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古担当委員）

塩上重光 神戸女子短期大学教授

和田晴吾 立命館大学文学部教授

工渠普通 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長

神戸市教育委員会

教育長 鞍本昌男 社会教育部長 矢野栄一郎

文化財課長 杉田年章 社会教育部主幹 岡田哲通

埋蔵文化財係長 渡辺伸行 事務担当学芸員 横詰清孝

調査担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

主査 深谷憲二（茨城県より支援）

技術職員 氏平昭則（岡山県より支援）	
平成10年度	神戸市文化財保護審議会（史跡・考古担当委員）
檀上重光 前神戸女子短期大学教授	
工業普通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長	
和田晴吾 立命館大学文学部教授	
神戸市教育委員会	
教育長 鞘木昌男　社会教育部長 矢野栄一郎	
文化財課長 大勝俊一　社会教育部主幹 岩田哲通	
埋蔵文化財係長 渡辺伸行　事務担当学芸員 東喜代秀	
調査担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	
調査専門員 小川良太　主査 渡辺界（第5次調査）	
主査 山田清朝　研修員 高木芳史（第6次調査）	
平成11年度	神戸市文化財保護審議会（史跡・考古担当委員）
檀上重光 前神戸女子短期大学教授	
工業普通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長	
和田晴吾 立命館大学文学部教授	
神戸市教育委員会	
教育長 鞘木昌男　社会教育部長 水田祐次	
文化財課長 大勝俊一　埋蔵文化財係長 渡辺伸行	
文化財課主査 丹治康明 丸山潔 岩本宏明	
事務担当学芸員 東喜代秀 井尻格 藤井太郎	
遺物整理担当学芸員 平田朋子	
保存科学担当学芸員 千種浩 中村大介	
発掘調査担当学芸員 山本雅和	
平成12年度	神戸市文化財保護審議会（史跡・考古担当委員）
檀上重光 前神戸女子短期大学教授	
工業普通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長	
和田晴吾 立命館大学文学部教授	
神戸市教育委員会	
教育長 木村貞一　社会教育部長 水田祐次	
文化財課長 大勝俊一	
社会教育部主幹 渡辺伸行（埋蔵文化財指導係事務取扱）	
埋蔵文化財調査係長 丹治康明	
文化財課主査 宮本郁進 丸山潔 岩本宏明	
事務担当学芸員 山口英正	
遺物整理担当学芸員 谷正俊	
保存科学担当学芸員 千種浩 中村大介	
発掘調査担当学芸員 山本雅和	

第2節 整理作業

はじめに

調査は、先述したように第4次から第7次にわたって行われている。このため、整理作業も、各調査単位で順次進めていった。したがって、同一遺構が複数の調査にまたがる場合においても、相互の土器の接合は試みられていない。また、基本的には、各調査担当者がそれぞれの調査分の整理を担当した。ただし、平成9年度調査分については、調査担当者が県外からの支援であり、当該年度をもって帰任しているため、山田・高木が補った。

なお、各年度の整理作業は以下のとおりである。整理作業は、各調査時の現場事務所内の作業をのぞいては、神戸市埋蔵文化財センターにて行った。

平成9年度

第4次調査終了後、神戸市埋蔵文化財センターにて、出土遺物の水洗・ネーミング・接合・復元・実測および遺構図の整理を行った。

平成10年度

第6次調査出土遺物について、現場事務所内にて水洗を行った。また、同事務所内にて、一部の土器の実測および遺構図の整理を行った。

平成11年度

第5次調査出土遺物の水洗・ネーミング・接合・復元・実測、および第6次調査出土遺物のネーミング・接合・復元・実測を行った。また、第4次～第6次出土遺物のレイアウトを行った。

また、第4次調査出土土器および石器の一部について、平成9年度に実施できなかった分の追加実測を行った。

平成12年度

昨年度に引き続き、第4次～第6次の出土遺物のレイアウトを行い、さらにそのトレースを行った。合わせて、遺物の写真撮影を行った。また、原稿の執筆を行った。

第7次調査出土遺物については、調査終了後、ただちに神戸市埋蔵文化財センターにて、水洗・ネーミング・接合・復元・実測・レイアウト・原稿執筆を行った。また、金属製品の保存処理も同センターにて行った。

平成13年度

本書の編集作業を行い、刊行した。

第3節 金属製品の取り上げと保存処理

木棺墓（ST01）の棺内には土師器の皿などとともに、鉄製の鎌・刀子や紡錘車などが検出された。しかし、鎌や刀子は亀裂があり劣化している上に、寄り添うように近接しており、それそれを壊さずに取り上げることが困難な状況にあった。

これらの脆弱な金属器をできるだけ壊さずに取り上げるために、鎌と刀子はその下の土ごと硬質発泡ウレタンで包み込んで取り上げを行った。幸いこれらの遺物は棺底から浮いた高さに位置していたため、棺底などの遺構を傷めずに取り上げることができた。

現地で行った方法は、以下の写真のとおりである。その後、埋蔵文化財センターに搬入し、硬質発泡ウレタンの中の、遺物の下側の土を取り除き、出土状態の裏側を検出した。

アルコールで洗浄後、X線透過写真撮影を行い、刀子と鎌の重なりや他の遺物がないかの確認を行ってからそれぞれの遺物を取り外した。紡錘車もX線透過写真撮影を行い、その情報をもとに物理的にサビを取り除いた。

さらに、サビの原因となる塩化物をある程度取り除くために、水酸化リチウムのアルコール溶液に約4か月間浸し、脱塩を行った。乾燥後、アクリル系エマルジョン樹脂を減圧含浸し、強化と表面の保護を図っている。



第10図 取り上げ1－周囲掘削－

遺物の周囲の土を取り除き、さらに遺物の下の土も、遺物が崩れない程度に逆台形になるように削り込む。



第11図 取り上げ2－硬質発泡ウレタン外枠－

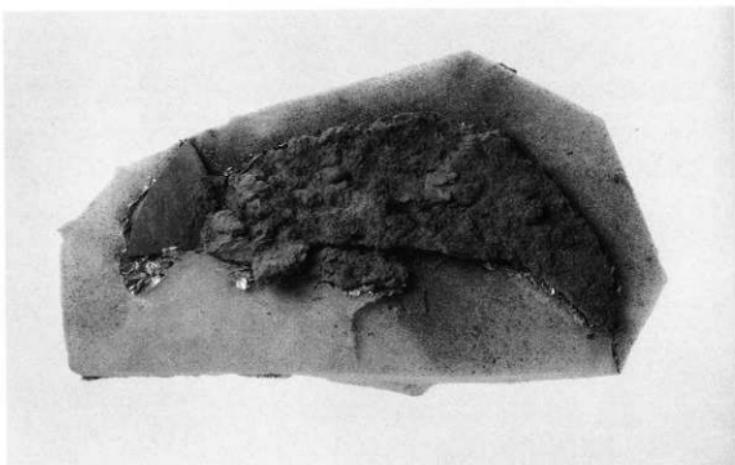
アルミ箔で金属器の表面を覆う。硬質発泡ウレタンの外枠を作る。切り離す高さに金属ヘラを差し込む。



第12図 取り上げ3－硬質発泡ウレタン充填－
硬質発泡ウレタンを充填し、反転の準備をする。



第13図 取り上げ4－反転－
金属ヘラを持ち上げて反転。左側が元の位置。



第14図 取り上げ5—裏側の土を取り除いた状態—



第15図 取り上げ6—同上のX線透過写真—(Scale:3/5 3mA 80kVp 30sec.)



第16図 検出遺構

第3章 調査の結果

第1節 調査概要

1. 検出遺構

はじめに

今回報告する第4次から第7次の調査を通して、大きく、①弥生時代後期から古墳時代初期、②平安時代後期以降、の2時期の遺構・遺物が検出されている。そこで、本報告では、上記の2時期にわけて報告することにする。

弥生時代

検出した遺構は、竪穴住居跡・柱穴・土坑・風倒木痕である。竪穴住居跡は計42棟検出し、時期差を内包するものの、当該期の集落を分析する上で良好な資料となるものと考えられる。柱穴については、少なからず検出されたが、建物を復元するまでにはいたらなかった。土坑は、14基と多くはない。溝状を呈するSK14についても、調査区の北西隅で検出したため、その規模等が不明確である。このため、本報告では土坑として報告する。

また、風倒木痕については、当初土坑として調査を進めていたが、土坑内の上層観察の結果、風倒木痕であることが明らかとなったものである。4次にわたる調査で計45基検出している。ただし、時期については、上記の竪穴住居跡を切ることから、当該期以降であること明確である。ただし、その下限については明確にできない。このため、風倒木痕についても、弥生時代～古墳時代の遺構のなかでとりあえず報告することにする。

平安時代以降

平安時代・鎌倉時代・近世の遺構を検出している。

平安時代については、掘立柱建物跡・木棺墓を検出した。鎌倉時代については、日輪寺の束縛を画する堀跡と考えられる溝状遺構を検出した。この遺構については、日輪寺の創建時期および寺域を検討する上で、貴重な調査成果といえよう。

近世については、掘立柱建物跡を検出している。

2. 基本層序

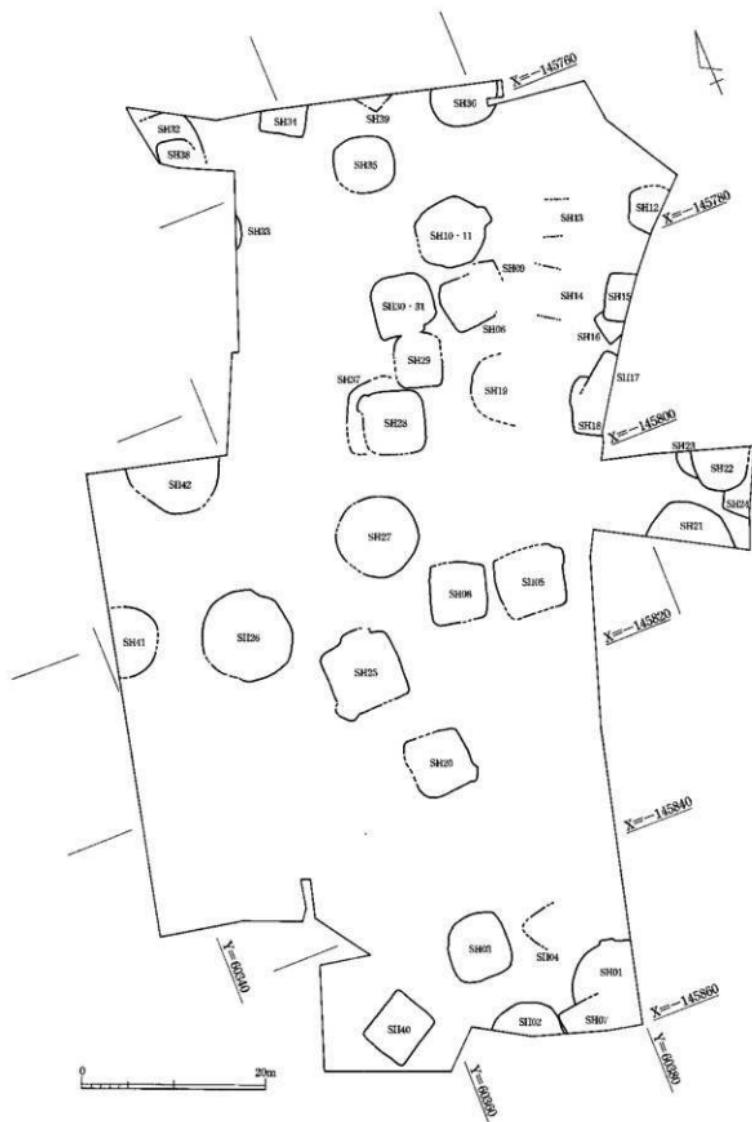
遺構の検出

第1章でも述べたように、日輪寺遺跡は段丘面上に立地しており、洪水等による遺跡の埋没は想定しがたい。加えて、当遺跡の調査前は竹林もしくは畑地となっており、現地表面下には、上記の竹林および畑地に起因する上塙層が顯著に形成されていた。そして、この上塙層を掘り下げたレベルで遺構を検出した。これらの遺構は、前述したように、大きく2時期からなるが、同一面で検出している。

土壤層

上塙層は、第4次調査と第6次調査の境中央部で、10cmを測る。結果として、遺構は現地表面下20～30cmで検出している。なお、土壤層は、第4次調査と第6次調査区南側では、2層認められる。上層の土壤層が、当遺跡全域に認められる土壤層である。当初は、下層の土壤層が北側の1層のみの土壤層に対応していたものと考えられ、後世の造成により、上層の土壤層が形成されたものと考えられる。30cmを測る。このため、遺構検出面は、南側へわずかに傾斜している。

遺構検出面の標高は、北端部で31.25m、中央部で31.20m、南端部で30.90mを測る。



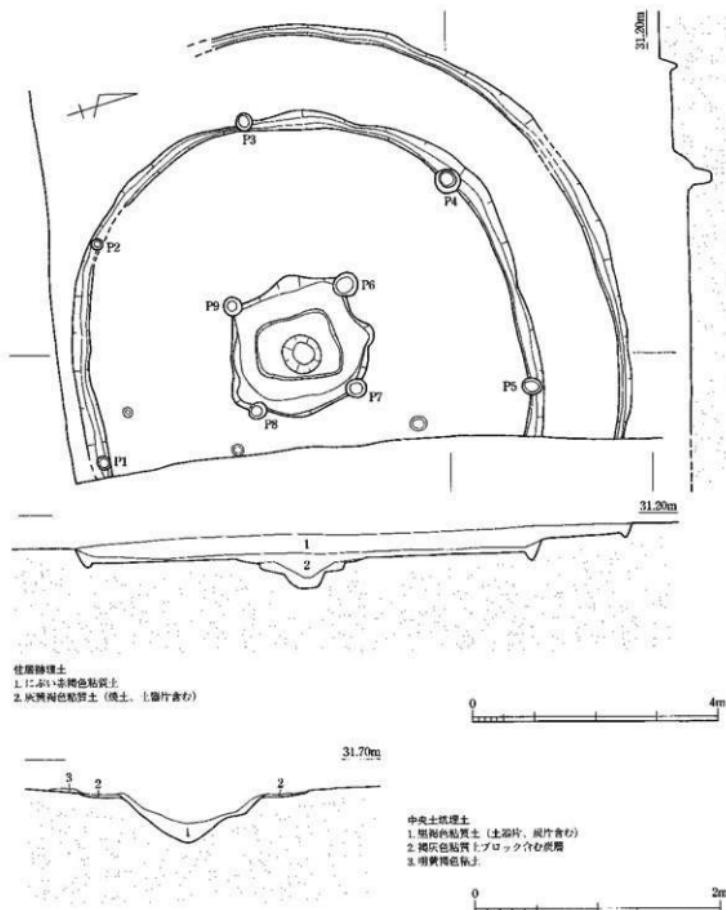
第17図 住居跡

第2節 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

はじめに 当該期の遺構としては、堅穴住居跡・土坑が検出されている。この他、鳥形土製品についても、遺構には伴わず時期の特定が困難であるが、当節で報告する。

1. 住居跡

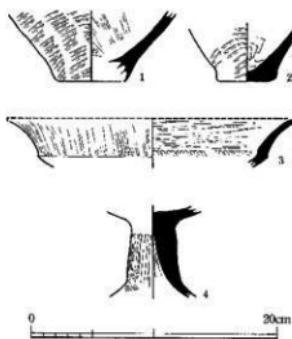
計42棟を検出している。



第18図 SHO1

SH01

- 検出状況** 調査区南東隅に位置する。東端および南端は調査区外へと広がる。南西部はSH07に切られている。
- 形状と規模** 平面は円形を呈する。直径は5.14mに復元できる。検出面からの深さ46cm、床面の標高は30.51mである。
- 付属施設** 土柱穴・中央土坑・高床部・周壁溝がある。
- 柱穴** 柱穴は12基検出している。このうち主柱穴と考えられるのは、床面と高床部の境界に沿って構築されている5基と考えられる。元来は7基からなっていたと考えられる。
- P1は掘り方22cm、床面からの深さ12cm、P2は掘り方17cm、床面からの深さ12cm、P3は掘り方26cm、床面からの深さ38cm、P4は掘り方27cm、床面からの深さ38cm、P5は掘り方27cm、床面からの深さ48cmである。柱穴間距離は、P1-2間で3.5m、P2-3間で3.1m、P3-4間で3.5m、P4-5間で3.6m、平均主柱穴間距離は3.1mである。
- また、中央土坑の四隅にも柱穴が検出されており、先の柱穴とあわせて柱の支柱として機能していたのであろう。P6は掘り方35cm、床面からの深さ40cm、P7は掘り方30cm、床面からの深さ43cm、P8は掘り方23cm、床面からの深さ43cm、P9は掘り方28cm、床面からの深さ49cmである。柱穴間距離は、P6-7間で1.7m、P7-8間で1.8m、P8-9間で1.9m、P9-6間で1.7m、平均主柱穴間距離は1.7mである。
- 中央土坑** 2段に掘って構築している。上段の周囲は約2.2m四方の範囲で4~5cm掘り下げてあり、一部に床面からの比高差3cmほどの周堤が遺存している。上段は床面から20cmほど掘り下げており、底面はほぼ平坦である。平面プランは1.15×1.19mの方形を呈する。下段は径60cmの円形を呈し、検出面から約20cm掘り下げている。埋土は炭泥じり層~炭層および粘土層である。
- 周壁溝** 床面縁辺高床部の壁に沿うものと、外壁に沿うものの2条が検出された。内側のものは主柱穴と重なっている。また、外側のものは一部後世のピットに切られている。規模は内側で平均幅20cm、床面からの深さ8cm程度、外側で平均幅26cm、床面からの深さ6cm程度である。
- 高床部** 外側を全周して検出された。幅は60~65cmで、床面との比高差25cm、高床面の標高は30.79mである。
- 出土遺物** 上器と右器が出土している。
- 土器** 壺と高壺が出土している。このうち、1と3は柱穴内から出土している。
- 壺** 底部片2個体を図化した。2個体ともV様式系縫に分類されるものである。1は内面をハケ調整により仕上げられている。2は、摩滅のため内面の調整は観察できない。
- 高壺** 壺部片と肩部片を各1個体ずつ図化した。3は、II縫部内面を横方向、外



第19図 SH01出土土器

面を縦方向のヘラ磨きにより仕上げられている。

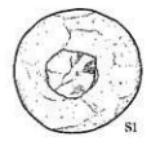
4は、外面をヘラ磨きにより仕上げられている。杯部内面は、摩滅のため観察できない。

石器

S 1 は敲石で埋土巾から出土している。卵形の凹窪を用いており、長軸方向の両端面に敲打痕が認められる。敲打面は上部で径約1.5cm、下部で径約2.0cmの範囲に広がっている。全体に被熱の影響がみられる。また体部表面には2カ所に強い線条模が認められる。規模は長さ69mm、横断面はほぼ円形で50×48.2mmである。重量は226.1gを測る。石材は細粒花崗岩である。

時期

出土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。



第20図 SH01出土石器

S1

0 5cm

SH02

検出状況 調査区南端に位置する。南半は調査区外へと広がる。東側はSH07と接するが、切り合いはない。

形状と規模 平面は円形を呈する。直径は6.8mである。検出面からの深さ29cm、床面の標高は30.51mである。

付属施設 主柱穴・中央土坑・周壁溝がある。

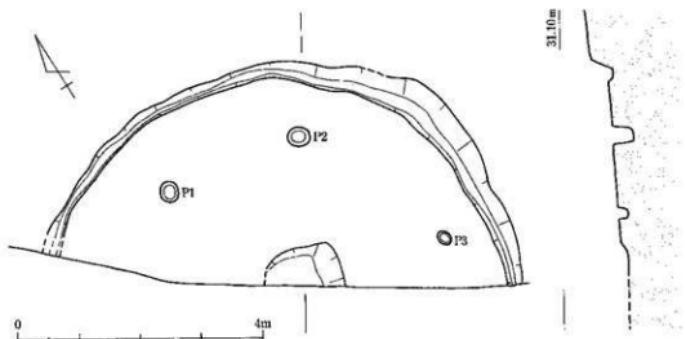
柱穴 柱穴は3基検出している。元来は7基からなっていたと考えられる。P 1は掘り方30cm、床面からの深さ20cm、P 2は掘り方30cm、床面からの深さ36cm、P 3は掘り方25cmである。

柱穴間距離は、P 1-2間で2.3m、P 2-3間で2.9m、平均主柱穴間距離は2.6mである。

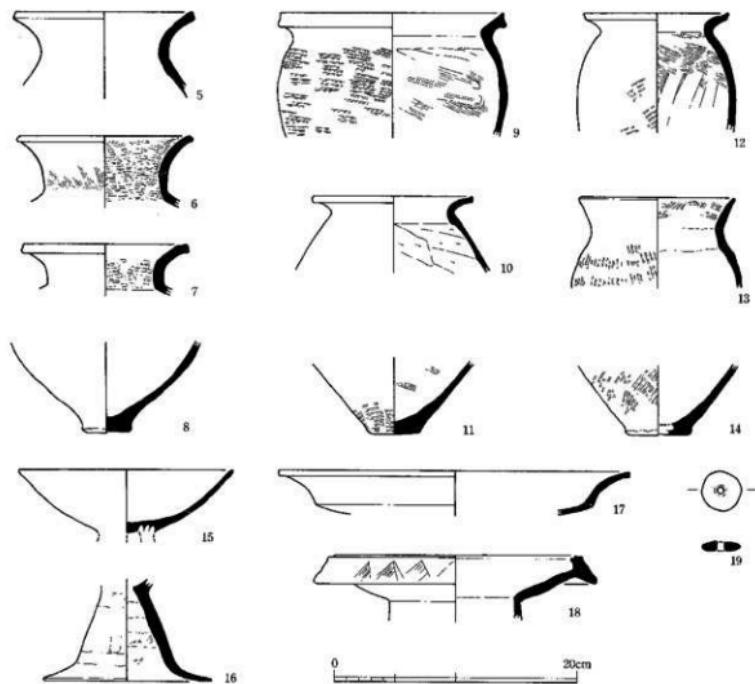
中央土坑 約半分を検出した。残りは調査区外へと広がる。平面プランは径55cmの円形を呈する。検出面からの深さは15cm程度である。

周壁溝 外壁に沿って検出された。規模は平均幅24cm、床面からの深さ8cm程度である。

出土土器 壺・甌・高杯・器台・紡錘車の各器種が出土している。9の壺が床面直上から出土している以外は、いずれも埋土上層から出土している。



第21図 SH02



第22図 SH02出土土器

壺

広口壺と底部が出土している。広口壺は4個体図化した。6と7の口頭部内面はヘラ磨きにより仕上げられ、6の外面はハケ調整後ヘラナデ調整により仕上げられている。この他、5の内外面と7の外面は摩滅のため観察できない。

底部から体部中位まで残存する8は、内面をヘラナデ調整、外面をナデ調整により仕上げられている。

甕

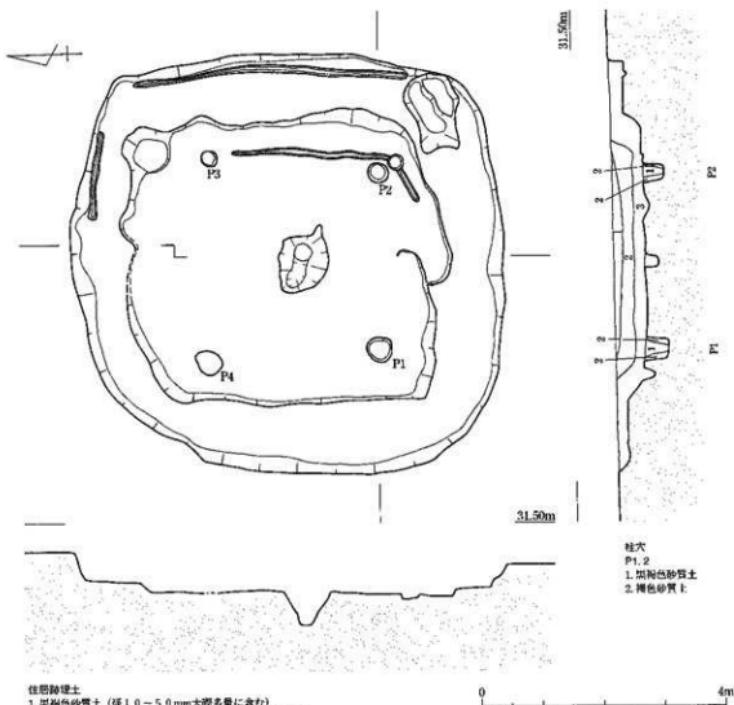
底部片を含めて6個体図化したが、いずれもV様式系甕に分類されるものである。床面直上から出土した9は、体部外面をタタキ整形後、口縁部を横ナデ調整により下斜め方向に拡張している。体部内面はヘラ削り後ハケ調整により仕上げられている。10も体部内面をヘラ削りにより仕上げられている。外面は、摩滅のため観察できない。口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。また、12は体部外面をタタキ整形後ナデ調整、内面をハケ調整後下半をヘラナデ調整により、仕上げられている。13も内面を板ナデ調整に近いヘラナデ調整により仕上げられているが、外面のタタキ整形は緩方向に施されており、他のタタキ整形とは異なる。

底部片はいずれも内面をナデ調整により仕上げられている。ただし11は、一部にハケ調整が認められる。

高坏	环部片と脚部片が出土している。环部は、2個体とも有底高坏に分類されるものであるが、形態的特徴を異にする。15は、体部と口縁部の境の稜が不明瞭である。口縁部を横ナデ調整後、体部外面をヘラ磨きにより仕上げられている。ただし、摩滅のため単位は不明瞭である。一方、17は口縁部と体部の境が明瞭で、外面をヘラ磨きにより仕上げられている。
16	16の脚部は15のタイプの环部に対応するものと考えられる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。
器台	18の1個体である。壺の口縁部の可能性も考えられるが、ここでは器台として報告する。口縁端部を横ナデ調整により上下方向に拡張し、端面には鋸齒文を施している。施文は、一般的なヘラ描きより銛利な工具によって施文されている。口縁部から頸部にかけての外面はヘラ磨きによって仕上げられているが、単位は不明瞭である。また、内面は摩滅のため観察できない。
土罐	19の1個体である。平面形は径3.3cmのはば円形を呈し、中央部に径6mmの孔が穿たれている。厚さは8mmである。
時期	床面直上出土の9の壺から判断すると、弓生時代後期後半と考えられる。

SH03

検出状況	調査区南端に位置する。第4次と第6次の2度の調査により全体を検出した。ただ北東隅は後世の屋倒木によってわずかに切られている。また、南東隅は攪乱を受けているが、遺存状況が良いため床面および壁の立ち上がりを検出することができた。
形状と規模	平面は隅円方形を呈する。南北7.0m、東西6.8mを測る。検出面からの深さ64cm、床面の標高は30.42mである。
付属施設	土柱穴・中央土坑・周壁溝・高床部がある。
柱穴	柱穴は5基検出している。このうち主柱穴と考えられるものは4基である。
P 1	P 1は掘り方40cm、床面からの深さ41cm、P 2は掘り方35cm、床面からの深さ41cm、P 3は掘り方26cm、床面からの深さ34cm、P 4は掘り方40cm、床面からの深さ32cmである。柱穴間距離は、P 1 - 2 間で2.9m、P 2 - 3 間で2.7m、P 3 - 4 間で3.2m、P 4 - 5 間で2.8m、平均土柱穴間距離は2.9mである。
中央土坑	平面プランは、検出面で0.8×0.9mの方形を呈するが、底面は径30cmの円形である。断面は逆台形を呈する。床面から約56cm掘り下げている。埋土は黒褐色～褐色砂礫である。
土坑1	高床部床面南東隅部分で検出された。1.2×0.6mのやや不整な長方形様を呈する。掘り方は住居の外側から内側に向けて下るステップ状の構造になっている。ただ、切り合い関係や出土遺物からは確実にこの住居跡に伴うものかどうかは判断できない。
周壁溝	床面縁辺高床部の壁に沿うものと、外壁に沿うものの2条が検出された。遺存しているのは東半部である。内側のものは東壁から南壁にかけて認められた。柱穴と重なっている。
規模	また、外側のものは東壁沿いと北壁沿いの一部で断続的に検出されている。一部後世のピットに切られている。
外側	規模は内側で平均幅12cm、床面からの深さ3cm程度、外側で平均幅10cm、床面からの深さ4cm程度である。



住居跡埋土

1. 黒褐色の質土 (縦1.0~5.0mm大網多量に含む)
2. 棕褐色の質土 (縦5~30mm大網多量を含む細め混じり粗砂)
3. 黄褐色粗砂 (縦1.0~3.0mm大網少量化)

30.60m

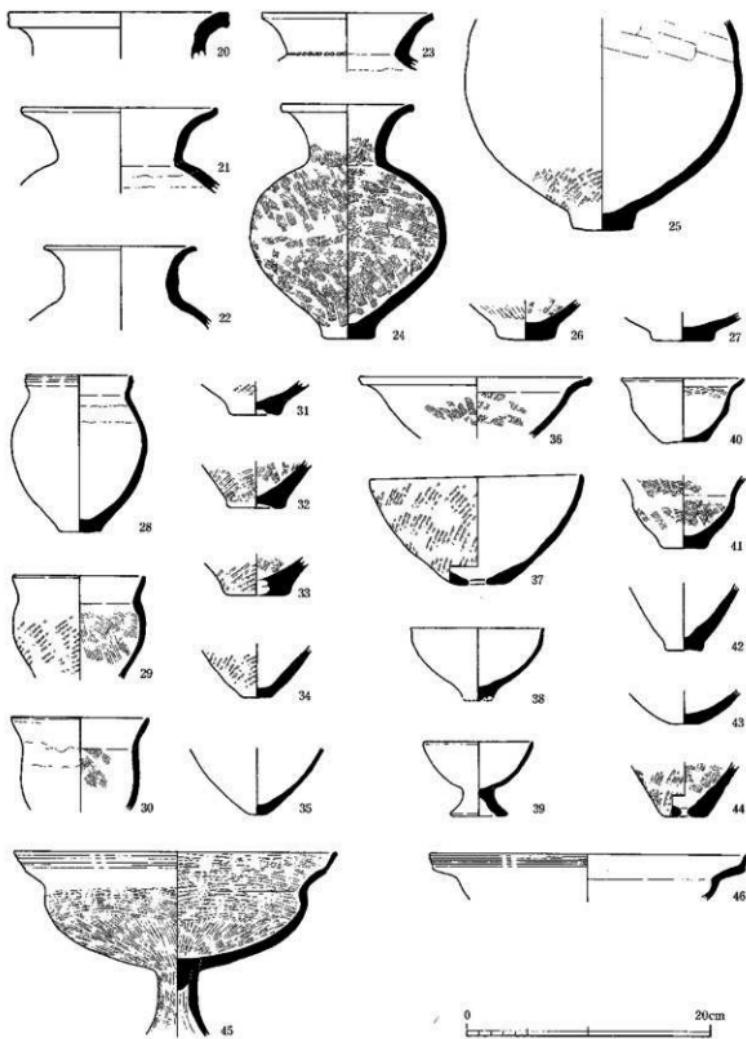
- 中央土坑
1. 黒褐色砂質土 (縦5~5.0mm大網小量含む)
 2. 棕褐色砂質土 (縦5~4.0mm大網多量に含む)
 3. 黄褐色粗砂 (小量)

0 2m

第23図 SH03

高床部 4辺に沿って検出された。壁は本来直線的に造られていたと思われるが西側以外の3辺は崩れたためか不整である。幅は最も遺存状況の良い西側で85cm、平均では69cmである。床面との比高差は26cm、高床面の標高は30.68mである。

出土土器 当住居跡内からは多量の土器が出上している。これらの上器は、出土層位から判断して、当住居跡に伴うもの〔下層出土土器〕と、当住居跡廃絶後に投棄された一群〔上層出土土器〕とに大きく分けることができる。以下、上層出土土器と下層出土土器とに分けて報告する。



第24図 SHO3上層出土土器

上層出土土器　当住居跡に伴う土器の大半は、この一群に含まれる。壺・壺・鉢・高環の各器種が出土している。

壺　広口壺・短頸壺・底部片が出土している。

20～24の5個体を図化した。20～23は、口縁部のみ残存し、内外面を横ナデ調整により仕

上げられている。なお、21については、頸部外面にヘラ磨きの痕跡が認められるが、摩滅のため明確にできない。23の頸部外面には梢円形の刺突文が施されている。24は唯一完形に復元できた個体である。体部下半から頭部にかけての外面をハケ調整により仕上げた後、口縁部外面を横ナデ調整により仕上げられている。

底部片は3個体図化した。特に25については、体部中位まで残存する個体であるが、広口壺の可能性が高い。外面はタタキ整形後ヘラ磨き、内面は下半をナデ調整、中位以上をヘラナデ調整により仕上げられている。26は、外面をヘラ磨き、内面をハケ調整により仕上げられている。27は、外面をナデ調整により仕上げられている。

短頸壺（28）は、完形に復元できたが、器高12.8cmと、小型の土器である。口縁部内外面を強い横ナデ調整により仕上げ、外面に2条の凹線が施されている。体部内面はナデ調整により仕上げられているが、外面は摩滅のため観察できない。

壺 底部片を含めて7個体図化したが、35を除いてはV様式系壺に分類されるものである。このなかで、30については、外面にタタキ整形の痕跡が認められないこと、口径11.0cmと小型であることから、鉢に分類される可能性も否定できない。内面をハケ調整後、外面をナデ調整により仕上げられている。35については、形態的特徴からは庄内式壺と類似するが、胎土は他の壺と同様の特徴を有する。摩滅のため、外面の調整は観察できない。

他の底部については、内面をハケ調整もしくはナデ調整により仕上げられている。

鉢 9個体図化した。中型鉢・小型鉢・有孔鉢・小型台付鉢・底部が出土している。

中型鉢は、36の1個体を図化した。36は、強い横ナデ調整により、口縁部が大きく屈曲する。体部は外面ともハケ調整により仕上げられている。

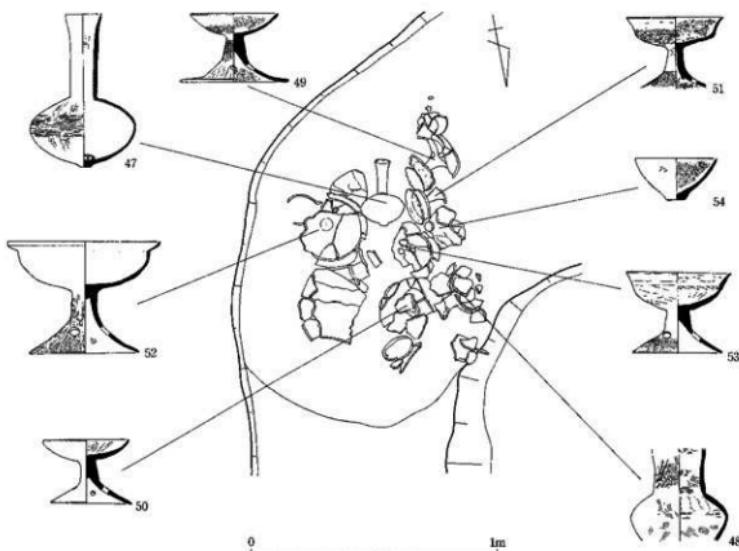
小型鉢に確実に分類できる上器は、38と40・41の3個体であるが、42・43について小型鉢に分類できるものと考えられる。38は、底部をわずかに欠くが、ほぼ完形に復元できた土器である。内外面をナデ調整により仕上げられている。40も完形に復元できた個体である。口縁部内外面および体部外面をナデ調整により、他の内面をヘラ磨きにより仕上げられている。内面のヘラ磨きについては、頸部を除いては、その単位を観察することはできない。41は完形に復元できなかったが、40と同形態をなすものと考えられる。体部から口縁部にかけての外面をハケ調整により仕上げた後、頸部外面を横ナデ、体部外面をナデ調整により仕上げられている。

42・43については、摩滅が著しく、わずかに、42の内面でナデ調整を観察できたにすぎない。

小型台付鉢は、39の1個体のみである。脚部はユビオサエにより、体部外面はナデ調整により、仕上げられている。

有孔鉢は37と44の2個体である。37は、完形に復元できた土器である。底部から口縁部にかけての外面をタタキ整形後、体部の一部と内面をナデ調整、口縁部内面を横ナデ調整により仕上げられている。また、底部中央に1.3cm×1.5cmのやや不定形な穿孔が焼成前に施されている。44は、底部中央に径4mmの穿孔が焼成後に施されている。

高壺 2個体図化したが、いずれも丹波系の高壺の特徴をもつ個体である。口縁部は複合口縁をなし、外面に5条の擾凹線が施されている。



第25図 南東隅一括土器群出土状況

45は、口縁部から体部にかけての内面全面と体部外間にていねいなヘラ磨きが施されている。また頸部外面にもヘラ磨きが施されているが、その単位は観察できない。脚部外面にもていねいなヘラ磨きが施されている。46についても、45と同様に仕上げられているが、摩滅のため調整方法は明確に観察できない。

なお、これら2個体については、胎土・色調等の特徴が他の土器とは異なり、搬入品の可能性が考えられる。

下層出土土器 墓下下層および床面から出土した土器であるが、これらのなかに、住居跡南東隅高床部で一括で出土した一群がある（第25図）。これらの上器については、いずれも完形に近く一括性が高いため、この一群の土器（以下「一括土器群」と呼称）を他の下層出土土器（「床面上土器」）とは分けて報告することとする。

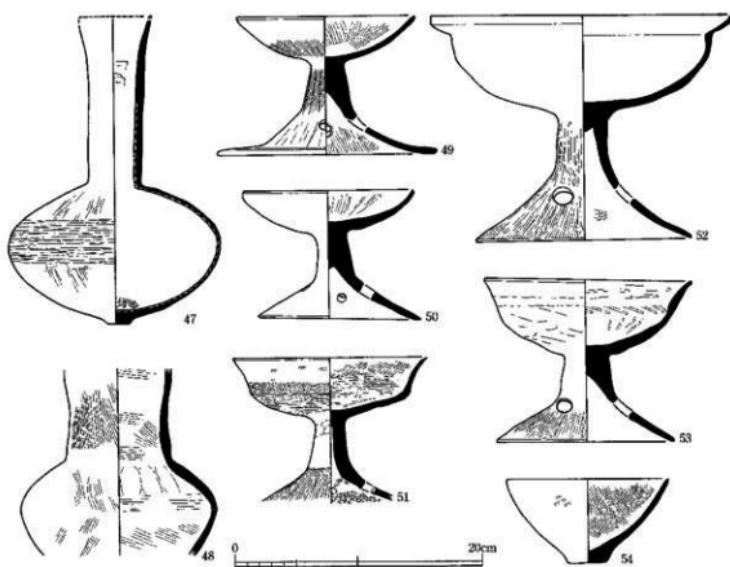
一括土器群 壺・鉢・高杯が出土している（第26図）。

壺 細頸壺（47）と長頸壺（48）が各1個体出土している。47は、口縁部内面を横方向のヘラ削り、体部外面をヘラ磨き、内面をハケ調整により仕上げられている。体部のヘラ磨きについては、かなりていねいに施されているため、単位を十分観察することは困難である。口縁部外面については摩滅のため観察できない。

48は頸部から体部中位にかけて残存する。頸部内外面、体部外面および体部下半内面はハケ調整、体部上半内面はユビオサエにより仕上げられている。

高杯 5個体出土している。皿形高杯・有稜高杯・丹波系高杯の3タイプが出土している。

皿形高杯は49・50の2個体が出土している。2個体とも杯部は皿形に近い。49は、杯部内



第26図 SH03-1括土器群

外面部をハケ調整後口縁部外面を横ナデ調整、脚部外面は、上半をハケ調整、下半をナデ調整により仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。脚部には4箇所に径1.2cmの透孔が焼成前に穿たれている。また、脚端部外面には2条の沈線が施されている。

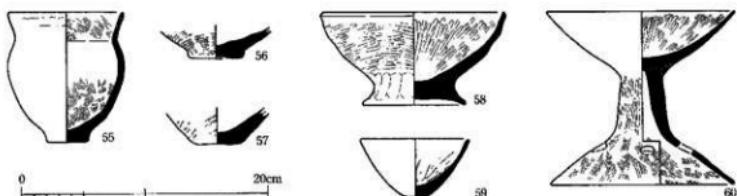
50は、环部内面をヘラ磨きにより仕上げられている。他については、摩滅のため観察できない。脚部には、径1.2cmの透孔が4箇所に焼成前に穿たれている。

有稜高环は51と53の2個体である。51は、脚端部を除きほぼ完存する。环部内外面をハケ調整後体部外面をヘラ磨き、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。

脚部外面上半と内面はナデ調整、下半はヘラ磨きにより仕上げられている。脚部には透孔が3箇所に残存するが、本来は4箇所に穿たれていたものと考えられる。透孔は完存するものではなく、その径は明らかにできない。

53は、外面上部から口縁部にかけての境が不明瞭で、51のような稜は認められない。ただし、内面には环部上部の強いナデ調整による明確な段が認められる。口縁部は外外面を横ナデ調整後、内面をヘラ磨きにより仕上げられている。体部外面はヘラ削り後ナデ調整、内面は暗文状のヘラ磨きにより仕上げられている。口縁部付近と以下の箇所ではヘラ磨きの方向は明らかに異なり、綾杉状をなしている。脚部外面上半はナデ調整、下半はヘラ磨き、内面はハケ調整により仕上げられている。脚部には3箇所に径1.2cmの穿孔が認められる。

丹波系高环は、52の1個体である。环部内面および脚部外面はヘラ磨き、脚部内面はハケ



第27図 SH03下層出土土器

調整により仕上げられている。坏部のヘラ磨きは、摩滅のためその単位は不明瞭である。口縁部内面のヘラ磨きは横方向に施されている。他については、摩滅のため観察できない。脚部には径1.6cmの透孔が3箇所に穿たれている。なお、この土器については、形態的にいわゆる丹波系高坏に類似するが、口縁部は明瞭な複合口縁をなさず、端面に擬凹線は認められない。

鉢 小型鉢に分類される54の1個体が出土している。外面をタタキ整形後、内外面をハケ調整により仕上げられている。

床面出土土器 壺・鉢・高坏が出土している（第27図）。

壺 完形に復元できた55と底部片（56・57）が出上している。

55は、口縁部内面をハケ調整、外面を横ナデ調整、体部外面をタタキ整形後ナデ調整、内面をハケ調整後上半をナデ調整により、仕上げられている。

底部片は、V様式系壺の底部で、56の内面はナデ調整により仕上げられている。57の内面は摩滅のため観察できない。

鉢 小型鉢2個体が出土している。

58は、台付鉢に分類される土器である。体部内外面をヘラ磨きにより仕上げた後、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。台部はユビオサエにより整形されている。

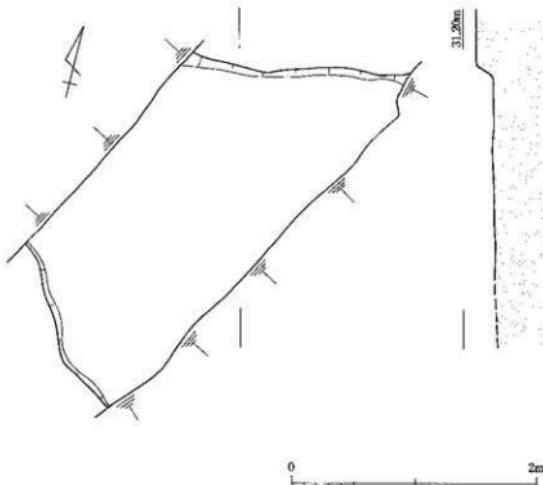
59は、わずかに平底を呈する鉢で、内面をヘラ削り、外面をナデ調整後、口縁部内外面をユビオサエと深い横ナデ調整により仕上げられている。

高坏 1個体出土している。脚部の一部をのぞいて完存する土器である。坏部内面はハケ調整後部分的にヘラ磨きを施し、その後口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。外面の調整は摩滅のため観察できない。脚部外面は、ハケ調整後上半は全面、下半は部分的にヘラ磨きにより仕上げられている。内面はハケ調整により仕上げられている。脚部には、径1.3cmの透孔が4箇所に穿たれている。

時期 下層出土土器を中心に判断すると、弥生時代後期後半と考えられる。

SH04

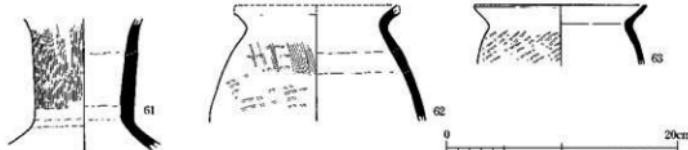
- 検出状況** 調査区南東隅に位置する。遺存状況はきわめて悪く、大半を擾乱によって消失している。北辺および西辺の一部をわずかに検出した。
- 形状と規模** 平面は方形を呈するものと思われる。現存値で南北1.5m以上、東西1.8m以上である。検出面からの深さ10cm、床面の標高は30.97mである。
- 付属施設** 全く検出できなかった。



第28図 SH04

- 出土土器** 壺と甕が出土している。いずれも埋土中から出土している。
- 壺** 61の1個体を図化した。長頸壺の頸部から体部にかけての一部である。頭部外面はハケ調整、頸部から体部への変換部外面は横ナデ調整により仕上げられている。他の部位については、摩滅のため観察できない。
- 甕** 2個体図化したが、2個体ともV様式系縦に分類されるものである。62は、体部外面をタキ整形後部分的なハケ調整、口縁部外面を横ナデ調整により仕上げられている。他の部位については摩滅のため観察できない。63は、体部内面から口縁部外面上にかけて横ナデ調整により仕上げられている。

- 時期** 山土器から判断して、弥生時代後期前葉から中葉と考えられる。



第29図 SH04出土土器

SH05

検出状況

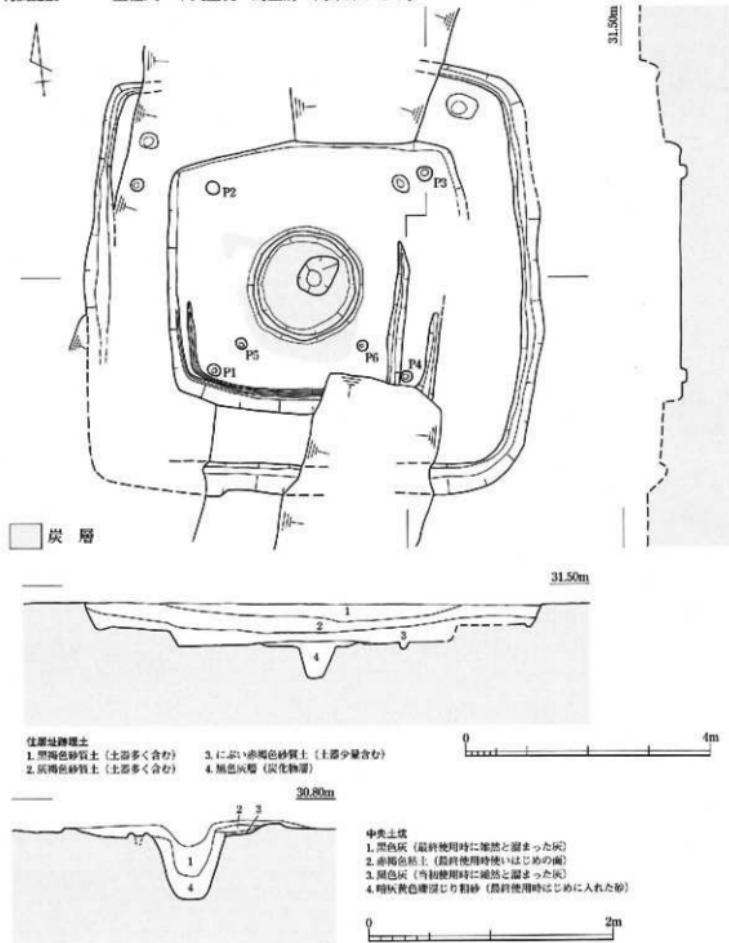
調査区中央東よりに位置する。SH08の東に隣接するが切り合い関係はない。北辺および南辺は搅乱を受けており高床部の半分以上を消失する。床面は周壁溝の検出状況から東西方向へ拡張していることがうかがわれる。

形状と規模

平面は隅円方形を呈する。南北7.0m、東西7.5mを測る。検出面からの深さ68cm、床面の標高は30.51mである。

付属施設

主柱穴・中央土坑・周壁溝・高床部がある。



第30図 SH05

主柱穴

柱穴は10基検出している。このうち主柱穴と考えられるものは4基である。

P 1は掘り方20cm、床面からの深さ26cm、P 2は掘り方20cm、床面からの深さ31cm、P 3は掘り方21cm、床面からの深さ42cm、P 4は掘り方16cm、床面からの深さ33cmである。柱穴間距離は、P 1-2間で3.0m、P 2-3間で3.4m、P 3-4間で3.3m、P 4-5間で3.2m、平均主柱穴間距離は3.2mである。

また、床面では周壁溝が一部で2条検出されていることから拡張が行われたと思われるが、拡張前の主柱穴と見られるのがP 5・P 6の2基である。本来4基あったと考えられるが、対応する2基は検出できなかった。P 5は掘り方17cm、床面からの深さ16cm、P 4は掘り方18cm、床面からの深さ15cmである。柱穴間距離は1.9mを測る。

中央土坑

2段に掘って構築している。上段は床面からの比高差3cmほどの周堤をもつ。深さは周堤の頂から約10cm下がっている。周堤は円形にめぐっており直径1.4mの規模である。下段は径60cmの円形を呈し、検出面から約20cm掘り下げている。周堤との位置関係であるが、同心円上の配列ではなく周堤がやや南西にずれている。埋上は炭混じり層～炭層および粘土層である。また、上段では炭が結まっており、周堤の内側全面と一部外側にもはみ出す形で広がっていた。

周壁溝

床面毎辺高床部の壁に沿うものと、外壁に沿うものの2条が検出された。床面では南北では2条検出されたのに対し北半では全く検出できなかった。規模は内側で幅5~25cm、床面からの深さ10cm程度、外側で幅12~18cm、床面からの深さ7cm程度である。外壁に沿うものは擾乱のために断続的にしか検出されていないが、本来は全周していたものと思われる。規模は平均幅29cm、床面からの深さ12cm程度である。

高床部

4辺に沿って検出された。東辺のものは後世の造構によって削半されているため消失している。幅は南側で84cm、西側で90cm、平均では86cmである。床面との比高差は20cm、高床面の標高は30.72mである。

出土遺物

土器と石器が出土している。

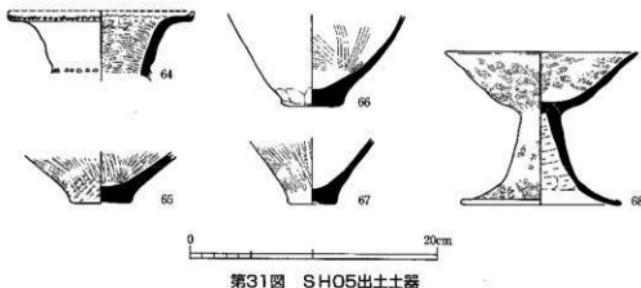
土器

壺・甕・鉢・高坏が出土している。65が中央土坑、66・67が床面直上から、他は埋上中から出土している。

壺

広口壺と底部片が出土している。

64の広口壺は、口縁端部を横ナデ調整によりつまみあげられているが、端部を欠く。端面



には櫛描波状文が施されているが、単位は不明瞭である。また、内面にはヘラ描による波状文が認められるが、単位は明瞭にできない。口縁部内面はヘラ磨き、外面は横ナデ調整により仕上げられている。また、頸部外面には、三角刺突文が認められる。

65については、形態的特徴から蓋の底部として報告する。ただし、内面がヘラ磨きにより仕上げられていることから、鉢に分類すべきかもしれない。外面はタタキ整形後ヘラ磨きにより仕上げられている。

要

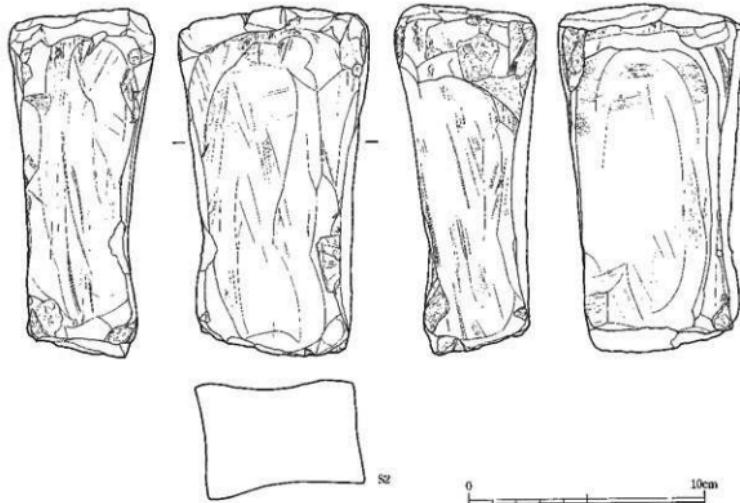
66の1個体である。内面はハケ調整により仕上げられている。外面は、摩滅が著しく、調整は観察できない。

鉢

67の1個体である。外面はヘラ磨きにより仕上げられている。内面は、摩滅傾向にあるが、わずかにヘラ磨きの痕跡が認められる。底部はユビオサエにより整形されている。

高环

68の1個体である。円錐高环に分類されるものであるが、体部と口縁部の境がやや不明瞭である。体部から口縁部内外面はハケ調整により仕上げられ、内面はさらにナデもしくはヘラ磨きにより仕上げられている。ただし、摩滅傾向にあるため、調整方法は明確にできない。脚部外面についてもハケ調整後ヘラ磨きにより仕上げられているが、摩滅傾向のためその単位を明確にできない。内面はヘラ削りにより仕上げられている。



第32図 SHO5出土石器

石器

磁石が出土している(S 2)。形態はほぼ直方体で4側面を底面として利用する。両端面は削れ面を残しており使用した形跡はない。線条痕はいずれの面も長軸に対してやや左上がりに斜行するものが主である。左側面には脱く削られた強い線条痕が認められる。規模は、長さ148mm、幅79mm、厚さ57.9mm、重さ858.3gである。石材は流紋岩質凝灰岩である。

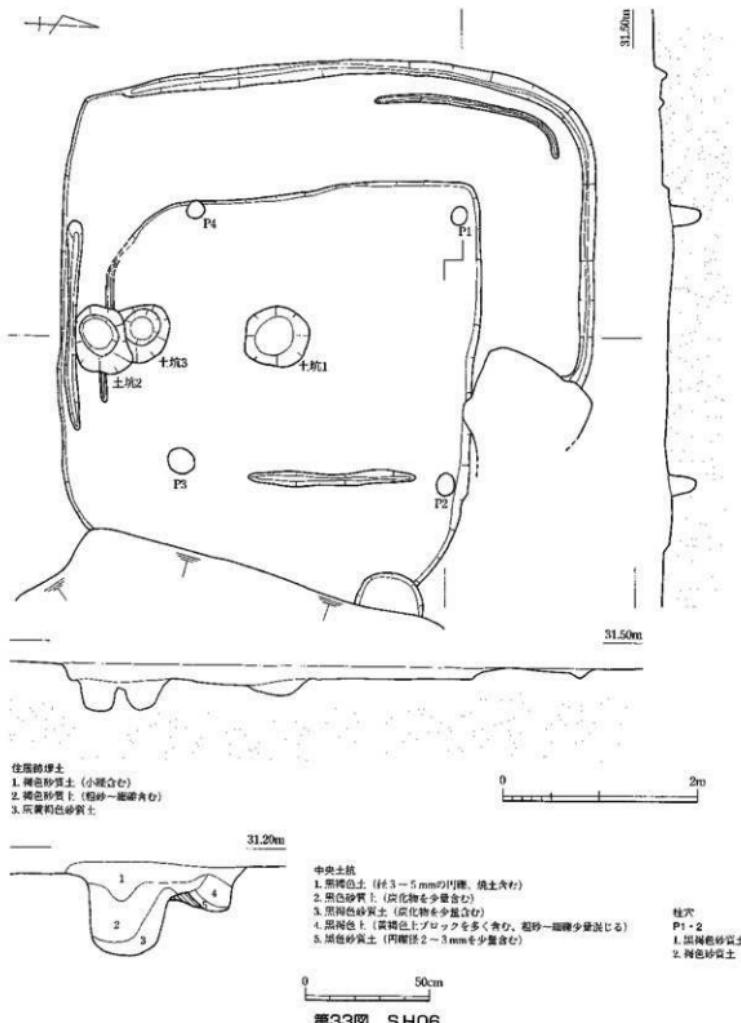
時期

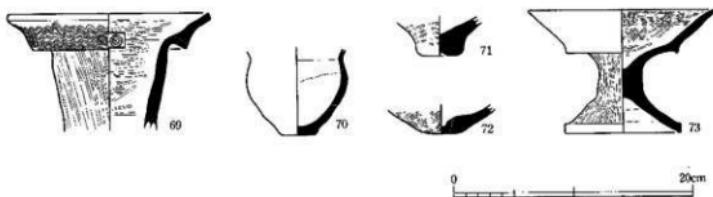
床面上および中央土坑から出土した土器から、弥生時代後期後半と考えられる。

SH06

検出状況

調査区北に位置する。第4次調査と第6次調査の2度にまたがって全体を検出した。東辺は擾乱を受けて消失している。また北東隅についても後世の風倒木によって切られて消失している。北東ではSH09が重なって検出された。当住居はこのSH09に先行して造られたものであるが、SH09の床面レベルが相対的に高く、かつ重なる範囲の大半が削平されて消失





第34図 SHO6出土土器

しているため、床面と高床部および壁の立ち上がりを検出することはできなかった。周壁溝は一部で2条認められるところがあり、屋内土坑が3基検出されたことともあわせて、建て替えが少なくとも1度行われたものと考えられる。

形状と規模 平面は隅円方形を呈する。南北5.15m、東西5.3mを測る。検出面からの深さ16cm、床面の標高は31.12mである。

付属施設 主柱穴・上坑・周壁溝・高床部がある。

柱穴 柱穴は4基検出している。いずれも主柱穴と考えられる。

P 1は掘り方17cm、床面からの深さ30cm、P 2は掘り方24cm、床面からの深さ27cm、P 3は掘り方25cm、床面からの深さ42cm、P 4は掘り方18cm、床面からの深さ33cmである。柱穴間距離は、P 1～2間で2.8m、P 2～3間で2.7m、P 3～4間で2.6m、P 4～5間で2.7m、平均主柱穴間距離は2.7mである。

土坑 3基検出された。

上坑1は屋内中央部に位置しており、中央土坑と考えられる。壁面には被焼の痕跡が認められ火を使用したことがうかがわれる。遺存状況は悪く上部を大きく削平されている。平面円形を呈し、直径60cm、検出した床面からの深さ18cmである。

土坑2は南壁際に位置し、高床部を切っている。上坑3と接しており、やはりこれを切っているものと思われる。平面はやや東西に長い方形で70×50cm、深さ32cmの規模である。埋土中に炭を多く含む。

土坑3は南側高床部の壁際に位置し、土坑2に切られる。平面は不整であるが、木米上坑2と同様東西方向にやや長い方形を呈するものと考えられる。現存値60×45cm、床面からの深さ33cmを測る。

周壁溝 床面縁辺高床部の壁に沿うものと、外壁に沿うものが検出された。床面では南辺と東辺の一部で検出された。規模は幅5～15cm、床面からの深さ3cm程度である。外壁に沿うものは北辺から西辺にかけてと南辺の一部で検出された。北西隅から西辺では2条認められた。規模は外側のもので平均幅15cm、床面からの深さ7cm程度、内側のもので幅13cm、床面からの深さ5cm程度である。

高床部 北辺および西辺で認められた。本来は4辺に造られていたのかもしれない。すなわち、東辺は擾乱によって、南辺は土坑2と土坑3によって破壊された可能性が考えられるからである。

規模は北辺で105cm、西辺で110cmである。現存値で床面との比高差は5cm、高床面の標高

は31.17mである。

出土土器 瓢・甌・高杯・器台が出土している。ただし、器台については小片のため図化できなかった。いずれも理土中からの出土である。

甌 條合口縁甌1個体(69)を図化した。口縁部は、粘土紐を貼り付け横ナデ調整により斜方に拡張し、複合口縁をなす。外端面に6条1単位の櫛描波状文を2帯施し、2側でセットをなす竹管円形浮文が5箇所に貼り付けられている。口縁部内外面はヘラ磨きにより仕上げられている。

甌 底部片も含めて3個体図化した。このなかで70は、推定器高10cm弱の小型の甌である。底部内外面はナデ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

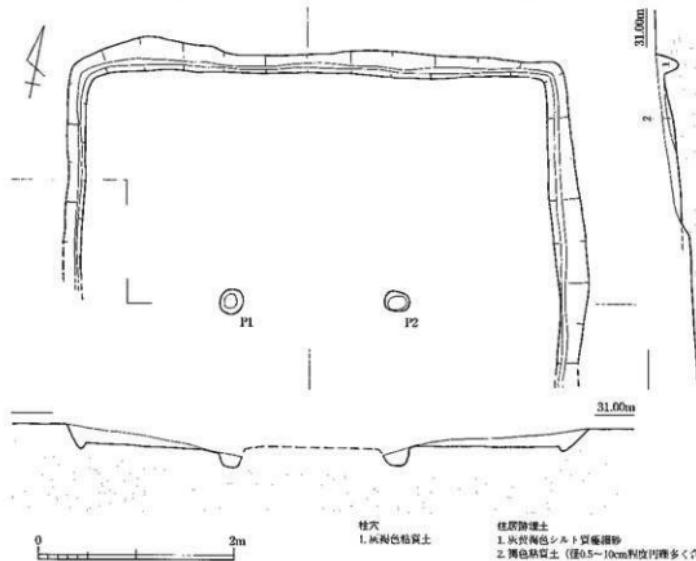
高杯 73の1個体のみである。有縁高杯に分類され、口縁部と体部の境は突堤状をなす。口縁部は、内面をハケ調整、外面を横ナデ調整後、杯部内面をヘラ磨きにより仕上げられている。脚部外面はヘラ磨き、内面はナデ調整、脚端部は横ナデ調整により仕上げられている。

時期 山土器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。

SH07

検出状況 調査区南東隅に位置する。南半は調査区外へと延びる。SH01を切っている。ただし、床面の標高が相対的に高いため、重複した範囲でもSH01を著しく破壊するものではない。床面中央部は擾乱坑によって若干削平されている。

形状と規模 平面は方形を呈する。東西で5.3mを測る。検出面からの深さ25cm、床面の標高は30.68m



第35図 SH07

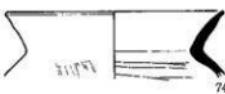
である。

付属施設

主柱穴・周壁溝がある。

主柱穴

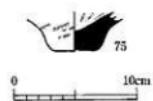
主柱穴は2本柱と思われる。P1は掘り方25cm、床面からの深さ17cm、P2は掘り方21cm、床面からの深さ20cm、柱穴間距離は1.7mである。ピットの上部は2基共に内側の肩が擾乱を受けて削平されている。



74

周壁溝

外壁に沿って検出された。規模は、幅19~32cm、床面からの深さ7cm程度である。



75

第36図 SHO7出土土器

出土土器

埋土中より甕が出土している。

甕

2個体図化した。このなかで、74は、体部外面をハケ調整、内面を横方向のヘラ削り、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。

時期

出土土器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。

SHO8

検出状況

調査区中央に位置しSHO5の西に隣接する。第4次調査と第6次調査の2度にまたがって全体を検出した。北辺の西端を後世の風倒木によって切られている。

形状と規模

平面は隅円方形を呈する。南北6.7m、東西で6.4mを測る。検出面からの深さ40cm、床面の標高は30.80mである。

付属施設

主柱穴・中央土坑・周壁溝・高床部がある。

主柱穴

柱穴は3基検出している。本来は4基からなっていたものと思われる。P1は掘り方28cm、床面からの深さ15cm、P2は掘り方38cm、床面からの深さ15cm、P3は掘り方32cm、床面からの深さ21cmである。柱穴間距離は、P1-2間で2.5m、P2-3間で2.7m、平均主柱穴間距離は2.6mである。

中央土坑

2段に掘って構築している。上段は1辺1.16mの方形を呈する。床面から15cmほど掘り下げており底面はほぼ平坦である。下段は径約40cmの円形を呈し、上段底面から約20cm掘り下げている。

埋土は炭混じり層～炭層および粘土層である。また、炭は上段掘り方の外側に広がって認められた。

周壁溝

床面線近高床部の様に沿うものと、外壁に沿うものが検出された。床面では東辺を除くと西辺で若干途切れるほかはほぼ全周して検出された。規模は幅14~25cm、床面からの深さ8cm程度である。

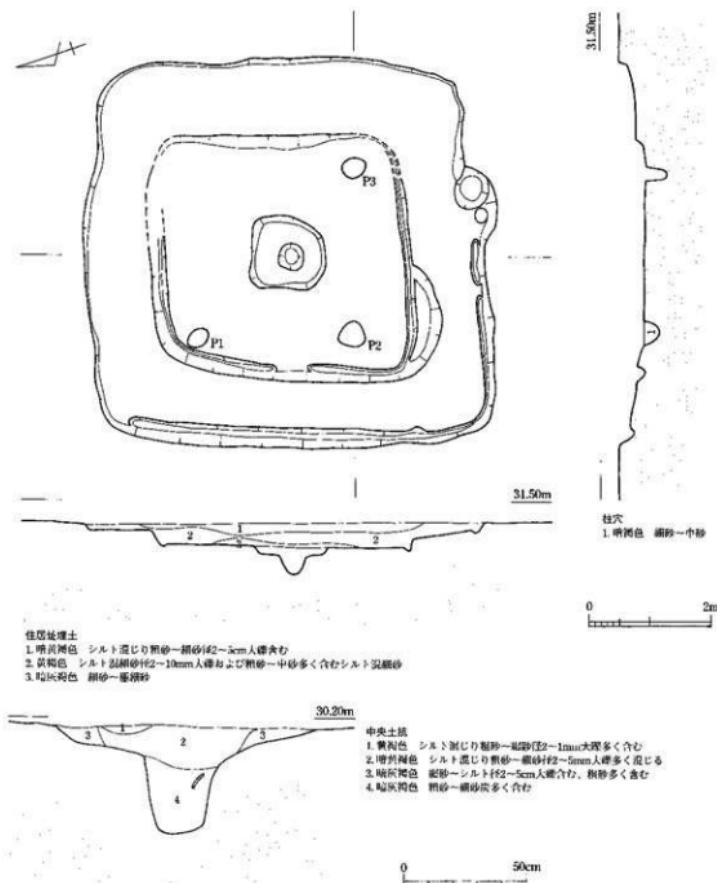
外壁に沿うものは西辺から南辺にかけて検出された。規模は幅10~30cm、床面からの深さ8cm程度である。

高床部

4辺に沿って検出された。壁は木氷直線的に造られていたと思われるが南側西端では崩れたためか不整である。幅は76~115cmで、床面との比高差21cm、高床面の標高は31.01mである。

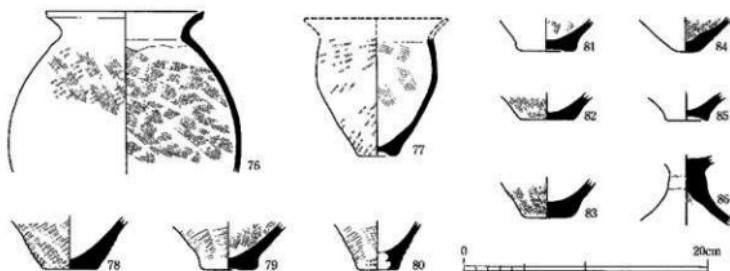
出土土器

甕・鉢・高杯が出土している。84が中央土坑、78・83が埋土下層から出土している。他の土器については、上層から出土している。



第37図 SH08

- 皿** 底部片を含めて9個体図化した。いずれもV様式系譜に分類されるものである。内面は、80のナデ調整以外はハケ調整により仕上げられている。なお、83については、摩滅のため観察できない。底部片は、突出した平底を呈するものではなく、尖り底化の傾向が顕著である。
- 鉢** 85の1個体のみである。底部のみであるが、形態的特徴から鉢と判断した。内外面とも、摩滅のため観察できない。
- 高环** 86の1個体のみである。脚部上半のみ残存し、外側をハケ調整により仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。



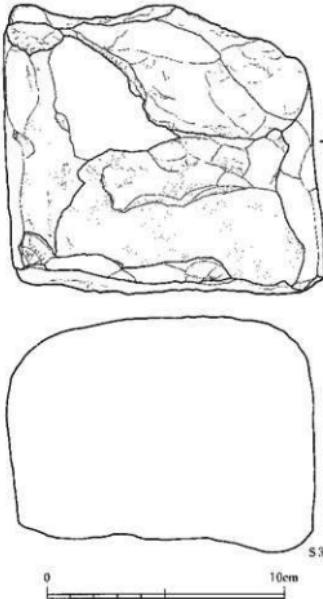
第38図 SHO8出土土器

石器 台石1点(S3)が出土している(第39図)。

両端と裏面が破損して欠失している。正面においても破損箇所が多く作業面は左半の一部に認められるにすぎない。両側面は全体に摩滅しており、作業面であつたと考えられる。いずれの面においても摩滅による著しい凹みが形成されたり、強い条線痕が残るなどの顕著な使用痕は認められない。

現存値で長さ121mm、幅131mm、厚さ101.5mmである。石材は凝灰質砂岩である。

時期 出土土器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。

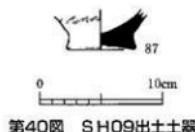


第39図 SHO8出土石器

SHO9

検出状況 調査区北に位置する。大半の部分が擾乱を受けて消失しているため、全容は明らかでない。SHO6と重なって検出されたが、床面の標高が浅いため削平の影響を強く受け、重複する部分では遺存していない。

形状と規模 直交する2辺を検出していることから方形の平面プランを持つと考えられる。現存値で南北方向に2.18m、東西方向に3.1mを測るが、本来の大きさを復元することは困難である。検出面からの深さ8cm、床面の標高は31.27mである。



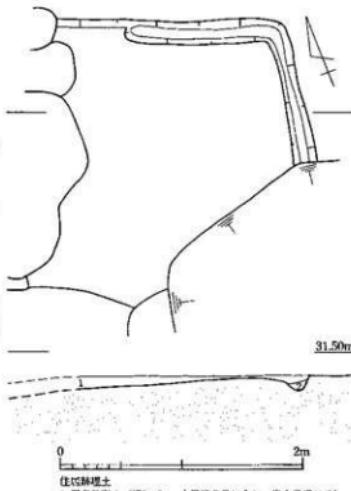
第40図 SH09出土土器

付属施設 柱穴を1基検出しているが、主柱穴である確証を得られない。

出土土器 壺の底部片が埋土中より出土している(第40図)。

炭化したのは87の1個体のみである。内面はナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。



第41図 SH09

SH10

形状と規模 平面は扇円方形を呈し、1辺は約5.9mである。検出面からの深さ35cm、床面の標高は31.01mである。

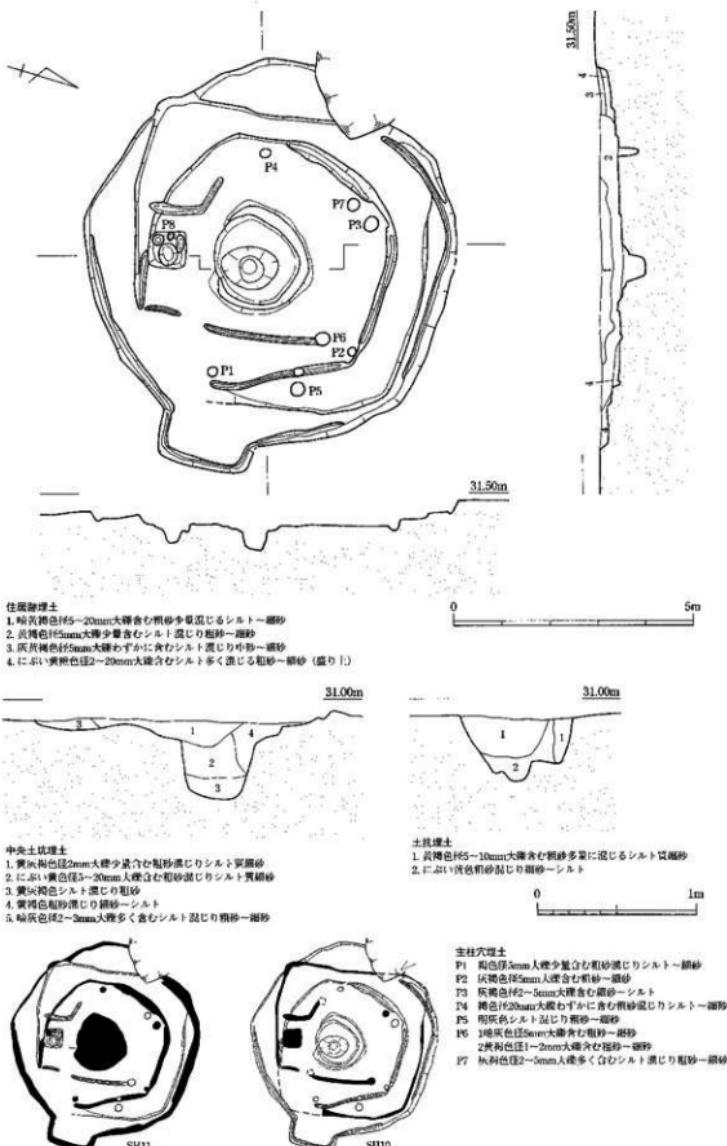
付属施設 主柱穴・屋内土坑・周壁溝がある。

主柱穴 本来4基であったと考えられるが、検出したピットのうち主柱穴と考えられるのは2基である。P 6は掘り方25cm、床面からの深さ42cm、P 7は掘り方23cm、床面からの深さ40cmである。柱穴間距離は、P 6 - 7間で2.9mである。

屋内土坑 南壁沿い中央に構築されている。2段に掘って構築しており、上段は1辺約70cmの正方形で床面からの深さ13cm、下段は円形の土坑で径40cm、下段底面からの深さ27cmである。多角形住居(SH11)の主柱穴が重なって検出されたが、これは上段部分の埋土を取り除いて初めて検出したことから、切り合いで方形住居(SH10)の方が後と判断した。

周壁溝 外壁沿いでは全く検出されなかったが、床面で東壁に平行して1条、さらに土坑の西側に1条、検出された。

東側のものは住居の南壁と主柱穴を直線的に結んで掘られており、東壁からは約1.2m離れている。溝の規模は幅10cm、深さ3cm、延長3.6mを測る。西側のものはやはり南壁を起点に西壁と平行して北へ約1.2m延び、そこから西へ約120度屈曲し80cm延びて収束している。幅12~17cm、深さ3cm、延長2mを測る。これらの溝の機能であるが住居内を区画するための仕切り溝と考えられる。



第42図 SH10・SH11

出土土器

当住居跡とSH11は、ほぼ完掘した段階で2棟の住居跡が平面的に重複していることが明らかとなった。このため、床面直上出土土器のなかで平面的位置が明らかな土器以外は、どちらの住居跡に伴う土器かについて駁別できない。しかし、これらの土器の大半は、当住居跡廃絶後のある時期に一括投棄された一群と考えられる。このため、これらの大半については、SH10廃絶後の土器と考えることができる。

器種としては、壺・瓶・鉢・高杯が出土している。

壺

広口壺・短頸壺・直口壺・底部が出土している。底部が大半を占める。

広口壺は88の1個体を図化した。内外面とも摩滅のため調査は観察できない。

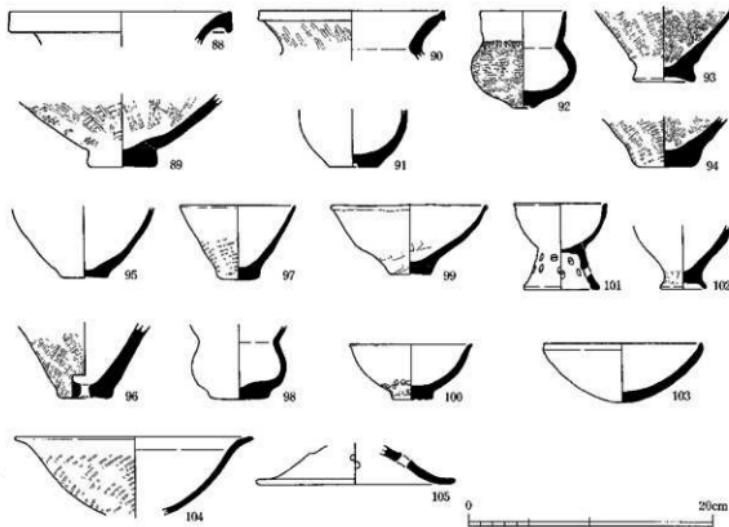
短頸壺の90は、形態的には壺と類似するが、口縁部内外面を横ナデ調整後、外面をヘラ磨きにより仕上げられていることから、壺に分類した。また、口縁部内部も、最終的に、ヘラナデ調整により仕上げられている。

直口壺は92の1個体である。器高7.9cmとかなり小型の土器である。口縁部内外面を横ナデ調整後、内面をヘラナデ調整、外縁部内外面をナデ調整により仕上げられている。体部外縁は比較的ていねいなヘラ磨き、内面は弱いヘラ削り後ナデ調整により仕上げられている。また、口縁部から体部への変換部外縁には刺突文が施されている。

底部は89と91の2個体を図化した。89は、内面を弱いハケ調整、外縁をタタキ整形後粗いヘラ磨きにより仕上げられている。91は、鉢の可能性も考えられるが、小型壺の底部として報告する。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

瓶

底部片2個体を図化した。2個体ともV様式系甕に分類されるものである。両個体とも、内面をハケ調整により仕上げられている。



第43図 SH10出土土器

鉢	10個体図化した。小型鉢・中型鉢・台付鉢が出土している。 小型鉢は、95~100の6個体である。95は内外面をナデ調整により仕上げられている。96は有孔鉢に分類されるもので、底部中央に径7mmの孔が穿たれている。外面は直父する2方向のタタキ整形を施し、内面はナデ調整により仕上げられている。86は、完形に復元できた直口鉢である。外面のタタキ整形後口縁部内外面を横ナデ調整、体部内面をナデ調整により仕上げられている。98は、小型壺の可能性も考えられるが、体部径に対して頭部が大きいため、鉢に分類した。内外面ともナデ調整により仕上げられている。99も完形に復元できた鉢である。体部内外面をナデ調整後、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。100は99を小型にした形態をとる。体部内外面をナデ調整後、口縁部をユビオサエにより外反させている。底部から体部にかけての外面に米粒人の刺突文が不規則に施されている。
台付鉢	2個体図化した。101は、楕形の体部に透孔をもつ脚部がつく。透孔は上下2段に施され、それぞれ8箇所ずつ施されている。透孔の径はいずれも8mmである。体部は内外面とも摩滅のため調整は観察できない。102は底部をユビオサエによりわずかに胸部をなす。体部は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。
中型鉢	103と104の2個体である。103は、浅い楕形を呈する鉢である。体部内外面をナデ調整後、口縁部を横ナデ調整によりわずかに端部をつまみあげている。底部はわずかに平底の痕跡が認められる。104は体部外面をタタキ整形後、口縁部を横ナデ調整により大きく外反させている。また、体部内面はナデ調整により仕上げられている。底部は残存しないが、丸底形態に近いものと考えられる。
高壙	105の脚部1個体のみである。外面をヘラ磨き、内面をナデ調整により仕上げられている。外面のヘラ磨きの単位は摩滅のため不明瞭である。4箇所に透孔が焼成前に穿たれている。径は8mmを測る。
時期	出土土器から判断して、弥生時代後期後半~庄内併行期と考えられる。
SH11	
検出状況	調査区北に位置する。張り出し部を第4次調査で、残りの部分を第6次調査で検出した。西辺は擾乱を受けて一部消失している。多角形のプランを検出したが、掘削を進めるうちに、方形住居が重なっていることが判明した。多角形住居跡（SH11）から方形住居（SH10）へと建て替えられたものと考えられる。煩瑣を避けるため別々に記述する。
形状と規模	平面プランは五角形を基準に設計されたものと思われる。1辺は約5m弱で、直径7.5mにおさまる。1頂角のところに張り出し部が取り付く。検出面からの深さ46cm、床面の標高は30.9mである。
付属施設	主柱穴・中央土坑・周壁溝・高床部がある。
主柱穴	主柱穴と考えられるのは5基で、高床部の壁沿い、各頂角のところに配置されている。P1は掘り方19cm、床面からの深さ27cm、P2は掘り方16cm、床面からの深さ25cm、P3は掘り方30cm、床面からの深さ24cm、P4は掘り方19cm、床面からの深さ42cm、P5は掘り方23cm、床面からの深さ28cmである。柱穴間距離は、P1~2間で2.9m、P2~3間で2.7m、P3~4間で2.6m、P4~5間で2.9m、P5~1間で平均柱穴間距離は2.76mである。

中央土坑 2段に掘って構築している。上段は幅30~40cm、床面からの比高3~4cmの周堤を持ち、南北1.75m、東西1.85mのいびつな円形を呈する。床面から5cmほど掘り下げており底面はほぼ平坦である。下段は径約50cmの円形を呈し、上段底面から約40cm掘り下げている。埋土は炭泥じり層~炭層および粘土層である。

また、炭は上段掘り方の外側に広がって認められた。下段の土坑は上段のものと同心ではなく東に偏って配置されている。

周壁溝 床面縁辺高床部の壁に沿うものと、外壁に沿うものが検出された。床面では南北の2辺では認められなかったが、残りの部分ではあまねく検出された。規模は幅10~30cm、床面からの深さ10cm程度である。

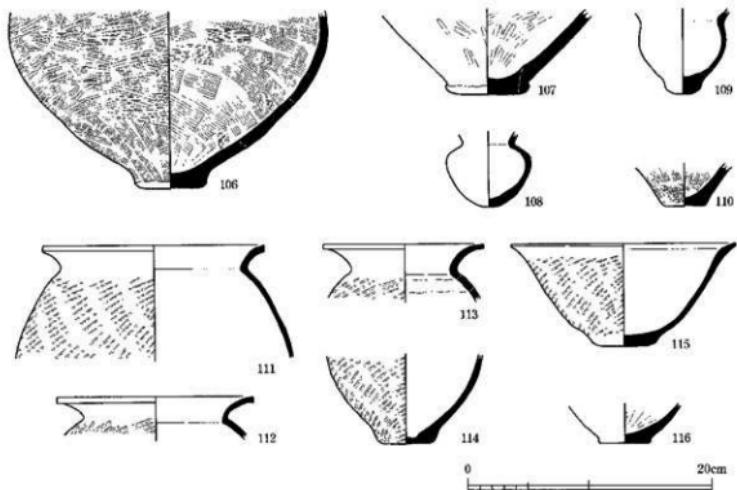
外壁に沿うものは南辺を除く全ての辺で検出された。張り出し部についても外壁のラインを辿る形で周壁溝が掘削されている。規模は幅17~25cm、床面からの深さ4~5cm程度である。

高床部 5辺に沿って検出された。壁は本来直線的に造られていたと思われるが、方形住居跡に立て替えた際削られており不整である。このため現存では幅は40cm程度しか遺存していないが、床面で検出された周溝の位置から、本来の幅は90~100cmと復元できる。床面との比高22cm、高床面の標高は31.12mである。

張り出し 東端にあたる頂角のところに張り出し部分がつくられている。張り出し部は長方形で、幅80cm、長さ160cmを測る。検出面からの深さは16cm、標高は31.20mである。

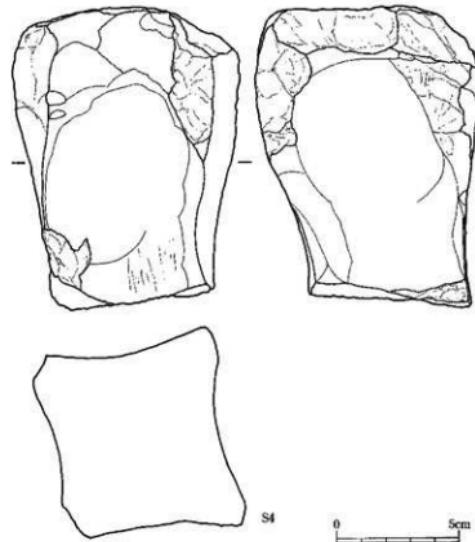
出土遺物 土器と石器が出土している。

土器 壺・甕・鉢が出土している。



第44図 SH11出土土器

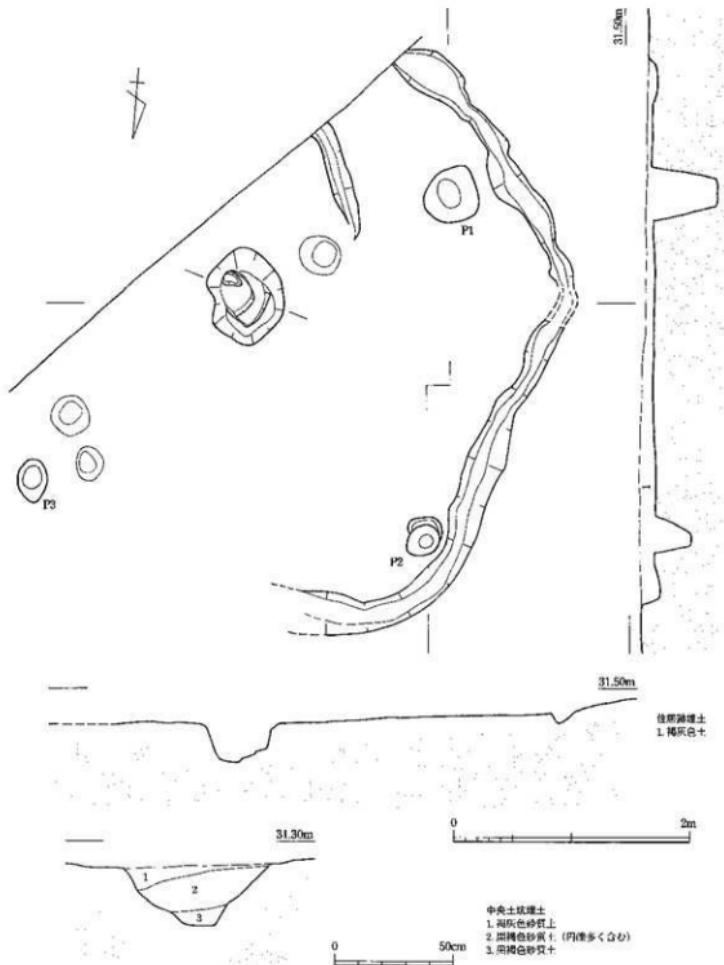
- 壺** 3個体図化したが、口縁部まで残存するものではなく、明確に分類することはできない。このなかで、108は小型直口壺と考えられる。内外面ともユビオサエとナデ調整により仕上げられている。106は、内面をハケ調整、外面をタタキ整形後部分的にヘラ磨きにより仕上げられている。107は、内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。外面のヘラ磨きは部分的なもので、内面はより密に施されている。
- 甕** 5個体図化した。このなかで109については、小型であることから、鉢に分類される可能性も否定できない。内外面ともユビオサエとナデ調整により仕上げられている。他の甕は、V様式系甕に分類されるものである。
- 鉢** 3個体図化した。114については、形態的特徴から鉢に分類した。内面はナデ調整により仕上げられている。115は、体部外面をタタキ整形後、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。116は、内外面をナデ調整により仕上げられている。
- 石器** 低石が出土している（第45図）。形態は直方体を呈するが、約半分を折損しているものと思われる。4平面すべてが作業面である。どの面もよく使い込まれており、縦方向にも、横方向にも強く湾曲して底面が窪んでいる。線条痕は縦方向のものが認められる。現存値は長さ123mm、幅92.4mm、厚さ91.1mm、重さ1300gである。石材は凝灰質砂岩である。
- 時期** 下層出土土器を中心に判断すると、弥生時代後期後半と考えられる。



第45図 SH11出土石器

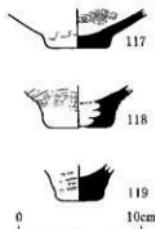
SH12

- 検出状況** 調査区北東端に位置する。東側の約半分が調査区外へと続く。
- 形状と規模** 周壁溝の検出状況から多角形の住居跡と考えられる。現存値で南北方向に4.5m、東西方向に3.8mを測る。検出面からの深さ11cm、床面の標高は31.29mである。
- 付属施設** 主柱穴・中央上坑・周壁溝がある。



第46図 SH12

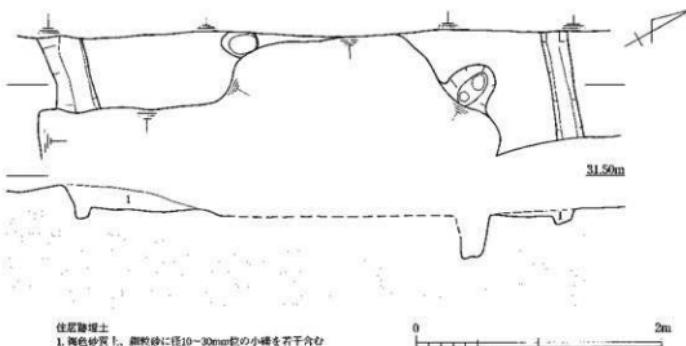
- 主柱穴** 検出したピットのうち七柱穴と考えられるのは3基である。P1は掘り方45cm、床面からの深さ52cm、P2は掘り方25cm、床面からの深さ29cm、P3は掘り方25cm、床面からの深さ27cmである。柱穴間距離は、P6-7間で3.0m、P7-8間で3.3mである。
- 中央土坑** いびつな円形を呈する。南北80cm、東西60cm、床面からの深さ約31cmを測る。掘り方の断面形は掘り鉢状であるが、西半の立ち上がりは2段ほどの弱いステップが形成されている。
- 周壁溝** 外壁に沿って検出した。幅15~30cm、床面からの深さ約8cmを測る。2カ所で約120度の角度で屈曲しており六角形の平面プランを持つ多角形仕居跡の可能性が考えられる。また、床面では南壁と中央土坑の間に溝が検出されている。塙から70~130cm離れたところに位置する。床面からの深さは約6cmである。間仕切り溝として機能していた可能性を指摘しておく。
- 出土土器** 壺と甕の底部片が出上しているが、118の甕が中央土坑内から出土している以外は、いずれも埋土中から出土している。
- 壺** 117の1個体である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。
- 甕** 118と119の2個体出土している。いずれもV様式系甕の底部である。118については、蓋の底部となる可能性も考えられる。内面は、いずれもナデ調整により仕上げられている。
- 時期** 底部片のみのため時期を特定することは困難であるが、形態的特徴から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。



第47図 SH12出土土器

SH13

- 検出状況** 調査区北東部に位置する。長大な攪乱に挟まれて帯状に遺存する遺構面で検出された。攪乱の方向と住居の軸がほぼ直交もしくは平行するため、1方向の幅については確認することができた。床面の中央部は後世の風倒木によって切られている。
- 形状と規模** 方形の住居跡と考えられる。現存値で南北方向に4.2m、東西方向に0.85mを測る。検出面



第48図 SH13

からの深さ15cm、床面の標高は31.26mである。

- 付属施設** 主柱穴・周壁溝がある。
- 主柱穴** ピットを2基検出したが、住居の全容を把握できないため、主柱穴を特定しがたい。P1は掘り方28cm、床面からの深さ25cm、P2は掘り方32cm、床面からの深さ27cmである。柱穴間距離は1.9mである。
- 周壁溝** 外壁に沿って検出された。規模は幅18~33cm、床面からの深さ8cm程度である。
- 時期** 土器が出土していないため時期の特定は困難であるが、弥生時代後期と考えられる。

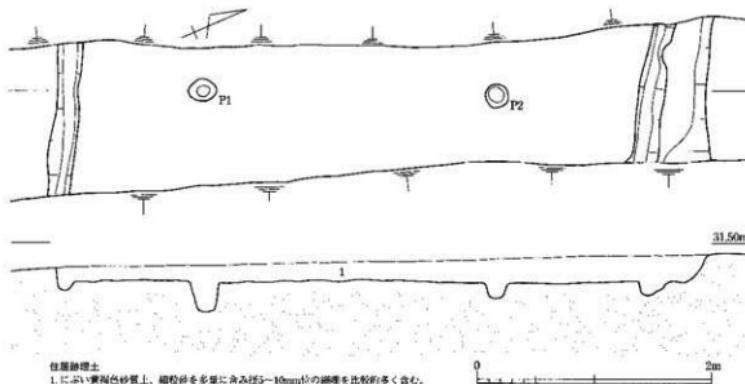
SH14

検出状況 調査区北東部に位置する。長大な擾乱に挟まれて帯状に遺存する遺構面で検出された。擾乱の方向と住居の軸がほぼ直交もしくは平行するため、1方向の幅については確認することができた。

形状と規模 方形の住居跡と考えられる。現存値で南北方向に5.3m、東西方向に1.28mを測る。検出面からの深さ21cm、床面の標高は31.20mである。

付属施設 主柱穴・周壁溝がある。

主柱穴 柱穴を3基検出したうち、配列の状況から2基を主柱穴と判断した。ただ住居の全容を把



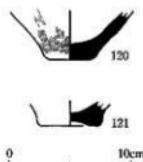
第49図 SH14

握できないため確実ではない。P1は掘り方24cm、床面からの深さ25cm、P2は掘り方18cm、床面からの深さ13cmである。柱穴間距離は1.9mである。

周壁溝 外壁に沿って検出された。規模は幅18~33cm、床面からの深さ13cm程度である。

出土土器 壺の底部片2個体が床面上から出土している。121の内外面の調整は、摩滅のため観察できない。120は、外面をハケ調整により上げられている。内面の調整は、摩滅のため観察できない。

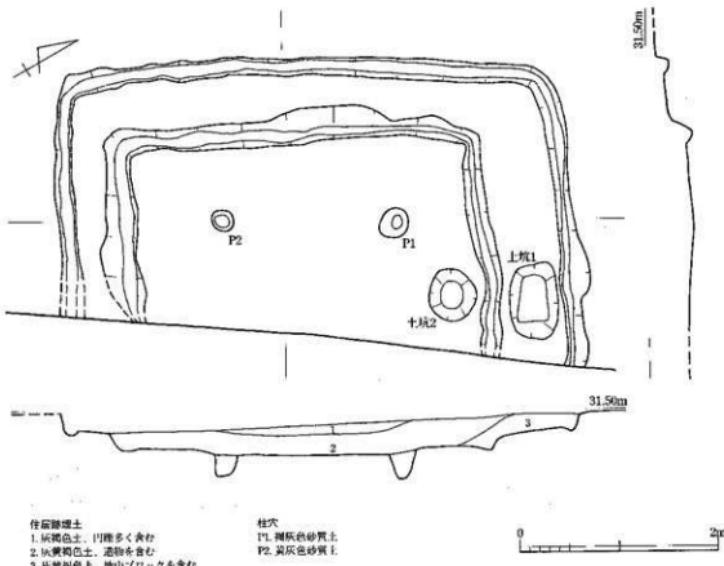
時期 出土土器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。



第50図 SH14出土土器

SH15

- 検出状況** 調査区北東端に位置する。東側の約半分が調査区外へと続く。SH16を切っている。
- 形状と規模** 平面は隅円方形を呈する。南北5.3m、東西で3.1mを測る。検出面からの深さ37cm、床面の標高は31.11mである。
- 付属施設** 主柱穴・床内土坑・周壁溝・高床部がある。
- 主柱穴** 主柱穴と考えられるピットを2基検出した。P1は掘り方30cm、床面からの深さ26cm、P2は掘り方22cm、床面からの深さ23cmである。柱穴間距離は1.8mである。
- 屋内土坑** 土坑1と土坑2を検出している。
- 土坑1** 北辺中央の高床部上に構築されている。平面は外壁と平行する方向を長軸とする長方形を呈する。規模は長さ70cm、幅50cm、高床面からの深さ18cmで、掘り方の断面形は逆台形を呈する。
- 土坑2** 北辺中央の床面上に高床部の壁に沿って構築されている。平面は径50cmの円形を呈し、床面からの深さは7cm程度の浅い皿状に産む土坑である。
- 周壁溝** 床面縁辺高床部の壁に沿うものと、外壁に沿うものが検出された。床面のもので規模は幅17~25cm、床面からの深さ4cm程度である。外壁のものは幅15~20cm、床面からの深さ3cm程度である。
- 高床部** 東辺は調査区外にあたり検出できなかったが、おそらく4辺全てに沿って造られているものと考えられる。幅は70~73cmで、床面との比高差17cm、高床面の標高は31.29mである。



第51図 SH15

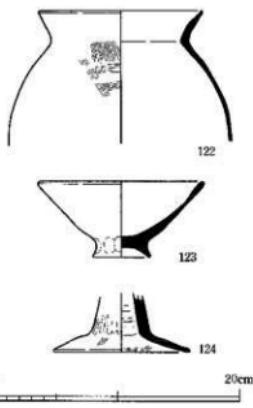
出土土器 瓢・鉢・高坏の各器種が出上しているが、甕の122が床面直上から出上している以外は、埋土中から出土している。

甕 口縁端部をわずかにつまみあげている。また、体部外面は縱および横方向のハケ調整により仕上げられている。以上の特徴から、布留式傾向の甕と考えられる。なお、体部内部の調整は、摩滅のため観察できない。

鉢 光形に復元できる小型鉢である。体部から口縁部にかけての内外面はナデ調整、底部はユビオサエにより、仕上げられている。全体的に歪みが顕著である。

高坏 脚部の下半部が出上している。有稜高坏の脚部と考えられる。上部外面はヘラ磨き、下部外面はハケ調整後横ナデ調整により仕上げられている。

時期 床面から出土している甕が布留式傾向甕であることから、古墳時代初頭と考えられる。



第52図 SH15出土土器

SH16

検出状況 調査区北東端に位置する。北東側の約半分をSH15によって切られる。

形状と規模 平面は方形を呈する。南東-北西方向で5.7m、南西-北東方向で2.7mを測る。検出面からの深さ6cm、床面の標高は31.39mである。

付属施設 中央土坑・周壁溝がある。

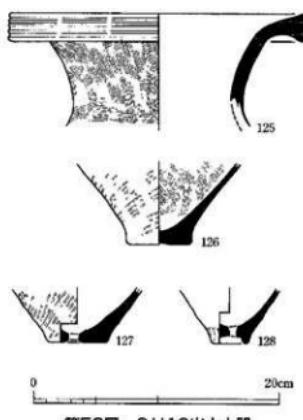
中央土坑 四方に窪む浅い土坑である。中心部分は後世の擾乱を受けてピット状に窪む。埋土中に炭などは見られない。

周壁溝 南東辺および北東辺に沿って断続的に検出された。幅8~11cm床面からの深さ5cmである。

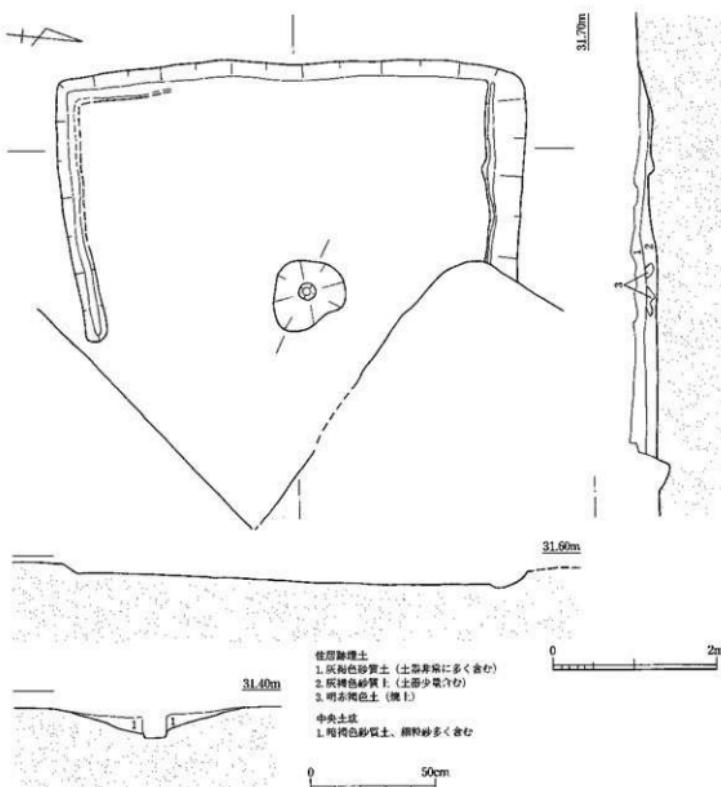
出土土器 瓢・甕・鉢が出土している。いずれも、埋土中からの出土である。

甕 図化できたのは、125の広口甕1個体のみである。口縁端部を上下に拡張し横ナデ調整により仕上げ、端面に4条の擬回線を施している。口頸部外面は、縦方向のハケ調整後、頭部外面を横方向のヘラ磨きにより仕上げられている。内面は、摩滅のため十分確認できないが、ヘラ磨きの痕跡がわずかに認められる。

鉢 126の1個体のみ図化した。V様式系の甕である。



第53図 SH16出土土器



第54図 SH16

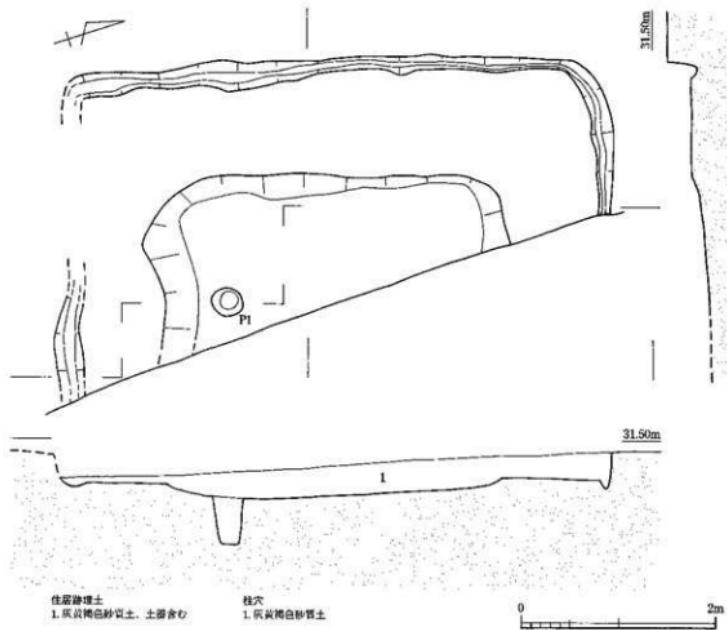
鉢 127と128の2個体図化した。いずれも有孔體に分類されるものである。両個体とも底部のみ残存する。

127は、径8mmの穿孔が焼成前に施されている。内面はナデおよびユビナデ調整により仕上げられている。128は、径5mmの穿孔が焼成前に施されている。底部はユビオサエにより高台状に仕上げられ、外表面はタタキ整形後ナデ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。

時期 出土上器から判断して、弥生時代後期中葉と考えられる。

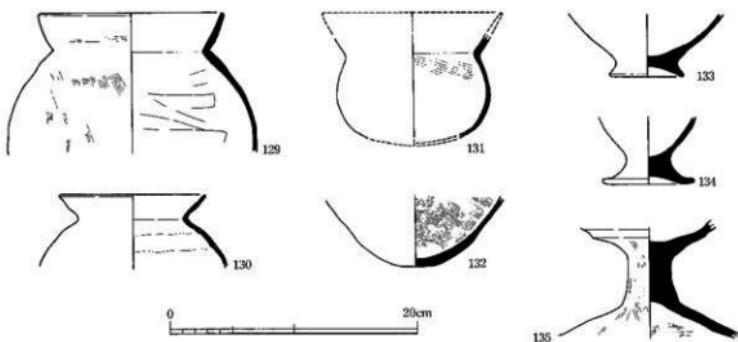
SH17

- 検出状況** 調査区北東端に位置する。南東側約2/3が調査区外へと続く。SH18を切って検出された。
- 形状と規模** 平面は方形を呈する。南西-北東方向で5.7m、南東-北西方向で3.4mを測る。検出面からの深さ32cm、床面の標高は30.98mである。
- 付属施設** 主柱穴・周壁溝・高床部がある。
- 主柱穴** 柱穴を1基検出した。掘り方30cm、床面からの深さ48cmである。
- 周壁溝** 外壁に沿って検出された。SH18と重なる部分で一部検出できなかった。規模は幅11~26cm、床面からの深さ4cm程度である。
- 高床部** 東辺は調査区外にあたり検出できなかったが、4辺全てに沿って造られているものと考えられる。幅は95~110cmで、床面との比高10cm、高床面の標高は31.08mである。



第55図 SH17

- 出土土器** 壺・鉢・高杯が出土している。134の鉢と135の高杯が床面から、129の壺が下層から出土している以外は、埋土上層からの出上である。
- 壺** 2個体図化したがいずれも布留式系の壺である。129は、口縁部内外面を横ナデ調整、体部外面をハケ調整、体部内面をヘラ削り後ナデ調整により仕上げられている。130は、内外面ともモザイクのため調整は観察できない。
- 鉢** 小型丸底鉢・中型鉢・台付鉢が出上している。小型丸底鉢の131は、体部内面上部をハケ



第56図 SH17出土土器

調整により仕上げられている以外は、摩滅のため観察できない。中型鉢は132の1個体である。外面はユビオサエとナデ調整により仕上げられている。台付鉢は、133と134の2個体である。いずれも脚部をユビオサエにより整形している。133は、外面をナデ調整により仕上げているが、内面は摩滅のため観察できない。134は、外面をヘラ磨きもしくはヘラナデ調整により仕上げられている。内面については摩滅のため観察できない。

高环 135の1個体を図化した。脚部を中心に残存する。体部外面は横ナデ調整、他はヘラ磨きにより仕上げられている。脚部内面はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。

時期 床面および埋土下層出土土器から判断すると、古墳時代初頭と判断される。

SH18

検出状況 調査区北東端に位置する。東側約1/3が調査区外へと続く。SH18に切られるが床面の標高が相対的に低いため、重なっている部分についても遺存している。

形状と規模 平面は方形を呈する。南東-北西方向で5.2m、南西-北東方向で8.2mを測る。検出面からの深さ32cm、床面の標高は30.98mである。

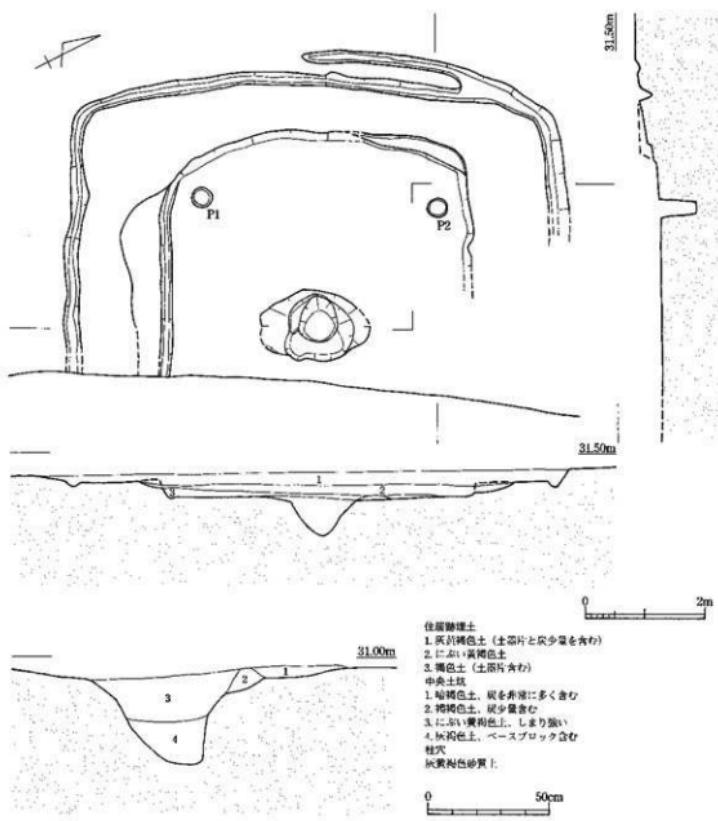
付属施設 主柱穴・中央上坑・周壁溝・高床部・張り出し部がある。

主柱穴 検出した柱穴のうち主柱穴と考えられるのは2基である。P1は掘り方24cm、床面からの深さ47cm、P2は掘り方22cm、柱穴間距離は2.9mである。

中央土坑 2段に掘って構築している。上段は皿状に盛る平面楕円形を呈する上坑で、長さ130cm、幅90cm、床面からの深さ約5cmである。下段は径約80cmの円形を呈し、上段底面から約35cm掘り下げている。埋土には炭を多く含む。

周壁溝 床面縁辺高床部の壁に沿うものと、外壁に沿うものが検出された。床面のものは南辺にのみ認められた。規模は幅14cm、床面からの深さ1cm程度である。

外壁のものはSH17によって切られる部分以外ではあまねく検出され、幅13~25cm、床面からの深さ6cmの規模である。張り出し部が取り付くところでこの周壁溝は枝分かれをし、方向を変えずに高床面と張り出し部床面を仕切る形で延びるものと、張り出し部の外壁に沿って巡るものがある。張り出し部外壁に沿うものは内び取り付くことなく収束する。



高床部 東辺は調査区外になるため検査できなかったが、おそらく4辺全てに沿って造られているものと考えられる。北辺についてはSH17の影響を受けて東半が消失している。現存値で、幅は南辺で80cm、北辺では100cmであるが、西辺は55cmと突出して狭くなっている。ただ高床部が立ち上がる壁の通りが不整であることから当時の姿を維持していないことは明白で、本来は一律1m程度の幅を持っていたと考えられる。床面との比高14cm、高床面の標高は31.14mである。

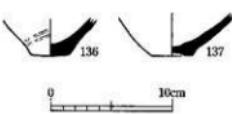
張り出し部 西辺と北辺がなす角から西辺側に取り付く。幅20cmと張り出し方は弱く、長さは約2mほどで南端は溝が閉じずに収束するため明確に区分されない。高床面との比高差は約7~10cm程度である。検出面からの深さは3cm、標高は31.20mである。

出土土器 壺と鉢が出土している。壺は床面直上から、鉢は中央土坑から出土している。

甕 底部片が出土している。外面をタキ整形、内面をナデ調整により仕上げられている。

鉢 底部から体部にかけて残存する。形態的特徴から鉢と判断した。内面は板ナメ調査、外面はナメ調査により仕上げられている。胎土中には砂粒がほとんど含まれていない。

時期 出土土器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。



第58図 SH18出土土器

SH19

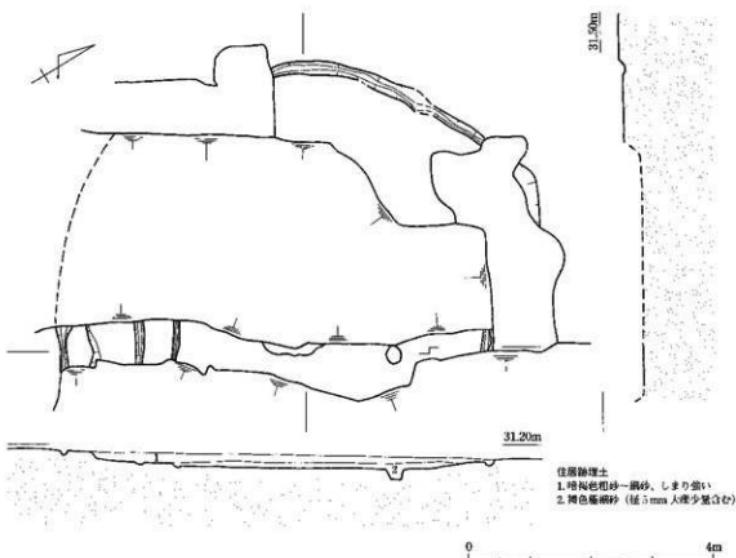
検出状況 調査区北東部に位置する。長大な擾乱に挟まれて帯状に遺存する遺構面で検出された。擾乱の方向と住居の軸がほぼ一致する。ただ、北辺は別の擾乱によって削平されているため、本来の幅を確認することができなかった。擾乱を挟んだ西向かいにはSH10がある。床面での周壁溝の検出状況から、1度建て替えが行われたと思われる。

形状と規模 方形の住居跡と考えられる。現存幅で南北方向に8.2m、東西方向に約2.8mを測る。北側については高床部から外側が削平されて消失しているが、復元すれば本来は1辺8m前後の規模であったと考えられる。検出面からの深さ19cm、床面の標高は30.13mである。

付属施設 主柱穴・周壁溝・高床部がある。

主柱穴 柱穴を1基検出した。掘り方25cm、床面からの深さ20cmである。

周壁溝 床面縁辺高床部の壁に沿うものと、外壁に沿うものが検出された。床面のものは南辺に2条、北辺に1条認められた。北辺については外側にあったものが削平されて消失したと考え



第59図 SH19

られる。南辺の2条は約30cmの間隔で平行しており、建て替えに伴うものであると考えられる。すなわち、約30cm拡張したことになる。これら床面縁辺の周壁溝の規模は幅12~15cm、床面からの深さ3~5cm程度である。外縁のものは幅8cm、床面からの深さ3cmの規模である。

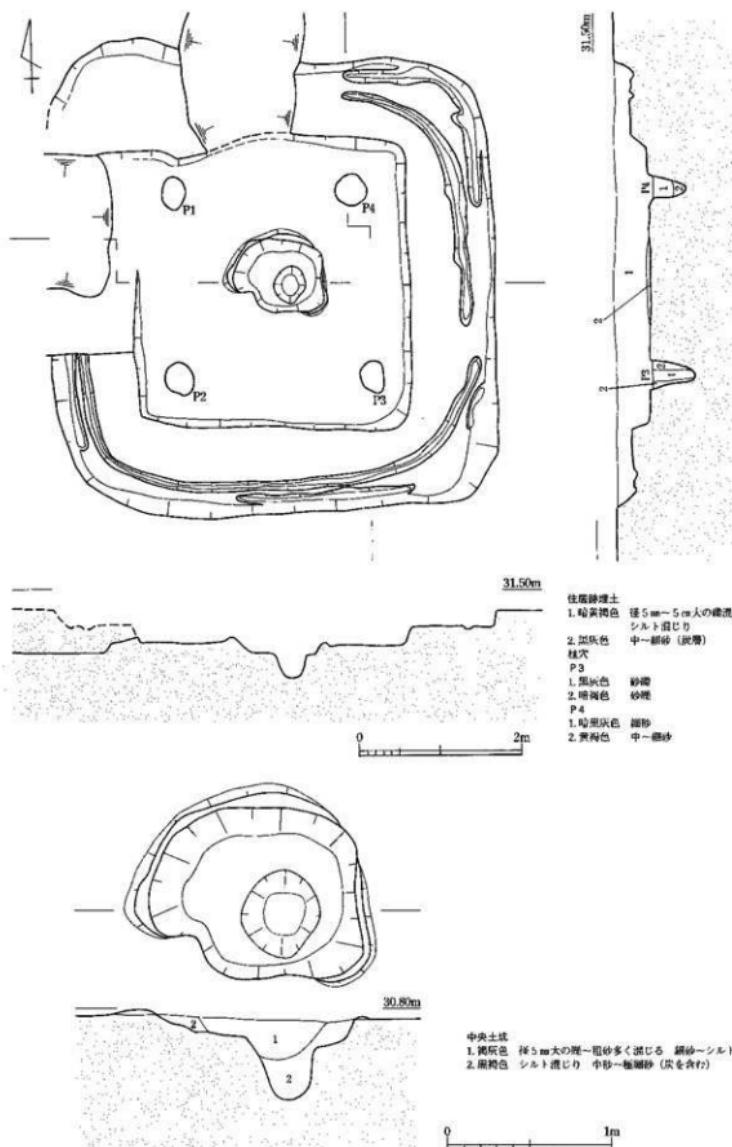
高床部	現状では南辺に沿ってのみ認められる。本来は四辺に沿って構築されているものと思われる。削平されているため幅は現存値で約40cmであるが、床面縁辺での周壁溝の検出状況から建て替え後で幅約110cmに復元できる。
出土土器	鉢と高環が出土している。いずれも、埋土中からの出土である(第60図)。
鉢	形態的には壺の底部と同じであるが、底部中央部に穿孔が認められることから、有孔鉢と判断した。底部の穿孔は径6mmを測り、焼成前に穿たれている。内外面の調整は摩滅のため観察できない。
高環	胸部の上半部の一部が出土している。有稜高環の脚部と考えられる。摩滅のため、調整は観察できない。
時期	出土した土器がいずれも小片のため、時期の特定は困難である。高環胸部の形態的特徴から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。



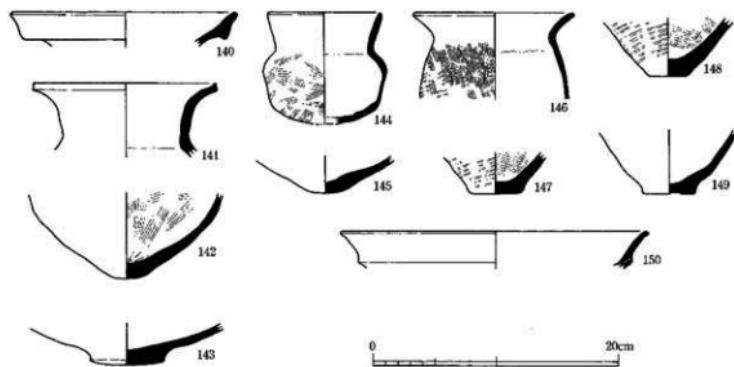
第60図 SH19出土土器

SH20

検出状況	調査区南半中央部分に位置する。西壁をSH41に、北壁を後世の風倒木に切られる。周壁溝の切り合いから、小規模の拡張が行われたことが伺われる。
形状・規模	平面は方形を呈する。1辺5.4mを測る。検出面からの深さ45cm、床面の標高は30.72mである。
付属施設	主柱穴・中央土坑・高床部・周壁溝がある。
主柱穴	4基検出しており、床面の四隅、高床部壁際には配置されている。P1は掘り方40cm、柱痕21cm、床面からの深さ44cm、P2は掘り方35cm、柱痕20cm、床面からの深さ41cm、P3は掘り方38cm、柱痕13cm、床面からの深さ35cm、P4は掘り方30cm、柱痕17cm、床面からの深さ55cmである。柱穴間距離は、P1~2間で2.2m、P2~3間で2.3m、P3~4間で2.3m、P4~1間で2.1m、平均柱穴間距離は2.23mである。
中央土坑	2段に掘って構築し、床面との比高3cmほどの周堤を持つ。上段は皿状に10cm掘り下げており、底面はほぼ平坦である。平面プランは西側の1辺が不整であるが、1辺85cm程度の方形を意識していたと思われる。下段は40×50cmの楕円形を呈し、検出面から約30cm掘り下げている。埋土は炭を多く含むシルト混じり中砂・極細砂である。
高床部	4辺に沿って検出した。幅は90~100cmで、床面との比高25cm、高床面の標高は31.08mである。
周壁溝	高床面上で検出した。壁に沿って方形に巡るものとコーナー部分が円く巡るもの2条がある。切り合ひ関係から元々圓筒形から方形へと拡張したものと考えられる。規模は内側・外側とともに幅15cm、床面からの深さ6cm程度である。



第61図 SH20



第62図 SH20出土土器

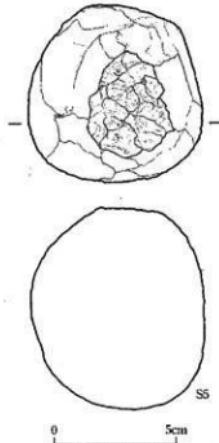
- 出土遺物** 土器と石器が出土している。
- 土器** いずれも、埋土上層もしくは上面から出土している。器種としては、壺・甕・鉢・高杯が出土している。
- 壺** 複合口縁壺・広口壺・小型丸底壺・底部が出土している。
- 複合口縁壺は、140の1個体である。全体的に摩滅しているが、複合部外面に波状文が認められる。
- 広口壺は、141の1個体である。全体的に摩滅傾向にあり、調整方法は一部を除いて観察できない。唯一、口縁端部は横ナデ調整により仕上げられている。
- 小型丸底壺は、144の1個体である。口縁部は、内外面とも横方向を主体としたナデ調整により仕上げられている。体部外面はハケ調整、内面はユビナデとナデ調整により仕上げられている。全体的に雑な仕上げで、整形による体部の凹凸が目立つ。また、器壁の厚さも一定していない。
- 底部は、142・143・145の3個体を図化した。142の内面は、ハケ調整により仕上げられている。外面は摩滅が著しく、明確にできない。底部外面は、ナデ調整により仕上げられている。143は平底であるが、丸底化の傾向が認められる。内面はハケ調整、外面はヘラ磨きにより仕上げられている。145は壺として報告するが、甕の可能性も否定できない。内外面ともナデ調整により仕上げられている。
- 甕** 量的には多く出土しているが、図化できたのは3個体である。いずれも、V様式系の甕である。146は口縁部内外面ともハケ調整後横ナデ調整により仕上げられている。体部内面はナデ調整により仕上げられている。底部の147と148は、平底を呈するが、突出せず丸底化の傾向が認められる。
- 鉢** 149の1個体のみである。口縁部まで残存しないが、その形態的特徴から鉢と判断した。内面はナデ調整により仕上げられているが、外面は摩滅が著しく、明確にできない。底部は輪台技法によっている。
- 高杯** 150の1個体である。口縁部がわずかに残存するのみである。内外面とも摩滅が著しいが、

外面にわずかにヘラ磨きの痕跡が認められる。

石器
S 5 は敲石である。一掴みほどの大きさの円錐を利用する。表面は風化が激しいが、片方の端面に敲打痕の広がりが43×35mmほどの範囲で認められる。

現存値で長さ82.6mm、幅70.8mm、厚さ72.0mm、重さ614.1gである。石材は砂岩を用いる。

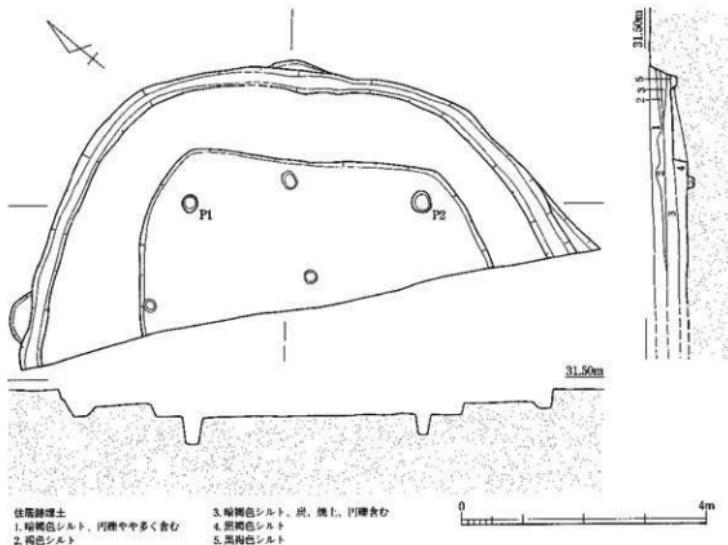
時期
住居跡に直接伴う土器が出土していないため、時期を特定することは困難である。固化したなかで最も新しい傾向にある144を考慮に入れると、弥生時代後期後半から庄内併行期にかけてと判断される。



第63図 SH20出土石器

SH21

検出状況
第5次調査の広い部分を占める大型の住居跡である。調査区中央南側に位置しており、調査区外へ延びており、約半分近くを調査している。今回の調査部分では、遺構の切り合いはなく、重複もしていない。拡張の痕跡も認められない。肩部の一部に建て替えの可能性のあ



第64図 SH21

る部分があるが、明瞭でない。

形状・規模 平面形態は不定形である。角の取れた多角形の可能性が高いと思われる。最大長で9.7mを測る。床面の標高は、30.70mである。多角形とすれば、1辺4m余りになろう。

付属施設 主柱穴・高床部・周壁溝は確認されているが、中央土坑や炉は検出されていない。

主柱穴 柱穴は、5基調査で確認しているが、すべてが主柱穴にはならない。多角形の変換点にある2基の柱穴（P2・P4）は主柱穴になると思われる。P2とP4の柱間の距離は3.8mを測る。北東辺に平行していることからも、主柱穴と考えられる。北東辺の残存状況は良好である。

高床部 周壁に沿って、調査区域ではすべて巡っている。調査区内では、東側は幅が狭く80cmである。他の部分は、110～150cmを測る。床面との比高は15～25cmを測る。肩部との差は40cmを測る。

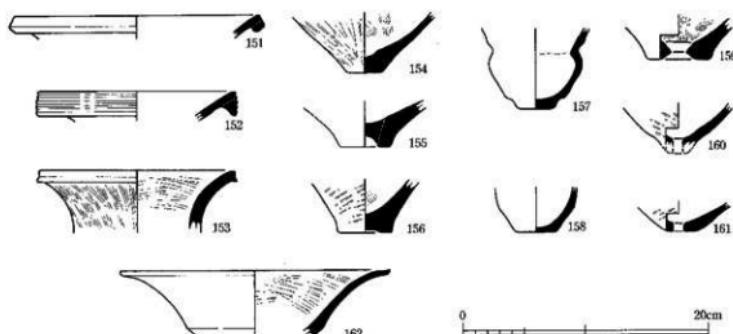
高床部に焼失材が相当量認められた。特に北側では残存状況が良好で50cmを超える炭化材も出土している。炭・焼土も多く埋土に入っている。高床部と低床部とのレベル差は平均35cmある。低床部は多角形でなく、方形を意識しているようである。

周壁溝 調査区域内では、すべて認められる。幅は25～55cmあり、深さは15～30cmを測る。コーナー部はやや幅が狭くなっている。高床部の幅が狭かった東側が逆に幅が広くなっている。北東辺中央やや西に人頭台の礫が精製の粘土（第65図）を伴って周壁溝上に置かれている。何らかの施設かもしれない。

南壁近くで東西両側の向かい合わせの位置に、対称的に小土坑が築かれている。壁沿いに小土坑を作っているもので、ステップ状になっている。肩部から約15cm下がっている。



第65図 粘土出土状況



第66図 SH21出土土器

出土土器 臺・甕・鉢・高坏が出土している。153・154・156・161が床面から、155が高床部から出土している。他の土器は埋土中から出土している。

臺 広口臺と底部片が出土している。

広口臺は151～153の3個体である。151は、口縁端部下端に粘土を貼り付け横ナデ調整により仕上げ、口縁部は断面方形の玉線状を呈する。内面はヘラ磨きにより仕上げられているが、その単位は不明瞭である。154も口縁端部下端に粘土を貼り付け、横ナデ調整後外端面に4条の擬凹線が施されている。他の調整については、摩滅のため観察できない。153は口縁部内外面を横ナデ調整後、それぞれ内外面を縦方向と横方向のヘラ磨きにより仕上げられている。

底部は2個体固化したが、155については、形態的特徴から鉢の可能性も考えられる。154は、内面をハケ調整後ナデ調整、外面をヘラ磨きにより仕上げられている。155は、内面をナデ調整、外面をハケ調整後ヘラ磨きにより仕上げられているが、その単位は不明瞭である。底部は高台状をなし、接地面に木の葉文が認められる。

甕 156の底部1個体のみである。内面はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。

鉢 小型鉢と有孔鉢が出土している。

小型鉢は157と158の2個体で、いずれもミニチュア上器に近いものである。157は口縁部内面を横ナデ調整、他をユビナデ調整により仕上げられている。内外面とも粗い仕上げである。158は外面ともユビオサエとナデ調整により仕上げられている。

有孔鉢は159～161の3個体を固化した。159は径1.2cm、160と161は径8mmの穿孔が焼成前に施されている。160と161の内面はナデ調整により仕上げられている。

高坏 162の1個体を固化した。いずれも底部のみ残存する。全体的に摩滅のため調整が十分観察できないが、内面はヘラ磨き、外面はナデもしくはヘラナデ調整により仕上げられている。

時期 床面出土土器を中心に判断して、弥生時代後期後半と考えられる。

SH22

検出状況

第5次調査の北東部分に位置している。今回調査した中では極端ではないが、最も新しいと考えられ、SH23の上に切り合って構築されている。南壁はSH24も切っている。東側は最近の擾乱で削平されている。北側調査区外へ延びており、約半分以上を調査している。拡張の痕跡も認められない。

形状・規模

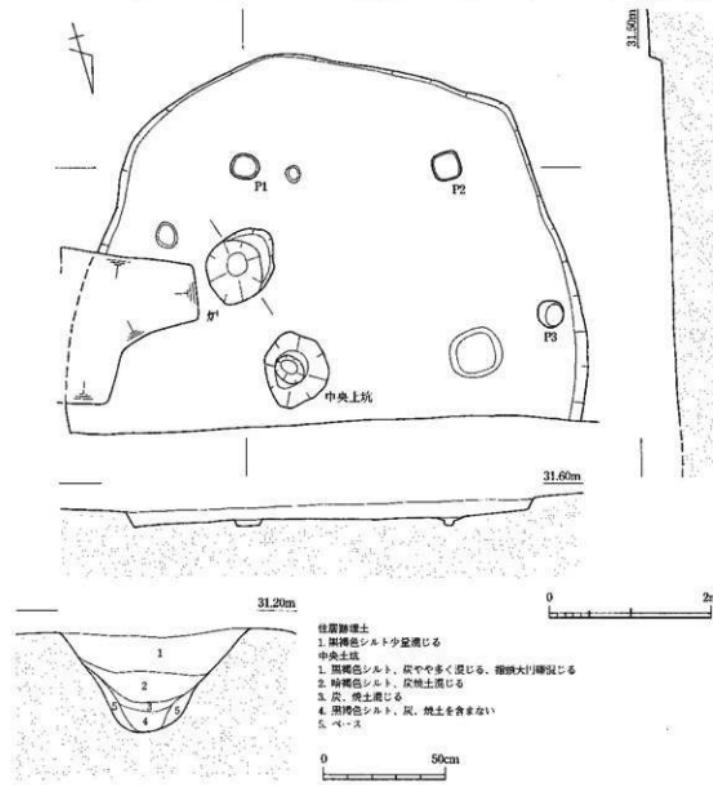
平面形態は不定形で、やや小型に見える。多角形になるかもしれないが、崩れた形状を示している。最大長で6.4mを測る。南北の検出長は4.4mであるが、中央十坑から復元すると、8m前後になろうかと思われ、南北方向に長い平面形態になる。床面の標高は、31.6mである。残存状況は良好でなく、壁の残りもSH21と比べると悪い。

付属施設

主柱穴・炉・中央上坑・高床部が確認されているが、周壁溝は検出されていない。

主柱穴

柱穴は6基確認している。柱穴は、5基調査で確認しているが、すべてが主柱穴にはならない。2基の柱穴（P1・P5）は主柱穴になると思われる。P1とP5の柱間の距離は4.8



第67図 SH22



第68図 炉

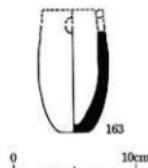
mを測る。P 2も主柱穴になるかもしれない。P 2とP 5の柱間の距離は4.2mとなる。

炉 床面中央の南東部で検出されている（第68図）。最大長1.0m、深さ0.4mを測るもので、南西部に浅い落ち込みを伴う。断面壠鉢状になっている。

高床部 残存状況は悪いが、南壁沿いに存在している。最大幅1.5m高床部になっている。東側にいくほど、段差が浅くなり床面と同一となる。長さ3.2mまで残っている。

出土土器 163の鋲窓1個体が中央土坑内から出土している。体部最大径5.7cmに対して器高8.7cm以上と、一般的な鋲窓と比較して細長い形態をとる。口縁部までは残存しないが、紐孔の一部が1穴残存する。紐孔は焼成後にあけられたもので、その径は1.2cmと推定される。

時期 出土土器からの判断は困難であるが、SH23・SH24との切り合い関係から、庄内併行期以降と考えられる。



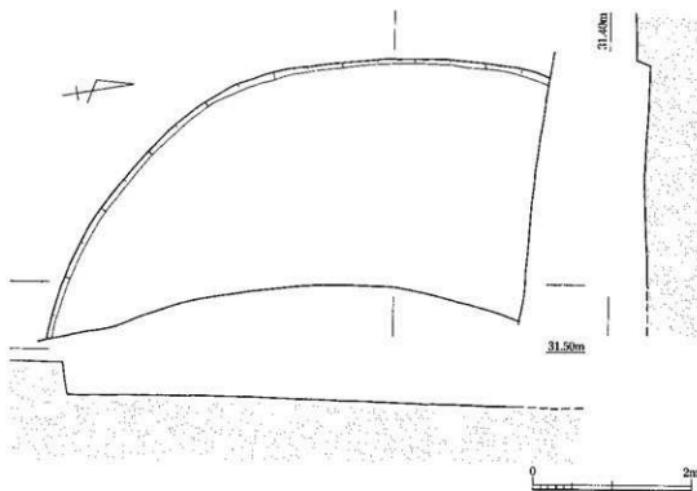
第69図 SH22出土土器

SH23

検出状況 第5次調査の北東部分に位置している。SH22に東側を切らされている。北側は調査区外へ続いており、全体の1/8～1/10を調査したものと思われる。調査区内では拡張した痕跡は認められない。残存部での遺物の保存状況は良好で、今回調査したなかでは床面の残存度も良好である。炭化材が床面に広がっていることから、焼失住居と考えられる。

また、遺構検出時に出土したガラス塊は特徴的な遺物である。製品ではないが、ガラスの保有には意味があるものと考えられる。

形状・規模 平面形態は現状では円形と思われる。SH22の西側での最大長は5.8mを測り、復元すると10m前後の円形住居跡になろうかと思われる。南北の検出長は6.7mで、東西の検出長は2.6mである。



第70図 SH23

床面の標高は、30.9mである。床面での保存状況は良好であるが、壁部の残存状況は良好でなく、壁の残りもSH21と比べると悪く、20cm前後である。床面のレベルがSH22に比べると高いことに起因しているかもしれない。

SH22の東側で調査区東端の間にも1段下がった部分があり、SH23の一部の可能性が高い。同一造構であるとすれば、残存長8.3mを測る。

付属施設 明確な遺構は確認されていない。主柱穴・炉・中央土坑・高床部などは確認されていない。周堀溝だけは存在していないことが確認されている。床面の遺物出土状況から見ると、床面の残存度が良好であることから、高床部も存在していないようである。

出土土器 壺・鉢・高环が出土している。このなかで、166～168が床面直上から出土している。
壺 直口壺・短頸直口壺・体部片が出土している。

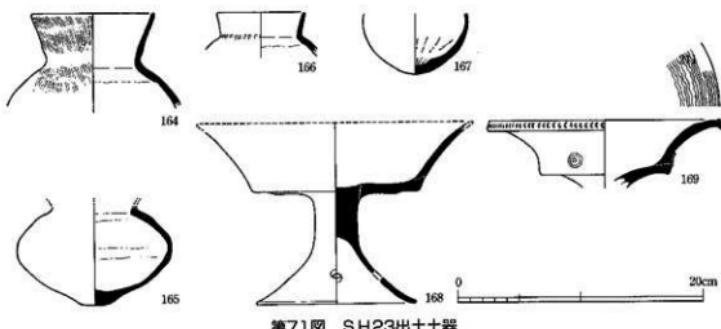
直口壺は164の1個体である。口縁部から体部にかけての外面はヘラ磨き、頭部外面は横ナデ調整により仕上げられている。体部内面はナデ調整、口縁部内面はヘラ磨きもしくはヘラナデ調整により仕上げられている。

短頸直口壺は166の1個体である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はナデ調整により仕上げられている。頭部外面には、刺突文が施されている。

165の体部片については、直口壺の可能性が高い。内外面とも摩滅のため調整の観察は困難であるが、外面はヘラナデもしくはヘラ磨きが施されていたようである。底部はほぼ尖り底に近い。

鉢 167の1個体のみである。形態的特徴から鉢に分類した。内面はヘラナデ調整、外面はナデ調整により仕上げられている。底部はわずかに平底状を呈している。

高环 2個体図化した。168は、口縁端部をわずかに尖く。全体的に摩滅傾向にあるが、環部内



第71図 SH23出土土器

面と脚部外面にわずかにヘラ磨きの痕跡が認められる。また、脚部内面はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。169も摩滅が著しい。わずかに、口縁端部に半截竹管文、口縁部内面上端部付近に波状文が施されている。波状文については、5条単位として3帯描かれている。また、口縁部外面には、竹管円形浮文が6箇所に貼り付けられている。

時期 住面直上出土土器を中心に判断して、庄内併行期を中心とした時期と考えられる。

SH24

検出状況 第5次調査の東部分の中央に位置している。東側は調査区外へ延びている。北東部はSH22に切られている。さらに北側の遺構がSH23の一部であるとすれば、SH23にも切られていることになり、今回の調査内では最古の遺構になりそうである。東側は調査区外へ続いている。全体の1/4程度を調査したものと思われる。調査区内では拡張した痕跡は認められない。

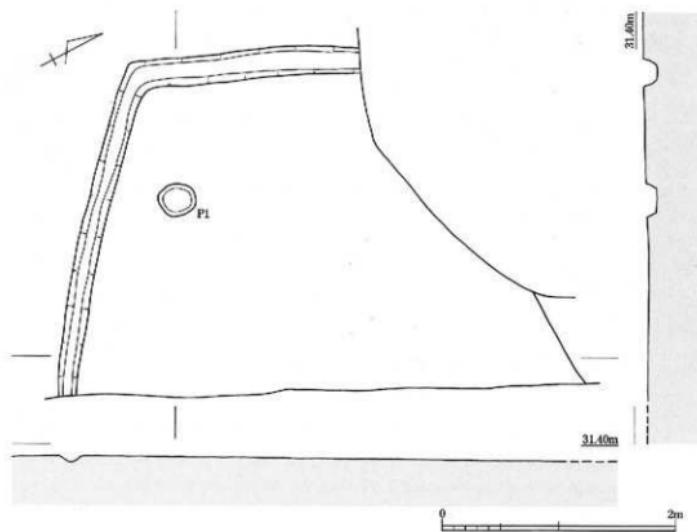
形状・規模 平面形態は方形と思われる。第5次調査例では唯一の方形プランである。南北の検出長は4.3mで、東西の検出長は3.1mである。削平を受けており床面での保存状況は余り良好ではない。壁部もほとんど残っていない。床面のレベルがSH22に比べると高いことに起因しているかもしれない。

付属施設 主柱穴・炉・周壁溝が確認されている。

主柱穴 1基検出している。径30cmと通常の規模である。深さは35cmと余り深くない。床面の調査率が1/4程度であることから1基しか確認しておらず想像の域となるが、コーナー部に柱穴があるから4本柱の上屋構造を推定できる。また、SH22の東側の柱穴が本住居跡の主柱穴の可能性がある。レベルが他の柱穴より浅く、SH24の柱穴と同じであることも有効な事実である。

炉 掘り込まれた遺構として検出していないが、中央付近で焼土面を確認した。浅い堆積で炭・焼土もあることから、炉跡の可能性を考えている。最大長で1.1mを測る東西に長い不定の梢円形のプランである。

周壁溝 周壁にはほぼ平行に溝が設けられている。周壁はほとんど残っておらず、周壁溝だけが残っている状況であった。方形プランの南辺と西辺を検出しているが、直角には曲がっていない。やや鈍角になっている。溝の断面は逆台形で比較的しっかり丁寧に掘られている。幅は25cm



第72図 SH24

~40cmを測る。溝内からも炭・焼土・土器片が出土している。

出土遺物

ほとんど出土していない。

時期

SH22との切り合い関係から判断して、弥生時代後期と考えられる。

SH25

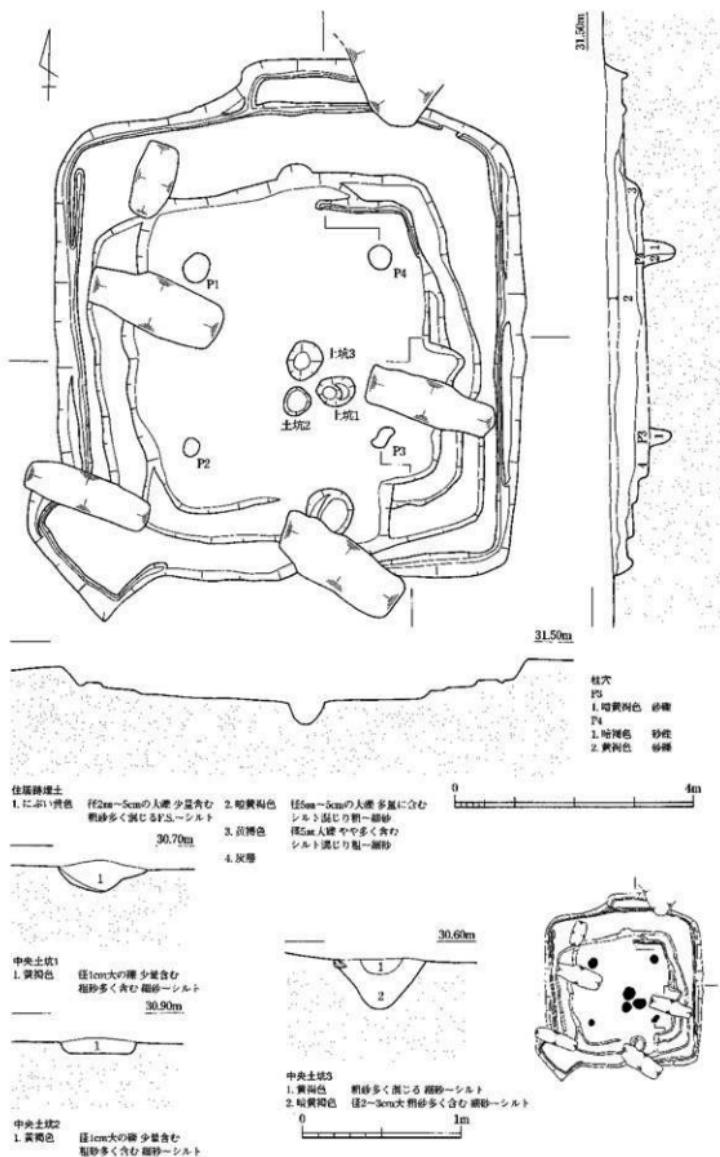
検出状況

調査区中央で検出された。ほぼ全体を検出したが、部分的に攢乱を受けている。高床部の検出状況および屋内土坑が3基見られることから、2度の建て替えが行われたものと考えられる。



第73図 SH25の検出

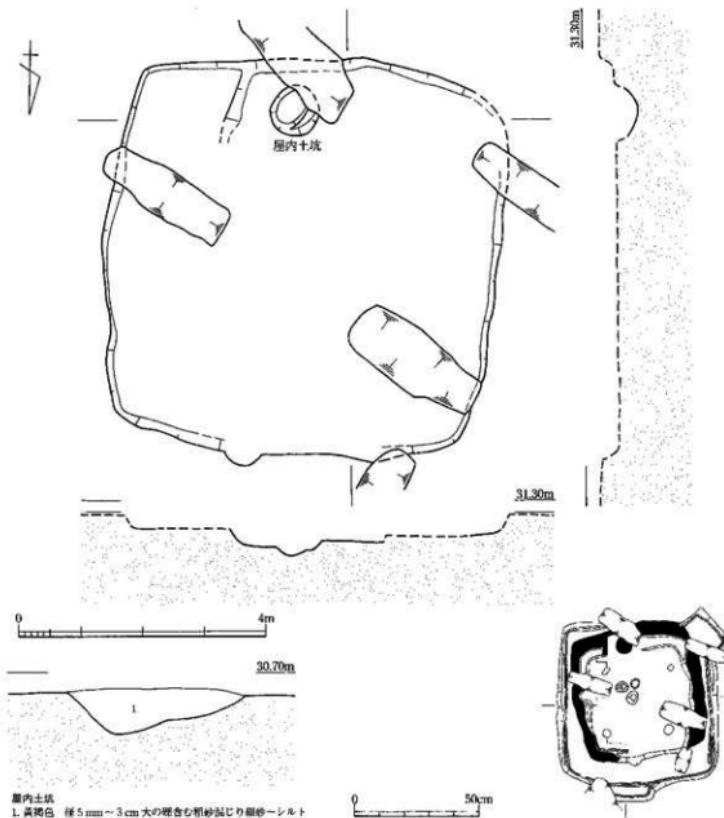
形状と規模	平面は方形を呈する。東西方向で7.7m、南北方向で7.4mを測る。検出面からの深さ57cm、床面の標高は30.63mである。
付属施設	主柱穴・屋内土坑・高床部・周壁溝・張り出し部がある。
主柱穴	4基検出しており、床面の四隅、高床部壁際に配置されている。 P 1は掘り方45cm、柱底10cm、床面からの深さ33cm、P 2は掘り方25cm、柱底15cm、床面からの深さ36cm、P 3は掘り方20~30cm、床面からの深さ35cm、P 4は掘り方36cm、柱底20cm、床面からの深さ40cmである。 柱穴間距離は、P 1~2間で3.0m、P 2~3間で3.2m、P 3~4間で3.0m、P 4~1間で3.0m、平均主柱穴間距離は3.05mである。
屋内土坑	3基検出している。
土坑1	床面中央部やや南東に位置する。東西65cm、南北50cmの楕円形の土坑で、東半は比高差約10cmのステップ状の平坦面がある。西半は円形に掘り込まれており、床面からの深さ23cmを測る。
土坑2	床面中央部やや南に位置する。径45cmの円形の土坑で、壁はほぼ直立して掘り込まれている。床面からの深さは9cmと浅いが、本来の深さというよりは建て替えによって上部を削平されてしまった可能性も考えられる。
土坑3	床面中央部に位置する。径60cmの円形の土坑で、床面からの深さ40cm、掘り方の断面形はV字形を呈する。
周壁溝	外壁に沿って検出された。張り出し部では南東では外壁に沿ってのみ認められたが、北辺のものでは2段に分かれて高床面と張り出し部床面を仕切る。幅8~20cm、床面からの深さ3~5cmを測る。床面においても高床部の壁に沿って北東隅~東辺で断片的に検出された。幅14~33cm、床面からの深さ5cmを測る。
高床部	4辺に沿って検出した。北辺以外では建て替えなどの影響で全容を把握しがたい。最大時を復元すれば幅約100~120cmと考えられる。
張り出し部	2カ所で認められる。
張り出し1	西辺と南辺がなす角に取り付く。幅80cmで、長さは約1.9mである。周壁溝は外壁に沿ってのみ認められ、張り出し部と住居内部を区画する溝はつくられていない。高床面との比高差はほとんどなく、検出面からの深さは28cm、標高は30.92mである。
張り出し2	北辺のやや東寄りに取り付く。幅40cmで、長さは攪乱を受けているため全容がわからないが、少なくとも185cm以上はある。周壁溝は2段に分かれて、外壁に沿うものと住居内部とを区画するものに分かれる。床面との比高差はほとんどなく、検出面からの深さは30cm、標高は30.90mである。
出土土器	S H25とS H25（新）の2棟の住居跡からなることは、住居跡完掘後に明らかとなった。このため、両住居跡から出土した土器を明確に分離することは困難である。加えて、2棟の前後関係は不明である。以上から、上層出土土器を中心に、両住居跡の埋没時期を判断する資料として扱えるものと考えられる。したがって、S H25（新）で報告する。
時期	上層出土土器から判断して、弥生時代後期後半と判断される。



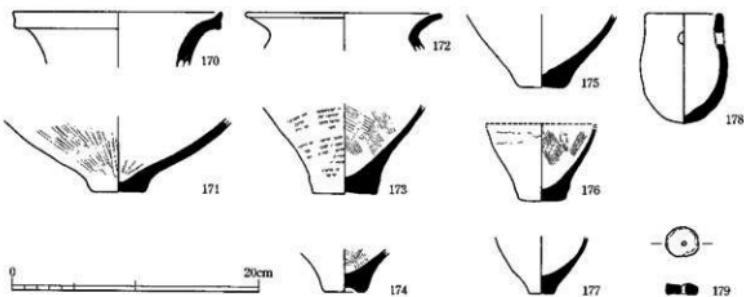
第74図 SH25

SH25(新)

- 検出状況** 調査区中央で検出された。SH25と重なっているが、切り合い関係は明らかでない。
- 形状と規模** 平面は方形を呈する。規模は南北6.0m、東西6.2mである。検出面からの深さ57cm、床面の標高は30.63mである。
- 付属施設** 土坑・高床部がある。
- 屋内土坑** 南壁際中央部に位置する。南端を擾乱で切られているため全容はわからないが、直径75cmの円形を呈するものと思われる。床面からの深さは30cmである。
- 高床部** 南辺東半でごく一部分を検出した。本來は東西辺に沿って2カ所に設けられていたと考えられる。高床面の標高は30.84mである。

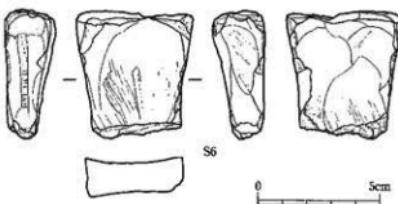


第75図 SH25(新)



第76図 SH25 (新)出土土器

- 出土遺物** 土器と石器が出土している。
- 土器** 壺・壺・鉢・鋤壺・土製紡錘車が出土している。
- 壺** 広口壺と底部片が出土している。広口壺は170の1個体で、内外面を横ナデ調整により仕上げられている。内面にわずかにヘラ磨きの痕跡が認められる。底部も171の1個体のみである。外面はヘラ磨きにより仕上げられているが、内面は摩滅のため観察できない。
- 甕** 口縁部片1個体と底部片2個体を円化したが、いずれもV様式系の甕である。
- 鉢** 3個体図化した。いずれも小型鉢に分類されるものである。175は内外面とも摩滅のため調整は観察できない。176は、外面をナデ調整、内面をハケ調整により仕上げられている。177は内外面をナデ調整により仕上げられている。
- 鋤壺** 178の1個体である。内外面ともユビオサエとナデ調整により仕上げられている。口縁部下に径1cmの紐穴が1穴あけされている。
- 紡錘車** 179の1個体である。2.4×2.6cmとほぼ円形を呈し、厚さは9mmを測る。中央部には径3mmの穴が穿たれている。
- 石器** S6は砥石である。半分を欠いている。作業面は2主面、2側面の4面である。表主面においては全面が一様に窪んでいる。使用痕は4面全てに線条痕が認められる。特徴的なものは、表主面と左側面において、2~3mmほどの幅で帯状に強く削ったような痕跡が認められる。現存値で長さ52.5mm、幅35.7~47.7mm、厚さ12.0~21.2mm、重さ63.2gを測る。石材は凝灰質砂岩を用いる。
- 時期** 上層出土土器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。



第77図 SH25 (新)出土石器

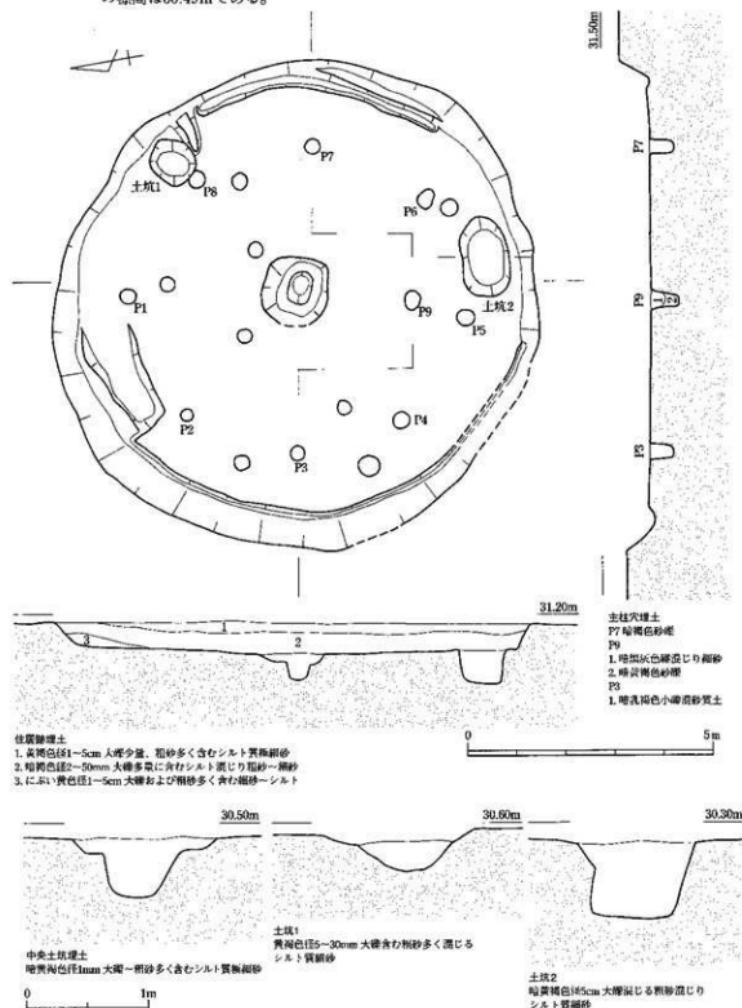
SH26

検出状況

調査区中央西に位置する。第6次調査と第7次調査の2度にまたがって全体を検出した。南端の一部を後世の搅乱によって切られている。

形状と規模

平面は円形を呈する。規模は南北10.0m、東西9.7mである。検出面からの深さ59cm、床面の標高は30.49mである。



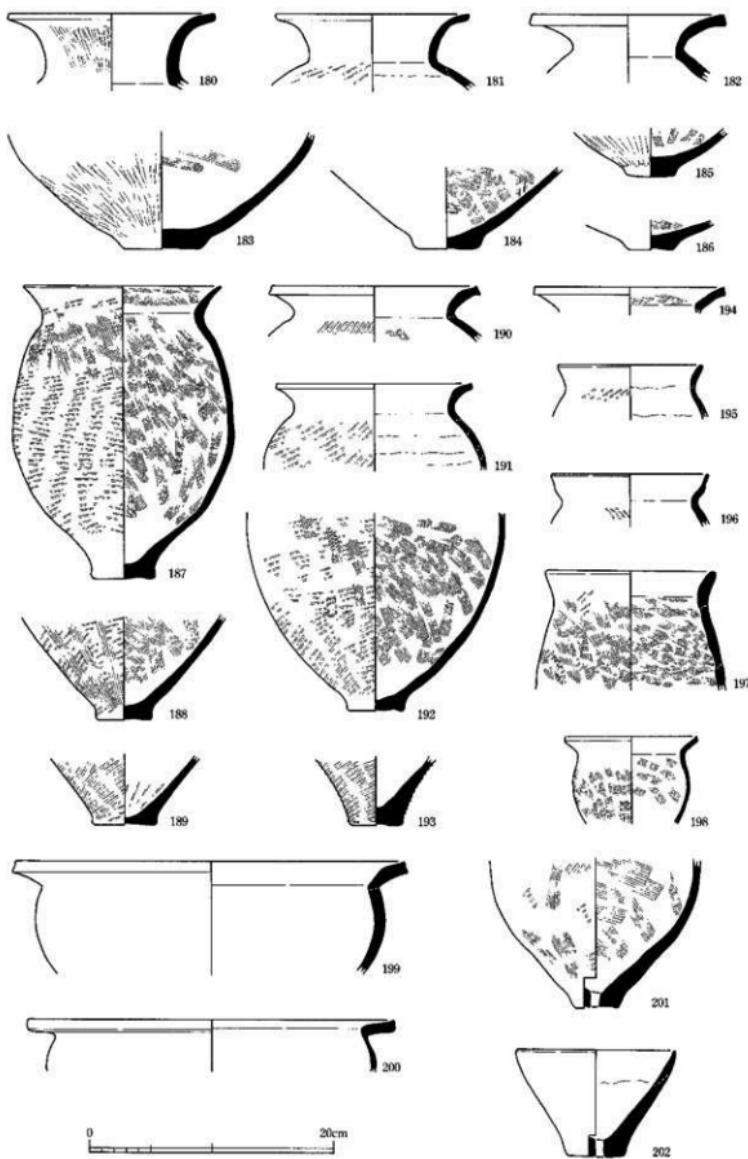
第78図 SH26

- 付属施設** 主柱穴・中央土坑・周壁溝がある。
- 主柱穴** 床面において17基のピットを検出した。このうち主柱穴と考えられるのは8基であるが、ほかのものについても柱の位置をずらすなど住居の改変に伴って掘られたものである可能性がある。主柱穴と考えられるのは5基で、高床部の壁沿い、各頂角のところに配置されている。P 1は掘り方30cm、柱痕直径15cm、床面からの深さ55cm、P 2は掘り方25cm、床面からの深さ34cm、P 3は掘り方28cm、柱痕直径12cm、床面からの深さ45cm、P 4は掘り方34cm、柱痕直径18cm、床面からの深さ54cm、P 5は掘り方31cm、柱痕直径20cm、床面からの深さ42cm、P 6は掘り方33cm、柱痕直径20cm、床面からの深さ36cm、P 7は掘り方32cm、床面からの深さ50cm、P 8は掘り方35cm、床面からの深さ46cmである。
- 柱穴間距離は、P 1～2間で2.7m、P 2～3間で2.4m、P 3～4間で2.2m、P 4～5間で2.5m、P 5～6間で2.5m、P 6～7間で2.6m、P 7～8間で2.5m、P 8～1間で2.8m、平均主柱穴間距離は2.52mである。
- 屋内土坑** 3基検出している。うち1基はいわゆる中央土坑で床面の中央部に構築されている。残る2基については壁際に掘られたもので、その機能などについてはよくわからない。
- 中央土坑** 2段に掘って構築しており、上段は10～13cm掘り下げておらず、底面はほぼ平坦である。平面形および規模は一辺140cm程度の方形を意識していたと思われる。下段は50cm×65cmの楕円形を呈し、上段底面から約35cm掘り下げている。
- 土坑1** 北東の壁際に位置する。平面形は楕円形を呈し、0.95×0.85mの規模である。床面からの深さは32cmを測る。
- 土坑2** 南東の壁際に位置する。平面は長方形を呈し、1.65×0.95mの規模である。壁はほぼ直立しており、床面からの深さ67.5cmを測る。
- 周壁溝** 壁際に沿って断続的に検出された。幅18～40cm、床面からの深さ3～6cmを測る。

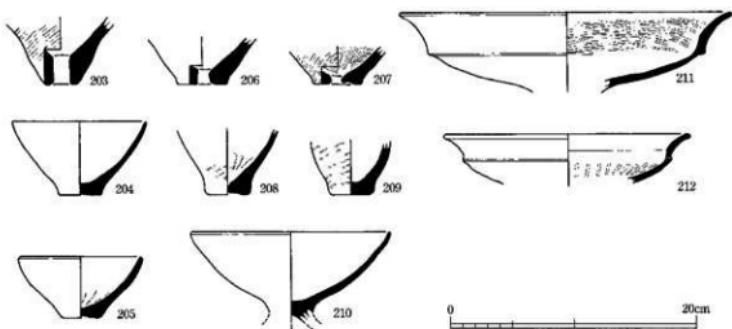


第79図 SH26の検出

出土遺物	土器と石器が出土している。
土器	今回報告する住居跡の中で、最も多量の土器が出土している。これらの土器は、当住居跡絶前の段階に伴う土器群（以下、「下層出土土器」）と、住居跡絶後一括投棄された一群（以下、「上層出土土器」）とに分けることができる。以下、上層出土土器と下層出土土器にわけて報告することにする。
上層出土土器	壺・甕・鉢・高杯が出土している。
壺	広口壺と底部片が出土している。広口壺は、180～182の3個体である。180は、内外面ともヘラ磨きにより仕上げられているが、内面についてはその単位は不明瞭である。口縁端部は横ナデ調整により仕上げられている。181は、口縁部形態および体部の整形方法から判断して甕に類似するが、口径に対して頸径が小さいことから、壺と判断した。体部外面はタタキ整形後ハケに近いナデ調整により、内面はユビオサエとナデ調整により仕上げられている。口縁部は摩滅のため観察できない。182は、口縁端部を横ナデ調整により端面をもち、体部内面はユビオサエとナデ調整により仕上げられている。他は、摩滅のため観察できない。なお、この土器は、胎土中に3mm以下の角閃石を多量に含み茶褐色を呈することから、讃岐地方からの搬入品と考えられる。
	底部は4個体図化した。内面はいずれもハケ調整により仕上げられている。外についても、183と185はヘラ磨きにより仕上げられている。184についても、摩滅が著しいが、わずかにヘラ磨きの痕跡が認められる。186は、ヘラナデもしくはナデ調整により仕上げられている。なお、184については、胎土的特徴および出土位置から判断して、182と同一個体の可能性が高い。
甕	底部片も含めて12個体図化した（187～198）。196を除いては、V様式系甕に分類されるものである。
	196は、口縁部が横ナデ調整により複合口縁をなす。体部内外面はナデ調整により仕上げられている。外面に擬凹線は認められないが、丹波・丹後系の甕と考えられる。ただし、搬入品ではない。
V様式系甕	V様式系甕は、外面はタタキ整形を基本とし、その後一部をハケ調整により仕上げられるものが多く認められる。内面はハケ調整もしくはナデ調整により仕上げられている。ヘラ削りは認められない。
鉢	12個体図化した。210については、高杯の可能性も考えられるが、本報告では台付鉢に分類しておく。大型鉢・有孔鉢・小型鉢が出土している。
	大型鉢は、199と200の2個体である。199は、体部外面をタタキ整形後ナデ調整、内面はナデ調整、口縁部は内面をハケ調整後横ナデ調整により仕上げられている。200は、全体的に摩滅気味であるが、体部内面にわずかにヘラ磨きの痕跡が認められる。
有孔鉢	有孔鉢は5個体図化した。201は鉢に分類したが、底部穿孔部の底体部の可能性も考えられる。焼成前に径8mmの穿孔が施されている。202は完形に復元できた鉢である。口縁部を横ナデ調整、体部内面をユビオサエ、体部外面をヘラナデ調整により、それぞれ仕上げられている。底部中央部には径6mmの穿孔が焼成前に施されている。203は、尖り底に近い底部に径1.3cmの穿孔が焼成前に施されている。内面はヘラナデ調整により仕上げられている。他



第80図 SH26上層出土土器 (1)



第81図 SH26上層出土土器（2）

に、206は径9mmの、207は径8mmの穿孔が、それぞれ焼成前に施されている。

小型鉢は4個体固化した。204は、内面をヘラナデとナデ調整により、外表面はユビオサエとナデ調整により仕上げられている。205は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。208と209は外表面をタタキ整形後ナデ調整により、内面はナデ調整により仕上げられている。

この他210は、内外面とも摩滅のため観察できない。ただし外表面にわずかにハケ調整の痕跡が認められる。

高環 2個体固化した。2個体とも有稜高環に分類されるものである。211は、全体的に摩滅気味であるが、口縁部内面は横方向のヘラ磨きにより仕上げられている。212は、体部内面をナデ調整後輪文状のヘラ磨きにより仕上げられている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

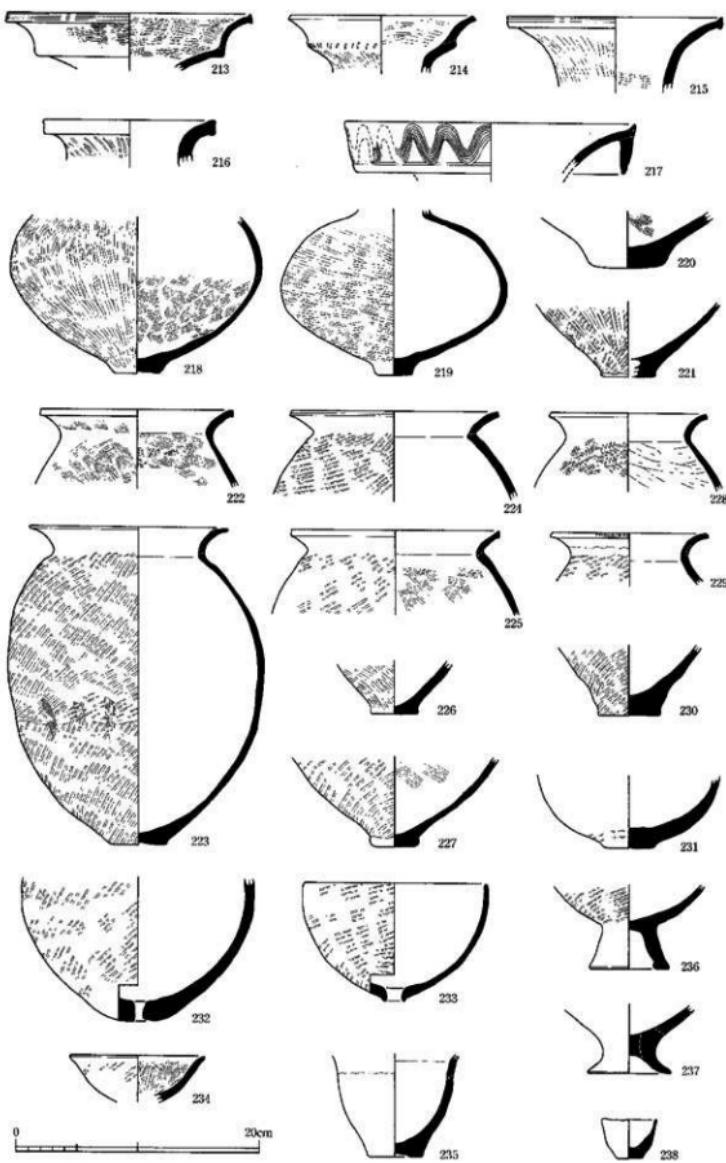
下層出土土器 壺・甕・鉢・高環・器台 各器種が出土している。

壺 複合口縁壺・広口壺・体部・底部が出土している。

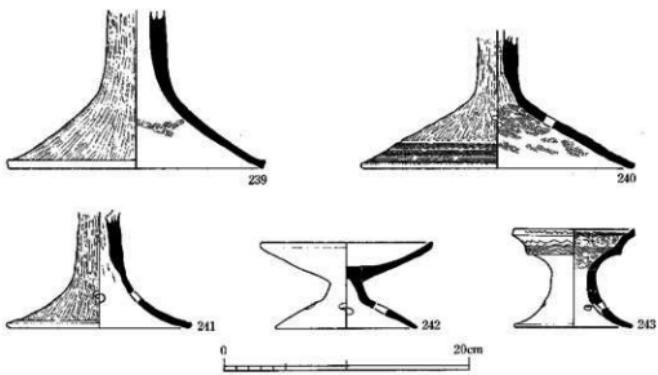
複合口縁壺は、213と214の2個体である。213は、口縁部外表面を縱方向のハケ調整後、内外面をヘラ磨きにより仕上げられている。また、口縁端部は横ナデ調整により面をもち、2条の擬凹線が認められる。214は、口縁部外表面を横ナデ調整、口縁部内面と頸部外面をていねいなヘラ磨きにより仕上げられている。また、受部外面上にはヘラ先状のものによる刻み凹が施されている。なお、頸部内面の調整については、摩滅のため観察できない。

広口壺は、215～217の3個体である。215は、口縁部内外面を横ナデ調整、頸部外表面をヘラ磨き、内面をハケ調整により仕上げられている。また、口縁端部は横ナデ調整により仕上げられているが、わずかに凹線状を呈している。216は、内外面を横ナデ調整後、外面に暗文状のヘラ磨きが施されている。頸部内面はハケ調整後横ナデ調整が施されている。217は、口縁端部に粘土紐を横ナデ調整により断面逆三角形形状に貼り付け、外端面には8条からなる櫛描波状文が施されている。他については、摩滅のため観察できない。

体部は、218と219の2個体である。いずれも広口壺の体部と考えられる。2個体とも体部外表面はヘラ磨きにより仕上げられている。体部内面は、218は上半をユビオサエとナデ調整、下半をハケ調整により、219はハケ調整とナデ調整により仕上げられている。



第82図 SH26下層出土土器 (1)



第83図 SH26下層出土土器 (2)

底部も220と221の2個体である。220は、外面はハケ調整後ヘラナデ調整、内面はハケ調整により仕上げられている。221は、体部外面にヘラ磨きが認められることから壺に分類した。内面はナデ調整により仕上げられている。

壺 10個体図化した。いずれもV様式系の壺である。228を除いては、体部内面は、ハケ調整もしくはナデ調整により仕上げられている。228は、体部外面のタタキ整形は、羽状タタキによる。また、体部内面は右から左方向のヘラ削りにより仕上げられている。

このほか、229の口縁端部には刻み目が施されている。231については鉢の可能性も考えられるが、本報告では壺として報告する。外面はタタキ整形後ナデ調整により仕上げられている。底部は全体的に退化傾向である。

鉢 7個体図化した。有孔鉢・小型鉢・台付鉢・ミニチュアが出土している。

有孔鉢は、232と233の2個体である。232は、ほぼ球形の体部にわずかに底部が認められ、径7mmの穿孔が焼成前に施されている。外面はタタキ整形後ナデ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。233は完形に復元できた個体である。底部はほぼ丸底を呈し、径1.2cmの穿孔が焼成前に施されている。232と同様の仕上げである。

小型鉢は234と235の2個体である。234は、外面をタタキ整形後、口縁部を横ナデ調整、体部をナデ調整により仕上げられている。内面はヘラ磨きにより仕上げられている。全体的に外面に対して内面のほうがていねいに仕上げられている。235は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。

台付鉢は、236と237の2個体である。236の内面および237の内外面は、ナデ調整により仕上げられている。

ミニチュアは238の1個体である。ユビオサエにより仕上げられている。

高杯 3個体(239~241)図化したが、いずれも脚部に限られる。239と241は、外面をヘラ磨きにより仕上げられている。また、内面については、239はハケ調整後ナデ調整、241はナデ調整により仕上げられている。239については、残存する範囲においては、透孔は認められない。241は、径9mmの穿孔が透孔されている。

240は、外面をヘラ磨きにより仕上げられ、下端部には4~6条単位の櫛描波状文が3単位描かれている。内面はハケ調整により仕上げられている。また、4箇所に径9mmの透孔が焼成前に穿孔されている。

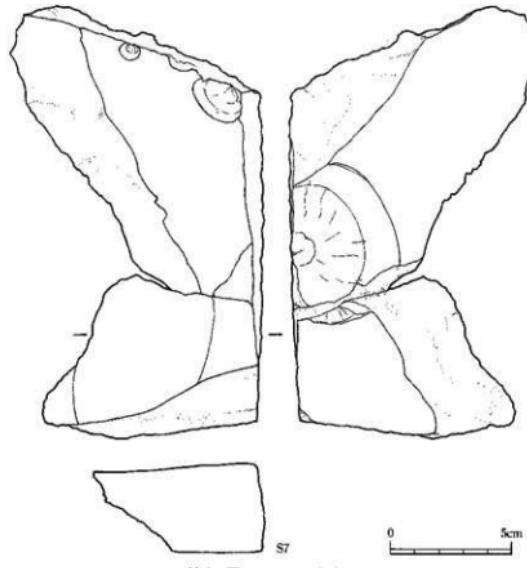
- 器台** 小型器台が2個体出土している。2個体とも器高8cm以下と、かなり小型である。
242は、中実の器台である。口縁部内外面は横ナデ調整、受部内外面はヘラ磨きにより仕上げられている。以下は、摩滅のため調整は観察できない。ヘラ磨きの単位についても、摩滅のため観察できない。脚部には径1.2cmの透孔が4箇所に焼成前に穿孔されている。

243は、中空の器台である。口縁部外面は、横ナデ調整後4条と1条からなる櫛描波状文が、内面はヘラ磨き後4条からなる櫛描波状文が2段にわたって施されている。また、口縁端部外面にも1条のヘラ描波状文が認められる。さらに、体部外面はヘラ磨き、脚端部は内外面ともユビオサエとナデ調整により仕上げられている。

胸部には、径6mmの透孔が5箇所に焼成前に穿孔されている。なお、穿孔は焼成前に行われているが、焼成後に当初穿孔した箇所の周囲が内外面とも打ち欠かれている。

- 石器** S7は砾石である。破損しており全容を把握できない。硬質で緻密な石材で、中砥もしくは仕上げ用の砾石と考えられる。器表は風化および経年変化のため褐色味を帯びている。表正面は研ぎ減りによるくぼみが若干形成されるが、裏面は平坦である。線条痕などの使用痕は顕著ではない。現存値で長さ175.8mm、幅102.8mm、厚さ33~36mm、重さ720.3gである。石材は流紋岩質凝灰岩を用いる。

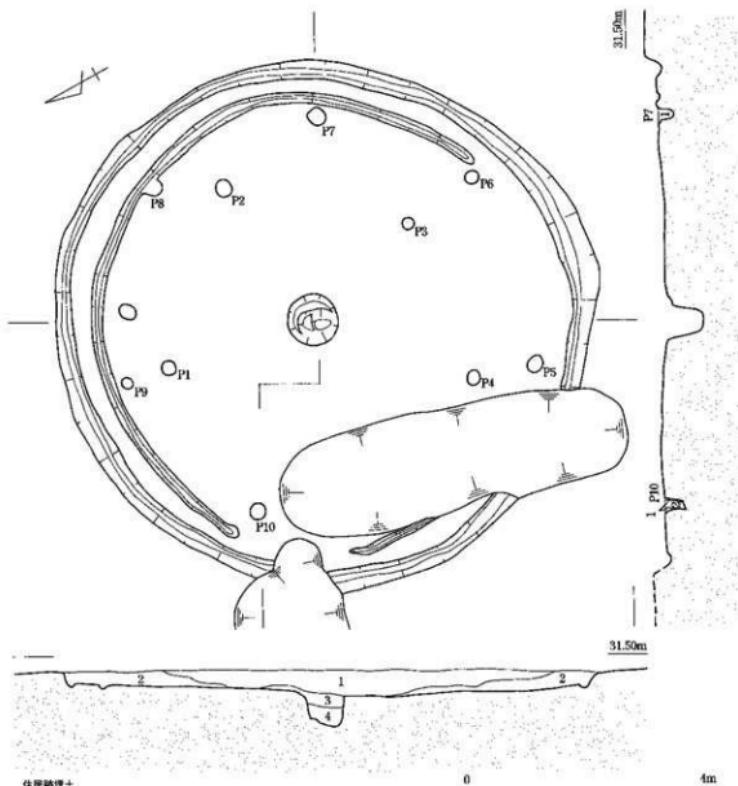
- 時期** 下層出土土器から判断すると、弥生時代後期後半と考えられる。



第84図 SH26出土石器

SH27

- 検出状況** 調査区中央に位置する。南壁を一部掘乱によって壊されているが、ほぼ全体を検出することができた。周壁溝の検出状況から少なくとも1度の建て替えが行われたと考えられる。
- 形状と規模** 平面は円形を呈する。規模は南北9.0m、東西8.7mである。検出面からの深さ59cm、床面の標高は30.94mである。
- 付属施設** 主柱穴・中央土坑・周壁溝がある。
- 主柱穴** 床面において11基の柱穴を検出した。このうち主柱穴と考えられるのは10基であるが、残る1基についても柱の位置をずらすなど住居の改変に伴うものである可能性がある。



第85図 SH27

- 住居跡地土
 1. 黄褐色 地面ごり細砂 (土器多量に含む)
 2. 黄褐色 細砂
 中央土坑
 3. 黄褐色 直径2mm大粒一粗砂多く含む シルト一細砂
 4. 黄褐色 大粒1cm大粒一粗砂多く含む シルト黄粗砂

- 柱穴
 P10
 1. 單色細色 硫化じり中一細砂
 2. 黄褐色 地面ごり細砂
 P7
 1. 單色褐色 硫化 細砂

建て替えた前の主柱穴はP 1-4である。本米は5基で上屋を支えていたと思われるが、擾乱によって消失している。P 1は掘り方24cm、床面からの深さ31cm、P 2は掘り方30cm、床面からの深さ47cm、P 3は掘り方20cm、床面からの深さ10cm、P 4は掘り方22cm、床面からの深さ50cmである。柱穴間距離はP 1-2間で3.1m、P 2-3間で3.1m、P 3-4間で2.8m、平均主柱穴間距離は3.0mである。

建て替えた後の主柱穴はP 5-10である。P 5は掘り方26cm、床面からの深さ50cm、P 6は掘り方24cm、柱径直徑12cm、床面からの深さ30cm、P 7は掘り方30cm、床面からの深さ29cm、P 8は掘り方27cm、柱径直徑11cm、床面からの深さ37cmである。柱穴間距離は、P 5-6間で3.2m、P 6-7間で2.7m、P 7-8間で2.9m、P 8-9間で3.1m、P 9-10間で3.0m平均主柱穴間距離は3.0mである。

中央土坑 直径80cmの円形の土坑で、壁はほぼ直立して掘り込まれている。床面からの深さは25cmを測る。

周壁溝 2条検出された。外側のものは幅17~50cm、床面からの深さ10cm、内側のものは幅10~23cm、床面からの深さ5cmを測る。

出土遺物 壺・壺・鉢・高杯が出土している。いずれも埋土上層から出土している。

壺 広口壺と複合口縁壺と底部が出土している。

広口壺は244・245・247~252の8個体である。

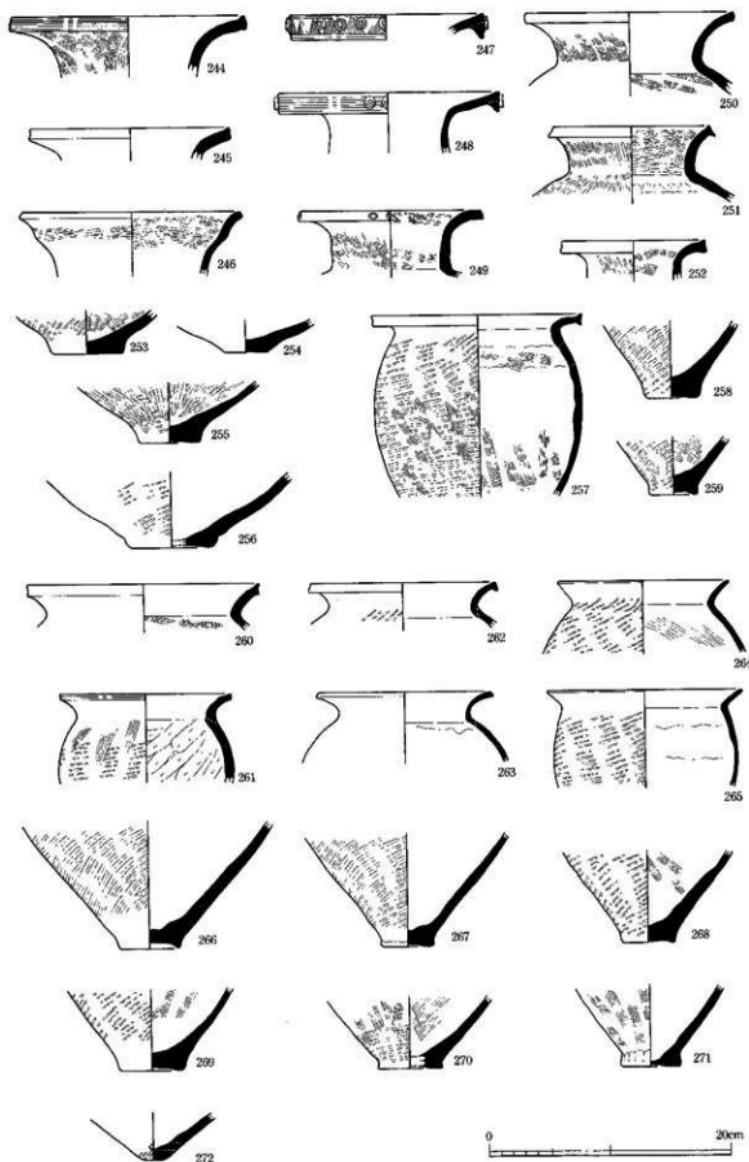
244は、口縁端部に3条の擬凹線を施し、外面をハケ調整、内面をヘラ磨きにより仕上げられている。245は、内外面を横ナデ調整により仕上げられている。247は、口縁端部下端を拡張し、端面に鋸齒文を施し、その後竹管円形浮文を貼り付けている。竹管円形浮文は、1セット半残存するが、その位置から判断して、4個が1セットとなり、当初は4セットあったものと推定される。248は、口縁端部に3条の擬凹線を施した後、2個一対の竹管円形浮文が貼りつけられている。2対残存するが、その位置から判断して、当初は4対あったものと推定される。他の部位の調整については、摩滅のため観察できない。249は、内外面をハケ調整により仕上げられている。また、口縁端部には2個一対の竹管文が4箇所に認められる。250は、口縁部内外面と体部内面をハケ調整により仕上げられている。体部外面は観察できない。251は、口縁部内外面と体部外表面をヘラ磨き、体部内面をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。252は、口頭部内面をハケ調整、外表面をヘラ磨きにより仕上げ、その後口縁端部を横ナデ調整により仕上げられている。

複合口縁壺は246の1個体である。内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。

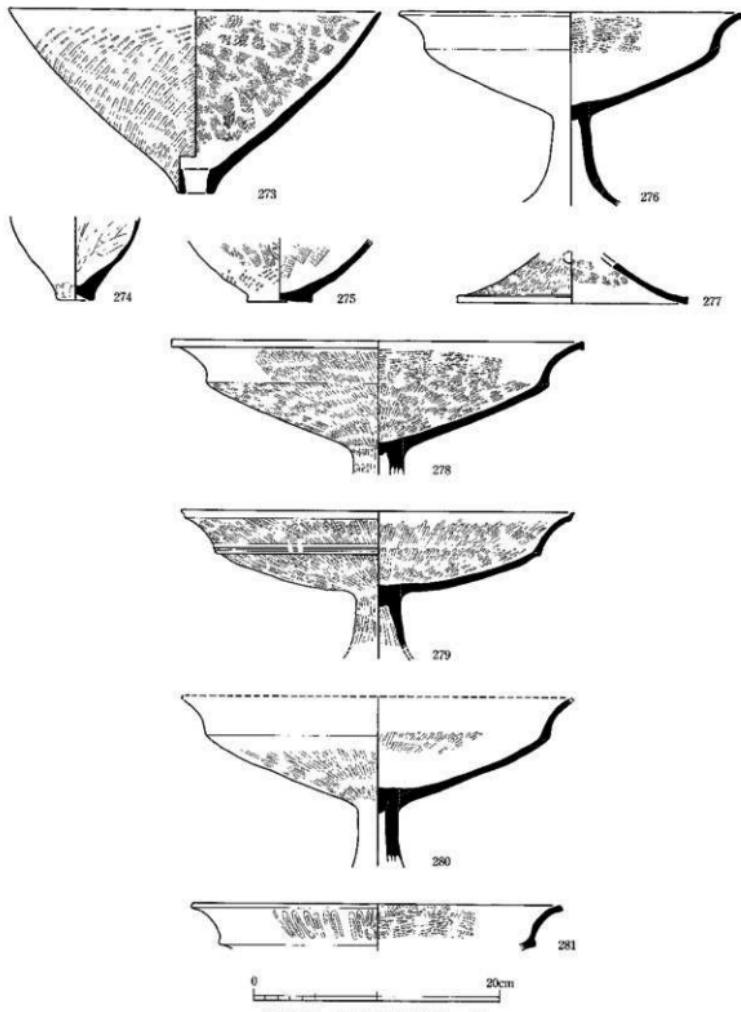
底部は4個体固化した。このなかで、253について、形態的特徴から壺の可能性も否定できない。254は、内面をナデ調整、外表面をヘラ磨きにより仕上げられている。ただし、摩滅のため単位は明瞭に観察できない。255は、外表面をタタキ整形後、内外面をヘラ磨きにより仕上げられている。256の内面はヘラナデ調整により仕上げられている。

壺 底部を含めて13個体固化した。いずれもV様式系壺に分類されるものである。このなかで、261は、体部内面を弱いヘラ削りにより仕上げられている。他の上器の体部内面は、ハケ調整もしくはナデ調整により仕上げられている。

底部は、全体的に平底ではあるが、退化傾向にある。特に272は、尖り底を呈している。



第86図 SH27出土土器 (1)



第87図 SH27出土土器 (2)

内外面ともナデ調整により仕上げられている。なお、この土器は、内面底部のレベルで水平方向に径6mmの穿孔が認められる。2方向からほぼ直線的に焼成前に穿孔されている。

鉢 3個体(273~275)図化した。273は、大型の有孔鉢である。外面をタキ整形、内面をハケ調整後、口縁部内外面をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。底部中央部には、径1.6cmの孔が焼成前に穿孔されている。全体的に歪みが顕著である。

274は、小型鉢である。内面はヘラ削り、外面はナデ調整により仕上げられている。底部はユビオサエにより整形されている。

最後に275については、形態的にみて、壺あるいは甕の可能性も考えられるが、ここでは鉢として報告する。

高坏 6個体（276～281）と、比較的多く出土している。277の脚部を除いては、いずれも有稜高坏に分類されるものである。

276は、坏部内外面および脚部外面はヘラ磨きにより仕上げられている。ただし、器表面の剥離が著しいため、単位は不明瞭である。

277は、有稜高坏の脚部と考えられる。外面はヘラ磨き、内面はハケ調整により仕上げられている。また、端部は横ナデ調整により仕上げられている。径1.4cmの円形の透孔が2箇所に認められ、その位置関係から、当初は4箇所にあったものと考えられる。

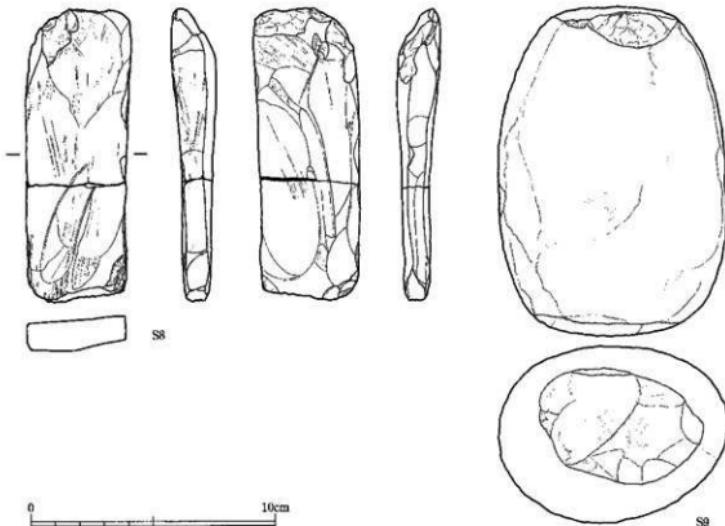
278と279は、坏部外面ともていねいなヘラ磨きにより仕上げられている。特に、279については、坏部外面をタクти形後にヘラ磨きが施されている。また、口縁部と体部の境の外面上には2条の凹線が施されている。

280は、全体的に器表面の剥離が著しいが、坏部外面はヘラ磨きにより仕上げられている。口縁部に関しては、観察できない。脚部外面もヘラ磨きにより仕上げられている。

281は、口縁部のみ残存する。内面は横方向の、外面は暗文状のヘラ磨きが施されている。特に外面のヘラ磨きは、ジグザグ状を呈している。

石器 2点出土している。

S 8は砥石である。2つに折れて検出された。形態はほぼ直方体で幅に対して厚みの薄い



第88図 SH27出土石器

ものである。作業面は2主面、2側面の4面である。主面においては、線条痕の方向および稜線の形成状況から複数の運動方向が考えられる。表主面においては、30~45mmほどの長さで弧を描いて延びる、溝状に刻まれた強い線条痕が認められる。この種の溝状に強く刻まれた線条痕は同主面の下端で、肩を刻むかのように6条ほど認められる。

現存値で長さ119.3mm、幅40~43mm、厚さ7.5~18mm、重さ108.63g。石材は泥岩を用いる。

S 9は敲石もしくは磨石である。周壁溝から出土している。長くてやや扁平な蹠を利用しており、作業面は両端面に認められる。圓化した作業面については44×63mmの範囲で使用による変化が認められる。顕著な敲打の痕跡は観察されないが、摩滅も認められない。線条痕などの運動方向を探れるような使用痕もわからなかった。おそらく、弱い力で敲きつすり滑すような作業を行ったものと推測される。現存値で長さ140.2mm、幅91mm、厚さ72mm。石材は花崗閃綠岩を用いる。

時期 出土土器から判断して、弥生時代後期中葉と考えられる。

SH28

検出状況 検査区北に位置する。南東壁および床面を風倒木などで攪乱されているが、ほぼ全体を検出することができた。周壁溝の検出状況から少なくとも1度の建て替えが行われたと考えられる。

形状と規模 平面は隅円方形を呈する。規模は南北5.7m、東西5.5mである。検出面からの深さ51cm、床面の標高は30.77mである。

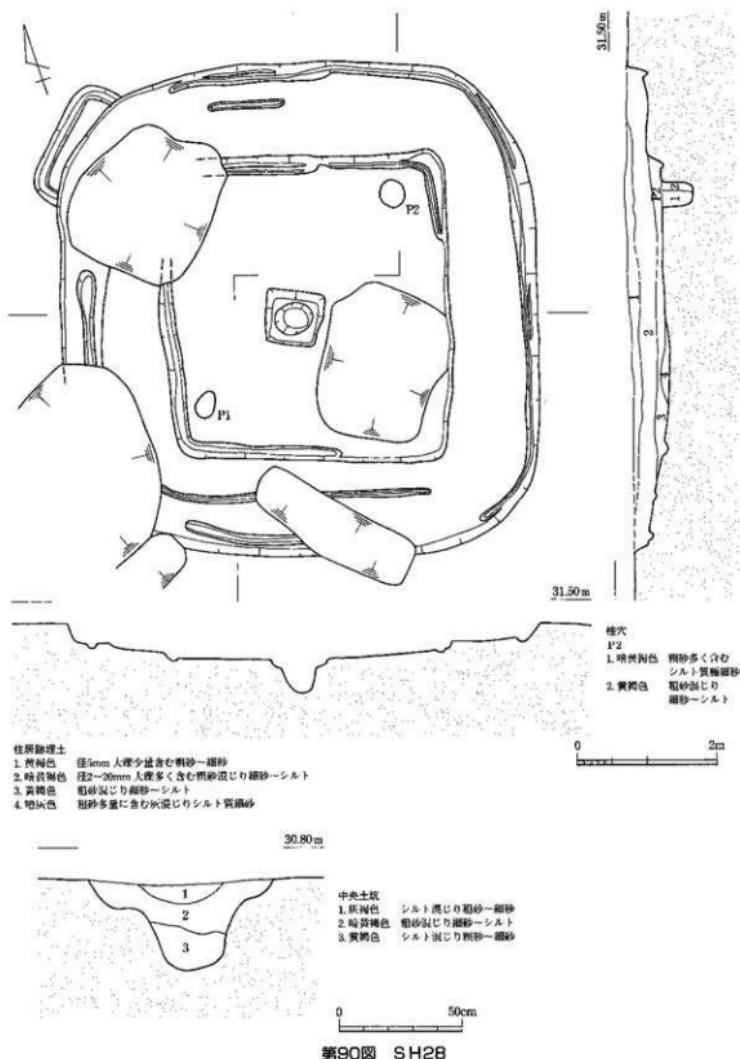
付属施設 主柱穴・中央土坑・周壁溝・高床部がある。

主柱穴 床面において2基のピットを検出した。本来は4基で上屋を支えていたと思われるが、攪乱によって消失している。P 1は掘り方27cm、床面からの深さ34cm、P 2は掘り方36cm、柱痕直径16cm、床面からの深さ43cmである。

中央土坑 2段に掘って構築している。上段は1辺70cmの方形を呈する。床面から10cmほど掘り下げており底面はほぼ平坦である。下段は径約40~45cmの梢円形を呈し、上段底面から約30cm掘



第89図 SH28の検出



第90図 SH28

り下げている。

周壁溝

外壁沿いと、床面上の高床部壁沿いで検出された。

床面のものは南東隅から東辺にかけて認められなかったが、残る部分では全周する。幅10～20cm、床面からの深さ5cmほどである。

外壁に沿うものは2条あり、内側のものは高床面上で外壁に平行して南辺から西辺、北辺の一部で断続的に検出された。高床面拡張前の外壁に沿う周壁溝の痕跡であろう。幅7~20cm、高床面からの深さ3cmである。

外側のものは東辺から北辺にかけてと南辺の一部で断続的に認められた。幅10~28cm、高床面からの深さ7cmである。

高床部 4辺に沿って検出された。周壁溝の検出状況から拡張が行われたと考えられる。幅は拡張前で30~60cm、拡張後で85~110cmである。擾乱の影響からか、西辺および南辺では高床部の壌は立ち上がりを失っている。床面との比高差19cm、高床面の標高は30.96mである。

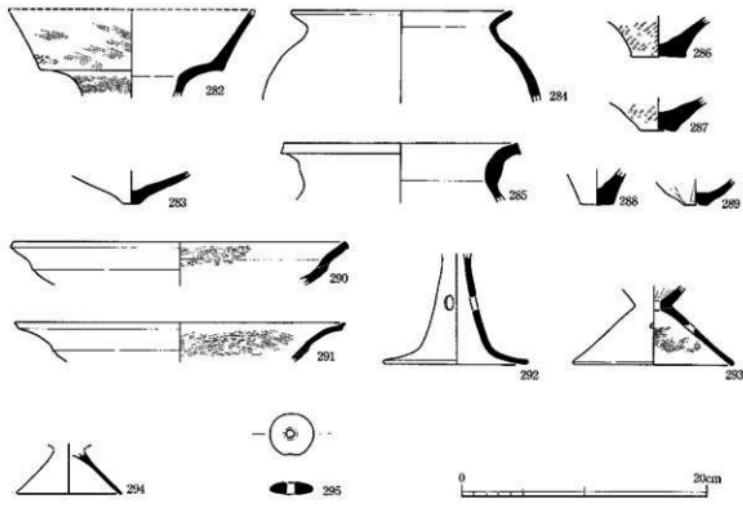
張り出し部 西辺と北辺がなす隅に取り付く。幅20cmで、長さは約1.4mである。周壁溝は外壁に沿ってのみ認められ、張り出し部と住居内部を区画する溝はつくられていない。高床面との比高差はほとんどなく、検出面からの深さは10cm、標高は30.92mである。

出土土器 当住居跡に伴う土器は、当住居跡廃絶後ある程度埋没した段階で投棄された土器（以下「上層出土土器」と、当住居跡に伴う土器（以下「下層出土土器」と）に分けることができる。以下、「上層出土土器」と「下層出土土器」とにわけて報告する。

上層出土土器 壺・甕・鉢・高环・器台・紡錘軸が出土している。

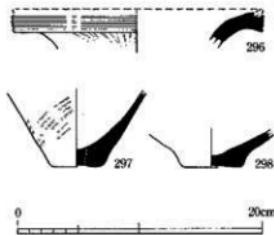
壺 復合口縁壺と底部が出土している。複合口縁壺（282）の外面はハケ調整により仕上げられている。内面は器表面の剥離のため観察できない。283は、細頸壺の底部と考えられる。剥離のため調整は観察できない。

甕 底部を含めて4個体化した。284は、内面をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。外面は摩滅のため観察できない。285は、内外面とも横ナデ調整により仕上げられて



第91図 SH28上層出土土器

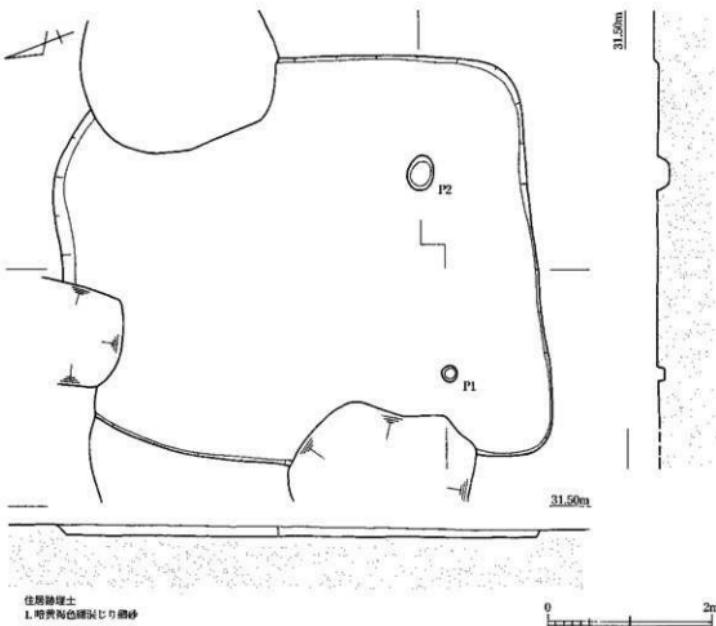
- いる。288と289の内面は、ともにナデ調整により仕上げられている。
- 鉢** 288と289の底部のみである。いずれも小型鉢の底部である。
- 288は内面をヘラナデ調整、外面をナデ調整により仕上げられている。289は内外面ともヘラナデ調整により仕上げられている。特に外面は、ヘラ削り後ヘラナデ調整が施されている。
- 高杯** 有稜高杯の口縁部（290・291）とその脚部（292）を図化している。
- 290は、横ナデ調整後、内面はヘラ磨きにより仕上げられている。口縁部と体部の境が明瞭な段を有し、他の有稜高杯と特徴を異にする。291は、内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。ただし、外面については摩滅のため単位は観察できない。全体的に器壁が薄く仕上げられている。292の脚部は、内外面とも摩滅のため、調整は観察できない。径1.2cmの円形の透孔が3箇所に穿たれている。
- 器台** 293と294の2個体を図化した。いずれも小型器台に分類されるものである。293は、中空の器台で、体部を壇に大きく屈曲する。内面はハケ調整、外面はナデ調整により仕上げられている。口縁部内面にはハケの原体と考えられるあたりが認められる。径6mmの円形の透孔が焼成前に穿たれている。1穴しか残存しないため、当初の個数は推定できない。
- 294については、中空かどうかについては判断できない。内外面とも磨滅が著しく、調整は観察できない。
- 纺錐車** 295の1個体出土している。円盤状を呈し、3.3×3.5cmとほぼ円形を呈する。1cmの厚さをもち、中央部に径7mmの孔が穿たれている。
- 下層出土土器** 出土量は少なく、壺と甕が出土している。このなかで298の底部は、中央上坑内から出土している。
- 壺** 広口壺と底部が出土している。
- 296は、口縁端部には4条+αの擬凹線が施されている。内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。298の底部は、内外面とも摩滅のため調整は観察できない。
- 甕** 297の1個体である。内面は器表面の剥離のため、調整は観察できない。
- 時期** 下層出土土器から判断すべきであるが、出土量が少なく小片であることから、上層出土土器も考慮に入れて判断すると、弥生時代後期後半～庄内併行期と考えられる。



第92図 SH28下層出土土器

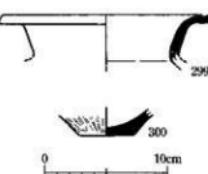
SH29

- 検出状況** 調査区北に位置する。SH30の南、SII28の北東に位置する。ほぼ接した状態で検出された。SH37とわずかに重なっているが、明確な切り合い関係を把握するには至らなかった。床面の標高が高く削平を著しく受けている。
- 形状と規模** 平面は隅円方形を呈する。規模は南北5.8m、東西4.9mである。検出面からの深さ6cm、床面の標高は31.15mである。



第93図 SH29

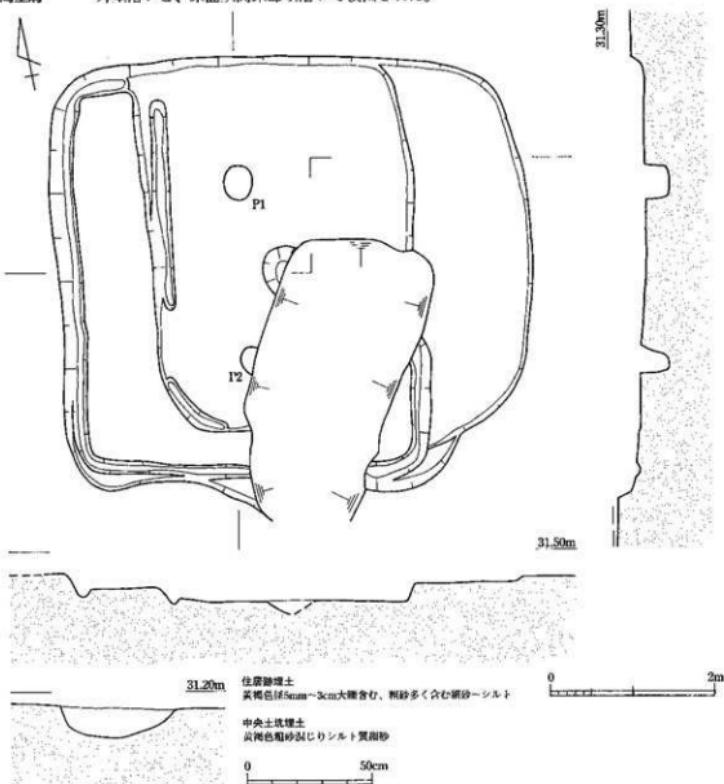
- 付属施設** 主柱穴がある。
- 主柱穴** 床面において2基の柱穴を検出した。本来は4基で上屋を支えていたと思われるが、検出できなかった。検出できた2基も掘り込みは浅く、削平を受けて消失した可能性が考えられる。
- P 1は掘り方17cm、床面からの深さ8cm、P 2は掘り方30cm、床面からの深さ14cmである。柱穴間距離は2.4mである。
- 出土土器** 当住居跡から出土した土器は少なく、小片が目立つ。このため、図化できたのは壺2個体に限られる。
- 壺** 広口壺と底部を図化した。広口壺は、口縁端部を強い横ナデ調整によりやや下方につまみだす。頸部内面はヘラ磨きもしくはヘラナデ調整、頸部外表面は横ナデ調整により仕上げられている。また体部内面にはユビオサエの痕跡がわずかに認められる。底部は、内外面をナデ調整により仕上げられている。
- 時期** 出土土器が限られているため、時期の特定は困難であるが、弥生時代後期中葉を中心とした時期と考えられる。



第94図 SH29出土土器

SH30

- 検出状況** 調査区北に位置する。SH29の北に接した状態で検出された。SH31とは重なり合っており、先行して構築された住居である。南壁中央部から中央土坑にかけて擾乱を受けている。
- 形状と規模** 平面は隅円方形を呈する。規模は南北4.9m、東西5.9mである。検出面からの深さ40cm、床面の標高は30.89mである。
- 付属施設** 主柱穴・中央土坑・周壁溝・高床部がある。
- 主柱穴** 検出したピットのうち、主柱穴と判断したのは2基である。本来は4基と考えられるが検出できなかった。P1は掘り方40cm、床面からの深さ27cm、P2は掘り方35cm、床面からの深さ35cmである。柱穴間距離は2.2mである。
- 中央土坑** 半分は擾乱を受けて消失している。直径60cmほどの円形の土坑で、掘り方の断面形は皿状を呈する。床面からの深さ18cmを測る。
- 周壁溝** 外壁沿いと、床面上高床部壁沿いで検出された。



第95図 SH30

床面のものは西辺および南東隅などで断続的に認められた。幅20~30cm、床面からの深さ6cmほどである。

外縁沿いでは西辺から南辺、東辺の一部にかけて検出された。幅15~30cm、高床面からの深さ10cmである。

高床部 東西壁に沿って造られている。西側で幅85cm、東側で幅140cmを測る。床面との比高17cm、高床面の標高は31.06mである。

出土遺物 土器と石器が出土している。

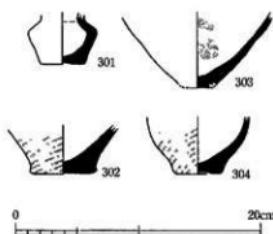
土器 壺・甕・鉢の各器種が出土している。

壺 残存高4.2cm、底径3.4cmのミニチュア土器1個体である。頸部以下、ほぼ完存する。内外面をユビナデおよびナデ調整により仕上げられている。

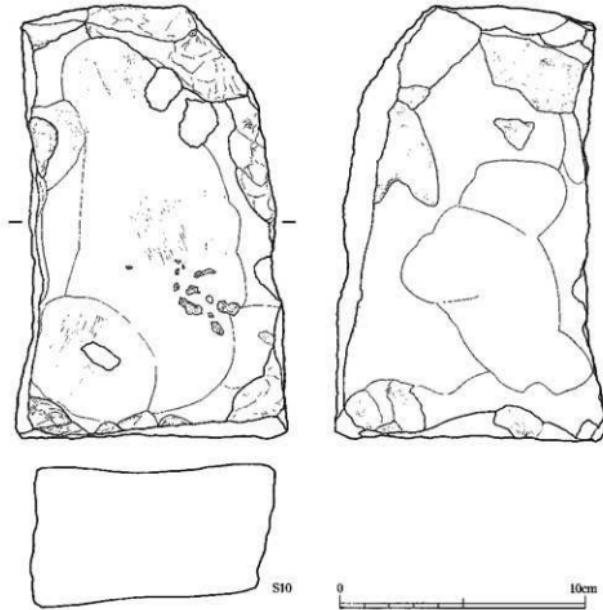
鉢 2個体(302・303)図化したが、いずれも底部片である。303は、外面をナデ調整、内面をハケ調整により仕上げられている。

石器 S10の1個体である。内面はナデ調整により仕上げられている。

S10は砥石である。形態はほぼ直方体で作業面は2主面の2面である。粒の粗い石材を利



第96図 SH30出土土器



第97図 SH30出土石器

用しており、粗砥として使用していた可能性が高い。表面には一部強い敲打痕の広がる部分が認められ、且立てを行ったものかもしれない。使用痕は弱い線条痕が観察される。その方向および稜線の形成状況から表面については主に2方向の運動方向が考えられる。裏面についても線条痕ははっきりとは観察されないが、稜線の形成状況から複数面の運動方向が考えられる。石材は凝灰質砂岩である。

現存値で長さ177mm、幅110.5mm、厚さ51~57mm、重さ1969gである。

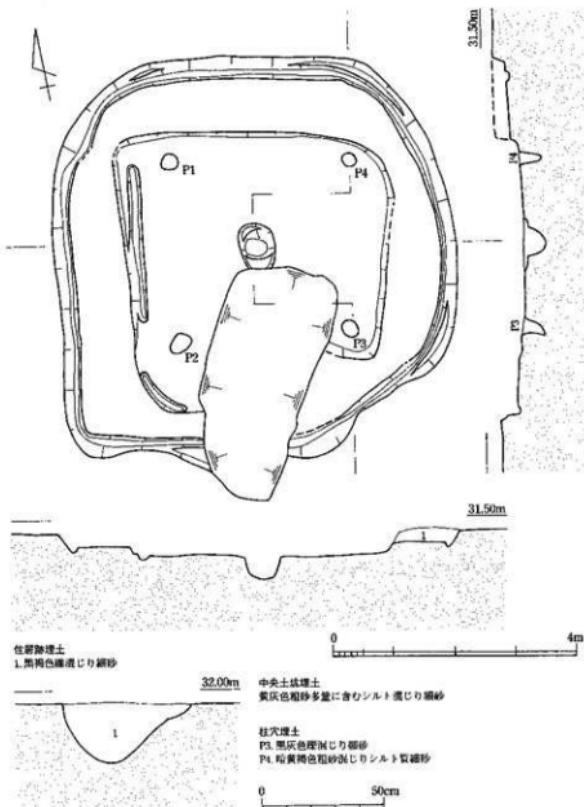
時期

出土上器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。

SH31

検出状況

調査区北に位置する。SH29の北に接した状態で検出された。SH30とは重なり合っており、SH30をもとに建て替えた住居と考えられる。南壁中央部から中央土坑にかけて攪乱を



第98図 SH31

受けている。

形状と規模 平面は橢円方形を呈する。規模は南北6.6m、東西6.5mである。検出面からの深さ38cm、床面の標高は30.89mである。

付属施設 主柱穴・中央土坑・周壁溝・高床部がある。

主柱穴 4基検出しており、床面の四隅、高床壁際に配置されている。P 1は掘り方26cm、床面からの深さ48cm、P 2は掘り方28cm、床面からの深さ42cm、P 3は掘り方25cm、床面からの深さ38cm、P 4は掘り方22cm、床面からの深さ38cmである。柱穴間距離は、P 1-2間で2.9m、P 2-3間で2.8m、P 3-4間で2.8m、P 4-1間で3.0m、平均主柱穴間距離は2.86mである。

中央土坑 南端の一部は擾乱を受け消している。45×60cmほどの橢円形の土坑である。掘り方の断面形は南北に弱いテラスを持つが全体的には楕形を呈する。床面からの深さ35cmを測る。

周壁溝 外壁沿いと、床面上・高床部壁沿いで検出された。床面のものは西辺で断続的に認められた。幅20~30cm、床面からの深さ6cmほどである。外壁沿いでは一部擾乱に切られるものほぼ全周する。幅15~30cm、高床面からの深さ10cmである。

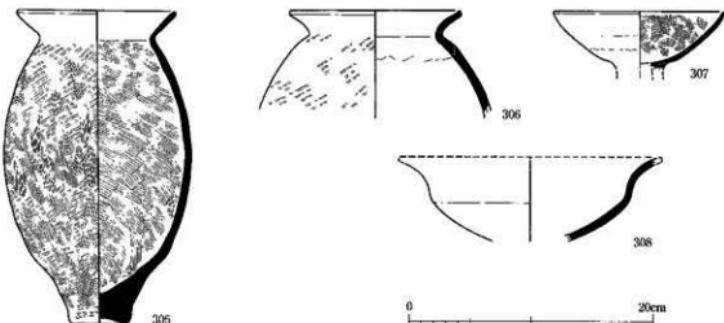
高床部 4辺に沿って検出した。幅は85~89cmで、床面との比高15cm、高床面の標高は30.89mである。

出土土器 瓢と高环が出土している。いずれも、上層からの出土である。

瓢 2個体図化している。いずれもV様式系の瓢である。305は、体部外縁をタタキ整形後部分的なハケ調整、内面をハケ調整により仕上げられている。口径・体部最大径に対して器高が高い傾向にある。306は、体部内面をナデ調整により仕上げられている。

高环 2個体図化している。308は有稜高环である。口縁部を欠く。口縁部内外面を横ナデ調整、环部内面をヘラ磨きにより仕上げられている。ただし、全体的に摩滅が著しく、ヘラ磨きの単位は観察できない。また、环部外縁の調整も観察できない。307は、楕形高环である。外面はナデ調整、内面はハケ調整により仕上げられている。

時期 床面直上から出土した土器がないため、当住居跡の時期を特定することはできない。ただし、上層から出土した土器から判断して、弥生時代後期後半がその下限と考えられる。



第99図 SH31出土土器

SH32

検出状況 調査区北西端に位置する。調査区が張り出したように伸びた箇所で狭くなっていることから、西半部および南半部は調査区外へと伸びている。SH38・SK14と重なっているが、明確な切り合い関係は把握できていない。

形状と規模 平面は隅円方形を呈する。規模は南北6.4m、東西5.0mである。検出面からの深さ36cm、床面の標高は30.92mである。

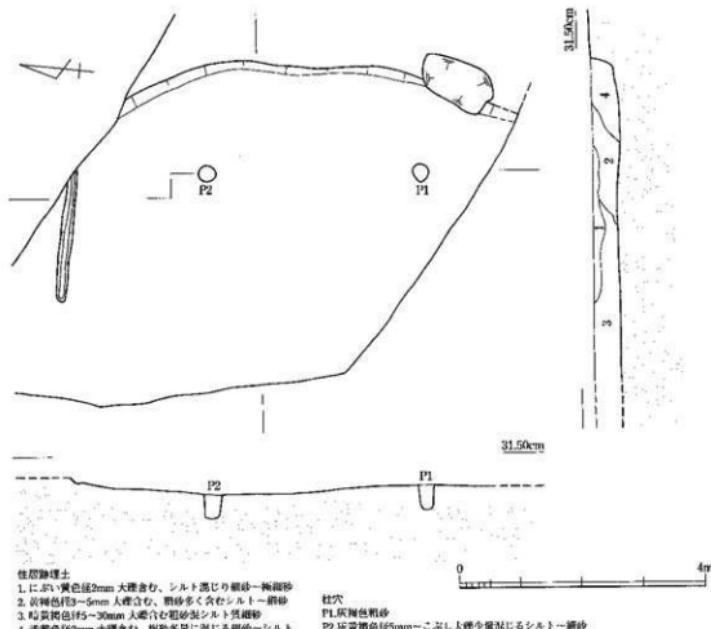
付属施設 主柱穴

主柱穴 検出した柱穴のうち主柱穴と考えられるのは2箇である。P1は掘り方25cm、床面からの深さ30cm、P2は掘り方25cm、床面からの深さ30cmである。柱穴間距離は、P1-2間で3.5mである。

周壁溝 北壁沿いの一部で検出した。幅15~18cm、床面からの深さ2cmである。

出土土器 壺・甕・鉢・高杯が出土している。いずれも上層からの出土である。

壺 広口壺と底部片が出土している。広口壺は、口縁部内外面を構ナテ調整、頸部内面をナテとヘラ磨きにより仕上げられている。頸部外面は、摩滅のため観察できない。底部の310と311は、いずれも丸底化の傾向にある。310の外面は、タタキ整形後ヘラ磨き、内面はナテ調整により仕上げられている。311は、内外面ともナテ調整により仕上げられている。



第100図 SH32

鑑 4個体図化したが、いずれもV様式系甕の底部片である。内面は、314のハケ調整を除いては、いずれもナデ調整により仕上げられている。

鉢 7個体図化した。

316は、外面をタタキ整形、内面をヘラ磨きにより仕上げられている。317は、有孔鉢に分類される鉢で、底部中央部に径4~6mmの穿孔が焼成前に施されている。内面はハケ調整、外面はタタキ整形により仕上げられている。

318は小型鉢の底部で、内面をハケ調整後、内外面をナデ調整により仕上げられている。

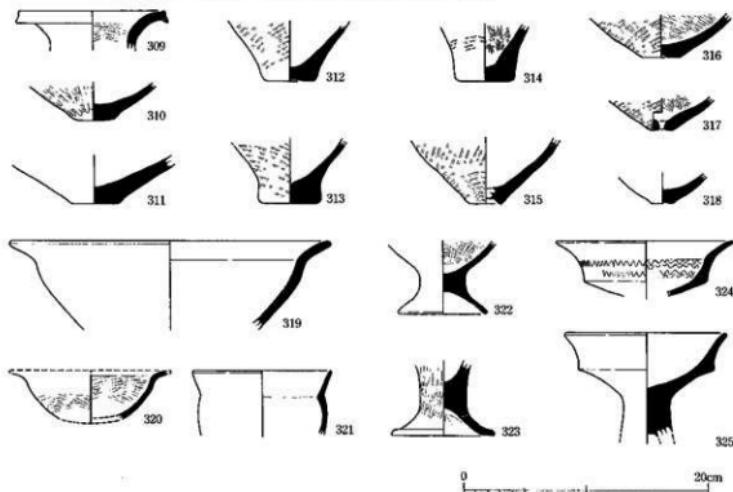
319は人型鉢である。全般的に摩滅が著しく、わずかに体部内面にヘラ磨きの痕跡が観察できるにすぎない。320は、319の小型のタイプである。口縁部内外面を横ナデ調整、体部内外面をヘラ磨きにより仕上げられている。

321は、小型丸底鉢に分類されるものである。口縁部内面は横ナデ調整、体部内面はナデ調整により仕上げられている。外面については摩滅のため観察できない。

322は台付鉢の底部である。体部内面はハケ調整後横方向から縦方向のヘラ磨きにより、脚部は横ナデ調整により仕上げられている。体部外表面は、摩滅のため明確にできない。

高杯 3個体図化した。323は、胸部のみ残存する。外面をヘラ磨きにより仕上げられている。324は装飾有板高杯である。全般的に摩滅が著しく、わずかに口縁部内外面に横描波状文が観察できる。2単位からなるが、詳細は不明である。325は、全般的に口径が小さいタイプの高杯である。内外面とも摩滅のため調整方法を観察できない。

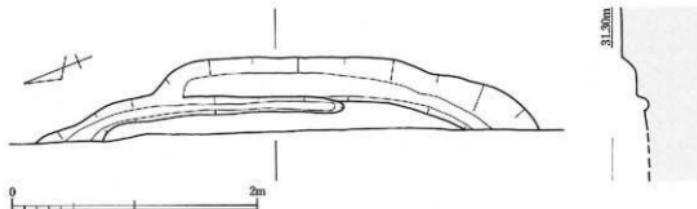
時期 出土土器から判断して、弥生時代後期末と考えられる。



第101図 SH32出土土器

SH33

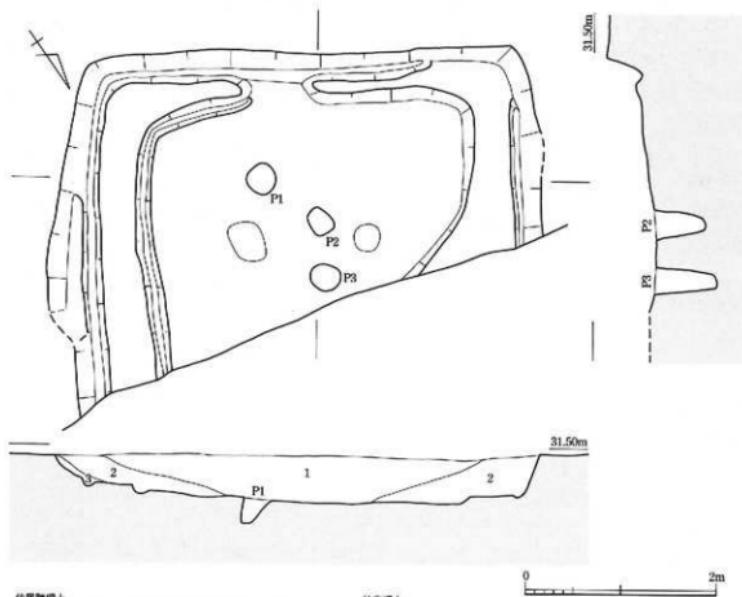
- 検出状況** 調査区北西に位置する。張り出し部を含むごく一部が検出されただけで、大半は調査区外である。
- 形状と規模** 平面は橢円方形もしくは方形を呈すると思われる。全容を把握できないが、検出したのは南北4.0m、東西50cmの範囲である。検出面からの深さ16cm、床面の標高は31.12mである。
- 付属施設** 周壁溝・張り出し部がある。
- 周壁溝** 外壁沿いの北半で検出した。幅12~18cm、床面から3cm、張り出し部床面から8cmの深さである。
- 張り出し部** 東壁中央に取り付くものと思われる。幅20cm、長さ1.95m、床面の標高は31.17mである。
- 出土土器** 小片がわずかに出土しているが、図化できるものは出土していない。
- 時期** 山土土器から時期の特定は困難であるが、弥生時代後期後半を中心とした時期と考えられる。



第102図 SH33

SH34

- 検出状況** 調査区北端に位置する。約半分が調査区外北へと延びる。
- 形状と規模** 平面は方形を呈する。規模は南北3.7m以上、東西5.1mである。検出面からの深さ16cm、床面の標高は31.12mである。
- 付属施設** 主柱穴・周壁溝・高床部・張り出し部がある。
- 主柱穴** 5基検出しているが、床面中央部付近に集中しており、本米の柱数や配置状況を推定したい。P 1は掘り方30cm、床面からの深さ23cm、P 2は掘り方29cm、床面からの深さ50cm、P 3は掘り方20cm、床面からの深さ60cm、P 4は掘り方35cm、床面からの深さ20cm、P 5は掘り方22cm、床面からの深さ16cmである。
- 周壁溝** 床面縁辺高床部の壁に沿うものと、外壁に沿うものが検出された。床面のものは東半部で認められた。規模は幅18~24cm、床面からの深さ1~8cm程度である。外壁のものは南北の隅で途切れるがあとは全周している。幅20~27cm、床面からの深さ4~7cmの規模である。
- 高床部** 基本的に東西2辺に沿って構築されているようである。南辺に沿う部分は東西両側から突出して伸びだしており、且つ幅が非常に狭くいわゆる高床部としての機能を有するものか疑わしい。全体に遺存状況は悪く、現状では床面との比高差がわずか4cmである。また、西側については壁面の通りが不整である。幅は東側で51cm、西側で45cmを測る。高床面の標高は



第103図 SH34

31.09mである。

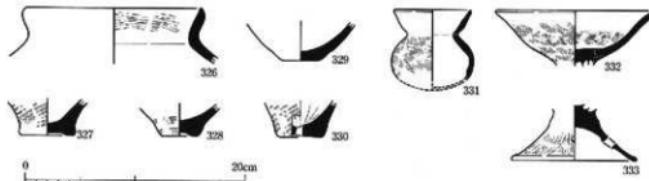
張り出し部 東壁中央に取り付く。幅24cm、長さ1.9m、床面の標高は31.19mである。

出土遺物 上器と石器が出土している。

土器 瓢・壺・鉢・高杯が出土している。333の鉢が下層から出土している以外は、埋土上層から出土している。

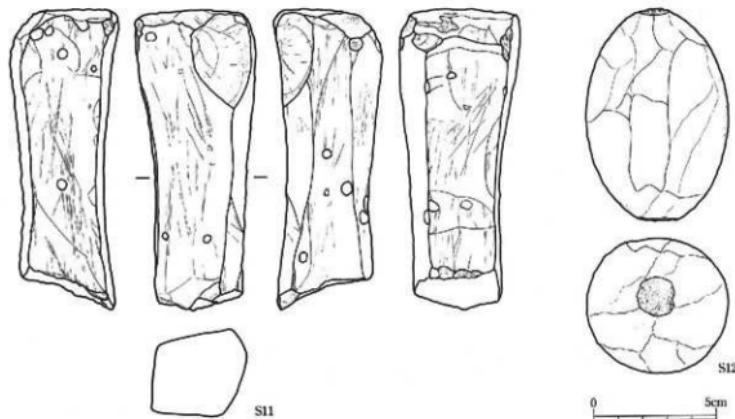
壺 短頸壺(326)と小型丸底壺(331)が出土している。326は、口縁部内面をヘラ磨きにより仕上げられている。他は摩滅のため調整は観察できない。331は、口縁部内外面を横ナデ調整、体部外表面を粗いハケ調整、体部内面をヘラナデ調整により仕上げられている。

甕 2個体図化したが、いずれもV様式系甕の底部片である。



第104図 SH34出土土器

- 鉢** 3個体図化した。329は、形態的特徴から鉢と判断した。内外面ともナデ調整により仕上げられている。330は有孔鉢の底部である。底部中央部に径7mmの孔が焼成前に穿たれている。333は、台付鉢の底部と考えている。外面はヘラ磨き、内面はナデ調整、脚下端部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。脚部中位に径9mmの穴が3箇所に穿たれている。焼成前の穿孔である。
- 高坏** 332の1個体を図化した。有段高坏に分類されるものであるが、体部と底部の変換部は緩やかである。体部から口縁部にかけての内外面をハケ調整後、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。内面に対して外面の方が粗いハケを使用している。全体的にていねいな仕上げである。
- 石器** S11は砥石である。下端は欠失している。表正面から右側面および右側面から裏正面にかけての角の部分を面取りして砥面を形成する。このため形態は8面体を呈する。このうち、作業面として使用したのは端面を除く6面である。器表には径2~3mm程度の円孔がみられるが、人為的なものではない。使用痕は各面とも長軸方向に走向する線条痕が多い。現存値



第105図 SH34出土石器

で長さ91.9mm、幅19.9mm～37.2mm、厚さ19.5mm～35.2mm、重さ131.2gである。石材は凝灰岩である。

S12は敲石である。梢円球形の鑑を利用しており、両端部に径16mmほどの範囲で敲打面が形成されている。また、体部の一部には $16 \times 35\text{mm}$ ほどのほぼ長方形を呈する範囲で摩滅の広がりが観察された。この摩滅面は平坦に広がることから、磨石として機能したことがわかる。

現存値で長さ86.5mm、幅58.5mm、厚さ54.7mm、重さ340.0gである。石材は細粒花崗岩である。

S13は楔形石器である。対向する2辺に微細な階段状剥離が観察される。1側辺は剪断面である。現存値で長さ54.6mm、幅44.9mm、厚さ14.2mm、重さ24.1gである。石材はサヌカイトである。

時期 出土土器から判断して、古墳時代初頭と考えられる。

SH35

検出状況 調査区北に位置する。南西隅を後世の風倒木によって、また床面の北西部を現代の攢乱によって切られている。

形状と規模 平面は梢円方形を呈する。規模は南北5.5m、東西5.8mである。検出面からの深さ60cm、床面の標高は30.76mである。

付属施設 主柱穴・中央土坑・周壁溝・高床部がある。

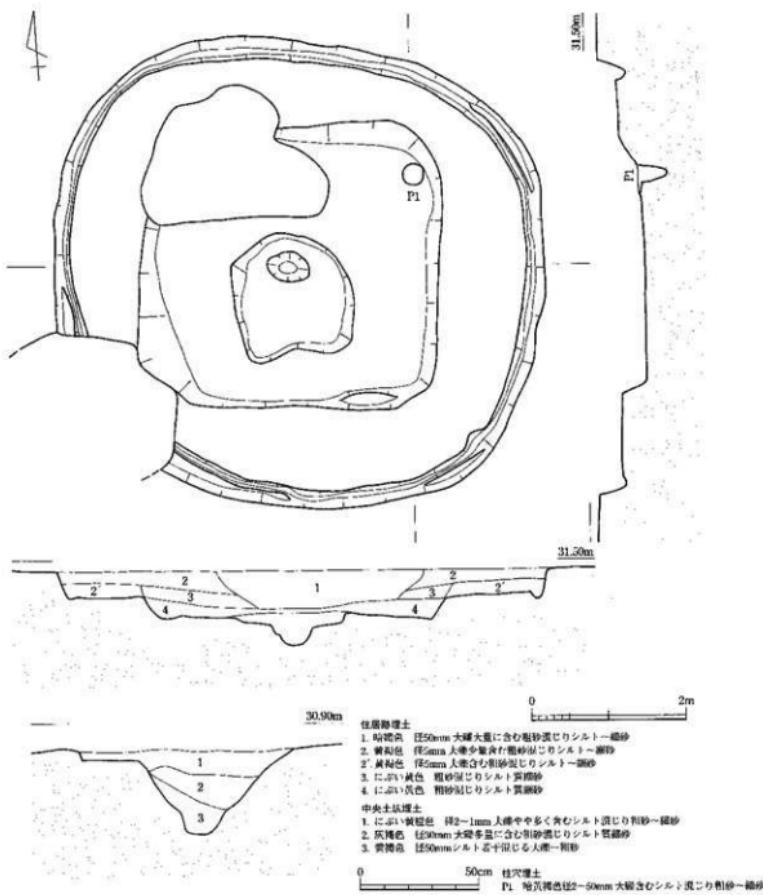
主柱穴 検出できたピットは1基のみで、床面北東隅に位置する。本来は4隅に配置されていたものと考えられる。

P1は掘り方22cm、床面からの深さ40cmである。

中央土坑 2段に掘って構築している。上段は4～13cm掘り下げており、底面は中心部に向かって緩やかに下がる。現状ではやや不整であるが平面プランは一辺1.5m程度の方形を意識していたと思われる。下段は $20 \times 30\text{cm}$ の梢円形を呈し、上段底面から約23cm掘り下げている。埋土は砂疊を多く含むが、炭などの有機質はほとんど見られない。

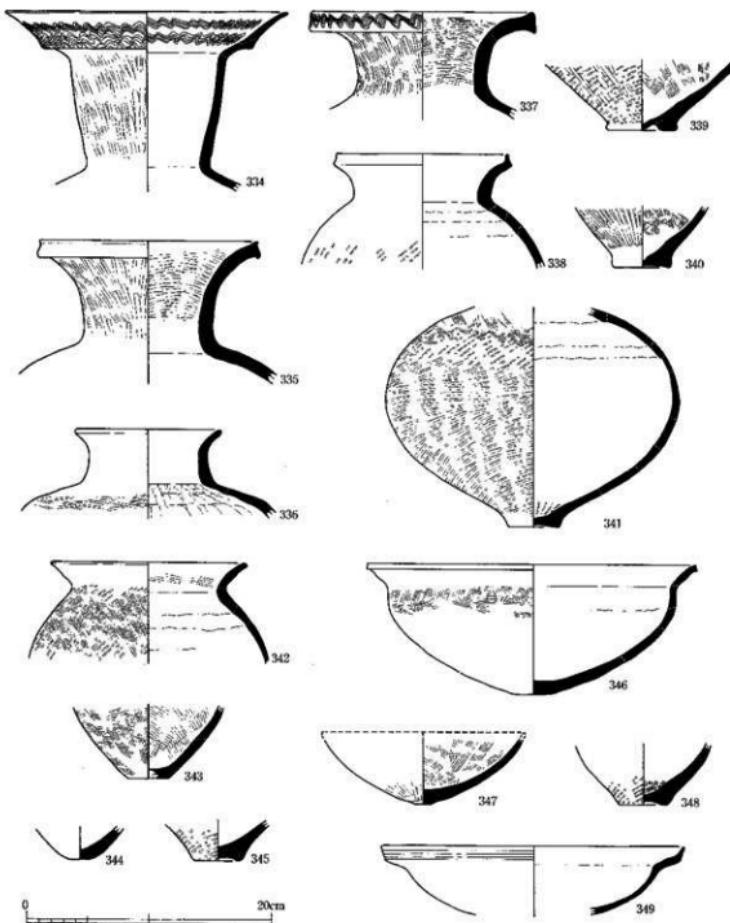


第106図 SH35の検出



第107図 SH35

- 周壁溝** 外縁沿いにのみ認められた。規模は幅19~25cm、床面からの深さ3~8cmである。
- 高床部** 4辺に沿って構築されている。幅は88~115cmで、床面との比高差23cm、高床面の標高は30.99mである。
- 出土石器** 土器と石器が出上している。
- 土器** 壺・甕・鉢・高杯が出土している。これらの土器はいずれも、当住居跡の廃絶後に一括投棄された土器である。特に、334~339は住居跡中央部で集中して出上している。



第108図 SH35出土土器

壹

複合口縁壺・広口壺・体部・底部が出土している。

複合口縁壺は334の1個体である。頸部が長く広口長頸壺にちかい。口縁部内外面には2帯の櫛描波状文が描かれている。両面とも櫛描波状文の原体は同じで、5条が1セットをなしている。外側の櫛描波状文については、上段→下段の順に施されている。頸部は、外側をていねいなヘラ磨き、内面をていねいなナデ調整により仕上げられている。また、頸部と体部の境の外側は強い横ナデ調整、体部内面はユビオサエとナデ調整により仕上げられている。

広口壺は4個体図化した。335と337はほぼ同タイプで、口頭部内外面はヘラ磨きにより仕

上げられている。ただし、335は口縁部が横ナデ調整により仕上げられているのに対して、337は口縁部を横ナデ調整後外端面に6条からなる梯状波状文が施かれている。

この他、336は、口縁部内外面を横ナデ調整、体部外面をヘラ磨き、体部内面をユビオサエにより仕上げられている。338は、体部外面をタタキ整形後、口縁部内外面を横ナデ調整、体部外面を板ナデ調整、体部内面をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。

底部は339と340の2個体を図化した。339は外面をタタキ整形後ヘラ磨き、340も外面をヘラ磨きにより仕上げられている。

体部は341の1個体である。外面をタタキ整形後肩部をハケ調整、内面をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。

甕

口縁部片（342）と体部片（343～345）を図化した。このなかで344については、形態および調整方法から判断して、鉢の可能性も考えられる。他の甕については、いずれもV様式系の甕である。

鉢

大型鉢（346）と小型鉢（347・348）が出土している。348については、形態的特徴から鉢と判断した。

大型鉢は、口縁部内外面を横ナデ調整、体部外面上半部をハケ調整、以下をヘラ磨きもしくはヘラナデ調整により仕上げられている。底部はほぼ丸底を呈する。

小型鉢の347は、外面をヘラ磨き、内面をハケ調整により仕上げられている。底部はわずかに平底を呈する。外面をタタキ整形後ナデ調整、内面をナデ調整により仕上げられている。

高坏

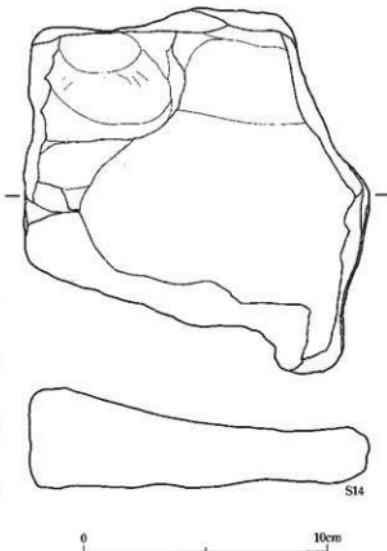
349の1個体を図化した。丹波・丹後系の特徴を示す高坏で、口縁端部外面には3条の擬凹線が施されている。口縁部から体部にかけては、剥離のため調整方法は観察できない。

石器

S14は砥石あるいは石皿と考えられる。右端部、下半部を欠失している。形態はおよそ直方体を呈する。粗い砂粒からなるもろい石材で、風化も激しく、器表面の遺存状況は悪い。表正面は使用のため窪んでいる。現存値で長さ150mm、幅142mm、厚さ21.3～40.9mm、重さ591.0gである。石材は白色凝灰岩である。

時期

出土上器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。



第109図 SH35出土石器

SH36

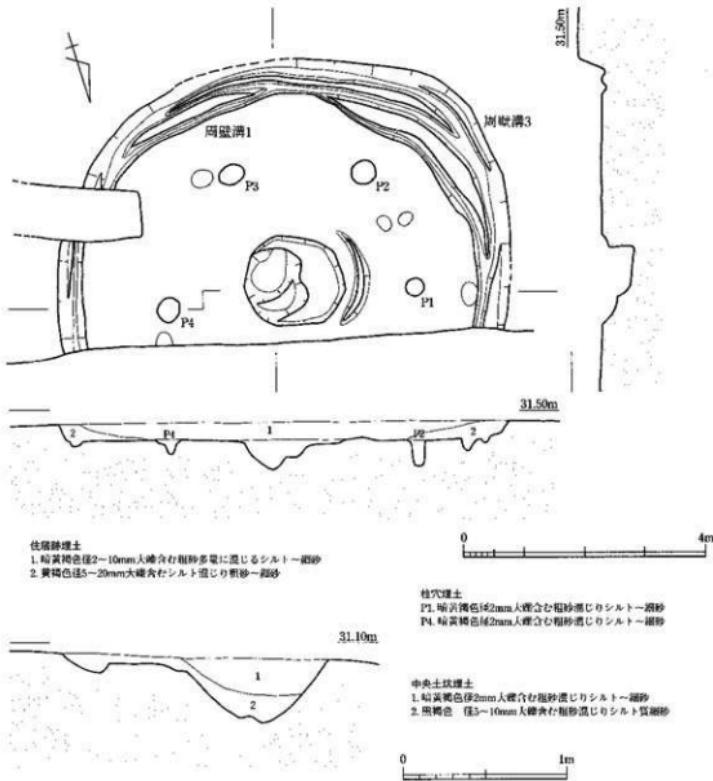
検出状況 調査区北端に位置する。約半分が調査区外北へと延びる。周壁溝の検出状況から2度の建て替えが行われたものと考えられる。

形状と規模 平面形は円形ないしは隅円方形を呈する。規模は南北4.1m以上、東西6.4mである。検出面からの深さ30cm、床面の標高は31.02mである。

付属施設 主柱穴・中央土坑・周壁溝がある。

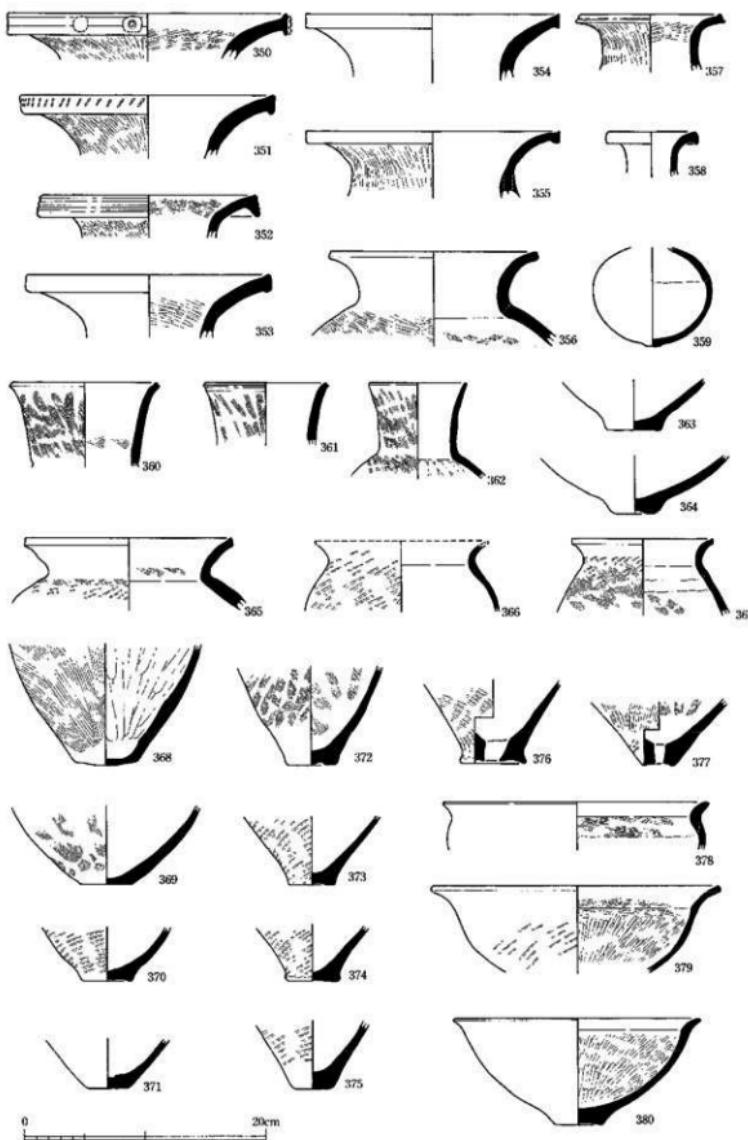
主柱穴 床面において9基の柱穴を検出した。このうち主柱穴と考えられるのは4基であるが、ほかのものについても柱の位置をずらすなど住居の改変に伴って掘られたものである可能性がある。本來の柱数は6本に復元できる。

P1は掘り方30cm、床面からの深さ44cm、P2は掘り方40cm、柱底直径20cm、床面からの深さ34cm、P3は掘り方40cm、床面からの深さ40cm、P4は掘り方40cm、床面からの深さ22cmである。柱穴間距離は、P1-2間で2.1m、P2-3間で2.1m、P3-4間で2.5m、平

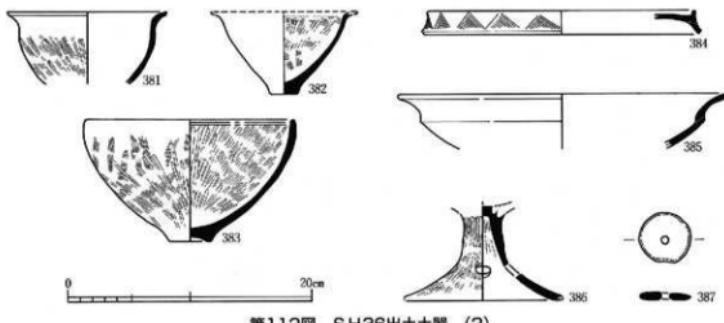


第110図 SH36

	均主柱穴間距離は2.22mである。
中央土坑	2段に掘って構築している。東側に弧状に1.5mほど巡る周堤を持っている。この周堤は床面からの比高差1.5~2.5cm、最大幅20cmの規模である。
	上段は東半部にテラス状に形成された部分で、床面から5cm掘り下げており底面はほぼ水平である。平面プランは南北1.45m、東西1.65mのやいびつな凹形を呈する。下段は南北1.2m、東西85cmのいびつな円形を呈し、上段底面から36.5cm掘り下げている。また土坑の両半には、上段底面からの比高差17.5cm、最大幅20cmほどのテラスが設けてある。
周壁溝	3条の溝が検出された。周壁溝2・3が隅円方形を呈するのに対し、周壁溝1は円形に巡る。このことは住居の拡張に伴って平面プランが変化したことを示唆するものと捉えられる。周壁溝1は幅7~25cm、床面からの深さ3~9cm、周壁溝2は幅15~22cm、床面からの深さ3~12cm、周壁溝3は幅25~40cm、床面からの深さ7cmである。
出土遺物	土器と石器が出土している。
土器	比較的多くの上器が出上している。図化した上器のなかでは、中央土坑内から出土した366の1個体を除き、上層からの出土である。これらの土器は、出土層位から判断して、当住居跡廃絶後に投棄されたものと考えられる。器種としては、壺・甕・鉢・高杯・端台・紡錘車が出土している。
壺	広口壺・直口壺・体部・底部が出土している。 広口壺は、350~358の9個体を図化した。これらの土器は、摩滅の著しい353・354・358および横ナデ調整により仕上げられている356を除いては、口頸部内外面をヘラ磨きにより仕上げられている。口縁部外面については、350は竹管円形浮文が貼り付けられ、351は列点文が施され、352は3条の擬円線が施され、357は弱い1条（部分的に2条）の擬回線が施されている。他の広口壺については、横ナデ調整により仕上げられている。なお、350の竹管円形浮文については、1個とその剥離痕が1箇所残存するが、その状況から2個が一対となって貼り付けられていたものと考えられる。
	直口壺は3個体である。360は口頸部外面を横ナデ調整後ヘケ調整、内面をハケ原体によるナデ調整により仕上げられている。361は、口頸部外面を横ナデ調整後暗文状のヘラ磨き、内面をナデ調整により仕上げられている。362は、口頸部内外面を横ナデ調整後、外側をヘケ調整後暗文状のヘラ磨き、内面をナデ調整により仕上げられている。
	体部は359の1個体である。ほぼ球形を呈し、底部はわずかに突出し、平底をなす。体部内面下半をナデ調整により仕上げられている以外は、摩滅のため観察できない。
底部	底部は、363・364の2個体図化したが、両個体とも摩滅のため調整は観察できない。
甕	完存もしくは完形に復元できる土器ではなく、口縁部片と底部片を11個体図化した。いずれも、V様式系甕に分類されるものである。このなかで、368の内面は縦方向（下→上）の粗いヘラ削りにより仕上げられている。他の甕の内面はハケ調整もしくはナデ調整により仕上げられている。また、底部は明確に突出した平底形態をとるものは認められず、丸底化の傾向にある。
鉢	有孔鉢・中型鉢が出土している。



第111図 SH36出土土器 (1)



第112図 SH36出土土器 (2)

有孔鉢は376・377の2個体を図化した。いずれもV様式系壺を基本としている。376は径1.2 cm～1.9cmの、377は径7～9mmの孔が焼成前に施されている。

中型鉢はバリエーションに富む。378は、口頭部内外面を横ナデ調整、体部内面上半をハケ調整、以下をナデ調整により仕上げられている。379は、口縁部内外面を横ナデ調整、体部内面をヘラ磨き、体部外面をタキ整形後ナデもしくはヘラ磨きにより仕上げられている。380も口縁部内外面を横ナデ調整、体部外面をナデ調整、体部内面をヘラ磨きにより仕上げられている。381は逆に、内面をナデ調整、外面をヘラ磨きにより仕上げられている。382は、内面をハケ調整後ヘラ磨き、外面をユビオサエ後ナデ調整により仕上げられている。383は、外面をハケ調整後内外面をヘラ磨きにより仕上げられている。ただし外面のヘラ磨きについては部分的である。

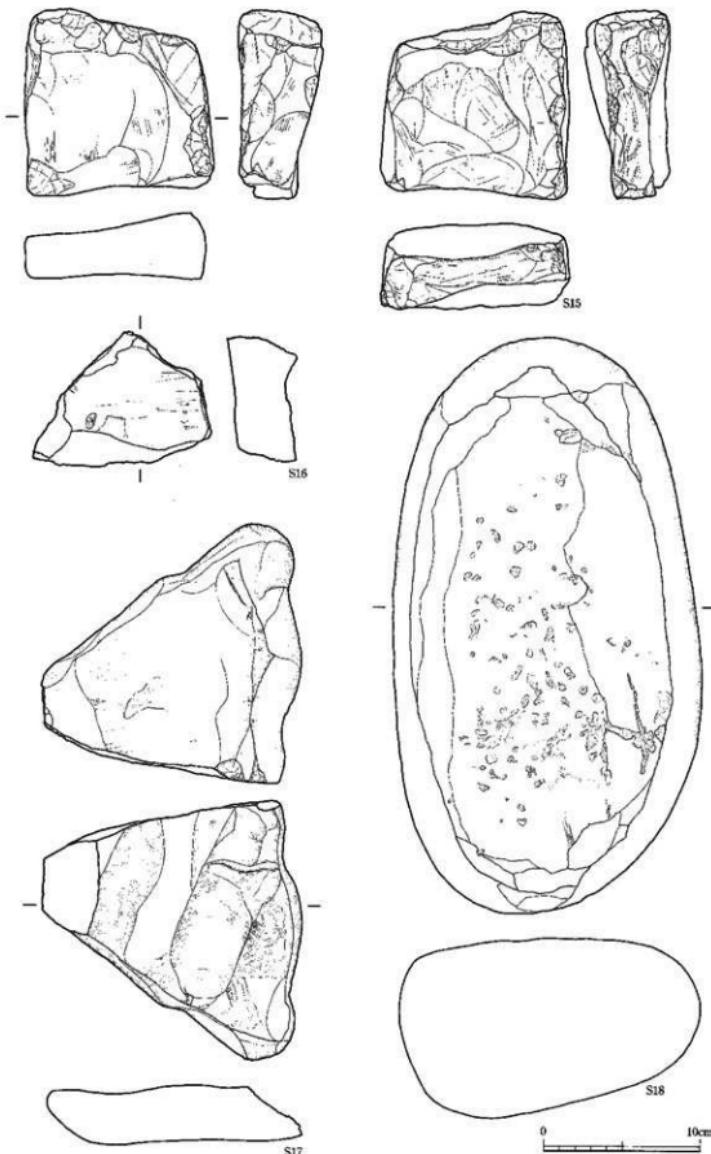
高杯 有稜高杯の口縁部（385）と脚部（386）を図化した。385は口縁部外面が摩滅のため観察できない以外はヘラ磨きにより仕上げられている。ただし、摩滅気味であることから、単位は不明瞭である。脚部は、外面をヘラ磨き、内面をハケ調整後横ナデ調整により仕上げられている。脚部中位に径13mmの透孔が4箇所に焼成前に穿たれている。

器台 384の1個体である。口縁端部を大きく拡張し、外端面に経齒文を施している。

筋鉢車 387の1個体である。4.0×4.2cmの円盤状を呈し、中央部に径6mmの孔が穿たれている。厚さは7mmである。



第113図 S18出土状況



第114図 SH36出土石器

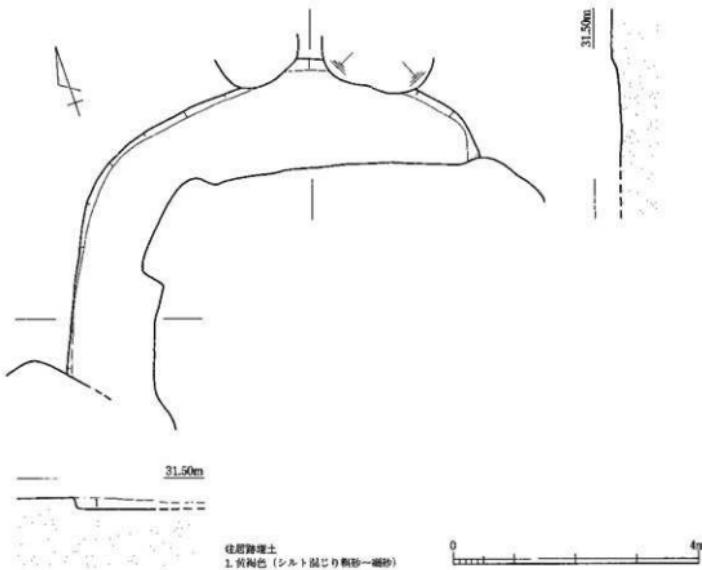
石器 S 15は砾石である。形態は直方体を呈する。作業面は2主面、2側面、下端面の5面である。両側面、下端面など幅狭な面では長軸方向に線条痕が発達している。表主面では主となる線条痕は縦方向に発達する。裏主面においては研ぎ減りによって形成された稜線が複雑に発達しており、作業の運動方向を単純化して捉えることができない。現存値で長さ119.3mm、幅120mm、厚さ17~53.8mm、重さ878.2gである。石材は細粒花崗岩である。

S 16は砾石である。破片のため、器面が遺存しているのは1面だけであった。使用痕は線条痕が観察される。現存値で長さ113mm、幅85.5mm、厚さ45mm、重さ429.7gである。石材は凝灰質砂岩である。

S 17は砾石である。不定形の転跡を利用したものか。下半部は欠失している。作業面は表裏主面の2面である。表主面においては線条痕は認められないが、使用により緩やかに瘤んでいる。裏主面では幅広の浅い溝状の産みが2条認められた。現存値で長さ165.3mm、幅165mm、厚さ33mm、重さ1282.8gである。石材は砂岩である。

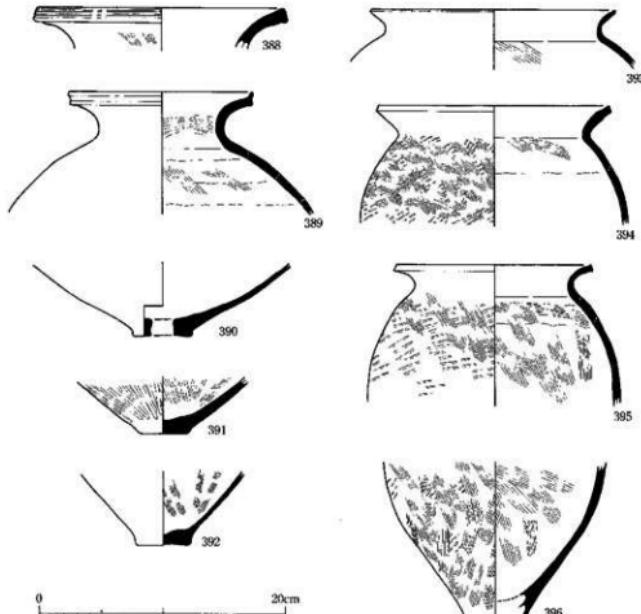
S 18は台石である。中央上坑内に廻棄されていた。表主面には細かい線条痕が観察される。明確な作業面はこの1面だけである。石材は凝灰質砂岩で、やや粗粒のものを用いており粗砾として使用したものと思われる。敲打痕がほぼ全面にわたって認められるが、これは摩滅した面を再び立てた可能性が考えられる。現存値で長さ363.7mm、幅197.0mm、厚さ121.5mm、重さ12573gである。

時期 出土十器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。



SH37

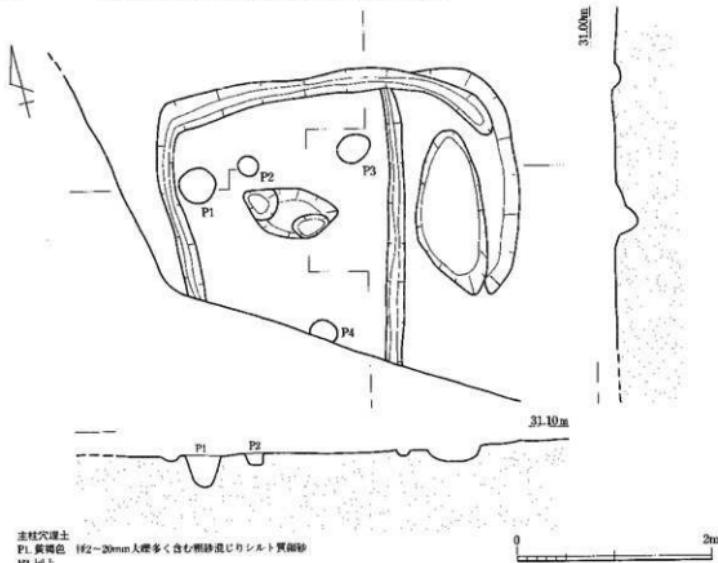
- 検出状況** 調査区北に位置する。SH28と重複するため南東部の大半が失われている。しかし、その尤後関係については不明である。これは床面の標高が高いため強く削平を受けて当住居の埋土がほとんど残っていないため、SH28と重複する部分において埋土の岐別が困難であったからである。このため、付属施設はなにも検出されていない。
- 形状と規模** 平面は隅円方形を呈する。全容はわからないが規模は南北6.0m以上、東西6.8mに復元できる。検出面からの深さ10cm、床面の標高は31.13mである。
- 出土土器**
- 壺** 壺と甕が出土している。特に392・394・395の壺が北端部から一括で出土している。
 - 388** は外表面を横ナデ調整後、内面はヘラ磨き、外面はハケ調整により仕上げられている。ただし、摩滅のため磨きの単位は不明瞭である。口縁端部は3条の擬凹線が施されている。
 - 389** は、口縁部内外面を横ナデ調整後、頭部内面をヘラ磨きにより、体部内面は粗いハケ調整により仕上げられている。体部外面は摩滅のため観察できない。底部の390は、胎土・色調の特徴から389と同一個体の可能性が高い。底部中央に径1.8cmの穿孔が焼成前に施されている。391は、外面をヘラ磨き、内面をハケ調整により仕上げられている。
 - 393** は、5個体図化した。全てV様式系の壺である。体部内面は全てハケ調整により仕上げられ、外面は392のナデ調整を除き、タタキ整形後部分的にハケ調整により仕上げられている。
- 時期** 山土器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。



第116図 SH37出土土器

SH38

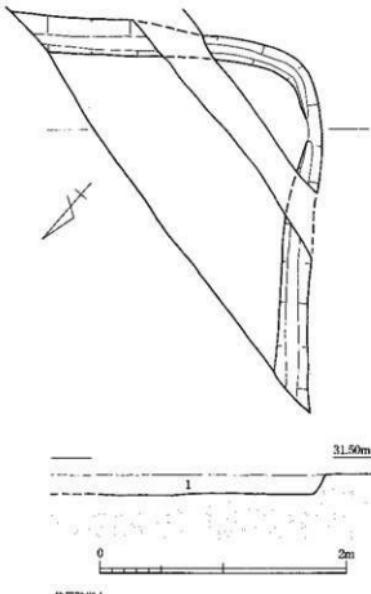
- 検出状況** 調査区西北端に位置する。両半部は調査区外へと延びている。SH32と重なっているが、明確な切り合い関係は把握できていない。
- 形状と規模** 平面は隅円方形を呈する。規模は南北2.8m以上、東西3.3mである。検出面からの深さ6cm、床面の標高は30.93mである。
- 付属施設** 主柱穴・土坑・周壁溝・溝がある。
- 主柱穴** 4基検出しているが、本来の柱数や配置状況を推定しがたい。
- P1は掘り方25cm、床面からの深さ27cm、P2は掘り方15cm、床面からの深さ10cm、P3は掘り方26cm、床面からの深さ10cm、P4は掘り方27cm、床面からの深さ10cmである。
- 屋内土坑** 2基検出している。うち1基はいわゆる中央土坑で床面の中央部に構築されている。残る1基は壁際に掘られたもので、その機能などについては不明である。
- 中央土坑** 東西1m、南北50cmの歪な楕円形様をなす。床面からの深さ10cmを測る。土坑内部両端に約25×35cmの楕円形を呈する柱穴状の落ち込みがあり、床面からの深さ20cmを測る。
- 土坑1** 東壁際に位置する。平面形は0.6×1.7mの楕円形を呈し、床面からの深さ10cmを測る。
- 周壁溝** 西側および北側の壁に沿って検出された。幅15~25cm、床面からの深さ7cmを測る。
- 溝** 北壁に取り付き、約80cm離れて東壁に平行する溝である。幅14~19cm、床面からの深さ5~8cmである。仕切溝と考えられる。
- 出土土器** 小片のみの出土で、図化できなかった。
- 時期** SH32との先後関係が不明なため、判断できない。



第117図 SH38

SH39

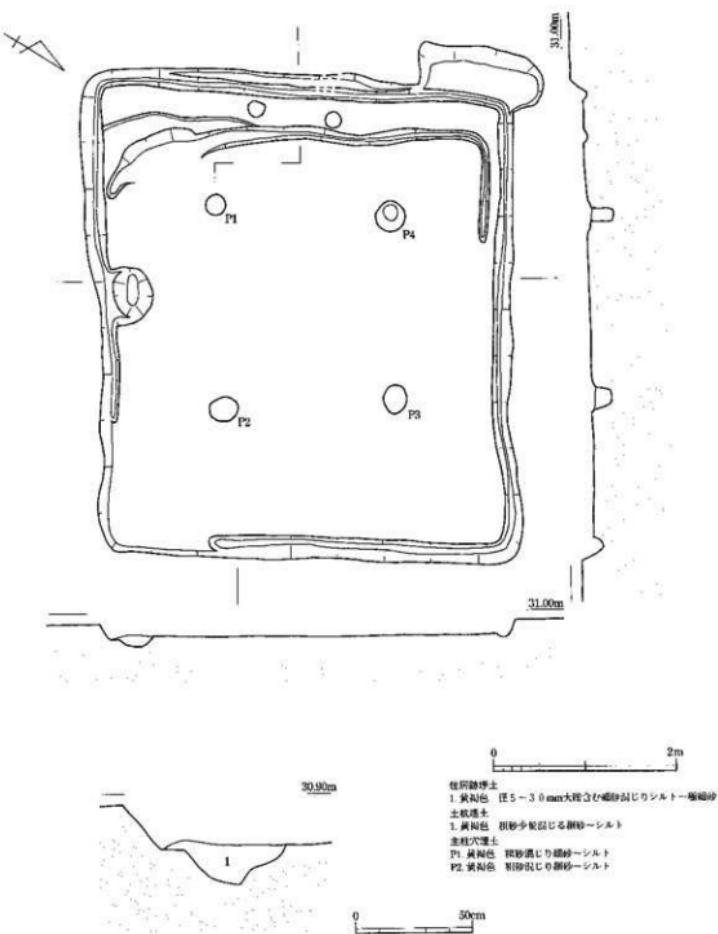
- 検出状況** 調査区北端に位置する。コーナー部分を検出した。大部分が調査区外北へと延びる。当初検出できた範囲がわずかであったためできる限り拡張して調査範囲を広げた。このため、当初の側溝掘削で破壊している箇所がある。
- 形状と規模** 平面は方形を呈する。全容がわからないが、規模は南北2.0m以上、東西2.6m以上である。検出面からの深さ17cm、床面の標高は31.22mである。
- 付属施設** 周壁溝がある。
- 周壁溝** 検出した範囲では全測する。規模は幅13~27cm、床面からの深さ2~5cmである。
- 出土土器** 小片のみの出土で、図化できる土器は出土していない。
- 時期** 出土した小片の土器から判断すると、弥生時代後期と考えられる。



第118図 SH39

SH40

- 検出状況** 調査区南端に位置する。周壁溝の検出状況から1度建て替えが行われたと思われる。
- 形状と規模** 平面は方形を呈する。規模は拡張前で $5.0 \times 4.9\text{m}$ 、拡張後で $5.0 \times 5.8\text{m}$ である。検出面からの深さ18cm、床面の標高は30.74mである。
- 付属施設** 主柱穴・土坑・周壁溝・張り出し部がある。
- 主柱穴** 7基検出している。このうち床面に方形に配された4基が主柱穴と考えられる。P1は掘

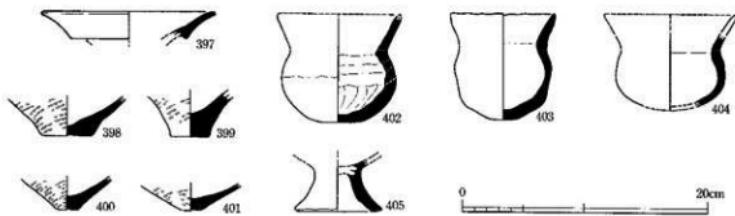


第119図 SH40

り方24cm、床面からの深さ30cm、P 2は掘り方32cm、床面からの深さ41cm、P 3は掘り方28cm、床面からの深さ26cm、P 4は掘り方37cm、柱痕直徑20cm、床面からの深さ35cmである。柱穴間距離は、P 1～2間で2.7m、P 2～3間で2.3m、P 3～4間で2.4m、P 4～1間で2.3m、平均主柱穴間距離は2.41mである。

西壁際中央部に住居の軸線を基軸にして対象に配された2基のピットが検出されている。その配置状況から例えれば入り口など、先に述べた4基と併存して何らかの機能を果たしたものと考えられる。P 5は掘り方21cm、床面からの深さ10cm、P 6は掘り方20cm、床面から

- の深さ15cmである。柱穴間距離は、P 1 - 2 側で1.1mである。
- 屋内土坑** 南壁際中央部に位置する。70×45cmの梢円形の土坑で、掘り方の断面形は楕円形を呈する。床面からの深さは20cmである。
- 周壁溝** 外壁に沿って断続的に検出された。南東隅で一部検出できない箇所がある。内側にある建て替え前の住居に伴うと考えられる溝は西側全域から北側へ屈曲して1mほどのところまで検出できた。南西の隅ではやや不整になって収束している。
- 規模は外側のもので幅15~26cm、床面からの深さ3~5cm、内側のもので幅8~24cm、床面からの深さ3~5cmである。
- 張り出し部** 西壁北端に取り付く。幅40cm、長さ1.4m、検出面からの深さ13cm、床面の標高30.79mである。
- 出土土器**
- 壺・甕・鉢・小型丸底壺の各器種が出土している。いずれも埋土上層から出土している。
 - 壺
複合口縁壺と底部片が出土している。
複合口縁壺(397)は、口縁部のみ残存する。内外面とも摩滅のため、調整方法は観察できない。底部片(398)は、わずかに平底をとどめる。内面はナデ調整により仕上げられている。
 - 甕
3個体図化したが、いずれもV様式系の甕である。内面はナデ調整により仕上げられている。
 - 鉢
台付鉢の底部1個体分が出土している。内外面ともナデ調整により仕上げられている。
 - 小型丸底壺
3個体図化した。各土器ともユビオサエとナデ調整により仕上げられている。このなかで403は、底部外面をハケ調整により仕上げられている。3個体とも粗い仕上げである。
- 時期** 小型丸底壺が出土していることから、古墳時代初頭と考えられる。

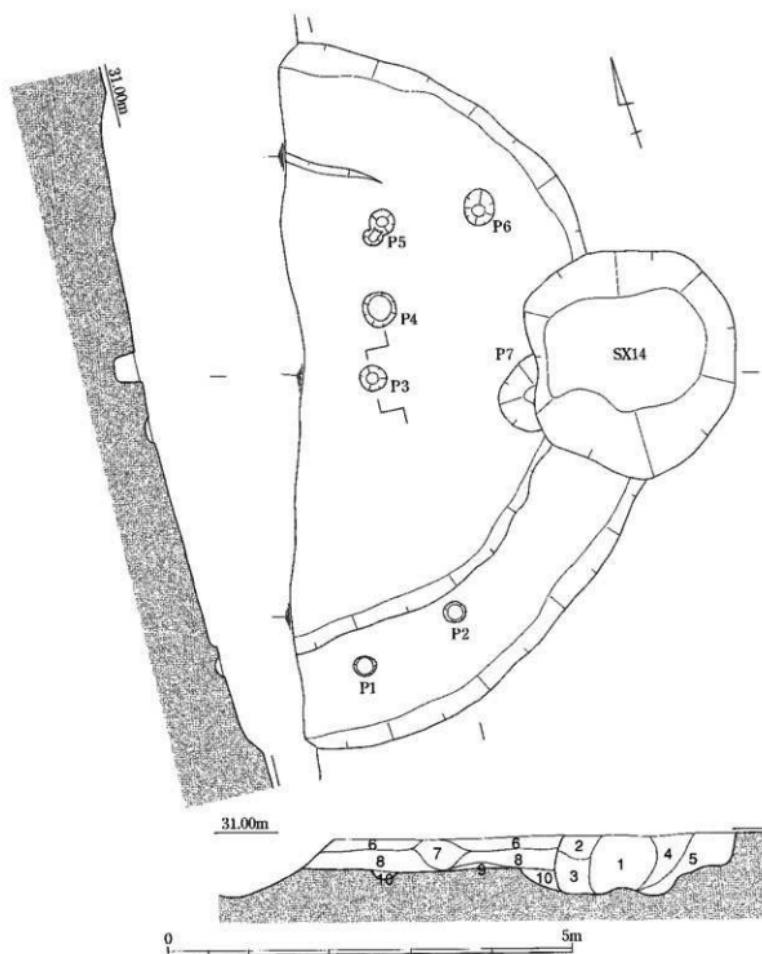


第120図 SH40出土土器

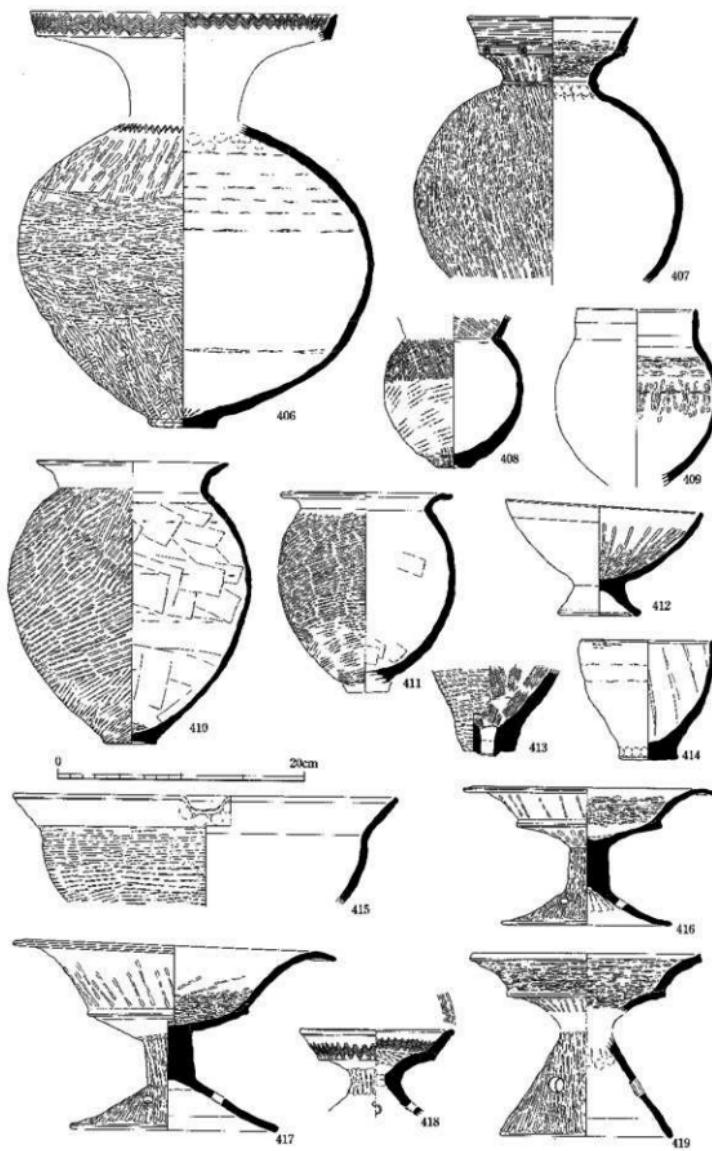
SH41

検出状況 調査区西端に位置し、西半はSD01に切られた上、さらに調査区外に延びるものと推定される。また、東壁は風倒木痕(SX14)に切られている。

形状・規模 平面は円形で、最大径8.8m、壁高20cmの大型の竪穴住居で、床面の標高は30.49mである。幅約1m前後、最大高さ8cmの不明瞭な屋内高床部が造り出される。床面ではピット4基と土坑1基、屋内高床部でピット2基が確認できたが、いずれも柱痕がなく、明確な主柱穴としては認識していない。



第121図 SH41

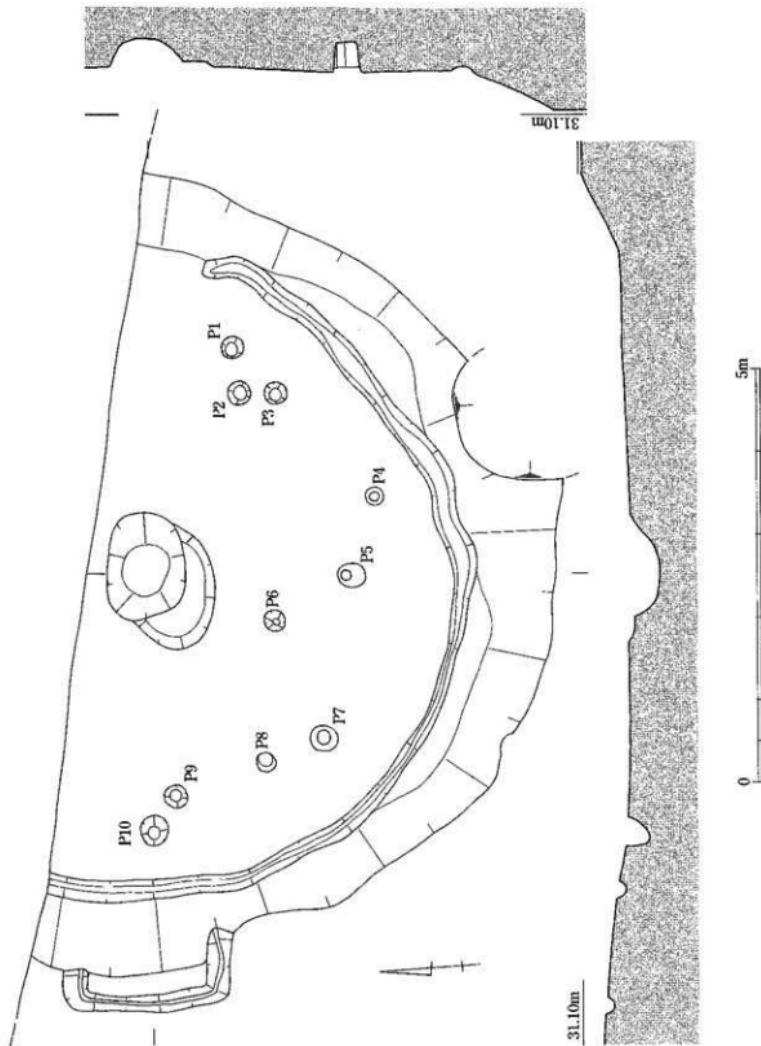


第122図 SH41出土土器

出土器	出土した大量の弥生土器は、埋土最上層からのものがほとんどで、壺・甕・鉢・高环・器台が出土している。
壺	406は広口壺で、球形に近い体部に、頭部は欠損するものの、端部の内外面を櫛揃波状文で飾った口縁部をもつ。体部は外面を平行叩きの後ヘラ磨き調整で仕上げ、最上位には半截竹管による櫛揃波状文が飾られる。内面には粘土紐接合痕がみられる程度である。
	407は複合口縁壺で、基部に不明瞭な突帯を1条巡らした後外反する短い頭部からさらに斜め上方に内湾気味に延びる口縁部をもつ。口縁部外面は9~10条の擬凹線を巡らせ、円形竹管文を施した円形浮文を9方向に配する。底部は欠損するが、球形の体部は外面が縱方向の繊密なヘラ磨き調整である。
	408は口縁部を欠損するが、頭部が内湾気味にたちあがる点から直口壺とした。ドーナツ形に突出する底部と倒卵形の体部をもつ。体部下半は2条/cmの平行叩き、上半は平行叩きの後綱刷毛調整。
	409は短頭壺で、底部を欠損する。口縁部はまっすぐ上方に延びる。既してナデ仕上げであるが、内面の中位から上位には粘土紐接合痕を消すようにヘラ磨きが施される。
甕	410は中型甕で、体部最大径が体部中位よりやや口縁部よりも大きい。体部外面は2条/cmの平行叩きで、内面は板ナデが顕著である。411は小型甕で、口縁端部が強いナデによって受口状を呈する。体部外面は4条/cmの平行叩きで、内面は板ナデを含むナデ仕上げである。
鉢	412は短い脚をもつ鉢で、内面には縱方向の放射状のヘラ磨きが施される。
	413は有孔鉢の底部で、円孔の直径は9cmで、内面から穿孔される。
	414は小形鉢で、平らな底部と内湾気味に延びる体部をもち、口縁部はわずかに内傾し、丸く求められる。内面には板ナデ調整が施されるが、外面は粘土紐の接合痕が残る程度のナデ仕上げ。
	415は大型鉢で、斜め上方に延びる口縁端部はわずかにつまみ上げられる。また、口縁部には片口部をもつ。体部外面は平行叩きで仕上げられる。
高环	416・417は高环で、法量の大小の差があるだけで、両者ともに同一形態を採る。环底部から屈曲して大きく延びる口縁部をもち、端部がさらに外傾するのが特徴的である。脚柱部は中実で、据部は大きく広がる。縦方向のヘラ磨き調整が顕著である。
器台	418は口縁部内外面を櫛揃波状文で飾る小形器台である。419はU型の器台で、环底部から屈曲した後口縁部が外湾して延びる。端部は明確な平坦面をもつ。外面が繊密なヘラ磨きで丁寧に仕上げられる。
時期	以上の出土土器は住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。したがって、この住居の時期を決める手掛かりが明確にはできないが、弥生時代後期後半のものであろう。

SH42

検出状況　調査区中央北西辺に位置し、東南部周壁を風倒木旗に切られ、南西部は時期不明の土坑に切られている。



第123図 SH42

形状・規模 平面形態は円形で、最大径9.6m、壁高41cmの大型竪穴住居で、幅15~30cmの周壁溝が巡る。床面の標高は30.55mである。北西方向には幅25cm前後、最大深さ17cmの周壁溝を伴う幅2.0m、長さ0.90mの張り出し部がある。

付属施設 床面では中央土坑1基と柱穴が10基確認できた。

中央土坑 中央土坑は椭円形の土坑の南辺に深さ約10cmの浅い落ち込みが伴う。長軸1.8m、短軸1.2m、最大深さ0.31mで、埋土は炭を多く含む暗褐色～黒褐色砂質土で、完形に復元できた弥生土器鉢などが出土している。

柱穴 柱穴はP 6を除く9基で構成されていたようで、P 1~3、P 4~5、P 7~8、P 9~10の2基あるいは3基の柱穴が対となっている。直径12~15cmの柱痕が確認できたP 4・P 5・P 7の掘り方直径は35cm前後、深さは約30cmである。本来は8本柱で、少なくとも1回の建て替えが行われたものと考えられる。

出土土器 出土した大量の弥生土器は、床面に密着したものがほとんどなく、壺・甌・鉢・高环・器台が出土している。

壺 420~423は広口壺で、短くたちあがる頸部から緩やかに外反して延びる口縁部をもつ。423では端部が上下に拡張され、端面に凹線が2条巡る。

424は直口壺で、わずかに外反して延びる短い口縁部をもつ。内外面ともに10条/cmの刷毛調整である。

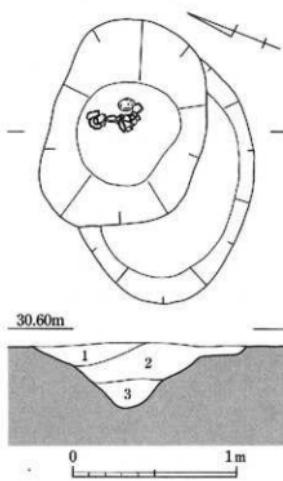
甌 426~429は甌で、いずれも口縁端部を上方へつまみあげている。体部は右上がりの平行叩き仕上げである。430は甌体部下半で、外面の左上がりの平行叩きがスリ消されるとともに、下位には縱方向のヘラ削りが一部施される。

鉢 433・434は中央土坑から出土している。433は平らな底部から大きく開いて延びる体部から口縁部をもつ。端部はわずかに下方に拡張される。内・外面ともにヘラ磨き調整によって丁寧に仕上げられる。

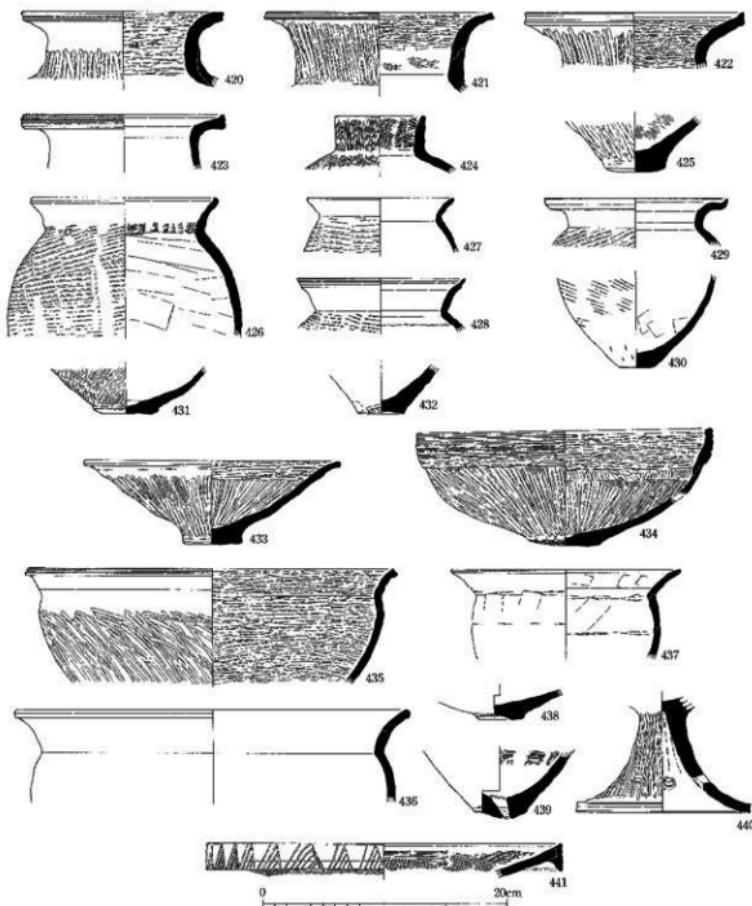
434は丸みをもった底部から緩やかに内湾しながら延びる体部をもち、口縁部は縁帯状に拡張され、大きな外縁面には凹線4条を巡らせる。底部外面は6条/cmの不整方向の刷毛調整、体部内外面はヘラ磨き調整、口縁部は横方向のヘラ磨き調整が施される。

435・436は大型鉢で、床面直上から出土している。内外面をヘラ磨き調整で仕上げた435の口縁端部はわずかに上下に拡張され、端面は凹状を呈する。

437は小型鉢で、体部に比して口縁部が長く、大きく開く。粘土紐接合痕を残す他は、板ナデが若干みられる程度である。438はドーナツ形に突出する小型鉢の底部である。

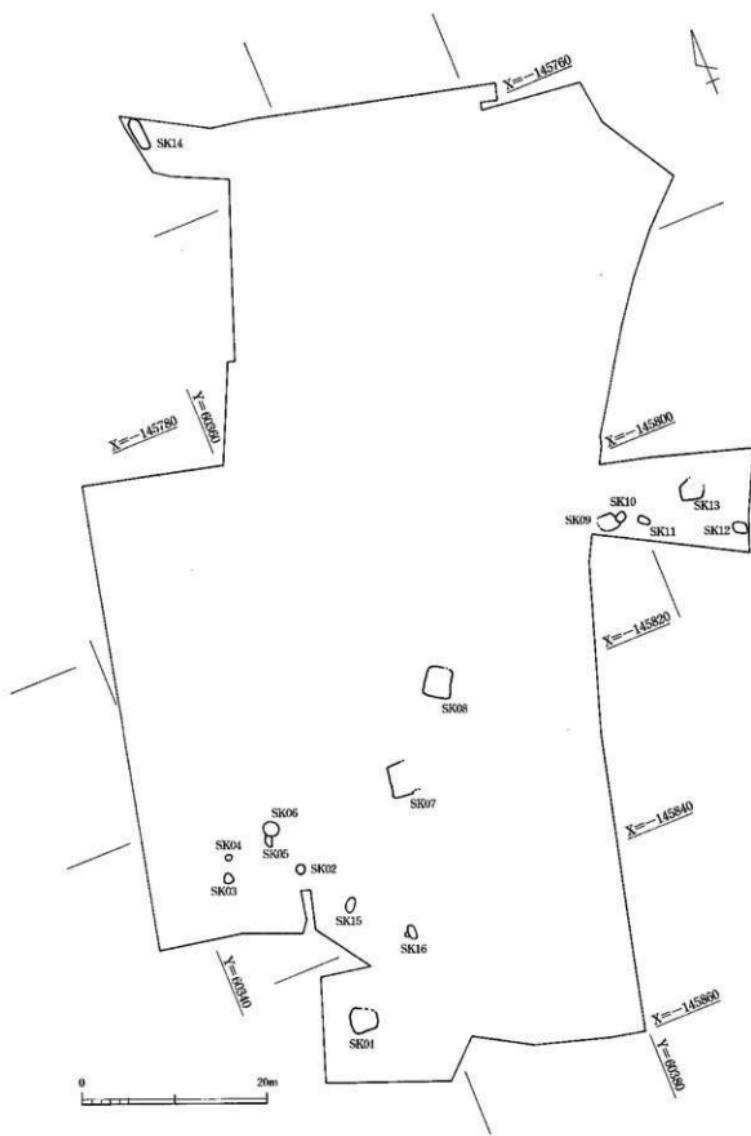


第124図 SH42中央土坑



第125図 SH42出土土器

- 高环** 439は有孔鉢の底部である。穿孔は内面から行われ、底部がやや突出する。
- 器台** 440は高环脚部で、中央土坑から出土している。環部は全く欠損している。
- 時期** 441は器台で、口縁端部を大きく垂下させ、端面にはヘラ描き沈線による鋸歯文が施文される。なお、先述した S II26の埋土上層出土上器と接合した資料である。
- 以上の出土土器は住居廃棄後に投棄されたものと考えられる。中央上坑出土の上器からみて、弥生時代後期後半のものである。



第126図 土坑

2. 土坑

SK01

検出状況 調査区南端に位置する。北東部分を風倒木によって切られる。南東にあるSH40と隣接するが切り合い関係はない。

形状・規模 平面は台形気味の圓円方形を呈する。規模は東西方向で2.5m、南北方向で2.3m、検出面からの深さ14cm、底面の標高は30.68mである。掘り方の断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。

付属施設 底面において、柱穴を検出した。掘り方径22cm、底面からの深さ4cmである。

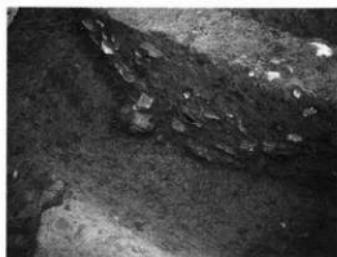
出土遺物 弥生時代後期の小片のみの出土で、固化できなかった。

時期 出土土器から判断して、弥生時代後期と判断される。

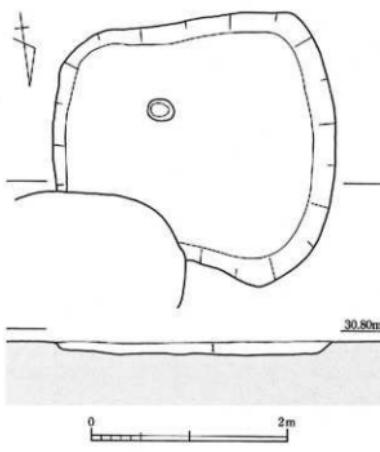
SK02

検出状況 調査区南西に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 平面形は円形をなす。規模は110×105cmで、検出面からの深さ37cmである。掘り方の断面形は楕円形を呈するが、壁の立ち上がりは急で、直立に近い部分もある。

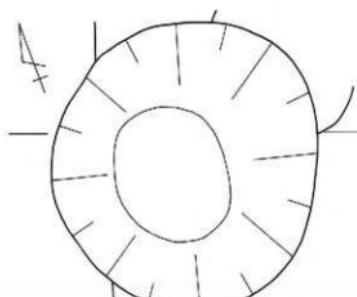


第128図 SH02土器出土状況



1. 黄褐色 細砂混じりシルト～粘土質

第127図 SK01



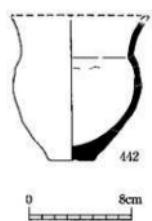
1. 塗黄褐色 粘土（ややしまりが悪い）

第129図 SK02

出土遺物 土坑の規模を考えると、比較的多く出土している。しかし、ほとんどが小片で、図化できたのは442の1個体のみである。

442は小型甕である。口縁部の立ち上がりが高いことから、甕の可能性も否定できない。底部から口縁部にかけてユビオサエによる幣形後、口縁部内外面と休部外面はナデ調整、内面はヘラナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。



第130図 SK02出土土器

SK03

形状・規模 直径1.1m、深さ0.23mの円形の上坑で、東側に小さな突出部がある。埋土の上層は暗乳黃褐色砂質土で、下層は淡乳黃色砂質土である。

出土遺物 弥生土器の大半は上層から出土しており、甕と鉢のみである。

甕

443～446は中型の甕である。体部最大径を中位よりやや上位にもち、外面を矢羽根叩きで仕上げるもので、一部は刷毛調整でスリ消される。矢羽根叩き原体の単位は明確にできていない。内面は概して刷毛調整である。445では最大径部分が中位まで下がり、体部もやや球形化している。

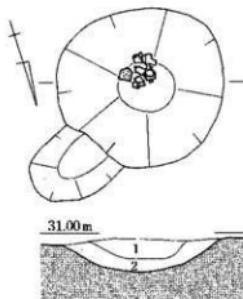
一方、447も中型の甕であるが、唯矢羽根叩きの見られない個体で、口縁部は欠損する。体部外面にはわずかに平行叩きが見られるが、概してナデで消されており、内面では縦方向のヘラ削りが顕著に認められる。

鉢

448・449は鉢で、平らな底部から内湾気味に延びる口縁部をもち、端部は若干外方へ拡張する。外面は縦方向のヘラ磨き調整で、内面は刷毛調整の後、縦方向のヘラ磨き調整である。

時期

矢羽根叩きで整形された甕が集中して確認される特異な傾向をもつ上坑である。弥生時代後期後半に位置づけられる。



第131図 SK03

SK04

規模・形状 直径1.4m、最大深さ0.30mの円形土坑で、弥生土器が遺構面から盛り上がるようにして検出された。埋土は弥生土器を多量に含む小砾をわずかに含む暗乳黃褐色砂質土の上層と、遺物を含まない淡乳黃色砂質土の下層である。

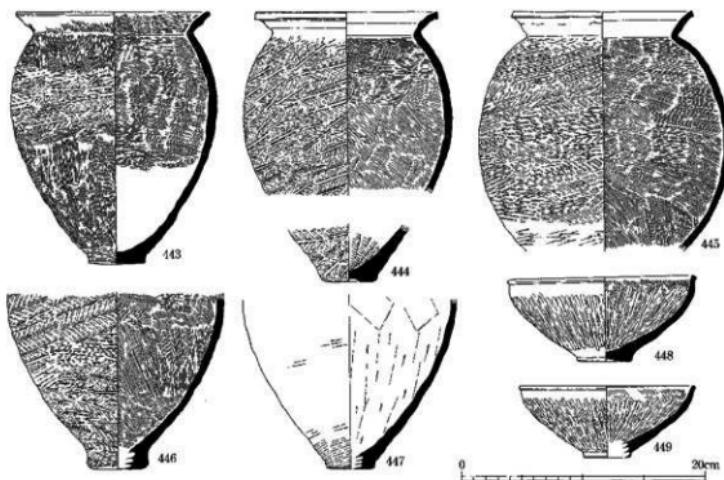
出土土器

上層出土の上器は甕が大半で、この他には図化できない人型の壺形土器の休部片がある。

甕

450は小形甕で、突出せずや丸みをもつ平底と体部最大径よりも開く口縁部をもつ。口縁端部は上方につまみあげられ、小さな外端面をつくる。体部は外面とともに刷毛調整である。

451・452は中型の甕で、体部外面には平行叩きが施され、内面は粘土紐接合痕を残す程度



第132図 SK03出土土器

の刷毛調整である。口縁部は基部から外反して延び、端部は上方へつまみあげられ、拡張された口縁部外端面には凹線が巡る。

451・455も小型の壺で、体部外面が平行叩きで仕上げられ、内面には若干の板ナデ調整が施される。口縁部がやや開き気味である点が前者と形態的には異なる。

455は破片を図上に復元していた中型の壺である。中位が大きく張る体部と、基部で直角に曲がって外折する口縁部をもつ。体部外面は平行叩き仕上げで、内面には粘土紐接合痕のほか上半では板ナデが、下半では縦刷毛調整が施される。

高坏 459は高坏で、脚底部を欠損する。坏部は浅い底部から稜をもった後きつく外反する口縁部をもつ。脚部を含め、内外面ともヘラ磨き調整によって丁寧に仕上げられる。

時期 弓生時代後期後半でも後半の時期のものであろう。

SK07

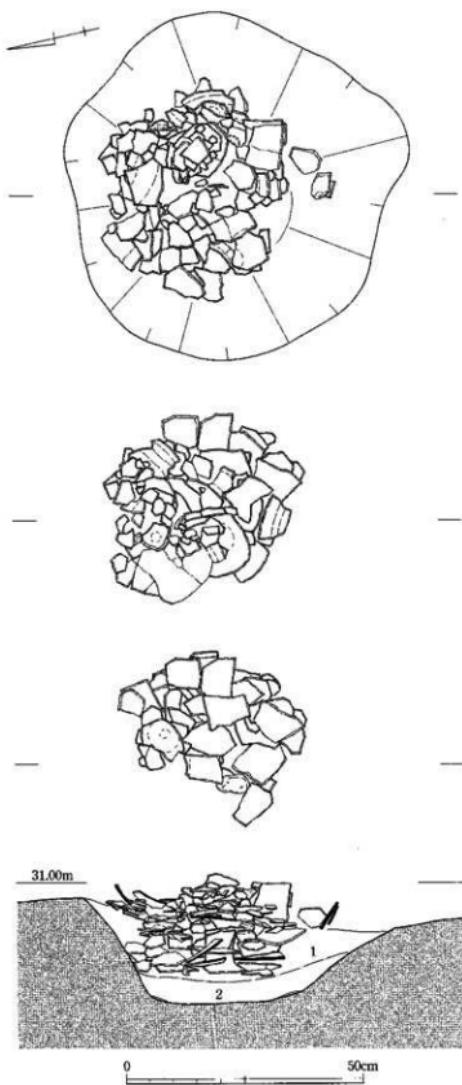
検出状況 調査区南に位置する。SH20の西辺と重なっているが、切り合いの先後関係は明らかにできなかった。当土坑の掘り方に収まる形で楓倒木が重なっているため、底面中央部を広い範囲で破壊されている。また西辺北半を現代の擾乱によって切られる。

形状・規模 平面は方形を呈するものと考えられる。規模は南北方向で3.15m、東西方向3.1m以上で、検出面からの深さは30~50cmである。なお、底面の標高は30.58~30.81mである。

付属施設 底面南東隅において柱穴を1基検出した。掘り方径25cm、底面からの深さ8cmである。

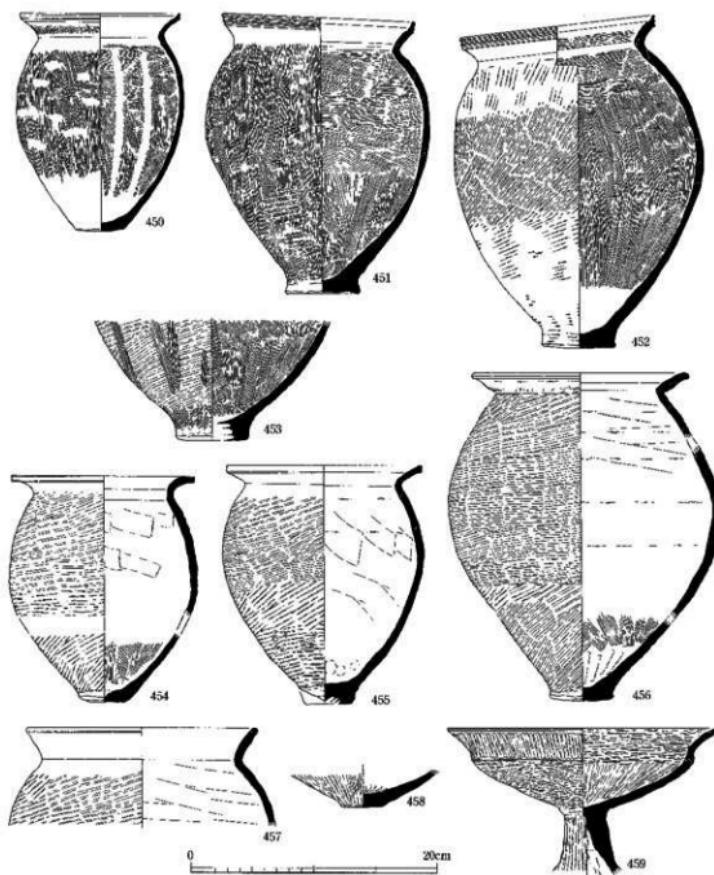
出土土器 土器は出土していない。

時期 土器が出土していないため、明確にできない。



1. 淡乳色小礫をわずかに含む砂質土
2. 淡乳黄色砂質土

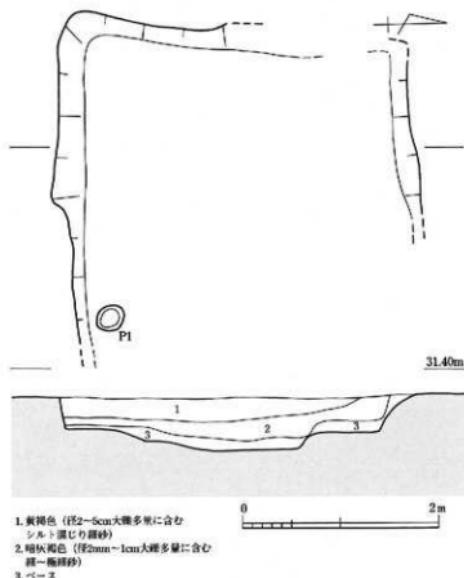
第133図 SK04



第134図 SK04出土土器

SK08

- 検出状況** 検査区中央に位置する。一部ピットに切られる。
- 形状・規模** 平面は台形気味の隅円方形を呈する。規模は南北方向で2.96m、東西方向では北辺で2.3m、南辺で2.5mを測る。検出面からの深さ25cmである。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は中心部に向かって緩やかに盛んでいる。
- 付属施設** 底面において4基のピットを検出した。P1-P3は隅に配置されており、北東隅では検出できなかったが、本来4本で何らかの上層構造物を支えていたと考えられる。P1は掘り方



第135図 SK07

28×40cmの方形のピットで底面からの深さ5cm、P 2は掘り方径45cm、底面からの深さ7cm、P 3は掘り方径30~40cm、底面からの深さ5cmである。P 4はP 1~2間に配置されたピットで、掘り方径28cm、底面からの深さ5cmを測る。

柱穴間距離はP 1~2間で1.4m、P 2~3間で1.9mを測る。

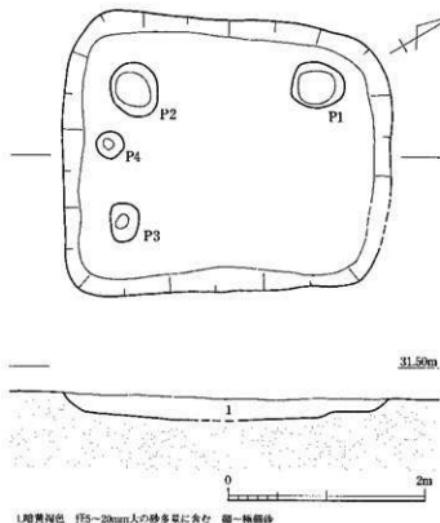
出土土器

壺

壺・鉢・小型丸底壺と、小型の土器が出土している。
460の1個体である。体部は無花果形を呈し、底部はほぼ丸底をなす。外面上半はハケ調整とナデ調整、外面下半はヘラ磨き、内面はナデ調整により仕上げられている。



第136図 SK08の検出



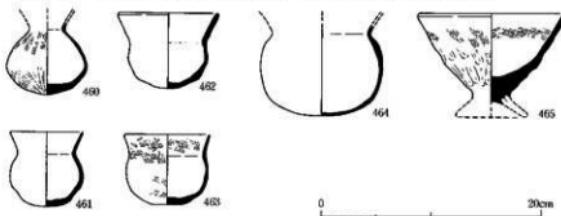
第137図 SK08

鉢 465の台付鉢の1個体である。外面は、下半を下から上方向のヘラ削り後、上半をハケ調整により仕上げ、その後口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。内面は、ハケ調整後、下半をナデ調整により仕上げられている。

小型丸底壺 4個体出土している。463を除いては、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。461は、体部外面をヘラ削り後ナデ調整、内面をナデ調整により仕上げられている。462は、内面をユビオサエにより仕上げられているが、外面については器表面が剥離しており、観察できない。463は、口縁部内外面をハケ調整、体部外面をナデ調整とハケ調整、体部内面をユビオサエ後ナデ調整により仕上げられている。

464は、比較的大型の土器である。体部外面はヘラ削り後ナデ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。

時期 出土上器から判断して、弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる。



第138図 SK08出土土器

SK09

検出状況	調査区中央東端に位置する。S K10を切って検出された。西端の一部は擾乱を受けて消失している。
形状・規模	平面形態はいびつな方形を呈する。東西方向2.1m、南北方向1.8m、検出面からの深さ20cmを測る。なお、東の隅には一段深くなっている箇所があり、深さ30cmを測る。
出土遺物	小片が出土しているが、図化できなかった。
時期	出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

SK10

検出状況	調査区中央東端に位置する。S K09によって西側を切られる。
形状・規模	平面形態は長方形を呈し、現存値で長軸方向1.1m、幅80cm、検出面からの深さ17cmを測る。なお、東の隅には一段深くなっている箇所があり、深さ30cmを測る。
出土遺物	小片が出土しているが、図化できなかった。
時期	出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

SK11

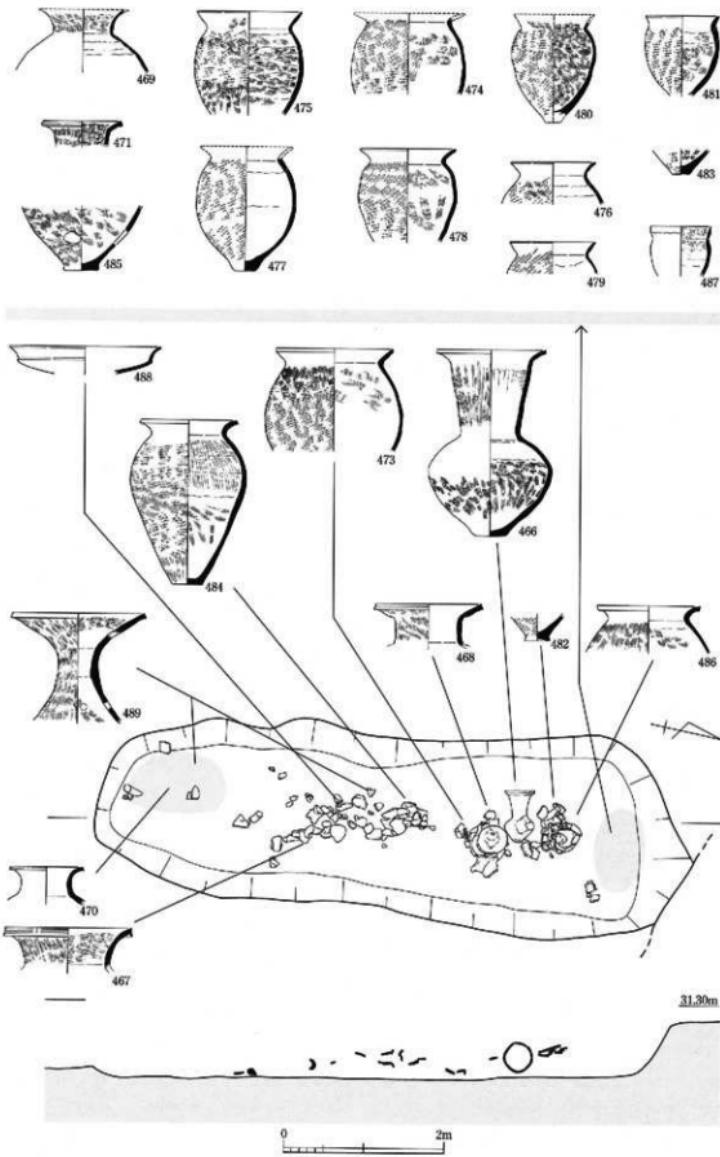
検出状況	調査区中央東端に位置する。
形状・規模	平面形態はいびつな長方形を呈し、東西方向1.35m、南北方向0.8m、検出面からの深さ50cmを測る。
出土遺物	小片が出土しているが、図化できなかった。
時期	出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

SK12

検出状況	調査区中央東端に位置する。
形状・規模	平面形態は隅円長方形を呈し、東西方向1.5m、南北方向1.15m、検出面からの深さ12cmを測る。
出土遺物	小片が出土しているが、図化できなかった。
時期	出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

SK13

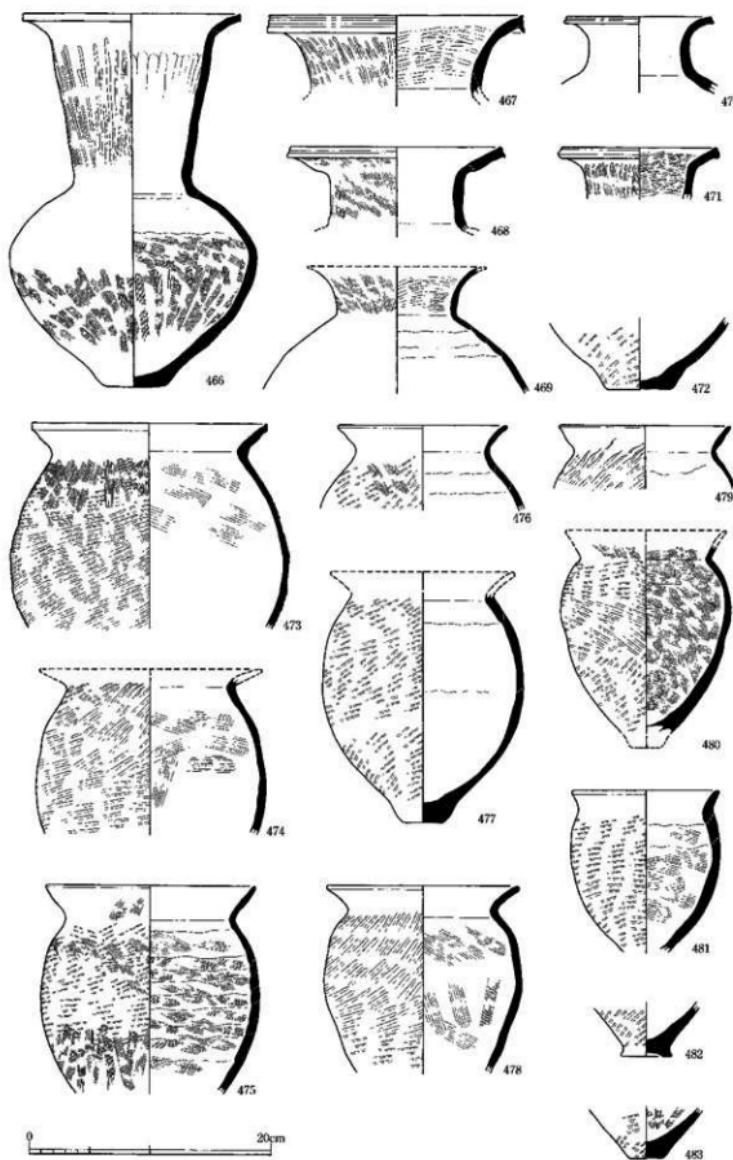
検出状況	S II22・S H23に切られている。
形状・規模	平面形態は五角形に近い不定形を呈する。南北で2.4m、東西で2.3m、検出面からの深さ55cmを測る。
出土遺物	小片が出土しているが、図化できなかった。
時期	S II22・S H23との切り合い関係から判断して、弥生時代後期中葉以前と考えられる。



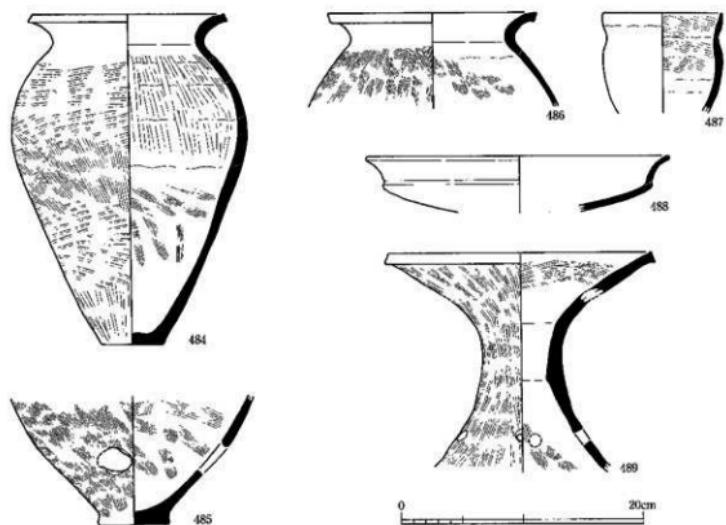
第139図 SK14

SK14

検出状況	調査区北西隅に位置する。溝状を呈する長大なもので、一部調査区外北へ続く。S H32と重なっているが、切り合い関係は判然としない。
形状・規模	長い楕円形を呈し、南北7.5m、検出面での幅2.1~2.5m、検出面からの深さ57cmである。底面はほぼ平坦で、壁はやや角度をもって立ち上がる。掘り方の断面形は逆台形を呈する。
出土状況	多量の弥生土器が底面上もしくは若干浮いた形で検出された。
出土遺物	出土土器から判断して、一括性の高い土器群である。壺・壺・鉢・高杯・器台の各器種が出土している。
壺	広口長頸壺・広口壺・底部が出土している。 広口長頸壺は466の1個体のみである。口縁部をのぞいてほぼ完存する上器である。口縁部内外面はユビオサエにより整形され、頸部との境は強い横ナデ調整により仕上げられている。頸部外面は輪文状のヘラ磨き、内面はユビオサエとナデ調整により仕上げられている。体部外面は、上半部をヘラ磨き、以下をハケ調整、体部内面は、肩部をユビオサエとナデ調整、以下をハケ調整により仕上げられている。
	広口壺は5個体出土している。467は、口縁部外面を横ナデ調整、頸部内外面をヘラ磨きにより仕上げられている。468は、外面はハケ調整により仕上げられているが、内面は器表面の剥離のため観察できない。469は、口縁部外面をハケ調整、内面を横方向のハケ調整後同方向のヘラ磨き、体部外面はハケ調整後ヘラ磨き、体部内面はユビオサエとナデ調整により仕上げられている。ただし、体部外面のヘラ磨きは、摩滅のため単位は不明瞭である。470は、口縁部内外面を横ナデ調整、頸部外面をヘラ磨きにより仕上げられているが、ヘラ磨きの単位は不明瞭である。471は、口縁部を横ナデ調整、頸部内外面をていねいなヘラ磨きにより仕上げられている。外面のヘラ磨きは、暗文状に施されている。
	底部は472の1個体のみである。外面はタタキ整形後ナデ調整、内面はヘラナデ調整により仕上げられている。
器台	底部も含めて14個体復元したが、いずれもV様式系の器である。484を除いては、体部内面はハケ調整もしくはナデ調整により仕上げられている。484は、内面上半をヘラナデ調整により仕上げられている。また、外面下半にも同様のヘラナデ調整が施されている。
	この他、485と486は、外面をタタキ整形後ハケ調整により仕上げられ、タタキ目がほとんど観察できない。また、485の体部には3.4×3.0cmの穿孔が焼成後に施されている。なお、この土器の外面には煤の付着が認められる。
鉢	487の1個体である。形態的に見て壺と差異は認められないが、口径9.8cmと小型であることから、鉢に分類した。内面は口縁部から体部をハケ調整後、体部下半をナデ調整により、外面はナデ調整により仕上げられている。口縁部はユビオサエにより整形されている。
高杯	有縁高杯1個体が出土している。内外面とも器表面の剥離のため、調整は観察できない。
器台	489の1個体である。口縁部は横ナデ調整により端面をもつ。口縁部から脚部外面及び口縁部内面はヘラ磨き、体部内面はヘラナデ調整、脚部内面はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。脚部には径1.2cm~1.4cmの透孔が焼成前に5箇所穿たれている。
時期	出土土器から判断して、弥生時代後期中葉と考えられる。



第140図 SK 14出土土器 (1)



第141図 SK 14出土土器 (2)

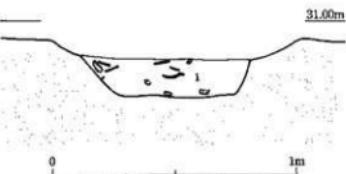
SK 15

検出状況 調査区南西に位置する。西辺の一部を柱穴に切られる。

形状・規模 平面は南北に長い楕円形を呈し、150×80cmの規模である。検出面からの深さは28cm、掘り方の断面形は逆台形を呈する。

出土遺物 土器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。

時期 出土土器から、弥生時代後期と考えられる。



1.灰褐色 径10~15mm大頭やや多く混じる粗砂含む細砂

第142図 SK 15

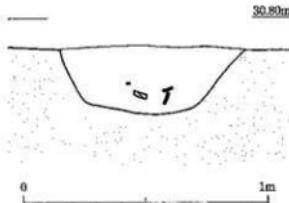
SK 16

検出状況 調査区南に位置する。他の透構との切り合い関係はない。

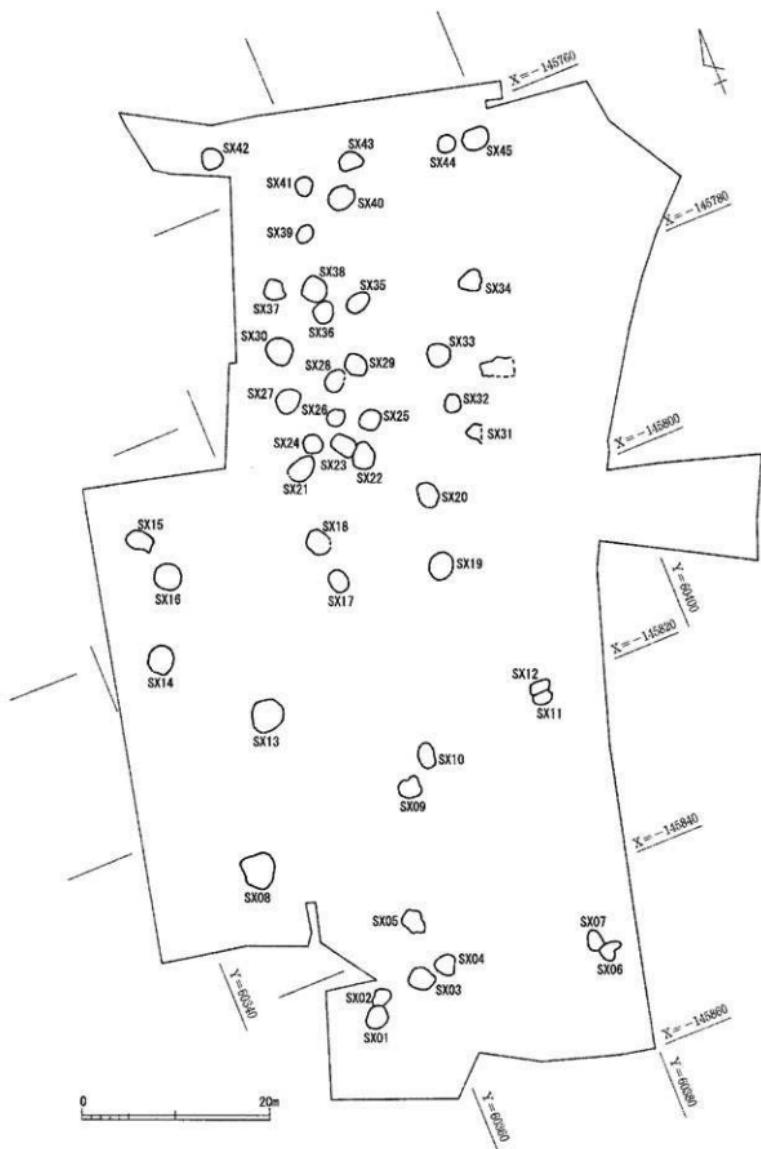
形状・規模 平面は南北に長い楕円形を呈し、150×70cmの規模である。検出面からの深さは15cm、掘り方の断面形は逆台形を呈する。

出土遺物 土器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。

時期 出土土器から、弥生時代後期と考えられる。

1.灰黄褐色 径2mm大頭~粗砂含む細砂
(径10cm大の隕石十合分)

第143図 SK 16



第144図 風倒木痕

3. 風倒木痕

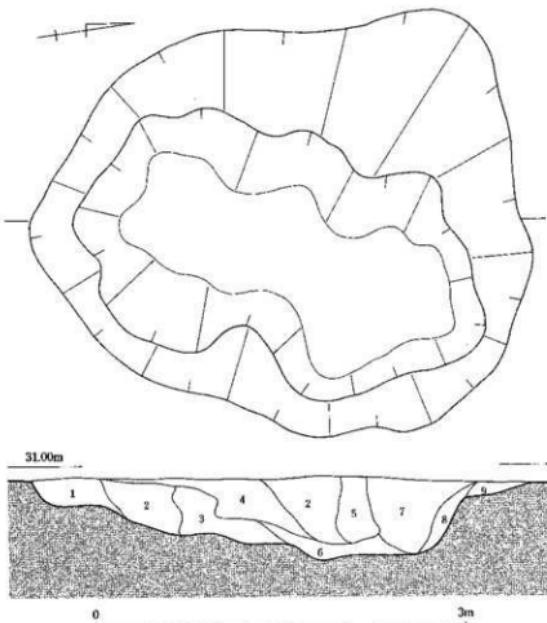
4次にわたる調査で、計45基の風倒木痕を検出している。

形状・規模 平面形態はいずれも不整形で、埋土の中央部に基盤層の赤黄色疊混じり粘質土の大きなブロックが必ず確認できる大型の土坑である。坑壁は比較的急な斜面となっている。埋上の状況から風倒木痕と考えている。

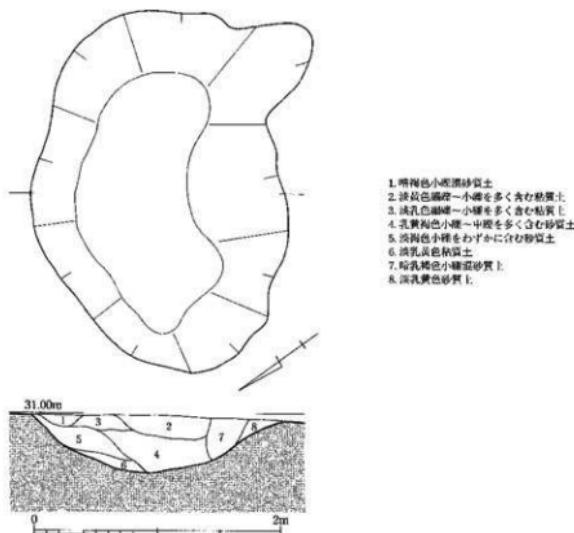
各遺構の規模は、S X14が直径2.85m、最大の深さ0.76m、S X08が長径4.09m、短径3.61m、最大の深さ0.69m、S X16が長径2.96m、短径2.04m、最大の深さ0.47m、S X15が直径2.94m、最大の深さ0.79mである。

出土土器 いずれの土坑でも坑壁に沿って流れ込んだ暗褐色系の砂質土から弥生上器片が出土している。

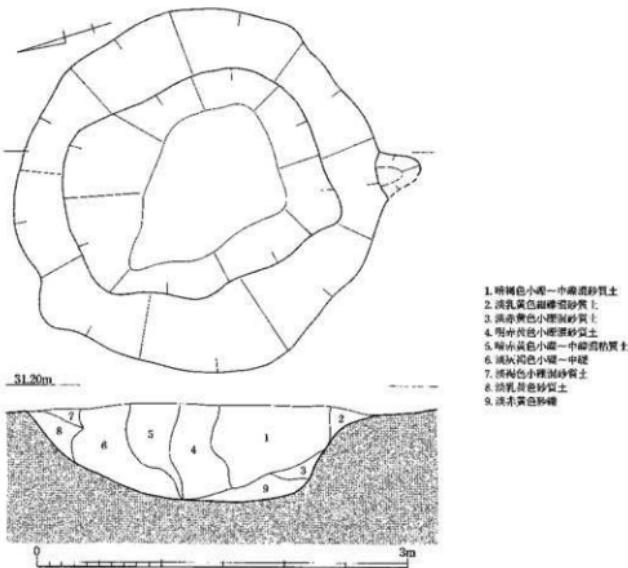
時期 烈穴住居を切り、後述するS B01の柱穴に切られていることから、古墳時代前期以降平安時代後期までの遺構と考えられる。



第145図 S X08



第146図 SX15



第147図 SX16

4. 遺構に伴わない遺物

鳥形土製品と台石（S19）が出土している。

鳥形土製品

S H10南側の包含層中から出土している。頭部のみ残存する。くちばしの先端と頭頂部が摩滅しているため、表現は不明である。頭頂部には波状の凹凸が4箇所認められる。後頭部から頸部にかけて1条の溝が刻まれ、本体に装着する際に棒状のものを通していたと考えられる。また、両面で目の表現が兎なるのはユニークである。底面以外の外面にはヘラ磨きか線刻の跡があり、赤色顔料の塗布が認められる。

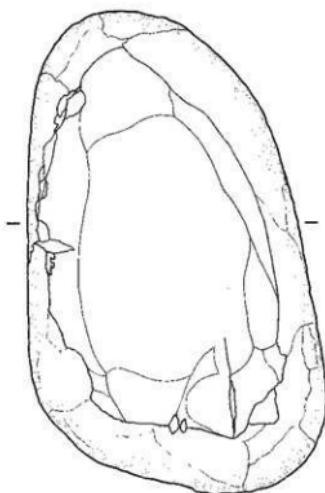
くちばしの長さ3.0cm、残存高5.4cmを測り、頭部は1.6cm×1.3cmと橢円形をなす。また、目の大きさは1.5cm×6mmである。

台石

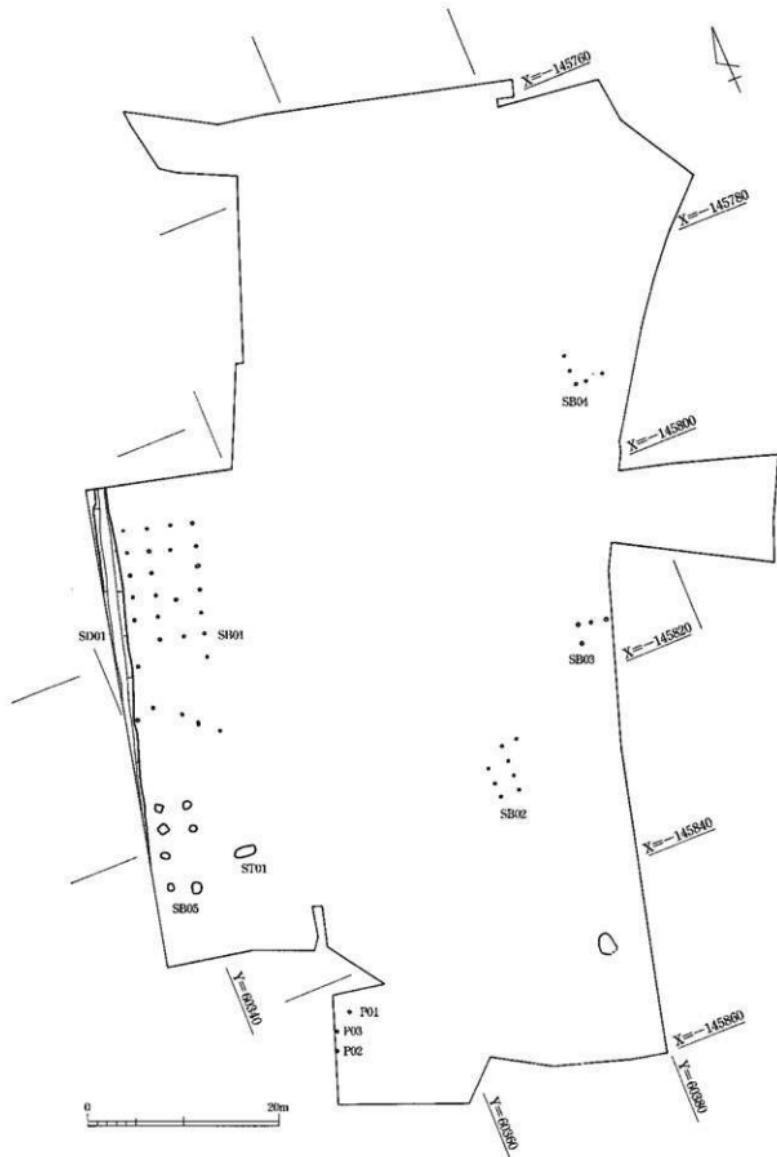
S19は台石である。作業面は2正面、2側面の4面である。よく使い込まれており、砾石のように全面にくぼみが形成される側面については全面にわたって平坦面が形成されている。現存値で長さ290mm、幅180.9mm、厚さ49mm、重さ7978gである。石材は凝灰質砂岩をもちいる。



第148図 鳥形土製品



第149図 S19



第150図 中近世の遺構

第3節 中世の遺構と遺物

1. 掘立柱建物跡

SBO1

規模・形状 奈行3間(7.2m)×桁行5間(11.8m)の縦柱の掘立柱建物で、桁行は座標北から15°東を指向している。なお、P6とP15は検出できていない。



第151図 SBO1

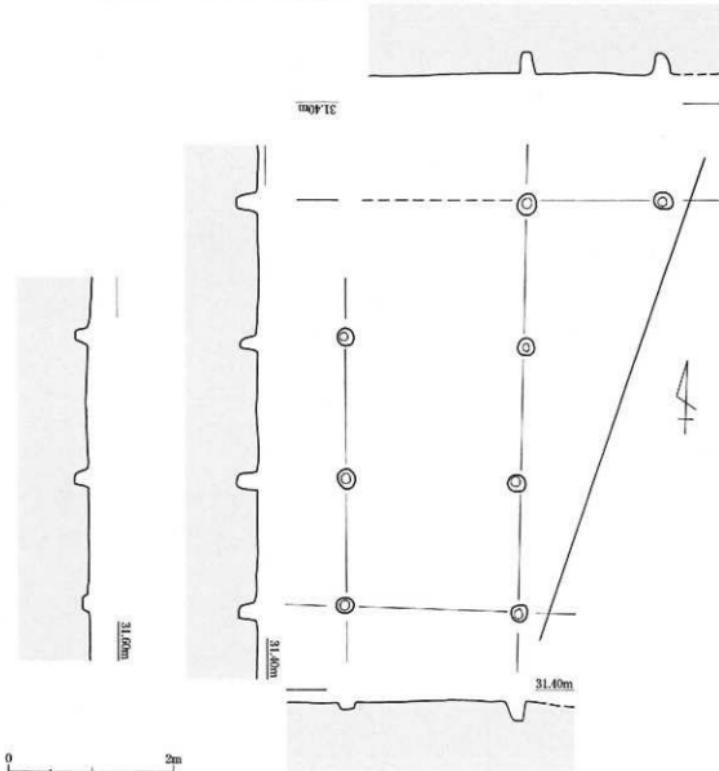
柱間距離はP14-22間の2.7mを最大とし、P16-17間の2.0mを最小とし、概ね2.4m前後である。それぞれの柱穴掘り方は直徑25~30cmで、暗褐色砂質土を埋土とする直徑10~15cmの柱痕の確認されたものもある。

時期 出土遺物は小片の弥生土器がある程度で、明確な時期決定はできない。先述した風倒木痕を切っており、平安時代後期以降と推定している。

SB02

検出状況 調査区の南部に位置する。SH20の東に隣接するが、切り合いは認められない。東側は擾乱を受けて消失している。

形状・規模 全容は不明だが、梁行2間、桁行3間の總柱建物に復元できる。梁行方向で4m、桁行方向で5m、床面積は20m²である。主軸方向はほぼ真北を向く。梁行方向の柱列間隔は西列と中央列間で2.1m、東列と中央列間で1.65m、桁行方向の平均柱間距離は1.67mである。



第152図 SB02

柱穴 堀り方はいずれも円形をなす。径は20~25cm、検出面からの深さは1基10cmのものがあるが、ほぼ25~28cmほどである。柱痕は検出できなかつた。

出土遺物 柱穴内より土器の細片が出土しているが、同化できなかつた。

時期 出土土器から判断して、平安~鎌倉時代と考えられる。

S B03

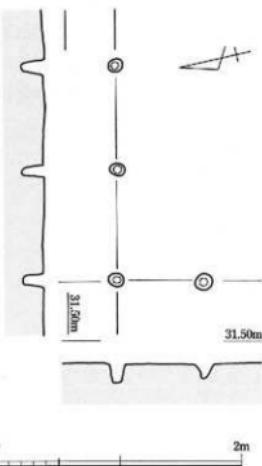
検出状況 調査区中央東端に位置する。SH05の南東に隣接するが、切り合いは認められない。東側は調査区外へ続き、南側については擾乱の影響を受けて対応するピットを検出できなかつた。

形状・規模 全容はわからないが、梁行1間以上、桁行2間以上の建物である。規模は梁行方向で1.1m、桁行方向で2.6mである。主軸方向はN102°Eである。梁行方向の柱間距離は1.1m、桁行方向の平均柱間距離は1.3mである。

柱穴 堀り方はいずれも円形をなす。径は20~25cm、検出面からの深さ約20~25cmである。柱痕は検出できなかつた。

出土遺物 全く出土していない。

時期 出土土器から判断して、平安~鎌倉時代と考えられる。

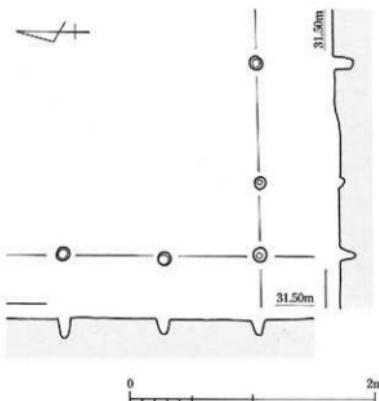


第153図 S B03

S B04

検出状況 調査区北東に位置する。SH17・SH18の西に隣接するが、切り合いは認められない。北側は擾乱の影響を受けて一部消失しているため、全体を検出できなかつた。

形状・規模 全容はわからないが、梁行2間以上、桁行2間以上の建物である。規模は東西方向で2.4m、南北方向で2.4mである。主軸方向はほぼ南北を向く。柱間隔は南北列ではいずれも120cmとほぼ均等に配置されているが、東西列では90cmと130cmで偏りが見ら



第154図 S B04

れる。

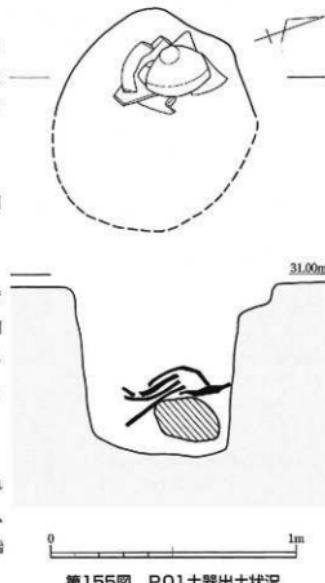
- 柱穴** 挖り方はいずれも円形をなす。径は15~20cm、検出面からの深さは10cmのものが1基あるが、ほぼ18~25cmほどである。柱痕は検出できなかった。
- 出土遺物** 柱穴内より土器の細片が少量出土しているが、図化できなかった。
- 時期** 出土土器から判断して平安~鎌倉時代と考えられる。

2. 柱穴

建物を構成する柱穴にならなかった柱穴の中には、良好な一括遺物を伴うものなど、特徴的な柱穴が検出されている。そこで、これらの柱穴についても報告することにする。

P01

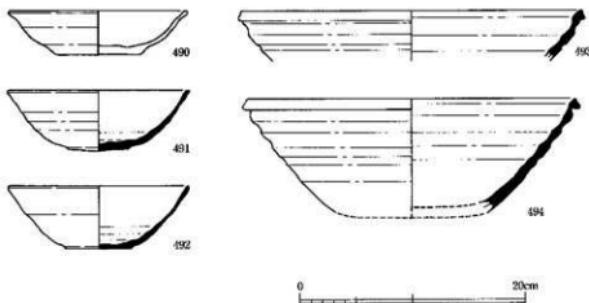
- 検出状況** 調査区南西隅に位置する。
- 形状・規模** 直径40cmの円形の柱穴である。検出面からの深さは34cmである。
- 埋土** 灰色の細砂混じりシルトが埋積していた。
- 出土状況** 柱穴の底には約15cm四方、厚さ9cmほどの
基石が掘えてあった。さらに基石の上には破
碎された須恵器の碗・捏鉢などが埋納されて
いた。
- 出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。
- 土師器** 490の楕1個体が出土している。底部は回
転糸切りにより切り離されている。
- 須恵器** 碗と捏鉢が出土している。
碗は、2個体出土している。完形に復元で
きた491と492はほぼ同様の特徴を示す。3個
体とも底部はわずかに平高台の痕跡が認めら
れる。底部はいずれも回転糸切りにより切り
離されている。
捏鉢は493と494の2個体が出土している。
2個体とも強い横ナデ調整により仕上げられ
ている。また、口縁端部は横ナデ調整により、
口縁部の立ち上がり方向に対して直交する端
面をもつ。
- 時期** 出土土器から判断して、12世紀前半と考えられる。



第155図 P01土器出土状況

P02

- 検出状況** 調査区南西隅に位置する。
- 形状・規模** 挖り方直径30cm、柱痕直径15cm、検出面からの深さ35cmを測る。
- 埋土** 柱痕部分には灰色細砂混じりシルトが、掘り方内には明黄褐色の砂質土が埋積していた。



第156図 P01出土土器

出土状況 磚石が三段重ねで埋設してあった。大きさはいずれも13cm四方に収まる厚さ6~8cmの扁平な川原石である。一番底の石はピットの底から14cm浮いた状態で検出されており、柱を抜き取った跡に据えられた可能性が考えられる。

出土遺物 出土していない。

時期 埋土の特徴がP01と類似することから、平安時代後期と考えられる。

P03

検出状況 調査区南西隅に位置する。

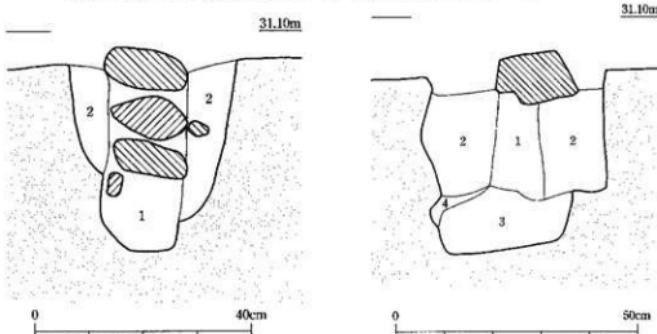
形状・規模 掘り方直径35cm、柱痕直径8cm、検出面からの深さ37cmを測る。

埋土 柱痕部分には細砂混じりシルトが、掘り方内には明黄褐色の砂質土が埋積していた。

出土状況 大甕が埋められていた。大きさは約15cm、厚さ10cmほどの扁平な川原石である。柱を抜き取った跡に据えられた可能性が考えられる。

出土遺物 出土していない。

時期 埋土の特徴がP01と類似することから、平安時代後期と考えられる。



第157図 P02

第158図 P03

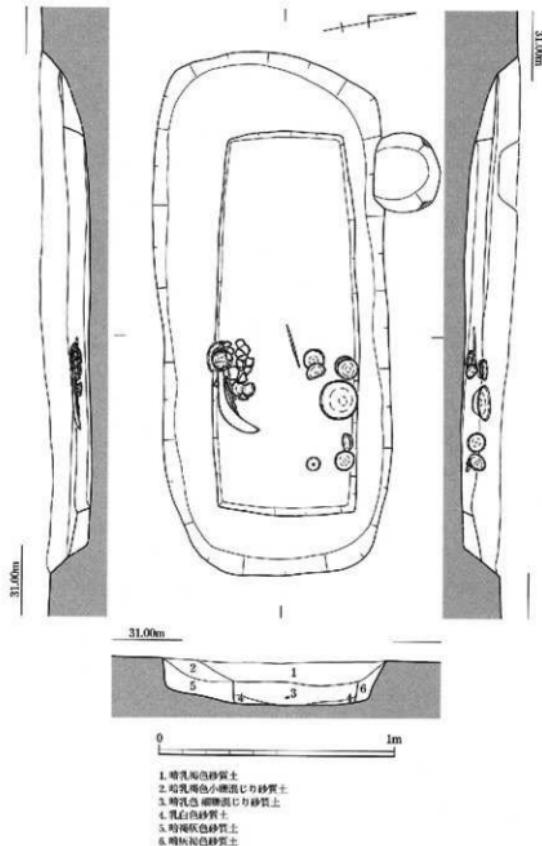
3. 墓

木棺墓が1基検出されている。

ST01

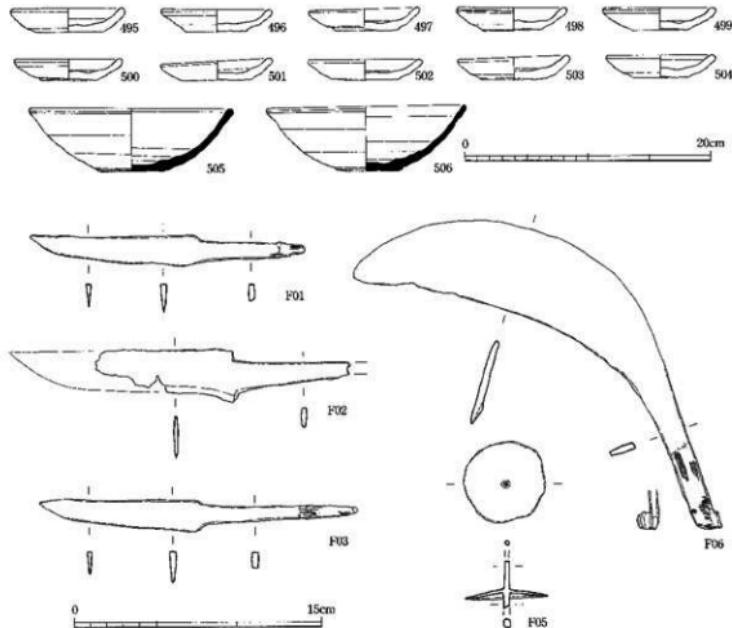
規模・形状 長軸2.2m、短軸0.95m、深さ19cmの開円長方形の墓坑に、やや北に偏して幅60cm、長さ1.65m、深さ10cmの箱形木棺を収めた木棺墓である。棺底は西が約5cm高く、頭位は西と考えている。

出土遺物 遺物は棺中央から足方の棺側近くで確認された。北側棺側では土師器皿6点、須恵器碗1点、鉄製刀子1点（切先は西、刃は棺内側）、鉄製紡錘車1点が、南側棺側では土師器皿4点、須恵器碗1点、鉄製刀子2点（切先は西、刃は棺内側）、鉄製鎌1点が出土している。

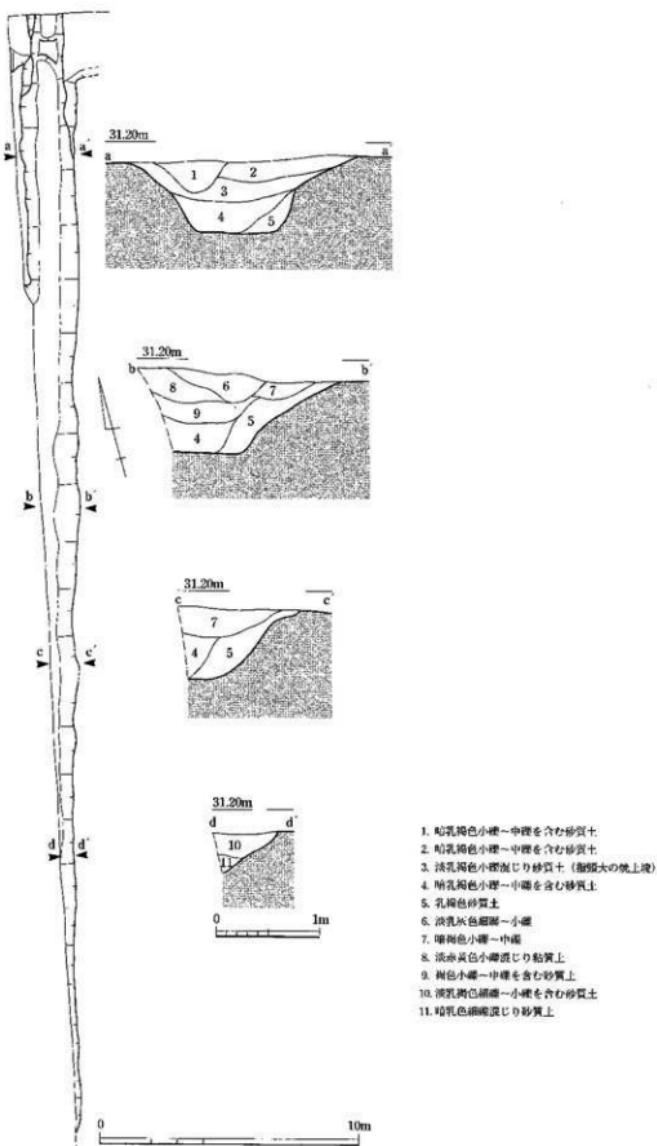


第159図 ST01

- 土師器** いずれも棺底には密着しておらず、棺蓋上に供献されたものが落ち込んだものと考えている。
495～504は土師器皿で、口径8.6cm前後、底径5.0cm前後、器高1.8cm前後で、いずれもほぼ同様の形態で、口縁部が内湾気味に短く伸び、端部は丸く收める。底部外面は回転糸切り未調整である。
- 須恵器** 505・506は須恵器碗で、口径16.0cm、器高5.2cm前後、底径5.3cm前後で、わずかに突出するベタ高台から内溝しながら斜め上方に延びる口縁部をもち、端部は丸く收める。
- 鉄製品** F03は北側棺側から単独で出土した鉄製刀子で、茎部端に長軸方向に平行する木質が遺存する。全長19.3cm、刀身最大幅2.0cm、同厚さ0.4cm。F01・F02は南側棺側で鎌と重なって出土した鉄製刀子である。F01は茎部先端を欠損し、全長16.6cm、刀身最大幅1.9cm、同厚さ0.4cm。本来はF03と同形同大であったと考えられる。F02はF01よりもやや大型で、刀身先端と茎部端を欠損する。残存長15.4cm、刀身最大幅3.1cm、同厚さ0.2cm。
- F04は鉄製鎌で、全長27.1cm、刃部長16.5cm、刃部最大幅5.1cm、同厚さ0.4cm。基部は刃部に比して短く、断面は厚さ0.4cmの偏平な長方形で、先端部は幅約1cmの折り曲げ部をもつ。基部に遺存する木質は継ぎと接合の両者が認められ、木柄の装着方法については現状ではうまく説明できない。
- F05は鉄製紡錘車で、直径4.9cm、厚さ0.2cmの輪部はほぼ完存し、高さ0.6cmの円錐形を呈



第160図 ST01出土遺物



第161図 SD01

する。紡軸は輪部の中央を貫通し、残存長2.9cmで、両端ともに欠損する。輪部上位の紡軸の断面は直径0.3cm前後の円形であるが、下位は0.1×0.6cmのやや潰れた断面長方形である。

時期 以上の遺物からみて、平安時代後期（12世紀前半）のものと考えられる。

4. 溝

SD01

検出状況 調査区の西端に沿って確認された塙状造溝で、座標北から15.5° 東を指向して調査区外へ延びている。

形状・規模 最大幅2.1m、最大深さ0.80m、総延長43mで、断面形は逆台形で、底部はほぼ平坦である。埴土の上半層は多量の拳大の円礫とわずかに焼土の小塊を含む暗褐色粘質土で、多量の遺物が確認されている。

出土遺物 土師器（皿・釜・鍋・擂鉢）・須恵器（碗・皿・鉢）・備前焼（一耳壺・甕・擂鉢）・瀬戸焼・磁器・須恵質瓦（軒丸瓦・軒平瓦・半瓦・丸瓦）・靖益・土甕などの多量の七器類があり、この他には砥石1点と焼成を受けた巻貝（アカニシ）³⁷十数点がある。

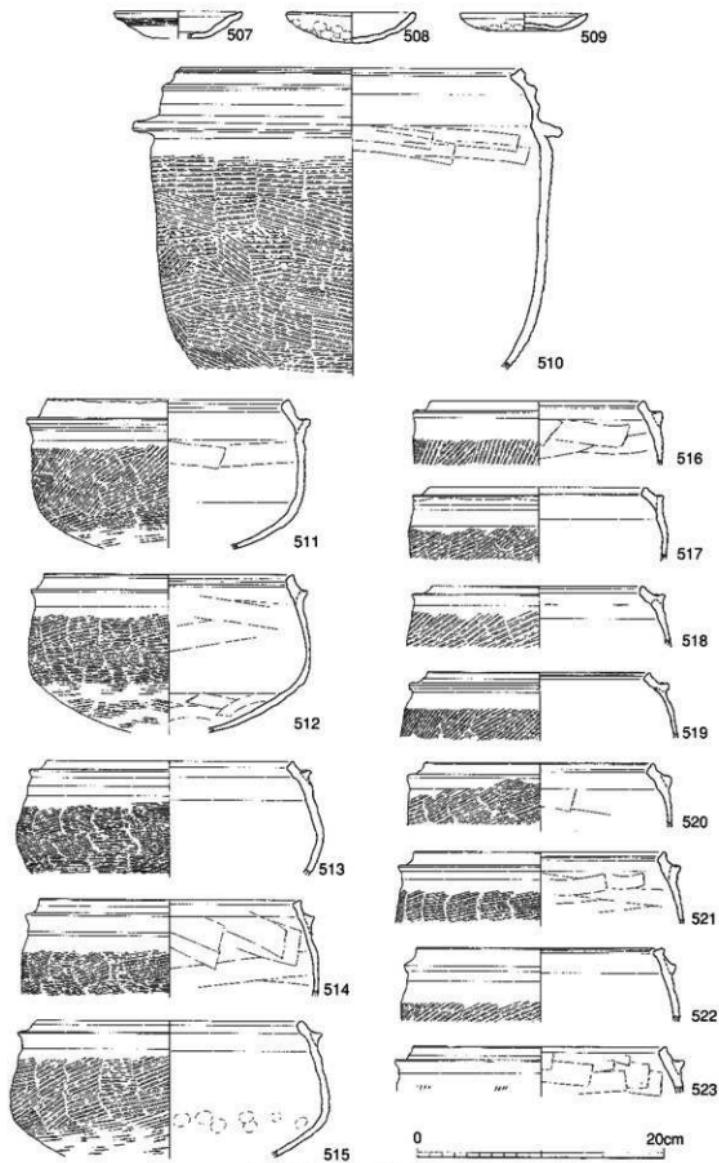
土師器 507は土師器皿で、小さな平坦から斜め上方に延び、さらに端部が強いヨコナデによって外傾する。508・509も土師器皿で、口縁部は強いヨコナデで横円形に仕上げられる。外面は指頭圧痕が顕著である。内面はナデによって比較的丁寧に仕上げられる。

510は土師器釜Aと分類した。底部を欠損する。わずかに裾窄まりの円筒形の体部に水平方向の短い窩をもち、内窓しながら延びる口縁部をもつ。口縁部外面は3段のヨコナデによる凹凸が顕著で、端部は内傾する平坦面をもつ。体部外面は平行叩き仕上げ、体部内面最上位は横方向の板ナデ調整が施される。なお、体部外面には煤の付着が認められない。

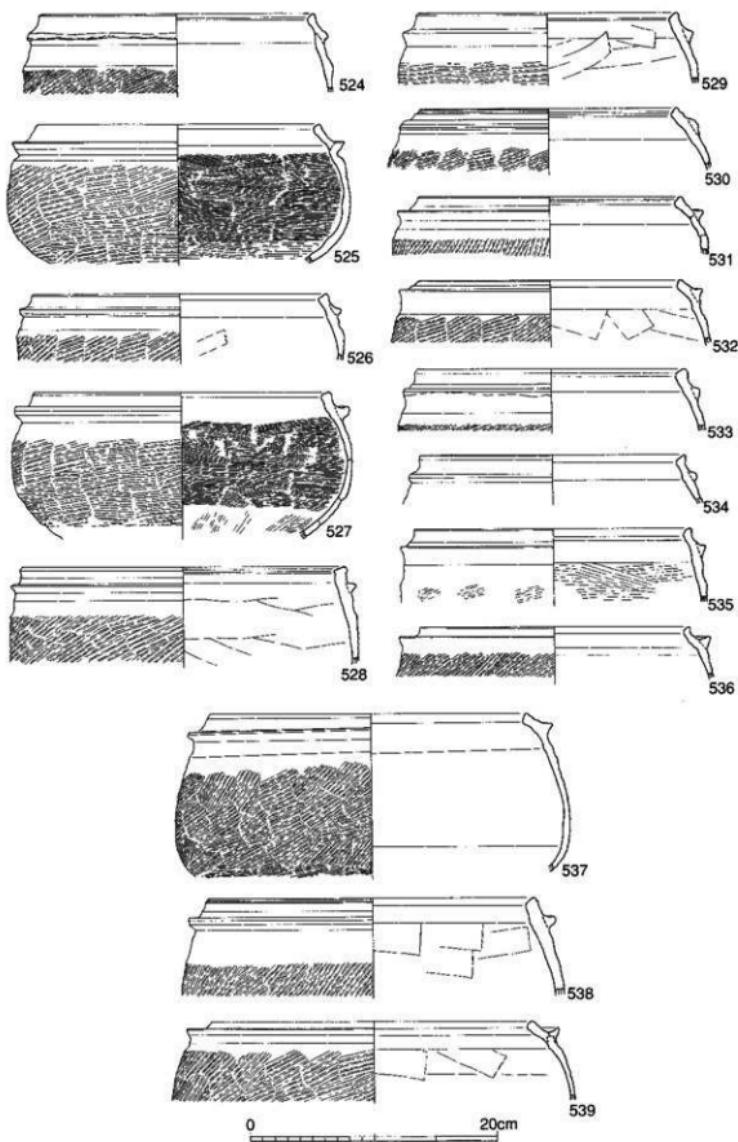
511～543は土師器釜Bと分類したもので、最も出土量の多い器種である。丸みをもった底部と内窓しながら延びる体部に、短い窩状の断面三角形の突帯を有した後軽く内傾する口縁部をもつ。底部と体部の境の最大径部分が突帯よりも大きいため、下ぶくれの体部となっているものが多い。口縁端部は丸く收めるものと明確に内傾する平坦面をもつものがある。ヨコナデ調整は、口縁部から突帯を貼り付けるまでの調整だけでなく、さらに突帯の下部にもヨコナデが及び、平行叩き目をスリ消す状態のものである。また、法星からも17～20cm、20～25cm、28cm前後の3種類に細分類できそうである。体部外面は概して平行叩き仕上げ、内面は板ナデのものが多く、削毛調整のものもある。擂磨系の鍋と呼ばれ、底部の型づくりが指摘されている³⁸が、底部まで完存するものもなく、明らかにはできていない。なお、体部外面には煤の付着が顕著である。

544・545は土師器鍋Aとしたもので、体部はほとんど欠損し、口縁部は体部から外折して延び、端部は丸く上方へつまみ上げられる。体部外面は平行叩き仕上げ、内面は板ナデ調整である。なお、体部外面には煤の付着が顕著である。

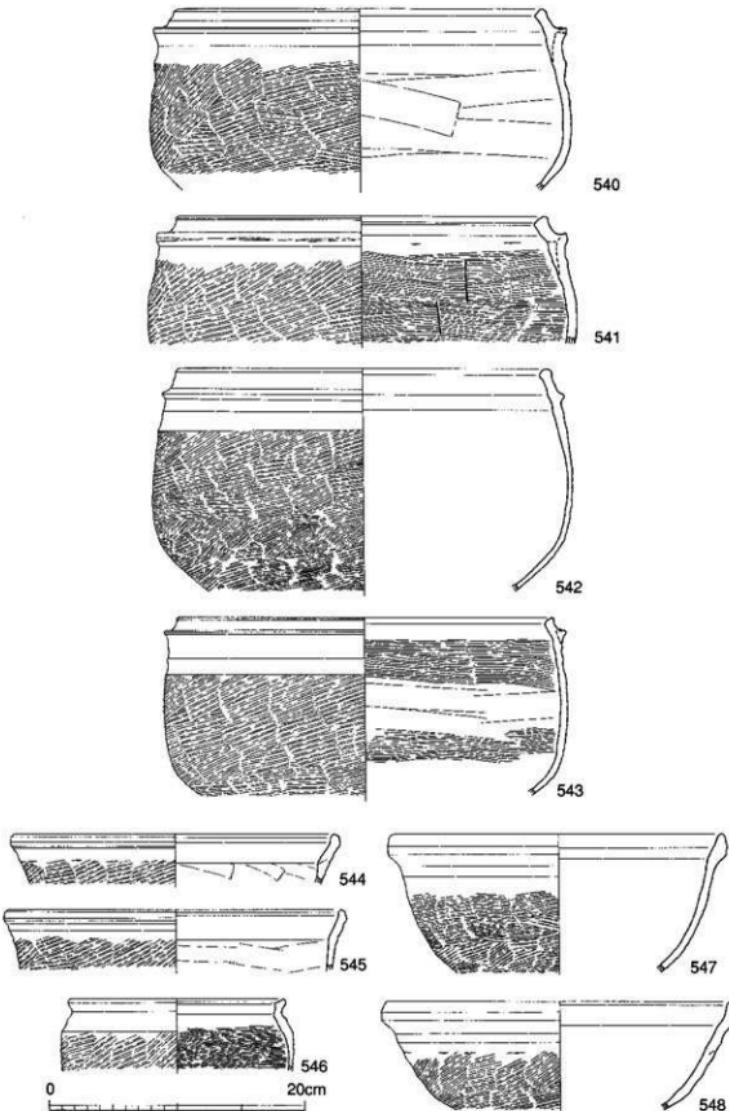
546も土師器鍋Bとしたもので、口縁部が短く外傾して延び、端面は内傾する凹状である。体部外面は平行叩き仕上げ、内面は横削毛調整である。なお、体部外面には煤の付着が顕著である。



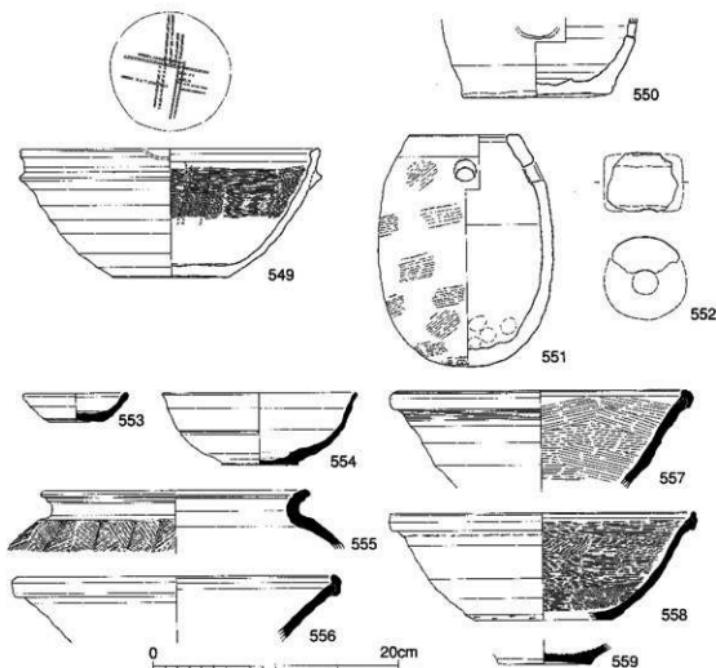
第162図 SD01出土土器 (1)



第163図 SD01出土土器 (2)



第164図 SD01出土土器 (3)



第165図 SDO1出土土器 (4)

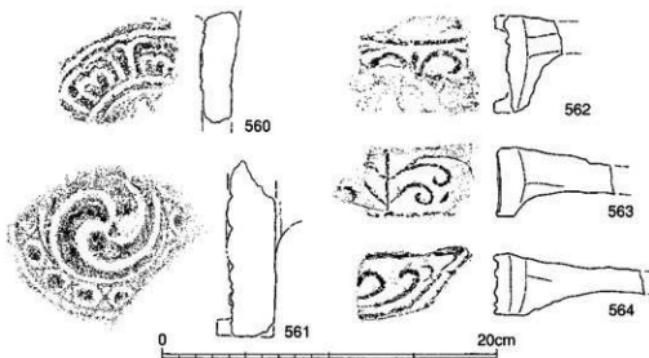
547・548も土師器縞Cとしたもので、比較的浅く丸みのある底部をもつものか。口縁部は外方へ拡張され、小さな正線状を呈する。体部外面は平行叩き仕上げで、内面は板ナデを含むナデで仕上げられる。なお、体部外面には煤の付着が顕著である。

549は土師器縞²⁷で、片口部は欠損する。底部から斜め上方に内湾気味に延びる体部に、端部の外面直下に突帯を1条盛らす口縁部をもつ。口縁端部は内方に若干拡張され、内傾する平坦面である。体部内面には10~12条/cmの横刷毛調整の後、粗い棒状の工具で見込み中央で直行する横目を施す。また、体部外面の下端には横方向の付い幅広で、単位の長いヘラ削り調整が施される。底部外面は回転糸切り未調整である。なお、見込み部分は使用によって著しく磨滅しており、横目は明瞭ではない。

550は回転糸切り未調整の平底から斜め上方に延びる体部をもつ。体部には復元径約3cmのスカシ様の円孔が穿たれる。内面は回転ナデによる凹凸が顕著である。

551は磁弾形の蛸壺と考えられ、体部外面には平行叩き調整が施され、直径16mmの紐孔が穿たれる。底部内面には指頭圧痕が顕著である。こうした蛸壺の形態には古代から大きな変化がないとされ²⁸、類品が長崎区二葉町遺跡の13世紀前半のS E 313²⁹からも出土している。

552は直径に比して、長さの短い寸詰まりの管状上鍤である。孔の復元径は2.0cm。



第166図 SD01出土土器（5）

須恵器 553は須恵器皿。回転糸切り未調整の平底から、斜め上方に延びる口縁部をもつ。端部は丸く收める。

554は須恵器碗。回転糸切り未調整の突出する平底から、内湾しながら延び、わずかに端部が外反する口縁部をもつ。内面の見込みは1段くぼんでいる。体部中位には鈍い沈線が1条巡る。

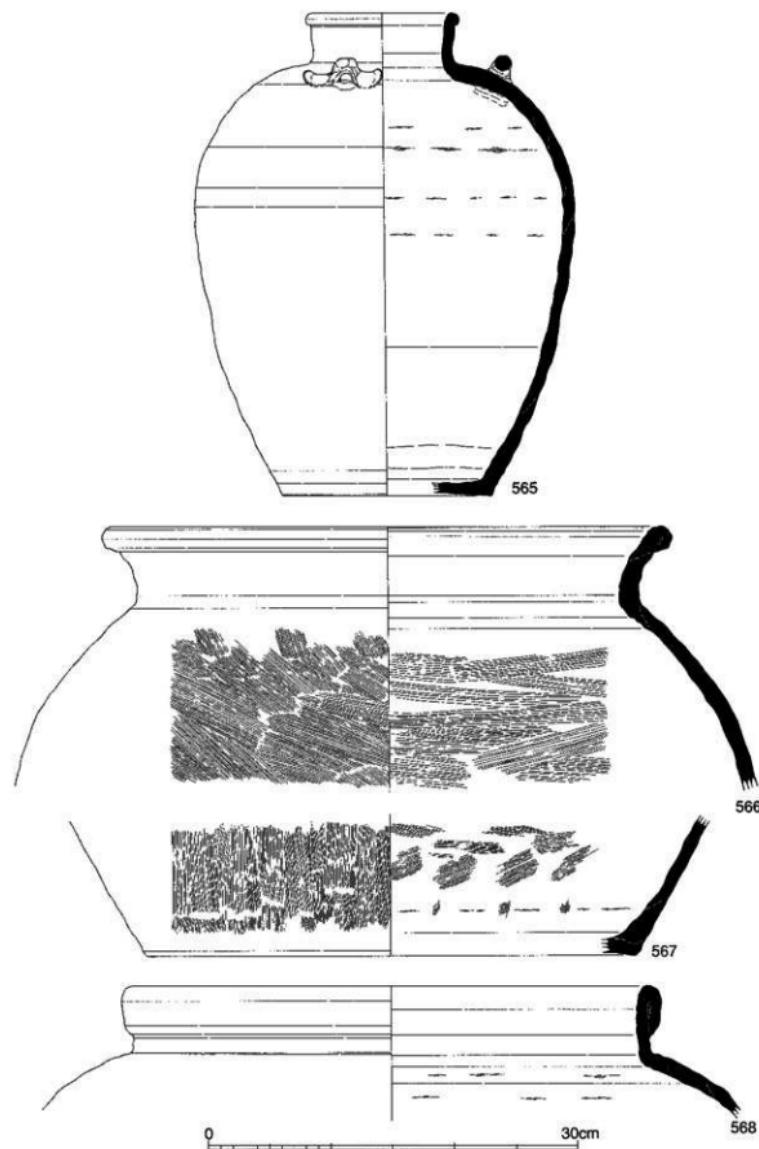
555は須恵器皿の口縁部で、短く外反する丸みをもった口縁部と縦位の綾杉文叩きが施された体部をもつ。

556は須恵器鉢で、口縁端部が上下方に大きく拡張し、大きな端面をもつ。内外面ともに回転ナデ調整。

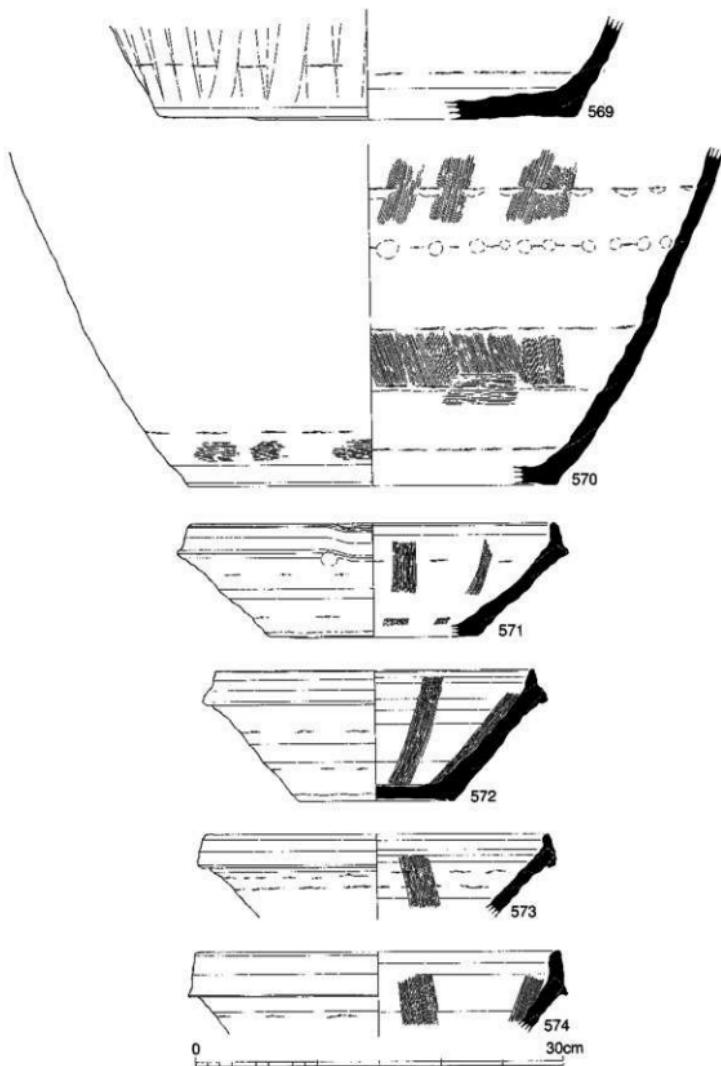
557・558も須恵器鉢で、内面に横方向の刷毛調整が施される¹⁰点が特徴的である。両者とも口縁端部は上下方に大きく拡張される。また、557では口縁部直下外面にカキ目調整、558では外面の体部下端には回転ヘラ削り調整が施される。口縁部形態が類似する資料が海あがりの資料¹¹や赤根川採集の資料¹²にみられ、胎土等の特徴から魚住窯跡で焼成されたものと考えられる。須恵器鉢の最終形態なのかもしれない。

559も須恵器鉢の底部と考えられる。外面は回転糸切り未調整で、周縁には離れ砂の付着が顕著である。内面は見かけが左巻きの幅3cm前後の沈線が巡る。

瓦当 560～564は須恵質の瓦当である。560は棒状の間弁をもつ擬複弁八葉蓮華文で、中房の團線1条が遺存する。神出窯・堂の前支群例¹³と同范であるが、子葉がやせている点、文様の浮き上がりが不鮮明な点、図示した右側の蓮弁に範ズレが認められる点が相異点として指摘できる。561は内区には尾が長く延びる左巻きの巴文を、外区には團線2条に挟まれた珠文帯の珠文間を「×」で埋める文様で、周縁部が欠損する軒丸瓦。瓦当面には0.5～1.0mmの離れ砂の付着が認められる。焼成は甘く、色調は淡乳色で、全体に磨滅が著しい。明石市太寺庵寺に同范の資料が確認できる¹⁴。562は欠損が著しく、文様がほとんど観察できないが、包み込み技法で製作された軒半瓦。563は均整唐草文の中心飾付近、564は均整唐草文の端部で、両者ともに文様は繊細かつシャープである。神山窯・田井裏文群¹⁵と同系の資料である。



第167図 SD01出土土器 (6)



第168図 SD01出土土器 (7)

なお、二ツ屋遺跡出土の資料¹⁰⁾には文様がやや甘くなった同範の軒平瓦がある。

以上の瓦当のはかに、平瓦・丸瓦片が多数あるものの、全形を窺えるものではなく、図化していない。平瓦の調査は凹面では布目を残すものが多く、糸切りあるいはナデで仕上げるものも含まれる。凸面では平行叩き・繩目叩き・粗い格子叩き(2.0×3.5cm角)・ナデで仕上げるものなどがある。丸瓦はいずれも玉縁形態を探る。

備前焼

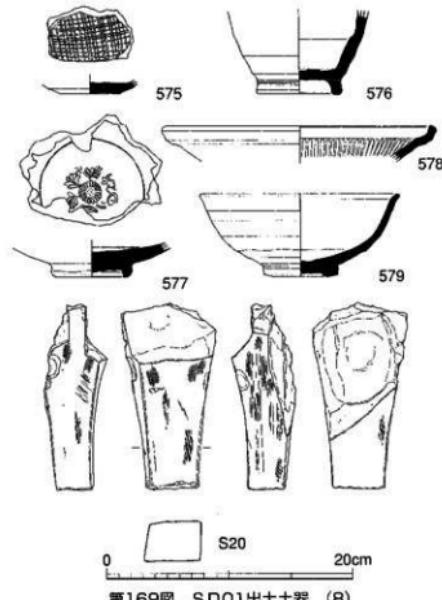
565は備前焼一耳盃で、葉茶盃と呼ばれる形態である。短く直立する口縁端部は玉縁状に丸く收められる。体部は平底で、最大径を中位よりやや口縁部寄りにもつ。肩部には3方向に指頭圧痕が顕著な耳が貼り付けられる。内外面ともに回転ナデ調整で、体部内面上半では粘土紐接合痕が明瞭である。

566と567は同一個体と考えられる備前焼甌である。口縁部は緩やかに外反して延び、端部は折り返して小さな玉縁状に收める。体部は内外面ともに8~10条/cmの刷毛調整が施される。色調は灰色~暗灰色で、肩部には淡黒色~乳黄色の自然釉をかぶる。

568と569も同一個体と考えられる備前焼甌である。口縁部は短く直立し、折り返した端部は大きな平坦面をもつ玉縁形に仕上げられる。体部肩部は内外面ともに不整ナデ、底部外面は板ナデ様の刷毛調整である。色調は暗灰色~暗赤紫褐色である。

570も備前焼底部で、口縁部は不明である。外面は板ナデ様の不整ナデ、内面は10条/cmの刷毛を含む不整ナデ仕上げで、粘土紐接合痕が明瞭である。

571~574は備前焼播鉢である。571では口縁端部が上方に大きく拡張され、三角形に近い



	断面を成す。片口部が遺存する。572・573でも口縁端部が上方へ大きく拡張されるとともに、下方へも余剰粘土を若干下垂させる。574ではさらに口縁端部が上方へ大きく拡張され、端面が大きくなっている。いずれも内面には8~10条の攝目が施される。
瀬戸焼	575は口縁部を欠損する瀬戸焼の鉢皿の底部で、底部外面は回転糸切り未調整である。内面には黄緑色の釉をかぶる。
	576も瀬戸焼の小形壺の底部で、貼り付け高台をもつ。底部外面の一部には回転ヘラ削り調整が施される。
磁器	577は青磁碗の底部で、見込みには草花文と「廿」文様が印陰刻される。高台は低く削り出される。高台裏付から外底見込みは露胎である。釉色は淡青緑色である。
	578は青磁盤の口縁部で、内面には細い陰刻蓮弁が刻まれる。釉色は淡黄緑色である。
	579は白磁碗で、口縁端部がわずかに外反する。高台は低く削り出され、高台の内端面で接地する。高台および外底見込みは施釉されない。釉色は淡灰白色で、露胎は淡乳色である。
砥石	S20は砥石で、4面ともに使用痕が明瞭である。
時期	これらの遺物からみて、壕状遺構の開削は須恵器編・Ⅲ・瓦当の時期から考えて平安時代後期(11世紀後半)以降と推定できる。一方、廃絶の時期については現状で最も編年観の確かと考えられる備前焼 ^① についてみていく。壺・壺・擂鉢の器種があるが、壺は間壁編年IV期A、壺はIV期AからIV期B(古)、擂鉢はIV期B(古)に併行するものと考えられる。こうした中で、枚方市楠葉野田西遺跡の「明應」の紀年銘木簡と共に伴する備前焼擂鉢 ^② がIV期B(古)併行と考えられる上、574と同一形態と判断できることからみて、SD01の資料は15世紀末を下限とする資料として位置付けられると考えている。SD01は室町時代後半(15世紀末)には何らかの理由で人為的に埋められ、廃絶したものと考えている。

〔註〕

- (1) 貝の肉眼観察による同定については奈良国立文化財研究所 松井京氏にお願いした。ここに記して深謝致します。
- (2) 上山健史「堺環濠都市における、15・16世紀の在地土器」『中近世土器の基礎研究』V 1989
- (3) 土師器擂鉢については、黒田恭正氏より懇切なご教示を得た。記して深謝いたします。黒田恭正編『萩原城跡埋蔵文化財発掘調査報告書－第1・3・5次－』神戸市教育委員会 2001
- (4) 古代から形態には大きな変化がないとされるが、図版2-4に類似する形態である。井上繁広「井上コレクションの海あがり遺物」『揖河泉文化資料』第28号 1981 また、ニシノ貝(=アカニシ)と呼ばれる巻き貝を使ったイイダコ壺漁が戦前から瀬戸内海沿岸の明石市林崎～二見の地域で細々と行われていたともされる。
- (5) 発掘調査担当の川上厚志氏よりご教示を得た。記して深謝いたします。川上厚志編『二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査－新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う－』神戸市教育委員会 2001
- (6) 北区淡河町を中心以以下の類例が知られる。
 - ① 萩原城遺跡 8トレンチ SX02 底部出土(16) 岩崎直也・松下智義編 『萩原城

- 遺跡発掘調査報告書』 淡河秋原遺跡調査会 1997
- ② 淡河秋原遺跡 第III次 第12地区 包含層(410)・第IV次 第2地区 包含層(64)
村尾正人・白谷朋世『淡河秋原遺跡 第III・IV・V次発掘調査報告書』 淡河秋原遺跡調査団・備理文 1999
- ③ 淡河中山遺跡 第1トレンチ(28) 阿部嗣治・明元知子『淡河中山遺跡発掘調査報告書I』 淡神文化財協会淡河中山遺跡調査会 1993
- (7) 水口富夫編 兵庫県文化財調査報告第19冊『魚住古窯跡群』 兵庫県教育委員会 1983
- (8) 鈴木信「魚住古窯跡群 遺物の分析」『明石市域の遺跡詳細分布調査(1)-1984/1985年度の調査-』 同志社大学考古学研究室・明石市教育委員会 1987
- (9) 丹治康明「神山古窯址群」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1985
- (10) 黒田清隆・山下俊郎「太寺廃寺」『明石市史資料(考古篇)』第4集 明石市教育委員会 1980 第39図-5
- (11) 註9と同じ
- (12) 前田佳久・井尻格「二ヶ屋遺跡」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1995
- (13) (a)間壁忠彦・間壁度子「備前焼研究ノート(1)~(3)」『倉敷考古館研究集報』第1・2・5号 1966・1968
(b)伊藤晃「15世紀から17世紀の備前焼」『中近世上器の基礎研究』 1985
(c)佐野元「備前焼」鳴瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録『六古窯の時代』 1998
- (14) 下村節子「袖葉野田西遺跡の備前焼描鉢について」『第1回中近世備前焼研究会レジメ集』 1999

第4節 近世の遺構と遺物

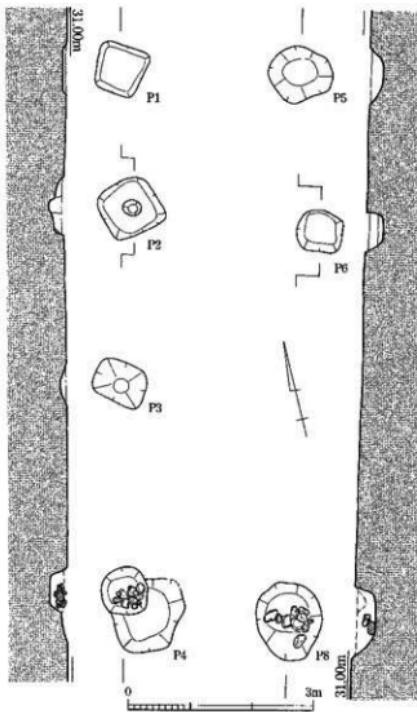
当該期の遺構としては、掘立柱建物跡1棟を検出したにとどまる。このほか、包含層中から出土した鉄釘についても、時期を特定できないため、本節で報告することにする。

1. 掘立柱建物跡

SB05

形状・規模 采行1間（2.8～3.0m）×桁行3間（8.7～9.0m）の建物で、桁行（西側）では座標北から13.5° 東を指向する。なお、P7は検出できていない。柱間距離はP3～4間の3.4mを最大とし、P1～2間の2.3mを最小とし、柱間距離は多様である。P4とP8では根石様の半大～人頭大の円礎が出土している。いずれの柱穴も埋土は乳灰色～黄灰色系の砂質土で、調査区内でこうした土が存在するのはこれらの柱穴のみであった。礎石建物かもしれない。

出土土器 山土遺物はP6からの土師器擂鉢と格子叩き目をもつ土師器炮烙の体部片が出上しているだけである。



第170図 SB05

580は最も形態の特徴をよく示す口縁端部を欠損するため、明確にはできないが、SD01の549に比して口縁部直下の突筋が不明瞭となっており、体部下半が丸みをもって深い感を与える。



第171図 SB05出土土器

底部外面は回転糸切り未調整か、離れ砂が明瞭に遺存する。外面最下部の回転ヘラ削りは明瞭である。内面は6条/cmの横刷毛刺の後、9条単位の搔目が施される。下半は使用による摩滅が顕著である。

時期

土師器棺鉢の特徴と格子叩きをもつ上師器炮烙の出土から、16世紀後半にまで下るものと考えられる。

2. 包含層出土遺物

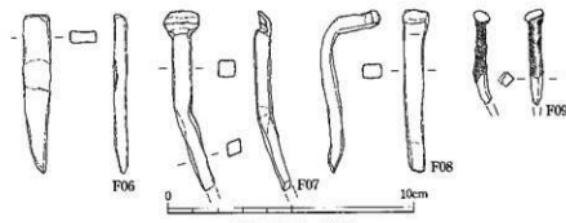
鉄釘

F06～F09は鉄釘⁽¹⁾である。いずれも詳細な時期決定はできないものの、平安時代後期から室町時代後半にかけてのものと考えられる。

F06は平釘と分類されるもので、断面は偏平な長方形である。長さ6.4cm、最大幅1.1cm、厚さ0.5cm。頭部はわずかにつぶれている。F07は頭巻型と分類されるもので、頭部端を叩き伸ばし、若々折り返したものである。長さ7.3cm、頭部幅1.5cmで、基部は0.7×0.7cmの断面正方形である。脚部中位で折れ曲がり、先端部は欠損する。F08は基部端部がそのまま頭部となる切り離し型と分類されるもので、脚部上位で折れ曲がっている。長さ6.6cm、頭部は0.5×1.0cm、基部は0.6×0.8cmの断面長方形である。F09は頭巻型と分類されるもので、脚部先端は欠損する。頭部は0.6×0.9cmで梢円形を呈し、基部から木質が遺存する。

〔註〕

(1) 以下、鉄釘の分類と記述は次の文献に拠った。千種浩「金属器」『神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 1993



第172図 鉄釘

第4章 ま と め

第1節 弥生時代後期～古墳時代初頭の土器

はじめに 前章第2節で報告したとおり、42棟の住居跡および数基の土坑から比較的一括性の高い土器が出土している。特に住居跡出土の土器については、直接住居跡に伴うと考えられる一群（下層出土上器）と、住居の廃絶跡に一括投棄されたと考えられる一群（上層出土上器）とが認められる。また、住居跡相互に切り合い関係も認められる。

そこで、これら住居跡群の変遷を捉える前提として、土器の分類を行い、これをもとに時期の検討を行いたい。

（1）土器の分類

土器の分類にあたっては、土器の出土量は多いものの、完形もしくは完形に復元された土器は多くはない。このため、口縁部を中心に分類を試みるとともに、個々の土器相手の個体差を考慮に入れ、細密な分類は避けることにする。また、土器の分類と合わせて、時期を特定できるものについては、そのつど検討していくことにする。

土器の分類 当該期の土器としては、壺形土器・菱形土器・鉢形土器・高環形土器・器台形土器の各器種が出土している。以下、器種ごとに分類を行う。

1. 壺形土器

口縁部形態を中心に、複合口縁壺・広口壺・長頸壺・細頸壺・短頸壺・直口壺・銷壺・小型丸底壺に分類できる。

複合口縁壺 頸部から口縁部の形態を中心に、長頸壺の形態をとり口縁部を櫛描波状文によって装飾するタイプ（A）、口縁部上半の立ち上がりが長いタイプ（B）、Bに対して口縁部上半の立ち上がりが短いタイプ（C）、口縁部外面に突堤状に粘土を貼り付け複合口縁を呈するタイプ（D）、口縁部上半を強いて横ナデ調整により外反させることにより複合口縁状を呈するタイプ（E）の5タイプに分類できる。

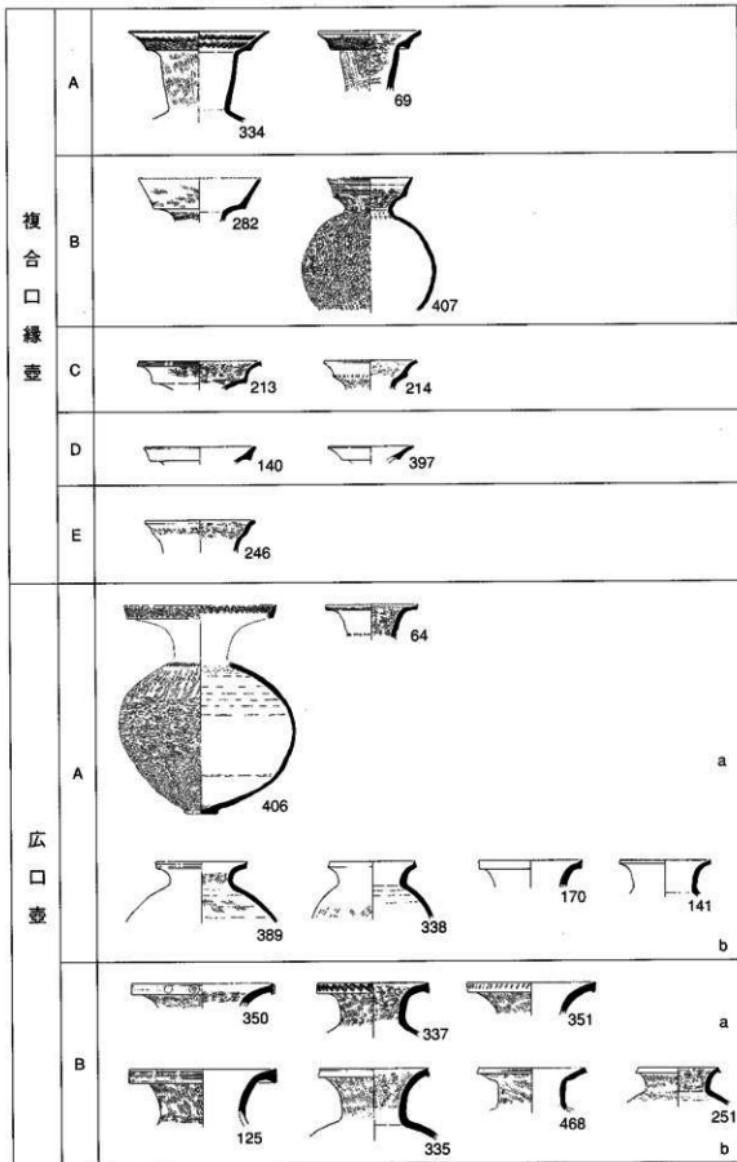
Bタイプ・Cタイプについては、庄内併行期に位置付けられる土器である。また、Eタイプについては、後期後半に位置付けられる。

広口壺 口縁部特に口縁端部の形態を中心に分類する。まず、口縁端部を上方に大きく拡張し明確な端面を有するタイプ（A）、口縁端部を上下方向に拡張するタイプ（B）、口縁端部を下方へ拡張するタイプ（C）、口縁端部をわずかに拡張を意識したナデ調整を施し、端面を有するもの（D）、口縁端部を丸く収めるタイプ（E）に細分できる。

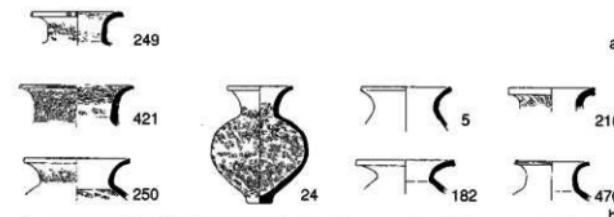
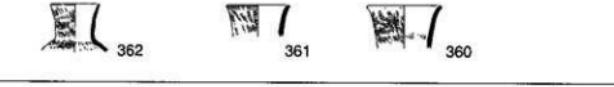
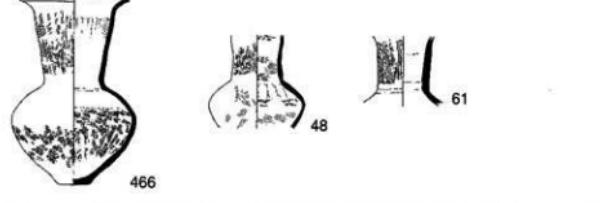
さらに、Aについては端面に櫛描波状文等の装飾が認められるもの（a）と認められないもの（b）とに細分可能である。B・C・Dについても、△と同様の細分が可能である。

長頸壺 小型のタイプ（A）と大型のタイプ（B）に分類できる。Aについては後期中葉、Bについては後期前半～中葉にかけて、それぞれ盛行する形式である。

細頸壺 47の1個体のみである。後期後半に盛行するタイプである。

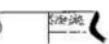
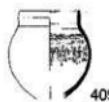
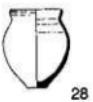


第173図 窒形土器の分類 (1)

	C		a b
広口壺	D		a b
	E		
	A		
長頸壺	B		
細頸壺			

第174図 壺形土器の分類 (2)

短頸壺 口縁部が斜方向に外反気味にのびるタイプ (A)、斜方向にわずかに直線的にのびるタイプ (B)、口縁部が直立気味に内湾しながらのびるタイプ (C)、口縁部が直立気味もしくは

短 頸 壺	A	 23	 90		
	B	 326			
	C	 409	 28		
	D	 424	 92		
直 口 壺	A	 164	 165		
	B	 460			
銷壺		 178	 163		
小型 丸底 壺	A	 331	B	 403	
	C	 131	 404	 144	 402
				 461	

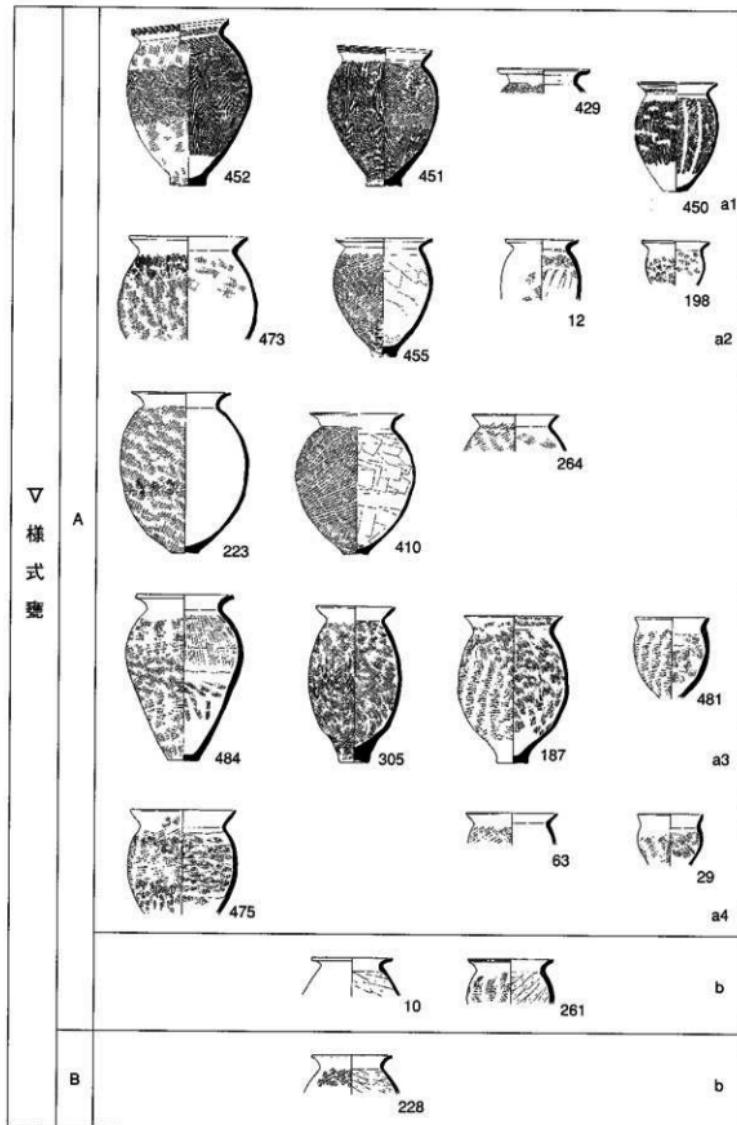
第175図 土器の分類 (3)

斜方向に直線的にのびるタイプ (D) に細分できる。Cについては、体部形態が長胴傾向にあり、Dについては、より球形に近い傾向にある。

直口壺 大型のタイプ (A) と小型のタイプ (B) に分類できる。Aについては、庄内併行期を中心とした時期に盛行するタイプである。

銷壺 2個体出土しているのみである。形態的には差が認められるが、2個体のみの出土であることから、個体差なのかどうか判断できない。

小型丸底壺 体部に対して口縁部が短く頸径が狭いタイプ (A)、Aタイプより頸径が広いタイプ (B)、



第176図 变形土器の分類 (1)

A・Bよりも頸径が広く口縁部が長いタイプ(C)、に細分できる。

これらの土器は、後期後半に出現し、庄内併行期・布留式期に流行する形式である。

2. 塗形土器

大きく、いわゆるV様式系甕・丹波系甕・布留式傾向甕の3タイプに分類できる。

V様式系甕 外面のタキ目が平行タキのもの(A)と羽状タキのもの(B)に大きく分類できる。

Aタイプ 体部内面をヘラ削りにより仕上げるもの(b)と、ヘラ削りによらず仕上げるもの(a)とに分けることができる。底部は平底であるが、一部に丸底傾向にあるものも認められる。

aについては、口縁端部の形状を中心に、端部のつまみあげが顕著なタイプ(1)、つまみあげを意識した横ナデ調整を施すタイプ(2)、端部につまみあげを意識した横ナデ調整を施さず端部を丸く收めるタイプ(3)、口縁部が全体的に内湾傾向にあるタイプ(4)に細分できる。また、(1)～(3)の3タイプについては、法量的に大中小の差が認められる。

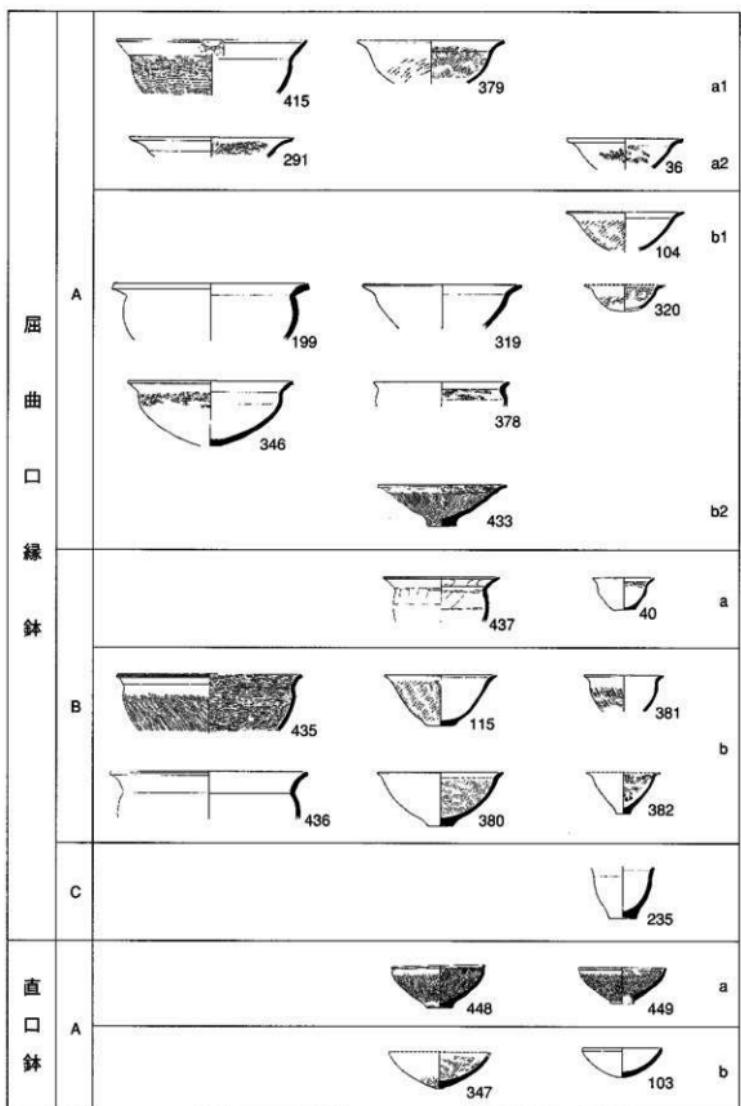
bについては、口縁端部のつまみあげが顕著なタイプ(1)と、つまみあげが認められないタイプ(2)に細分できる。出土量が少ないため、法量的な差については検討できない。

Bタイプ 出土量が少ないため、細分は困難であるが、体部内面をヘラ削りにより仕上げるタイプ(b)と、ヘラ削りによらず仕上げるもの(a)とに分けることができる。

丹波系甕 196の1個体のみである。口縁部の形態的特徴から判断したものである。口縁部は複合口縁状をなすが、擬凹線は認められない。以上から、この土器は、庄内併行期の特徴を示すものと考えられる。

V 様 式 甕	B		445		444		446	a
			196					
丹波系甕			129		122		130	
布留式甕			197		13			
その他								

第177図 塗形土器の分類 (2)

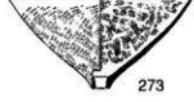


第178図 鉢形土器の分類 (1)

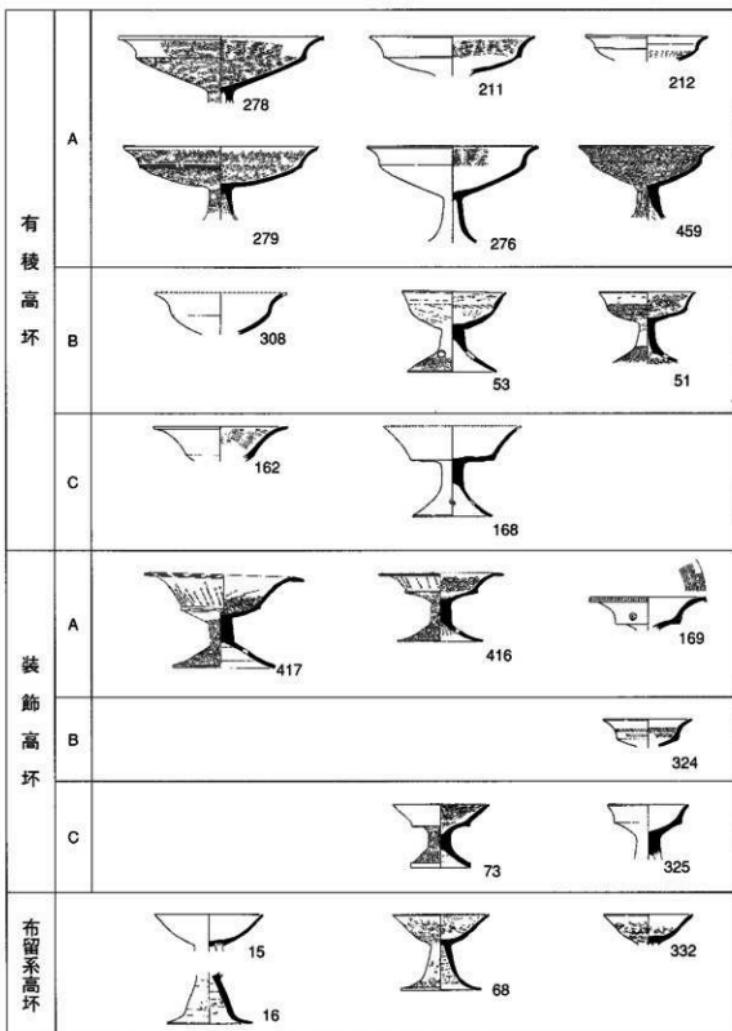
布留式傾向集 当タイプについても、出土量が少ないため、細分は困難である。口縁部の特徴から、布留式初頭と考えられる。

3. 鉢形土器

- 大きく、屈曲口縁鉢・直口鉢・台付鉢・有孔鉢・有段鉢・小型丸底鉢に分類できる。
- 屈曲口縁鉢** 口縁部をく字形に屈曲させるタイプである。口径と器高の比を基準として、口径に対して器高が低い浅鉢タイプ（A）、口径に対して器高の高い深鉢タイプ（C）、そしてAとCの中間のタイプ（B）の3タイプに大きく分けることができる。
- Aタイプ** 口縁端部をつまみあげるタイプ（a）と、つまみあげないタイプ（b）に細分できる。aタイプは大中、bタイプは大中小の法量上の差が認められる。また、bタイプについては、体部外面をタタキ整形により仕上げるもの（1）と、タタキ整形が認められないもの（2）がある。
- Bタイプ** Aタイプ同様、口縁端部をつまみあげるタイプ（a）と、つまみあげないタイプ（b）に細分できる。また、a・b両タイプとともに、法量的に、大型・中型・小型の3段階が認められる。
- Cタイプ** 235の1個体のみである。
- 直口鉢** 屈曲口縁鉢同様、口径と器高の比により、口径に対して器高が低い浅鉢タイプ（A）、口径に対して器高の高い深鉢タイプ（C）、AとCの中間の中鉢タイプ（B）の3タイプに大きく分けることができる。
- Aタイプ** 底部形態を基準に、平底タイプ（a）、丸底もしくはそれに近いタイプ（b）に細分できる。両タイプとも、胎土が精良で、丁寧に仕上げられている。法量的には、小型～中型品のみである。bタイプについては、その底部形態から判断して、庄内併行期から布留式期にかけての時期が考えられる。
- Bタイプ** Aタイプ同様、底部形態を基準に、平底タイプ（a）、丸底もしくはそれに近いタイプ（b）に細分できる。bタイプについては、59の1個体のみである。aタイプについては、法量的に、大型・中型・小型の3段階が認められる。ただし、大型のタイプについては、屈曲口縁鉢の大型品と比較して、かなり小型である。
- Cタイプ** A・Bタイプと異なり、すべて平底である。ただし、体部外面の仕上げ方法が、タタキ整形のみによるものと、タタキ整形が認められないものとがある。
- 台付鉢** 脚部が短いタイプ（A）と長いタイプ（B）とが認められる。Bタイプについては、101の1個体のみである。Aタイプについては、法量的に、大型・中型・小型の3段階が認められる。ただし、大型品については、直口鉢と同規模である。
- 有孔鉢** 量的には少ないが、平底に穿孔されたもの（A）と、丸底に穿孔されたもの（B）の2タイプが認められる。両タイプとも小型品は認められない。Aタイプには大型品も認められる。
- 有段鉢** 口縁部に帯状に粘土を貼り付け、体部との境に段が認められるものである。434の1個体のみである。
- 小型丸底鉢** 体部に対して口縁部が短いタイプ（A）と、長いタイプ（B）が認められる。いずれも、後期後半以降、庄内併行期に盛行する型式である。

直 口 鉢	B			
				
	a			
台 付 鉢	C			
				
有 孔 鉢	A			
	B			
有 段 鉢	A			
	B			
丸 底 鉢	A			
	B			

第179図 鉢形土器の分類 (2)



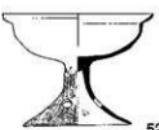
第180図 高環形土器の分類 (1)

4. 高環形土器

大きく、有稜高坏・装飾高坏・布留系高坏・皿形高坏・丹波系高坏に分類できる。

有稜高坏 口縁部と体部の高さの比により分類する。

Aタイプ 体部に対して口縁部高が短いもの。後期前半の指標となる型式である。

	B		242
皿形高坏	B		49
	C		307
	A		349
丹波系高坏	B		52

第181図 高坏形土器の分類 (2)

Bタイプ Aタイプより口縁部高が高く、口縁部高と体部高がほぼ同じもの。後期中頃の指標となる形式である。

Cタイプ A・Bタイプと比較して、明らかに口縁部高が体部高を上回るタイプである。体部が深みを有するタイプ(a)とほとんど深みがないタイプ(b)とに細分できる。後期後半の指標となるタイプである。

装飾高坏 有稜高坏Cとはほぼ同形式であるが口縁部と体部の境が突帯状をなすもの(A)、同じく有稜高坏Cと同形式であるが内面に柳描波状文を施すもの(B)、内面には明確な体部と口縁部の変化点が認められず外間にのみ明確な変化点が認められるもの(C)に分類できる。

また、Aタイプについては、口縁部に柳描波状文等の装飾を施すタイプ(a)と、施さないタイプ(b)に細分できる。

当形式の高坏については、後期後半から庄内併行期にかけての時期を示す型式と考えられる。

布留系高坏 基本的には、有稜高坏Cと同形態である。外側の体部と口縁部の変化点が緩やかなものを特徴とする。また、内外面ともハケ調整を主に仕上げられている。布留式初頭の指標となるものである。

皿形高杯 体部と口縁部の境が不明瞭な高杯である。杯部の法量により、杯部が浅く直線的なタイプ（A）、杯部が浅く皿形を呈するもの（B）、Bタイプより深いタイプ（C）の3タイプに細分できる。

丹波系高杯 丹波・丹後地域に特徴的な高杯である。ただし、明らかに当該地域から搬入されたものは認められない。口縁部外端面に擬円線を施すタイプ（A）と施さないタイプ（B）に分けることができる。特に、Aタイプについては、庄内併行期を中心とした時期に特徴的な型式である。

5. 器台形土器

器台と小型器台の2タイプに大きく分けることができる。

器台 口縁部の形態を中心に、複合口縁をなすタイプ（A）、口縁端部を拡張し外端面に装飾を施すタイプ（B）、口縁端部を拡張しないタイプ（C）の3タイプに細分できる。

Aタイプについては、大型（a）と小型（b）の2タイプに分けることができる。aタイプについては、いわゆる淡路型器台と称されるもので、後期後半から庄内併行期に特徴的なタイプである。

またCタイプについては、卡津田中遺跡出土例等から判断して、後期前半に特徴的なタイプと考えられる。

	A			
器 台	B			
	C			
小 型 器 台				

第182図 器台形土器の分類

小型器台 わずか2個体しか出土していないため、細分は困難である。庄内併行期から布留式期にかけて特徴的なタイプである。

(2) 一括資料の検討

はじめに 今回報告する住居跡を中心とした一括性の高い資料を中心に時期を検討していく。時期については、近年当該期の上器編年が細分化されているが、本報告では、従来の第V様式を前・中・後の3時期に区分し、これに庄内併行期と布留式期を加えた5期（以下、I期・II期・III期・IV期・V期と呼称）に分けて検討する。これら5時期のなかで、新旧が認められる場合は、そのつど考慮することにする。以下、遺構ごとに検討していく。

- SH01** 有稜高環Aの共伴から、I期に位置付けられる。
- SH02** SH01同様、有稜高環Aの共伴から、I期に位置付けられる。
- SH03** 上層出土土器については、丹波系高環A・有孔鉢Bの共伴からIV期と考えられる。南東隅一括出土土器群については、細頭壺・長頭壺・丹波系高環B・有稜高環Bの共伴から、IV期と考えられる。下層出土土器についても、直口鉢B bの共伴からIII期と考えられる。
- SH04** 長頭壺の共伴から、II期に位置付けられる。
- SH05** 布留系高環の共伴から、V期と考えられる。
- SH06** 複合口縁壺A・装飾高環Cの共伴から、IV期を中心とした時期と考えられる。
- SH07** 布留式壺の共伴から、V期と考えられる。
- SH08** 当遺構出土土器のなかには、時期を特定できる型式が認められない。ただし、壺の底部に尖り底を指向するものも認められることから、III期を中心とした時期が考えられる。
- SH10** 直口鉢A b、および装飾高環の脚部（105）の共伴から判断して、III期からIV期に位置付けられる。
- SH11** 時期を特定できる形式を欠く。しかし、小型壺および鉢の底部に尖り底化・丸底化の傾向が認められることからIII期からIV期に位置付けられるものと考えられる。
- SH12** 出土量がわずかで底部のみの出土である。いずれの底部も退化傾向にあることから、あえて時期を判断すると、III期に位置付けたい。
- SH14** SH12と同様の理由で、III期に位置付けたい。
- SH15** 布留式壺の共伴から、V期に位置付けられる。
- SH16** 広口壺Bが時期を検討しうる材料である。当タイプは後期中葉に多く出土することから、当該資料についてもII期と考えたい。
- SH17** 布留式壺および小型丸底壺Cの共伴から、V期に位置付けられる。
- SH20** 有稜高環Aが出土しているものの、小型丸底壺C・複合口縁壺Dの共伴から、IV期を中心とした時期が考えられる。
- SH21** 有稜高環C aの共伴から、III期に位置付けられる。
- SH23** 直口壺A・有稜高環C・装飾高環Aの共伴から、IV期を中心とした時期が考えられる。
- SH26** 上層出土土器については、一見、有稜高環Aの共伴から判断して後期前半～中葉と考えられるが、丹波系壺の共伴からIV期まで下るものと考えられる。下層出土土器については、複合口縁壺C・複合口縁壺E・器台A bの出土から判断して、IV期を中心とした時期が考えら

れる。以上から、上層出土土器との前後関係を考慮に入れると、上層出土土器をIV期後半、下層出土土器をIV期前半として理解しておきたい。

- SH27 有稜高環Aが数個体出土していることから、I期に位置付けられる。
- SH28 上層出土上器については、複合口縁壺B・小型器台の共伴から判断して、V期と考えられる。下層出土土器については、出土量が少なく時期を特定できる土器が出土していないが、上層出土土器より古い時期が考えられる。さらに、SH37との切り合い関係から判断して、IV期を中心とした時期に位置付けたい。
- SH31 有稜高環Bの共伴から判断して、III期と考えられる。
- SH32 装飾高環B・装飾高環Cの共伴、および丸底鉢Aの共伴から、IV期と考えられる。
- SH34 布留系高環・小型丸底壺Aの共伴から、V期に位置付けられる。
- SH35 複合口縁壺A・丹波系高環A・届出口縁鉢Aの共伴から、IV期に位置付けられる。
- SH36 長頸壺A・有稜高環Aの共伴から判断して、II期と判断される。
- SH40 小型丸底壺がまとまって出土していることから、V期に位置付けられる。
- SH41 複合口縁壺B・装飾高環A・器台A aの共伴から、IV期に位置付けられる。
- SH42 器台Bの共伴から、IV期を中心とした時期が考えられる。
- SK04 有稜高環Aの共伴から、II期と考えられる。
- SK08 小型丸底壺C・小型丸底鉢Dが共伴していることから、V期に位置付けられる。
- SK14 長頸壺B・有稜高環A・器台Cの共伴から、I期に位置付けられる。
- この他、SH25については、時期を特定できる形式が認められないが、壺・鉢の形態的特徴からIII期に位置付けられるものと考えられる。

以上をまとめたのが、以下の第2表である。

第2表 一括遺物の時期

時期	住居跡								土坑
I期	SH01 SH02 SH27								SK14
II期	SH04 SH16 SH36								SK04
III期	SH03下層 SH08 SH12 SH14 SH21 SH25 SH10 SH31 SH37								
IV期	SH03上層 SH06 SH11 SH20 SH23 SH26上層 SH26下層 SH28下層 SH32 SH35 SH41 SH42								
V期	SH05 SH07 SH15 SH17 SH22 SH28上層 SH34 SH40								SK08

(註)

多賀茂治「玉津田中遺跡出土土器の検討－弥生時代後期～古墳時代前期の土器」『玉津田中遺跡－第6分冊－』兵庫県教育委員会 1996

西村 歩「和泉北部の古式土師器と地域社会」『下田遺跡－都市計画道路常磐浜寺線建設に伴う発掘調査報告書－』財團法人 大阪府文化財調査研究センター 1996

第2節 住居跡の変遷

はじめに 前節での各住居跡出土土器の分析から、住居跡の変遷を簡単にまとめることにする。ところで、住居跡出土土器の報告においては、いくつかの住居跡で、住居跡に直接伴う上器（下層出土上器）と、住居跡廃絶後に一括投棄されたと考えられる土器（上層出土土器）とに区分してきた。そこで、各住居跡の時期については、下層出土上器の示す時期をもとに検討することにしたい。

また、前節の分析において、良好な出土資料を欠く住居跡についても、他の住居跡との切り合い関係等から判断できるものについては、これを参考とした。

住居跡の変遷 前節の上器の検討から、住居跡の変遷を以下のようにまとめることができる。

I期 S H01・S H02・S H27の3棟から構成される。ただし、S H01とS H02は比較的近接することから、微妙な時期差が考えられる。住居跡の平面形は円形のみである。

II期 前節の検討に加え、S H09についても、S H06・S H10・S H11との位置関係および出土土器から当該期に位置付けられる。さらに、S H29についても、S H28・S H30・S H31・S H37と隣接することと、出土上器から判断して、当該期に位置付けられる。

計5棟の住居跡からなり、調査範囲では散在する傾向にあるが、S H04を除く4棟が一つの単位とみることもできる。住居跡の平面形は円形に方形が加わる。

III期 前節の検討に加え、S H24についても、V期のS H22との切り合い関係およびIV期のS H23との位置関係から、当該期に位置付けたい。

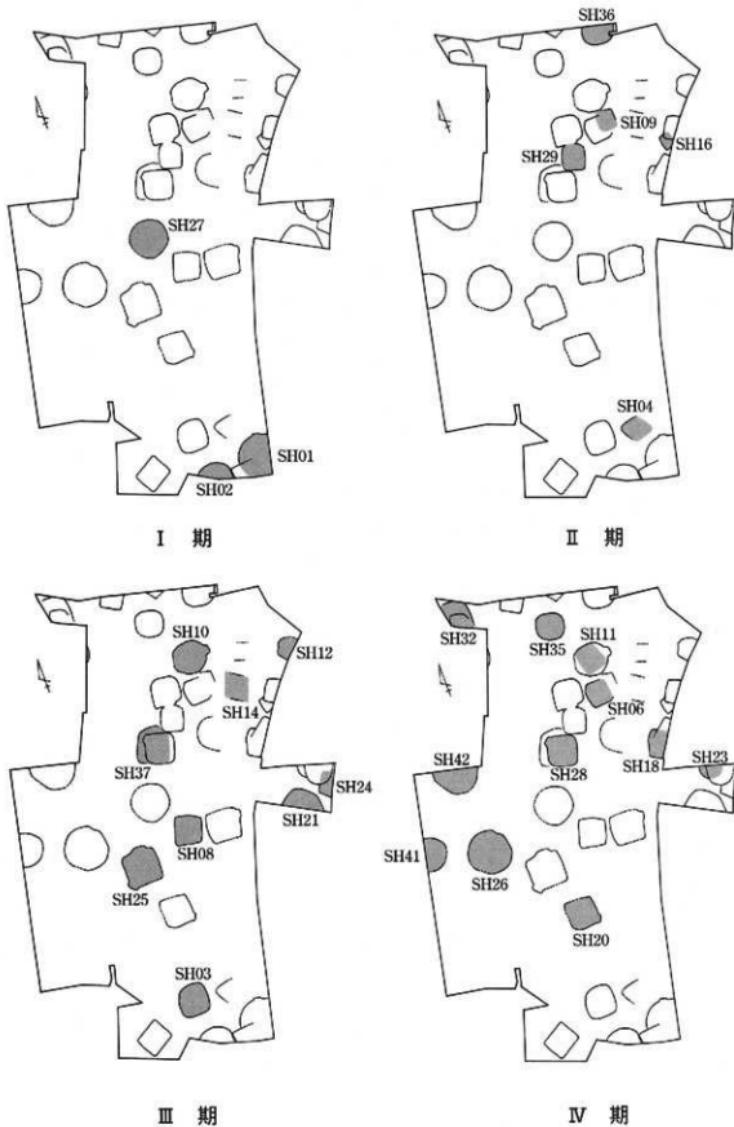
以上から、当該期の住居跡は9棟に増加する。S H31とS H37が比較的近接する以外は、散在する。

IV期 前節の検討に加えて、S H22がIV期のS H23を切るために、当該期に位置付けられる。また、S H18についても、V期のS H17との切り合い関係から、当該期に位置付けられる。

当該期の住居跡が11棟とその数が激増し、当集落のピークを迎える。これに呼応するかのように、S H37 > S H28・S H10 > S H11のように、前期の住居を切る形で、新たに住居が建て替えられる。また、前期のS H03が投棄場となり、ほぼ埋没する。以上の動きが、空閑地があるにもかかわらず認められることは、土地利用、具体的には居住域に何らかの規制が

第3表 住居跡の変遷

I期				S H01	S H02	S H27
				S H04	S H29	
II期	S H16			S H09	S H36	
				S H12	S H21	
III期	S H03 S H08 S H10			S H37	S H14	S H24
				S H26	S H06	S H32
IV期	S H03 S H18 S H11 (埋没) ↓ (建替)			S H23	S II28 ↓ (建替)	S H20 S H35 S H41 S H42
				S II26 (埋没)	S H05	S H07 S H34 S H40
V期	S H17 (建替)			S H15	S II22 (建替)	S H28 (埋没)



第183図 住居跡の変遷 (1)

存在したものと考えられる。

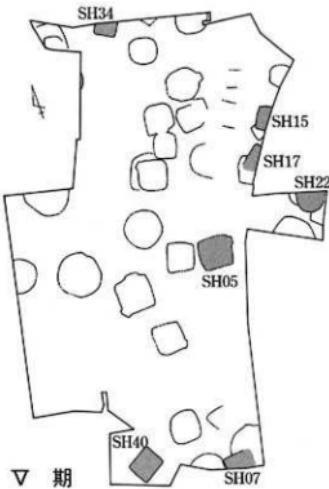
ただし、上記の住居跡間には近接傾向にあるものは認められず、ほぼ共存していたものと考えられる。一方、SH26に認められるように、当期のなかでも居住→廃絶の動きが認められることから、一定の時期幅の存在も否定できない。

なお、住居跡の平面形は、円形と方形がほぼ同率で認められる。

V期 住居跡が7棟と激減し、当期をもって集落は終焉を迎える。前期と同様、SH18→SH17・SH23→SH22・SH16→SH15のように、前期の住居を切る形で建て替えが行われる。また、前期のSH28は、当期において投棄場となり、埋没する。住居跡の平面形は、SH22を除いては方形となる。

まとめ 以上、5期にわけて住居跡の変遷を検討してきた。この結果、住居跡の数からみると、IV期に当集落のピークを求めることができる。また、各時期において、住居が数棟を単位として建てられているようである。

なお、SH13・SH33・SH38・SH39については、出土土器および他の遺構との切り合い関係等、いずれからも時期を特定することができなかった。弥生時代後期から古墳時代初頭に位置付けられることはまちがいない。



第184図 住居跡の変遷 (2)

第3節 弥生時代後期から古墳時代初頭の石器 —砥石を中心として—

はじめに　口輪寺遺跡では合計26点の石器が出土している。そのほとんどは住居跡埋土中からの出土であり、それ以外のものは表面採集されたものが1点のみである。ここでは、日輪寺遺跡における石器のあり方を整理しておく。

石器組成　その内訳は砥石9点、台石3点、石皿3点、磨石・敲石5点、搬入砾3点、楔形石器1点である。石器組成で見ると、いわゆる利器としての石器は抜け落ちてしまっている。このうち、楔形石器については他にサヌカイトの剥片、チップを全く見ないため、口輪寺遺跡において、當時サヌカイトの流通があり、それを石器石材として利用していたとは考えにくい。混入品と考えているが、あるいはサヌカイト流通が途絶えたあとも集落内にストックされた分割原石などを利用したものである可能性も全くないわけではない。しかし、いずれにせよ、恒常的なツールとして機能していたとは思われないのである。日輪寺遺跡における石器組成の傾向であるが、砥石をはじめとする、加工具、調理具などが石を素材として製作され使用されている状況である。このように砥石が高い占有力率を示すのは弥生時代後期の集落では通常の現象で（齋宮田1998）日常道具としての利器が鉄器に移行した証左となるものである。明石川流域では、表山遺跡においてV-0期の段階で、石製の利器が組成から抜け落ちる状況が確認できる。表山遺跡では石鎚、投弾など武器は残るが、その他の石器は、砥石、台石、石皿であり、当遺跡と同じ傾向をみる。玉津田中遺跡でも弥生時代後期の住居跡から砥石、敲石が出土している。とくにSH54006では砥石^①と敲石のセットが確認できる。また、播磨大中遺跡第7-C号住居跡からは、砥石3、台石1といった組み合わせになっている。

ここで当遺跡での同じ住居跡から出土した石器群を整理しておく。

- SII25 砥石2
- SII27 磨石、砥石
- SII34 楔形石器、砥石、敲石
- SII35 砥石、石皿、敲石
- SII36 敲石、石皿2、台石1、砥石2

住居一棟あたりの砥石保有量はほとんどが1個であるが、SH36のように複数の砥石を持つ事例が確認できる。砥石は大きさ、材質、形態などによって、さまざまな使い分けが行われたことが想定され、就中同一住居跡内に存在する複数の砥石はそれぞれが異なる機能を行っていたとみてよかろう。このような出土状況は、家族単位で複数の砥石を管理し日常的に使っていたことを示唆するものと言えよう。

砥石の検討　弥生時代の砥石は石器または鉄器の成形や刃付けなどに用いられる道具である。日輪寺遺跡では、鉄器や磨製石器の出土を見ないため、具体的に加工対象を提示することはできないが、石器組成や磁面に観察されるシャープな縦条痕の存在をもって、鉄製利器を対象としたものと考えたい。

第4表 出土砥石一覧表

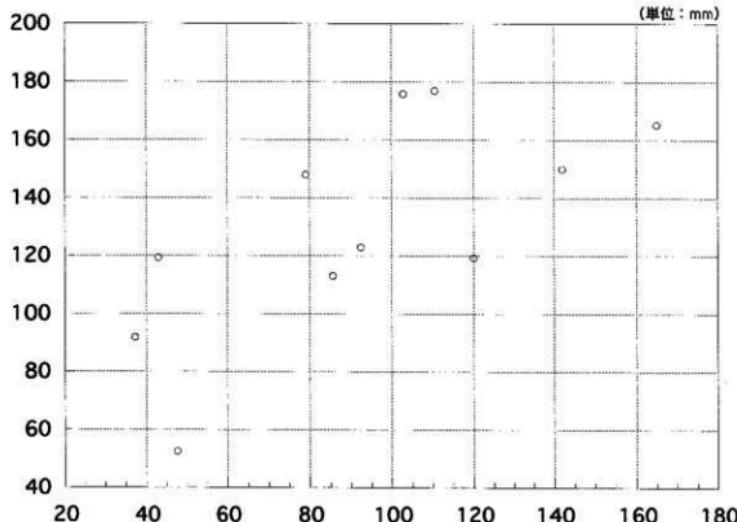
No.	長さ	幅	厚さ	重さ	造構	作業面	石材	備考	深さ	強度
S 2	148	79	57.9	858.3	S H05	4	流紋岩質凝灰岩		4	79
S 4	123	92.4	91.1	1300	S H11	4	凝灰質砂岩	端部欠失	123	92.4
S 6	52.5	17.7	21.2	63.2	S H25	4	凝灰質砂岩	半分欠失	52.5	47.7
S 7	175.8	102.8	36	720.3	S H26	4	流紋岩質凝灰岩	欠失多い	175.8	102.8
S 8	119.3	43	18	108.6	S H27	4	泥岩		119.3	43
S 10	177	110.5	57	1969	S H30	2	凝灰質砂岩		177	110.5
S 11	91.9	37.2	35.2	131.2	S H34	5	凝灰岩		91.9	37.2
S 15	119.3	120	53.8	878.2	S H36	5	凝灰質砂岩		119.3	120
S 16	113	85.5	45	429.7	S H36	1	砂岩		113	85.5

(単位:長さ・幅・厚さ・深さmm、重さg)

砥石は加工対象物との摩擦によって、必ず砥面が形成される。ここでいう砥石とは砥面の確認できる石のことである。出土した石器のうち砥石と認定したものは9点ある。砥石に用いられている石材は砂岩・凝灰質砂岩・泥岩・凝灰岩の4種類である。石材は書き記した順に円が細くなる。

形態 砥石の形態を決定する要素としては、採取した石材の形、摩滅による形態変化の2つが主に考えられる。

今回検出したものの中には特に意図的に形を作りだしたような形跡は確認できなかったが、出土したもののうち形態がわかるものはすべて直方体を呈し、円形や不定形のものは見られない。いずれも使用による摩滅のため、中央部は窪んでおり、端部で最大幅を測る。横断面



第185図 砥石長幅比

形を見ると、正方形に近いもの（S4、S11）、厚めの長方形様のもの（S2、S10）、薄い板状のもの（S6、S7、S8、S15）の3つに分かれる。全長で見ると完全に遺存しているものはないが、（a）5cm前後のもの、（b）10cm前後のもの、（c）15cm前後のものといった3類型に分類できる。このような差異は、加工対象物の大きさ、または、地面に設置するか手に持つかといった使用方法に関わるものであろう。ひいては、それらに応じて工具を保有していた、とも類推することができる。すなわち、斧や鎌などの大型農工具類と、刀子、ヤリ、ガンナなどの小型の刃器などが考えられよう。

砥石の使用痕 山上した砥石はいずれもよく使い込まれ、使用された面は研ぎ減りのため強く産んでいる。

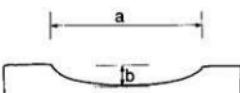
砥面について、横断面形を観察し比較したところ、大きく3つに類型化することができる。

第186図に示した方法で、その度合いを数値化し、窪みの絶対的な深さ、そして、砥面の弧度を把握してみた。この結果、（A）弧度が0.08～0.1の値を示すもの、（B）弧度が0.04～0.06の範囲に収まっているもの、（C）ほぼ平坦で縦方向に窪みや凹みが形成されるものの3つに群に分かれた。さらに砥面を細かく観察すれば、S4のようにほぼ一様に全体が窪むものと、S15のように一つの砥面に小さな窪みの単位がいくつも形成されているものがある。概して、前者は（A）類のような強い弧度を呈し、後者は（B）類のような弱い窪みをもしくは（C）類のように平坦な砥面を有する傾向にある。こうした、横断面形や底面形成状況の差異は、加工対象物、あるいは作業内容との強い相関が伺われる。なお砥面上には、（A）～（C）のいずれの類型にも、断面がV字形を呈するシャープな線条痕が認められる。

（A）類のような強い弧度を呈するものは、長い直線的な刃を研ぐ場合にはあまり適しておらず、小型の曲刃などを繰り返し研ぐ過程で変化したものであろう。あるいは右皿として機能したことでも想定すべきかもしれない。（A）類の石材は砂岩と流紋岩質凝灰岩であり、粒の大きさに規則性は見られない。

石材との相関を見ると、（C）類と凝灰岩や泥岩などのきめ細かい石材との関連が伺われる。これらは仕上砥、あるいは刃先の補修などに用いられたものかもしれない。当遺跡出土品の中で（C）類に相当するのは2点あるが、どちらも中型で掌中に収まる大きさであるため、設置するのではなく手持して細かい補修などをこなした可能性が考えられる。いずれにせよ、使っていく過程で砥面の窪みは進行していくため、その時々の状況によって使い方も変わっていくであろうし、砥面の補修や分割成形といった砥石自体の再加工もなされたであろう。

石材について 当遺跡で出土した石器に用いられている石材は、ほとんどが支流域も含めた明石川水系のなかで入手可能なものはかなりである。近隣の河原などから採集されたのである。少數ではあるが、礫石などに六甲山系の石材である花崗閃緑岩が見られる。敲石、磨石といった鍛石器には、細粒花崗岩、花崗閃緑岩などの深成岩が用いられている。石皿には砂岩、細粒花崗岩、凝灰岩が用いられる。台石には凝灰質砂岩が用いられている。砥石は砂岩～凝灰質砂岩が7点、凝灰岩が3点、泥岩が1点である。



第186図 砥面の弧度

まとめ

以上、日輪寺遺跡出土石器を概観した。報告例が少ないため、いささか推測の域を出ないが、その特徴を整理しておく。

- ・出土した砥石は、石材（粒度）、大きさ、砥面の形成状況などから、いくらかの使い分けがおこなわれていたことが想定される。
- ・砥石については複数出土した住居は1棟だけであるが、上記のように出土した砥石にバリエーションが認められること、そして玉津田中遺跡、播磨大中遺跡など同時期の集落にも出土例がみられる事から、むしろ住居単位での複数保有が一般的であったと考えられる。
- ・石器の住居単位での基本的なセットは、複数の砥石、台石、敲石、磨石、石皿の5種類であったと思われる。
- ・石器に用いられる石材は、遺跡周辺で採集されるものを利用している。敲石、磨石については六甲山麓の遺跡から入手した可能性もある。

以上4点を強調しておきたい。

このような傾向は、近隣の同時期集落の報告例が増すことによって、さらに具体的な把握が可能となることが期待される。今後の資料の増加を待ちたい。

【註】

(1) 玉津田中遺跡SH54004出土砥石は石皿としての機能が推定されている。

【参考文献】

兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡』 第3分冊一 兵庫県文化財調査報告 第135-3冊 1995

兵庫県教育委員会『衣山・池ノ内群集墳』 兵庫県文化財調査報告 第202冊 2000

播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館『播磨大中遺跡の研究』 1990

第4節 SD01出土の土師器について

第3章第3節で報告したように、SD01からはまとまった量の土器が確認された。時期が遡る資料を含んではいるものの、検出状況からみて一括性の高い資料群と考えられる。

搬入品として扱える備前焼についてはすでに詳述し、擂鉢である限り、開闢編年IV期B(古)の15世紀後葉～末葉にわたる期間が想定できたので、ここでは在地産と想定される土師器の様相について検討してみよう。

さて、室町時代後半とされる当該期の資料は、日輪寺遺跡を含む明石川流域ではそれほど知られておらず、芝崎遺跡¹¹と神出遺跡¹²が挙げられる程度で、東播磨の臨海部に視野を広げても大差はない。芝崎遺跡では、壺状遺構から十脚器の釜・鍋が確認されており、播磨加茂遺跡例¹³との比較検討から15世紀後半～16世紀前半の時期を比定されている。当資料を考えいく上で示唆に富むものの、備前焼の資料が欠如している点が比較検討する材料としては乏しい。神出遺跡8608T2区土壙8T2出土の一群も、神出窯・魚住窯産の須恵器類とともに土師器鍋・釜がまとまっているが、全形を窺える資料に乏しいうえに、同様に備前焼の資料は欠如している。したがって、これまでしばしば取り上げられ、土師器の出土器種が豊富である播磨加茂遺跡の堀上層出土資料(B群)について、ここでは再検討を加えていく。

まず、備前焼では開闢編年IV期Bを中心とする擂鉢がまとまって出土している。これらの資料のうち、逆「く」字形に内折する口縁部の上端が面取りされ、内傾する端面を明確にもつIV期B(新)のものがあり、IV期B(古)とした日輪寺遺跡の擂鉢よりも新相を示すものが多く含まれている点がまず指摘できる。ここでは播磨加茂遺跡のB群の資料を16世紀前半を下限とする資料として扱うこととし、以下備前焼の擂鉢に共伴する土師器の鍋・釜について日輪寺遺跡および芝崎遺跡の資料と比較しながら検討していく。(以下、遺跡を省略して記述する。)

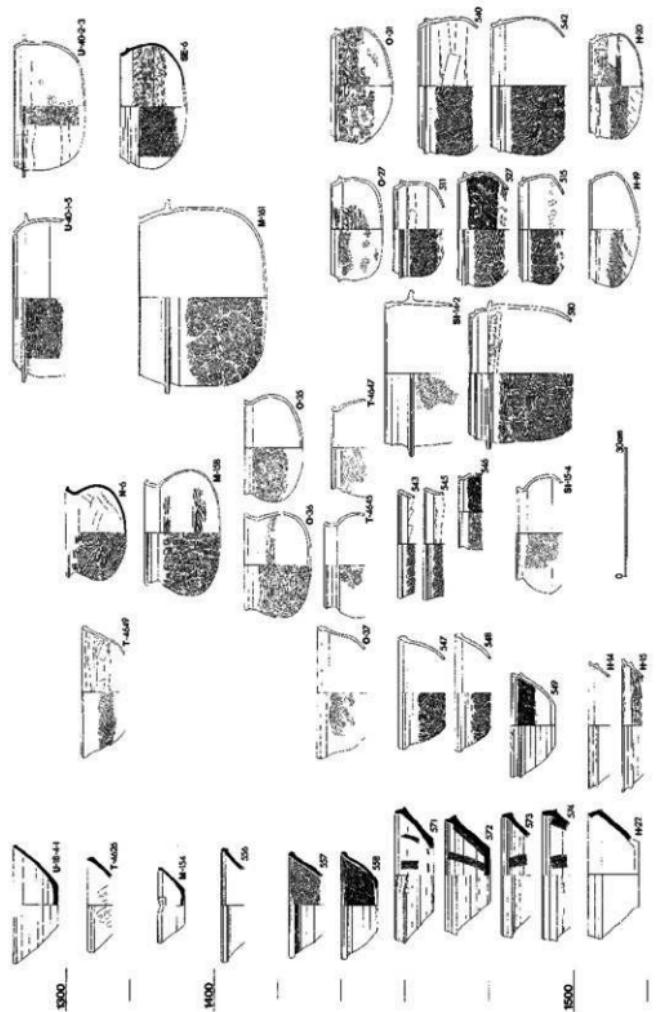
加茂十鍋II・III類は堀の下層から多く検出されたため、古い傾向をもつ資料群ともされるが、器形や調整の特徴から後代に出現する炮烙の祖形となった土器群と考えておきたい。十河良和氏の分析¹⁴にも合致するものと考えられ、系譜的には日輪寺釜Bに後続する形態であろうか。

加茂土鍋IV類もII・III類と同様に日輪寺・芝崎ともに存在せず、西播磨地方の地域色を示す資料であろうか。加茂土鍋V～VII類は分類が不明瞭とも見え、個別にみた場合、日輪寺鍋AあるいはCと同一形態のものを含んでおり、芝崎十鍋I類に近い形態を探るものも含んでいる。更なる類例の増加が望まれる。

加茂土釜I類の一部(91)は口縁部が1段低いものの、日輪寺釜Aあるいは芝崎羽錦IIa類と類似する形態で、やや新相を示すものか。加茂土釜II類は日輪寺・芝崎ともに存在しない。

加茂十釜III類は日輪寺釜Bに最も近似する形態を探るが、全形を窺える資料が少ない。口縁端部と突帯の形態が日輪寺遺跡とは明らかに異なり、体部最大径部も中位付近にあるものが多く、体部最大径が口径を凌ぐものはほとんどない。

また、日輪寺と芝崎を比較していくと、芝崎遺跡には日輪寺鍋C・釜Bもしくは擂鉢は存



第187図 土師器類・釜の変遷
U 金住古窯跡 M 津ノ原遺跡
T 工津田中遺跡 SE 西条ニユータウン内第7号地点遺跡
H 滝河・東河遺跡 H 大国山遺跡 SI 芝崎遺跡

在しない。日輪寺鍋Bは芝崎土鍋II類として存在し、播磨加茂遺跡には存在しない形態である。東播磨の地域として把握できる可能性も指摘できるが、時期的な特徴なのかもしれない。また、釜のII縁部形態では芝崎羽釜IIa類と日輪寺釜Aが同一形態で、芝崎羽釜IIb類は層位的に古相を示す可能性が示唆され、日輪寺釜Aは芝崎羽釜IIb類に後出することが判る。さらに、日輪寺釜Bは芝崎羽釜I類とされるものに類似する。

さらに、神出遺跡の長鈞型羽釜は芝崎・日輪寺と同一型式と考えられるが、短鈞型羽釜は鉗（尖帯）が明確に突出する形態のものから不明瞭なものまでが混在することから、型式的には幅が最も広いものと考えられる。

このように4遺跡の資料を比較検討してみると、自ずとそれぞれのまとまりが抽出できよう。すなわち、播磨加茂遺跡土鍋II・III・IV類、十釜II類は、神出遺跡・芝崎遺跡・日輪寺遺跡には存在しない器形で、時期的に新相を示すものと考えられる。そして、日輪寺遺跡の資料は播磨加茂遺跡と重複する様相を最も多く示している。さらに、芝崎遺跡の資料は日輪寺遺跡とはほぼ同時期で、若干古相を示すものが含まれており、神出遺跡の資料では短鈞型羽釜ではさらには古式の様相を示すものが含まれていると言えよう。

以上のように、ある程度の見通しがついたところで、これまで同じような時期に比定されてきた土師器鍋・釜類がまとまって確認されている周辺地域の資料について比較検討しながら、さらに編年への見通しを考えてみたい。

まず、上師器の鍋・釜の器種構成でみると、日輪寺遺跡例は加古川流域の大國山遺跡例^③とよく似た傾向を示すことが判る。15世紀前半に比定されてきた火葬墓に伴う資料群で、釜について大國山遺跡の資料と比較していくと、器形はほぼ同一形態を採るもので構成され、叩き調整が尖帯直下まで施されている点が指摘できる。遺跡の性格が火葬墓であることから、特に共伴した備前焼はいずれも型式的には古相を示し、伝世品を使用した可能性が高く、15世紀前半でもII頃に近い時期を想定するのが概ね妥当ではないかと考えている。

また、淡路・伊堂城跡^④では瓦窯出土の上師器釜の一群が知られる。15世紀後半に比定され、日輪寺とはほぼ同時期あるいはやや古相を示すものと考えられる。それを比較すると、平行叩きは尖帯の直下まで施され、口縁部が内傾するものと内湾するものがある。また、日輪寺で鍋Bとしたものも少なからず含まれている。玉津田中遺跡S F84002^⑤で示される土師器釜も日輪寺遺跡例とはほぼ同時期か若干下る時期のものと考えられる。

以上検討してきたように、須恵器鉢あるいは壺前焼播鉢に共伴する土師器の鍋・釜について、各器種別に全形が窺える資料を中心に変遷模式を第187図に示した。特に、14世紀代では良好な資料に恵まれないため、いま判然とはしない部分が多い。以下、この模式図を使って土師器器種の変遷を年度概観してみよう。

まず、釜については大型品と中型品で変遷が異なっていくようである。大型品では、発達した口縁部をそのまま維持しながら変遷する。鉢は徐々には形態化していくが、当初からの羽釜としての機能は何とか存続していたものと考えられる。一方、中型品ではいわゆる羽釜の鉢が短くなりながら変遷し、鉢が形態化・退化した上で尖帯となり、後代の炮烙へと続いくようである。器形では体部が扁球形の丸みをもつものから、下ぶくれのものへと変遷し、さらには丸みを失い、体部が直立気味のものとなる。最大径が鉢にあったものが体部最

大径部へと変化し、やがては口徑と体部最大径がほぼ同一になる。体部の叩き調整も口縁下まで施されていたものがナデによって口縁部から下位へとスリ消され、ヨコナデの範囲が拡大していくようになる。この過程での形態的な変化は極めて鈍く、各個体をそれぞれ時期比定できるほどの積極的な根拠を捉ふできない。

鍋については、外傾して延び、端部を大きく外方へ拡張する口縁部と扁球形の体部からなるものが2系統に分化するものと考えている。口縁部の形態そのものには顯著な変化をみせず、体部の張りを失いながら変化し、日輪寺鍋Aへと変遷する流れと、体部の変化が鈍く、もっぱら口縁部の高さを減じながら、端部の拡張がさらに顯著になった上で、体部の張りが下位へ移動し、扁平になり日輪寺Bあるいは芝崎鍋II類へと流れる系統を考えられる。日輪寺鍋Cは玉津田中遺跡S E84001⁽³⁾の鍋から変遷するものと考えたが、類例が乏しく判然とはしない。

最後に、土師器擂鉢について若干検討してみよう。先にも触れたように黒田氏が示す編年表⁽⁴⁾がある。その中で、a類と分類された擂鉢は、淡河東畠遺跡⁽⁵⁾の園地遺構とされるSG2で共存した備前焼・土師器鍋などを基にして、16世紀前半期に位置づけておられる。この資料中の備前焼は口縁部が大きく発達した間窓編年IV期B（新）に併行するものと捉えられ、日輪寺遺跡例よりも明らかに新相を示すものである。そして、これに共存する釜も体部のヨコナデによる叩き調整のスリ消しの範囲が拡大しており、同時期まで下るものとみた。そして、擂鉢は口縁部直下の突帯が断面三角形で、突出しているものである。但し、日輪寺遺跡の土師器擂鉢と比較すると、体部から口縁部が直線的で、開き気味になっており、器形が異なるものかもしれない。いずれにしても、その出自は明らかにできないものの、15世紀末にはすでに成立していた器種と言えよう。

ここで、興味深いのは上師器擂鉢の底部外面に離れ砂がみられる点と体部最下位にヘラ削り調整が施される点である。備前焼の急速な普及に押され、後退の一途をたどった須恵器製作工人たちの微妙な動きがその背景に想像できる。神出窯あるいは魚住窯では操業当初から瓦陶兼業で須恵器生産を行っており、離れ砂の使用は瓦製作には普遍的に認められた技法である。また、先にみた刷毛調整が施された上、体部最下位にヘラ削り調整を施した須恵器鉢(558)も同様に示唆に富む。さらに、魚住40号窯⁽⁶⁾でも知られるように、刹釜を還元焰焼成する努力も行っている。今後類例がさらに増加しないと、明言できないものの、備前焼の最新技法を模倣しながら須恵器あるいは土師器の製作を継続しようとした当地域の土器製作工人たちの強い意志が働いているものと考えられ、中世段階でも土師器・須恵器双方の工人間で情報交換が行われた結果を反映したものと言える。

以上、須恵器鉢あるいは備前焼擂鉢の型式変遷に依拠して、在地の上師器鍋・釜について検討を加えた。土師器皿の変遷については全く言及できていないことに加え、年代比定の根拠が乏しく、浅学のため早計に過ぎる点も多いと思われる。今後大方の叱正を乞うものである。

〔註〕

- (1) 藤田 淳編『兵庫県文化財調査報告第53冊『芝崎遺跡－一般国道175号線拡幅工事に伴う発掘調査』』兵庫県教育委員会 1988
- (2) 神崎勝・徳原多喜雄・山仲進『神戸市西区神出町 神出 1986－神出古窯址群に関する遺跡群の調査－』妙見山麓遺跡調査会 1989
- (3) 秋枝芳・山本博利『姫路市文化財調査報告V『加茂遺跡－姫路市飾磨区加茂字小寺・太ノ前一』』姫路市教育委員会 1975
- (4) 十河良と『堺環濠都市遺跡川上土の土師質土器・炮烙について』『関西近世考古学研究』IV 1996
- (5) 別府洋二編『兵庫県文化財調査報告書第110冊『一般県道飾東宝殿停車場線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－大國山遺跡』』兵庫県教育委員会 1991
- (6) 水口富夫編『兵庫県文化財調査報告第113冊『叶堂城跡－原川激甚災害対策特別事業に伴う発掘調査報告書』』兵庫県教育委員会 1992
- (7) 鈴木敬二「古代・中近世の土器」兵庫県文化財調査報告第135-3冊『神戸市西区玉津町遺跡－第3分団（狭間・唐上地区の調査）－町内特定土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会 1995
- (8) 本文で取り上げていない資料で、実測図を掲載したものは以下のとおりである。
 - (a) 口野博史「西神ニュータウン内遺跡（第7地点）」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1990
 - (b) 西口半介・吉識雅仁・久保弘幸・岸本一宏「溝ノ尾遺跡」兵庫県文化財調査報告書第62冊『吉野ダム建設に伴う発掘調査報告書（2）』兵庫県教育委員会 1988
 - (c) 丹治康明・阿部敬生「淡河・山村遺跡」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
- (9) 註7と同じ
- (10) 黒田恭正編『萩原城遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書－第1・3・5次－』神戸市教育委員会 2001
また、西口半介氏も17世紀前半までの土師器鉢について分類検討され、論及されている。西口主介編『兵庫県文化財調査報告書第194冊『二田城跡発掘調査報告書』』兵庫県教育委員会 2000
- (11) 岩崎清也「東畑・南浦遺跡発掘調査報告書」御阪神文化財調査会 1999
- (12) 寺島孝一編『魚住古窯跡群発掘調査報告書－中尾上地区画整理事業に伴う－』明石市教育委員会・平安博物館 1985

第5節 中世の日輪寺遺跡をめぐる諸問題

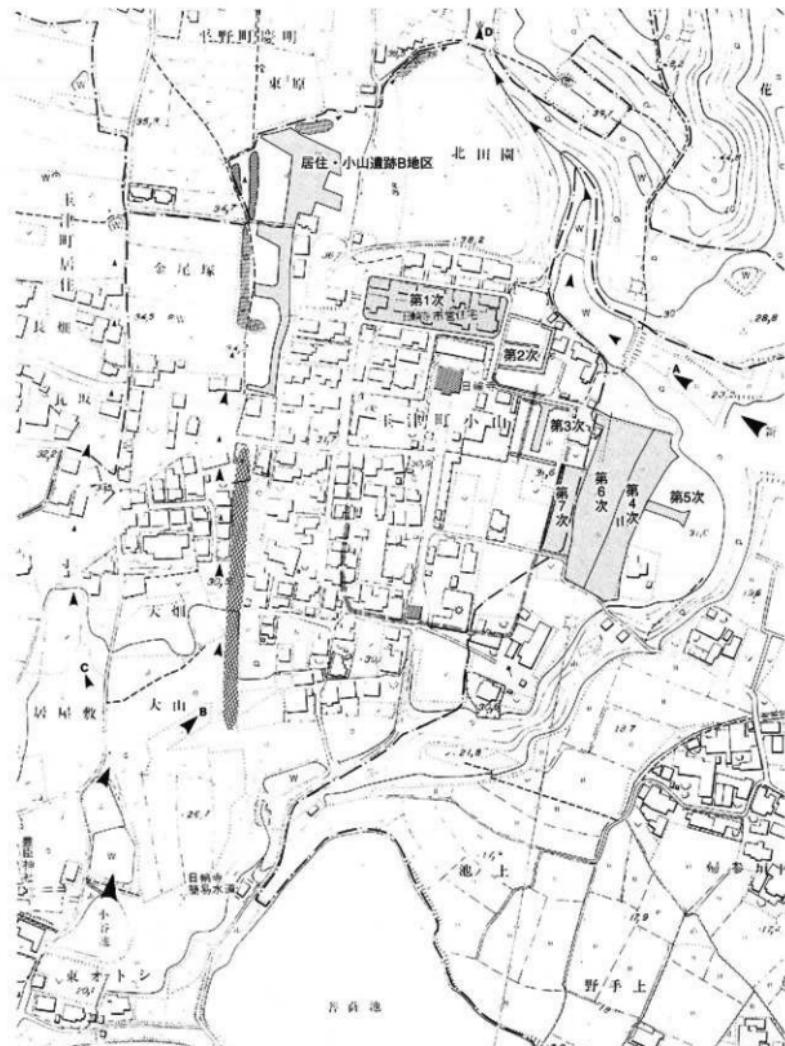
第3章第3節で報告したように、第7次調査地点では、中世の日輪寺に関連すると推定される室町時代後半の遺構・遺物が確認できた。

さて、日輪寺は太山寺を頂点とした明石郡内の強大な天台教團の一翼を担った寺院⁽¹⁾として知られている。『吉光山日輪寺記⁽²⁾』によれば、聖武天皇時代（奈良時代）に行基が開創したとされ、その後講堂・食堂・五重塔が建立されていたとされる。元徳元年（1329）には自然災害のため諸堂が壊れ、鏡に諸堂を移して再興したものの、天文年中（1532～1554）には阿波の三好衆が乱入した兵火のため焼失したとされる。この後本尊を安置する一堂が建立されて現在に至るとされる。

まず、現在の日輪寺の立地について検討してみよう。北から延びてくる緩傾斜の丘陵から段丘面へ降りてきた平坦面に占地していることが判る。昭和35年当時の地形図での判斷では、現在の本堂がこの背後の丘陵裾部をわざわざカットして營まれていることも判る。段丘崖上端と丘陵裾との間の平坦面で、ある一定の距離を確保するための地割を行ったためであろうか。現本堂と山門を結ぶライン（N 8° E）の延長線上の段丘を下った南側には、日輪寺開創の行基が造成したとされる菩薩池がある。さらに、東側から北東側は段丘崖と、新池から始まって南東方向から入り込む支谷（A）が発達し、自然の要害となっている。一方、本堂の西側から北西側にかけては緩やかな傾斜面が続き、ここでは自然地形の起伏がそれほど顕著ではないように見える。しかし、詳細に観察すると、西南方に小谷池から始まり、南から入り込む支谷が形成されていることが判る。そして、第188図のとおり、この支谷は2方向に分かれ、一方の小支谷（B）は居住・小山遺跡のB地区⁽³⁾の西端に接して存在する2条の土塁状遺構あるいは通称セツツ池と呼ばれる灌漑溜池へと続く。この土塁はすべて盛土で構成され、南北方向（東側の土塁N 9° E）の土塁状遺構の延長線上にある灌漑溜池も掘削様の遺構の名残と想定できるものである。また、一方の小支谷（C）もほぼまっすぐ北方向へ入り込み、両支谷に挟まれた舌状の丘陵部が形成されている。この舌状の丘陵部には居住・小川遺跡のB地区で確認された占墳の存在と、「金尾塚」という字名から埋没古墳の立地も想定できる。

以上述べた小支谷（B）から続く南北方向の谷筋が日輪寺の西の構えを構成していたものと推定できる。さらに、この小支谷（B）に沿った東側には、等高線が大きく乱れる幅の狭い南北方向の区画が連続していることもこの想定を裏付ける根拠になろう。

さて、第7次調査のSD01は第3次調査⁽⁴⁾で確認された築地状遺構（1区S X01・Ⅲ区S X05）の約26m東側で、この遺構にはほぼ平行する方向性を示す。これらの遺構は中世の日輪寺に関連した寺域東辺の区画を意図した遺構と考えられる。第4～6次調査地点では同様の区画を示すような遺構は全く確認されておらず、東限を測る可能性が高いものである。これらの方向性は現在の日輪寺の山門と本堂を結ぶラインとは合致しておらず、中世の日輪寺の寺域を推測させる成果と言える。地形図においての等高線や土地区画の形状の観察から、この塙状遺構はほぼ直線的に南下し、山門南辺の延長線上で西へ鈍角に曲がることが読み取れる。さらに、西側へ延びて、現道がクランクとなる箇所辺りから北へ曲がっていたと推定で



第188図 日輪寺遺跡と日輪寺の寺域 (Scale=1/3000)